
ストライクウィッチーズ 夢幻協奏曲

夢幻遊戯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ストライクウィッチーズ 夢幻協奏曲

【Nコード】

N2249R

【作者名】

夢幻遊戯

【あらすじ】

不意にそれは訪れる。

何の因果か、それは誰にも分からない。

勿論、巻き込まれている自分自身でさえも…。

時を、次元の壁を越えて…彼等は運命の邂逅を果たす。

異世界からの来訪者と、鋼鉄の筭を纏い空を駆る魔女達の物語が今、紡がれる…。

本来起こる筈のないこの邂逅は…何を意味するのか。
彼らに何を見せるのか…。
全ては…神のみぞ知る。

キャラクター設定（前書き）

どうも、夢幻遊戯です。

活動報告で申し上げました通り、大修正の意味も兼ねて新たに執筆することになりました。

以前の「ストライクウィッチーズ 私、恋しちゃってます」は削除しません。

見比べて頂ければ、という意味もあり残します。

これも活動報告で書いたんですが、前作より酷くなったとか前の方がマシと思われる方も当然おられるでしょう。

しかし、どうかもう一度：夢幻遊戯を応援して下さい。

それでは、まずはキャラクター設定からです。
どうぞ。

キャラクター設定

名前：儀國 雅史

性別：男性

年齢：19

身長／体重：177cm／67kg

特技：料理、ピアノ

趣味：カラオケ（主にアニソン、ゲーソン）

好きなもの：ゲームやアニメ（二次元）

嫌いなもの：束縛、信念を曲げること

【詳細】

現役大学生であり、特殊な環境化の中で育った青年。性格は面倒臭がり、真面目な話でもふざけたりする。基本自分から動こうとはしないが、目の前で助けを求めている者を見るとついつい助けてしまう性格でもある。とある理由から、女性との交流をなるべく避けようとしている。また戦闘においては絶対に“独りで闘う”という誓いを立てている。

第一章 第一節：邂逅（前書き）

修正verの第一話です。

大半は以前と同じですが…ちょっと変わってます。

見比べて下さい。

それでは…どうぞ。

第一章 第一節：邂逅

2010年…八月 初旬、季節は言うまでもなく真夏。

去年を上回る猛暑続き、ニュースでは夏バテ予防の料理の紹介や、熱中症に対し気を付けるように…と。

そんな内容ばかりが流れている気がする。

今より昔、電気やガス…今の文明がなかった頃、即ち自分達のご先祖様はどうやってこの夏を乗り切っていたのだろうか。

そんな事をふと思いつながら、青年は過去の記憶を呼び戻していた。

「……………で、だけど……………」

……………こんな生活を送ること、早一年が経過しようとしている。

我ながら、今でもこうして平凡な生活をしていることが信じられない。

そもそも、送るとも考えていなかった。

本来ならば、当たり前と誰もが認識している人間社会の中での生活とは大きく掛け離れた、誰もが想像しない裏社会で生きてきた。

そんな生活をこれから先、この身が朽ち果てるまでし続けると……そう思っていた。

……………だが、平凡な生活を送らなければならないという選択肢を選ぶぐらい、あの頃の自分は命の危機に晒されていた。

情けないとは分かっている、俺は…闘わずして逃げた。

命辛々、敵からの追跡から必死に逃げ、偽名を名乗り、追っ手から逃れた。

その結果、これである。

何故こんな事になったのか？

そんな質問をしても勿論答えは返ってこない、自分でも分からない。ただ言えること、あの一件以来で俺はどうやら人間不信になってしまったらしい。

主に“女性”に、の話だが…。

今の生活が物凄く楽しく、平和に感じる。

願わくば、こんな平凡かつ安全な毎日が過ごせるように。

そして、本当に出逢いと言うものに、巡り合えるように、と…。

「おい、聞いているのかよ！」

「…………え？」

誰かが自分の名を呼んでいることに気付き、回想していた思考は中断され、青年は現実へと帰る。

改めて視界に映る見慣れた部屋、そして四人の青年が呆れた様子で此方を見ていた。

「…………ああ」

すっかり忘れていた、と青年は目的を思い出した。

今は会議中だった。そしてその会議の為に友人の家に集まった。回想している内に、すっかり目的を忘れていた。

「おいおい頼むぞ？」

「ああ…………悪い」

青年は一先ず謝った。
退屈な会議とは言え、会議に参加せず意見を出していないことには
此方に非がある。

「いいけど…ちゃんと参加してくれよ？
さてと、それじゃあ今度のゲームだけど…ストライクウィッチーズ
を題材にして何か考えようと思うんだ」

一人が、そう口にした。
ストライクウィッチーズ、通称“パンツじゃないから恥ずかしくな
いもん”。
または“穿きません、勝つまでは”。

各国の英雄たちをモデルとし、ネウロイという謎の存在とウィッチ
と呼ばれる少女達が闘う二次作品。
主に女性キャラが活躍するアニメであり、男達は殆ど出ない上に活
躍もあまりない。
そんな作品でいったいどんなゲームを作るのか。
それが今各々与えられた課題だ。

「俺は恋愛ゲーで男主人公がいいな」

一人が意見を述べた。
ストライクウィッチーズは女性キャラが多いからそれもありと言え
ばアリだろう。

だが、男主人公という点で問題が幾つか湧き出てくる。

「でもさ、それかなりキツくないか？」

「かなり難しいだろうな。儀國はどう思う？」

「…右に同じ」

青年 儀國も同意見だ、と興味なさ気に答えた。

他の面子が難しいと発言するように、恋愛ゲームにするのはかなり難しいと言える。

まずは今作で主に活躍する第501統合戦闘航空団、通称「ストライクウィッチーズ」を率いる隊長、ミーナは魔女の魔法力を弱めない為に男性との接触を固く禁じている。

純潔の穢れは魔法力を弱める、これがストライクウィッチーズの世界観の設定。

従って、必要以上の会話やコミュニケーションも固く禁止されている。

つまり男性キャラで恋愛ゲームを出しても、この設定をどうにかしない限り恋愛ゲームとして設立しない。

かと言って、原作設定を崩壊させるのも当然ご法度。

それではユーザーに反感を買うだけだ。

それを何とかするのが腕の見せ所、ではあるが……。

生憎と、自分を含めてそれだけの技術を持っている奴はこの場にはいない。

それに、この物語は魔女^{ウィッチ}が活躍する物語だ。

野郎が活躍する物語じゃない。

一応男性も頑張ってはいるが所詮は脇役、ウィッチを立たせる為の存在に過ぎない。

以上の意見を纏めて、恋愛ゲーム化という案は

「……ムリダナ（・x・）」

全員指でバツテンを作り、エイラの真似をし却下を言い渡した。

「全員でムリダナするなよ！」

「じゃあシューティングは？やっぱりストライクウィッチーズだし、シンプルにシューティングゲームがいいと思うんだけど」

一人が別意見を上げる。

なるほど、それならいいかもしれない。

儀國はその案に納得した。

シューティングならば、複雑な設定やシナリオはそこまで気にしなくていい。

シューティングなのだから、使用キャラは言うまでもなくウィッチ達で、敵はネウロイだ。

アフリカの星ことマルセイユや、リバウの貴婦人こと竹井 醇子をクリア特典に使用出来る、なんて特典もあれば面白くなりそうだ。

「そうだな…それもいいかもな」

うんうんと頷く一同。

ただ一人、首を縦に振る事はなかった。

そう、恋愛ゲームにしたいと言った奴である。

首を大きく横に振るい、何やら鞆を漁り出す。

そして何かを取り出した。

取り出したのは一冊の本、表紙には「ストライクウィッチーズ

ドキッ！私恋してます。」と書かれてあった。

「まさかとは思うが…それは台本か？」

「俺、徹夜でシナリオとかイベント考えてきたんだよ！一回読んでみてくれ！」

そう言っただけ人数分取り出した台本を手渡していく。

かなりのページがある、100ページぐらいは…いや、もっとあるのかもしれない。

それにしても、よくこれだけ書き込めたものだ。

儀國は感心半分、呆れ半分で台本を見つめる。

強い執念は不可能であることも可能とさせる、とは言っただけ…。何も恋愛ゲームにしたいという執念で、ここまで頑張らなくてもいい気がする。

そう思うのは…はて、自分だけだろうか。

この執念を違う場面で生かせられないのか。

そんな事を考えながらも、儀國は適当にページを捲って内容に眼を通した。

「ま、まあ分かったよ…。じゃあ恋愛ゲーの方向もとりあえず保留で。それじゃあ他に意見は…」

とりあえず、一段落話し合い、今日は解散することになった。

明日まだ集りどんなゲームにするのかを話し合う。

そして、今日中に渡されてしまった恋愛ゲームのシナリオ本を読破

しなければならぬという、課題を与えられてしまった。

「はあ………」

大きな溜息を一つ。

心底面倒臭そうに、儀國は眉を寄せながら帰路を歩く。

何はともあれ、課題を与えられてしまった以上は仕方が無い。

自分も一応ではあるが、あのメンバーの一人なのだ。

徹夜で読むとしよう。

そう決めながら、儀國はもう一度溜息を零た。

|||||

深夜零時過ぎ。

机にある照明の灯りで薄暗く照らされた部屋。

机に向って手渡されたシナリオ本に眼を通していく。

読み始めたのは午後十時過ぎ頃、二時間近く経過しているがまだ半分にも到達しない。

細かく書かれた内容と解説、そしてご丁寧に感想も添えると赤字で書かれてあった。

これならもっと早く読んでおくべきだった、と儀國は後悔していた。

「えつと………」

自分なりに簡潔に纏めた内容を書き込んだノートを見る。

- 1：主人公で役割は新米の整備兵。
- 2：人には言えない過去を持っている。
- 3：なんやかんやで皆にバレる。
- 4：なんやかんやでラブラブハーレム展開に。

ということ。

後は全然頭の中に入っていない。

どうやったら恋愛フラグが成り立つのか、結ばれるのか細かく書いてあった…気がする。

兎に角、文章が多すぎと細かすぎで憶えられない。

改めて思うが、凄まじい執念という物は心底恐ろしいものだ。

「あゝ…目がマジで痛いし、何か頭も痛くなってきたな」

両目を抑えながら痛みを訴える儀國。

本を読むのは嫌いだ、特に活字は…。

活字を読んだのは本当に久し振りのことだった。

漫画なら登場人物やその場面が描写として書かれている。

が、活字の本には描写も何もない…ただ細かい文字だけがズラリと縦に、横に並んでいるだけ。

それだけではどうしても、この歳になっても好きになれない。

多分、否一生好きになることはないだろう。

そう断言できる。

「……………」

儀國は台本を机の上に置き、そのままベッドへと横になる。

これ以上はもう読みたくない。
他の皆は無事読み終えたのだろうか…。
多分自分同じ、頭に入っていない筈。
今頃は途中で読むのを止めて、ダウンしているに違いない。

明日の会議では、読めなかったと素直に報告するしかないだろう。
こんなもの一日で眼を通し、尚且つ感想まで書けなんて不可能。
時間が少なすぎる。

「あゝ…マジで眠い」

ベッドの上に寝転がった途端、急激に睡魔が襲ってくる。

台本本と睨めっこしていたのが、予想以上に身体を疲れさせていた
ようだ。

儀國は朦朧とする意識の中で、エアコンの事を思い出しリモコンを
探す。

一晩中エアコンの付けっぱなしは身体に毒。

それに電気代も馬鹿にならない。

寝る前のタイマーをしないと…、そう頭の中では思っているも身体は
言う事を聞かない。

ダメだとは理解している。

理解しつつも睡魔に負けて、そのまま深い眠りへと誘われた。

|||||

何処か見知らぬ場所。

崩壊した建物。

紅蓮の炎に包まれる何処かの街。

空は赤き炎により赤く輝いている。

周囲には破壊された戦車。

血を流し、亡き者となった兵士達やこの町の住民であろう人々の骸。聞こえてくるは炎が激しく燃え盛る音だけ。

そこに、気が付けば自分は佇んでいた。

儀國は瞬時に理解する。

今自分が佇んでいるここは…戦場なのだ、と。

久しく忘れていた、あの光景。

もう何年も目にしてなければ、感じてもない。

本当に久しい…。

とりあえず、現状を整理。

何故自分は、ここ（戦場）にいるのか。

それをまずは考える。

記憶に違いがなければ、使い慣れた愛用のベッドの上で眠っていた等。

だとすれば、ここは夢の中…とでも、今は言うべきだろうか。

だとしたら、嫌にリアル過ぎる夢。

夢とも現実とも区別がつかない程のリアル。

足に伝わる地面を踏み締める感触、焼け付くような炎の熱気、全てがリアル過ぎる。

と、儀國は何かを捉えた。

思わず身構える。

ここは戦場だ、何処の国同士が争っているか、そこまでは今の状況の中では分からない。

だが一つ言えることがある。

それは相手が誰であろうと、この場に居る自分は双方から見て敵だということだ。

戦争中であり双方は臨戦態勢に常時入っている。

即ち…視界に入った時点で手にした銃の引き金を引き、相手よりも素早く仕留めようとしてくる。

如何に相手よりも早く姿を捉え、引き金を引き、仕留めるか。

そんな心境の中、戦場で敵と一般人の区別をするなど不可能に近い。そんな事をしていたら敵に隙を見せるも一緒。

寧ろ、こんな状況の中にいる兵士でもない輩の方が悪い。

自分から死に行くようなもの。

責任は相手にあるのではなく、そっちにある。

「……………ん？」

儀國は構えを解いた。

現れたのは兵士ではなかった。

武装もしていなければ、鍛えられた身体をしている訳でもない。

至って普通、何処にでもいそうな…十歳にも満たない小さな少女だった。

泣きながら、ゆっくりと此方にやってくる少女。

ふと、少女が顔を上げる。

少女と眼が合う、その顔は悲しみに溢れていた。
この戦火に親とはぐれたか、或いは…既に。

兎に角、これも何かの縁なのだろう。ここが何処の戦場なのかは後
回しにして、まずは互いの為にも安全の確保が優先事項。
いつ兵士が、戦車が、或いは爆撃機がやってくるか分からない。
そうでなくても、ここは火の海だ。
長居をしていれば二人揃ってチャーシューになる。

「おい、こつちだ」

少女の手を引き、火の手が薄い場所まで走った。

自分一人ならば特に問題はない。
が、今は一般人がいる。自分の物差しで合わせられない。

少女の手を引きながら、儀國は燃え盛る炎に包まれた街を駆けた。

「…………ん？ あれは…………」

ふと上空を見上げる。

戦火で赤く輝く夜空、その夜空から地上へと落ちてくるのは爆撃機
による爆弾でもなければ、降下してくる兵士でもない。

大きな白い物体…。

仄かに発光する巨大なソレは、雨の如く炎に包まれたこの地上へと
落ちてくる。

彼方此方で大きな落下音が鳴り、砂煙が舞い上がり、地響きを発生
させる。

その物体の一つが、今正に頭上から落ちてきた。

「ちいつ

!!!」

舌打ちを零し、儀國は上空から落ちてくるソレを見据える。

あの白い物体が何なのか、それに対する考察は後回しだ。

いずれにせよ、このままでは二人共押し潰され、サンドウィッチになるだけだ。

マジックコード オープン
“ 魔術回路、開放 ”

意識を集中させる。

……力と言うのは、ただ物理的な力だけではない。

科学では説明がつかない力と言うものを、人間は持っている。

ただ、それに気付いていないだけ。

ただ、それを上手く扱えないだけ。

Hell Fire
“ 「地獄の七焰」、起動! ”

Belphoege
「 「煉獄の青焰」、解放ッ!!! 」

右手より炎が発生する。

その炎は赤ではなく、青。

海のように青く澄んだ炎は轟々と音を立てながら激しく燃え上がる。

何度も状況を整理するが、自分一人だけではなく子供が一人同行者としていて。

回避、という行為は間に合いそうにない。

ならばどうするか、答えは簡単至極。

「燃え尽きるッ!!」

儀國は大きく、右腕を前に突き出した。

突き出した右腕、その右手より青い炎が噴出する。

火焰放射器の如く、勢いよく飛び出した炎は真っ直ぐと空へ。

上空より落下する白い物体へと伸びる。

着火。瞬く間に青き炎は白い物体を包み込み、ものの3秒で跡形もなく焼き尽くした。

「青い、炎……お兄ちゃんも魔法が使えるの!?!」

少女が尋ねて来る。

先程まで泣いていた顔は驚愕と興奮に。

外観相応、少女は眼を輝かせていた。

「…まあな。俺は…まあとりあえず、分かりやすく魔術師とでも名乗っておくか」

「魔術…師?」

「そうだ、一応だけだな…」。

さてと、とりあえず安全な場所まで……ッ!」

身体に異変が起きる。

意識が急速に薄れていく。

この感覚は、死という感覚ではない。

そう、夢から覚めるような…そんな感じだ。

ああ、夢から覚めるのか。

やはりこれは夢で、本当の自分はベッドの上で眠っている。
少女が何か叫んでいるようにも聞こえるが、どうやら現実世界へと
帰らなければならぬ。

数年振りに味わった戦場と言う感覚。

この夢に現れた少女が何者なのか、それは分からない。
だが、もう逢うことはないだろう。

所詮記憶が夢とリンクし生み出した虚像に過ぎない。

“明日の朝飯、何食おうかな……”

その思考を最後に、儀國の意識は完全に途切れた。

|| || || || || || || ||

「ッ

」

ふと儀國は眼を覚ます。

「ここは……！」

開いた視界に映ったのは見慣れた天井……ではなかった。
見慣れない石造りの天井が最初に飛び込んできた。

飛び起きて、周囲を見回す。

今、横たわっていたベッドを含めて……何もかもが見慣れない物ばかりで構成されていた。

レンガ造りの壁に天井、ベッド以外何もない殺風景な部屋。

開いた窓から吹く、緩やかな風。
その風に吹かれ靡く白のレース。

その窓にゆつくりと近付き、儀國はレースを開く。
と、その窓の向こうの世界…全く知らない世界が広がっていた。

「これは…」

「お、ようやく起きたかコイツ。遅いぞ新人」

誰かが部屋の中に入ってくる。

黒い軍服に黒の半ズボン、黒い帽子と…黒づくめの格好をした男が
近付いて来る。

儀國は警戒する。

突如現れたこの男。

見た感じ、殺気も敵意を放っていない。

戦闘能力もそれ程高くない。

だが…油断は出来ない。

「お前だろ？昨日扶桑からこっちに配属されていう整備兵は」

「…扶桑、俺が整備兵だつて？」

突然身に憶えのない発言に、儀國は疑問に眉を寄せた。

扶桑…と言うのは、日本の異名の一つであった筈。

見た感じ、この黒ずくめの男は自分と同じ日本人だ。鈍つてもいないし、カタコトでもない。

だが、同じ日本人ならばどうして日本のことを“扶桑”……などと言うのだろうか。

そしてもう一つの疑問。

目の前にいるこの男は自分の事を整備兵、と口にした。

整備“兵”と言うからには、何かミリタリー関係の整備……ということなのだろう。

だが生憎と、整備業など生まれてこの方一度もした事はない。

戦車や戦闘機は見た事は勿論あるが、触れた事は一度としてない。

それに……整備兵ではなく、自分の役割はどちらかと言われれば闘う方だ。

疑問に眉を寄せたまま、儀國は男を見る。

すると男も同じ様に眉を寄せて、不思議そうな顔を浮かべた。

「どうした。まだ寝惚けているのか？」

まあ長旅で疲れているのは分かるが、今日からお前もこの部隊の正式なメンバーだ。

気を引き締める新人。ホレ行くぞ」

「おいおい、アンタさっきから何を……っ！か何処に」

「いいから！ ミーナ中佐がお前を呼んでいるんだ、早く支度しろ

」！

「……ミーナ……中佐？」

|| || || || || || || ||

黒ずくめの男の名は安藤と名乗った。

その安藤に儀國はこの“基地”内を案内されながら、この基地の隊長を務めている“ミーナ”という人物の元へと向っていた。

「間違いない…これは、ストライクウィッチーズの基地だ」

辺りを見回して、驚きを見せながら儀國は言った。

どうやら、自分ほとんどない現象に巻き込まれているらしい。

何の因果か、今あのストライクウィッチーズ基地にいる。

基地のデザインは第二期の方、地下に古代ウィッチの基地等がある、あの……。

23

どうしてこんな所にいるのか、それは全く分からない。

夢かと思えば古典的ではあるが頬を抓った、殴ってみた。

だが、痛みはハッキリとある。だからこれは夢じゃない。

「お前、何で自分の頬殴ってるんだ？」

「いや、虫が付いたから潰しただけ」

ここに来る前自分は何をしていたか…。儀國は頭の中で記憶を整理する。

ストライクウィッチーズを題材にした恋愛ゲーのシナリオ本を読んでいた…それで途中で諦めて寝た。

それで嫌にリアルで変な夢を見て、そこで少女を助けた。
そして意識が急速に薄れて、夢から覚めて…

「今に至る…か」

結局のところ、どうしてこうなっているのか…。

それを決定付けるものは何一つ記憶の中にはない。

何はともあれ、自分はこうして二次元の中へと来ている。
これだけは言い換えようのない事実である。

“それにしても、トリップって本当にあるんだな……”

そんなこと、儀國はふと思った。

世界というのは現実と言う名の顔と、幻想と言う名の顔を持つ。

それは数年前のあの時に学習している。

けれども二次作品の世界が実在するとは知らなかった。

そんな知識何処からも学んでいない。

これは新たな世紀の発見でもあり、貴重な体験でもある。

そして、ここでの役割は安藤という男が言う通り整備兵。

何を整備するのか、勿論それは彼女（魔女）達が装備する“ストラ
イカーユニット”及び武装。

この世界には儀國 雅史と言う人間は存在しない。

そんな中でも衣食住の確保は絶対。

ならば例え面倒だろうと嫌だろうと、この基地で整備兵として働く
他道は無い。

何事も生きていくにはやはり金が必要となってくる。

整備兵、機械弄りは…まあそんなに嫌いではない。
それに、元の世界に帰る方法も見つけなければならぬ。
こうして架空の世界にいる、来ているのだからその逆もあって普通。
それを見つけ出すまでは…。

「ほら、ボサツとしてないで早く歩け」

「はいはい」と

「お前…少し口が悪いぞ」

「それはスイマセン」

|||||

「おい着いたぞ、ココだ」

安藤の案内の元、一室の扉の前につく。
扉には執務室と書かれたプレートがあった。

この部屋の向こうにこの基地の隊長、ミーナ・ディートリンデ・ヴ
イルケ中佐がいる。
果たして本物か、それとも偽者か…。

三回の軽いノックの後、部屋の中から「どうぞ」、と聞いた事のあ
る女性の声がする。

「くれぐれも、失礼のないようにな」

「分かってますよ 失礼します」

儀國はドアを開け中へと入室した。

扉の奥、左手には壁一面が巨大な本棚と化しており、そこには隙間なく大量の本が納められている。

そして中央、デスクワークを行う机と

「貴方が昨日から配属された新しい整備士ね？」

私はミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ中佐です。

右にいるのは坂本 美緒少佐。貴方と同じ扶桑皇国の出身よ」

この基地の隊長であるミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ中佐が出迎えた。

そしてその隣、白い軍服の下にスクール水着と右目に眼帯をしているウィッチ、坂本 美緒の姿もあった。

「坂本 美緒少佐だ。儀國 雅史と言ったな、これからよろしく頼む」

「ええ、こちらこそ。よろしくお願い致します」

儀國は二人に、静かに頭を下げた。

面倒事はまだ起こしたくない。

一応立場的には彼女達の方が上だ。

昔から郷に入っては郷に従え、と言う。

ならば不本意であろうと、仕来りに従うのが道理。

相応の態度で儀國は接する。

「それじゃあ、最初の内は慣れるのに精一杯だろうけど、頑張ってお下さいね」

「はい。それじゃあ失礼致します」

儀國はもう一度静かに頭を下げ、踵を返し部屋を後に

「ああ、少し…待ってくれるかしら」

ドアノブに手を掛けようとして、ミーナに呼び止められる。

「何ですか？」

一旦ドアから離れて、再びミーナに向き直る。

真剣な表情で、少し考える様な仕草を取った後、彼女は静かに口を開いた。

「貴方は…以前にカールスラントへ行ったことはありますか？」

…不思議な質問をする。

儀國は顔に出さずとも、心の中で小首を傾げた。

此方は、この世界に今日初めて来たばかりの人間だ。カールスラントになど行ったことなどない。

「いや、ないですけど」

「…そう。ごめんなさい、引き止めて」

「いえ、それじゃあこれで」

改めてドアへと向きドアノブに手を伸ばす。
扉を開け、出る前に一礼した後閉める。その扉に背を預けなが
ら大きく溜息を吐いた。

「ああ……面倒になってきたな」

これから自分がしていく軍隊生活。
最初の内は慣れるのに大変だと彼女も言っていた。
が、果たして慣れるだろうか…。

「話は終わったか？それじゃあさっさと仕事に行くぞ新米」

「…へい」

「…ちゃんと返事しろ」

「はいはい」

「はい、は一回でいい」

そんな不安を感じながらも、儀國は安藤と共に執務室を後にした。

第一章 第一節：邂逅（後書き）

以上、修正verの第一話でした。

如何だったでしょうか？修正verはこんな感じで執筆していくつもりです。

…更に駄作になった様な…でも頑張っ行っていきますので、これからもよろしくお願い致します！

それでは！

すわっ！！

第一章 第二節：襲撃（前書き）

修正ver第二節です。

今回、ここは前回と違って大きく異なっております。

……多分。

第一章 第二節：襲撃

ストライクウィッチーズ基地で始まる第三の新たな人生。儀國 雅史と言う平成生まれの人間は、ネウロイとの戦争を繰り広げているこの世界で、整備兵として生きていくことになった。

「まったく…この服なんかなんないのか？」

身に纏う衣装に不満を零す儀國。

整備兵と言う立場であるが為、その整備兵の服装を身に纏わなければならぬ。

そう、あの安藤も着ていたダサイ服（黒の制服）だ。

帽子、上衣、下衣…全てが黒で統一された制服。

オマケに下衣は長ズボンではなく半ズボン。

夏だろうと冬だろうと長ズボンを履いてきた儀國にとって、半ズボンは不快感を与える代物であった。

本当ならば長ズボンを履きたい。

しかし、ここではこれが制服。それに従うしかない。

ダサイと文句を言いながら、儀國はストライカーユニットの整備に当たる。

とりあえず安藤の指導の下、ストライカーユニットのメンテナンス作業を学ぶこととなった。

知識は皆無。整備兵でありながら整備が出来ないなど、話にならない。

そう言った行動は周囲から怪しまれる。

だからこそ、短期間でそれを憶えなければならない。

この世界のハイテク技術、ストライカーユニット。空を飛ぶ時に使う、魔法のシンボルである筈。それがコレだ。初めて見る内部構造、部品、その技術力は自分側の世界にも負けず劣らずのものがある。

これから整備するのは、今作のヒロインである宮藤 芳佳のストライカーユニット。

「宮菱重工業 零式艦上戦闘脚22型甲 A6M3a」…。

「宮菱重工業 零式艦上戦闘脚」は扶桑皇国の主力ストライカーユニット。

魔法力が弱くても扱える上に身体への負担も少ないことがメリットであり、反面防御性が極めて低いというデメリットを持つ。

宮藤はこのストライカーユニットを装着している、つまり「筑紫飛行機 震電」を彼女（宮藤）が手にするまでの話には至っていない、ということ。

今自分がいるこの世界（時間）は…どの辺りなのだろうか。

「さてと、それじゃあ始めるぞ儀國」

「ウィッス」

安藤の指示の元、儀國はストライカーユニットに意識を集中させる。

そしていざ、ストライカーユニットを整備しようとして

「え……？」

異変が起きた。

儀國は思わずその異変に対する声を出していた。

初めて見る筈のストライカーユニット。

外観ではなく中身の話。初めて見る構造、パーツ。

なのにまるで長年も整備し続けてきたかのような感覚がある。

ストライカーユニットに対する知識は勿論ない。

だが、身体がそれを完璧に記憶している。

まるで、長年触れていなかった物に久し振りに触れて弄る…そんな感覚だ。

そして安藤の指導もなく、儀國はストライカーユニットの整備を完璧に終えた。

「……お前、随分と手慣れているな」

安藤も新米とは思えない程の熟練された動きだと驚いていたが、儀國自身も驚いていた。

何故ストライカーユニットの構造が分かるのか。

見ただけであり、触れたこともない間近で眼にしたこともない代物を、どうして自分は理解出来る？

「…まあ、有り難いな」

そう、本当に有り難い話である。

出来なければどうしようか、そんな不安はもう消え去っていた。

|| || || || || || || ||

「はあ…：やっと終わった」

儀國は首を回しながら廊下を歩く。

初めてであり、初めてでないストライカーユニットの整備を終えて、時刻は昼過ぎ。

そろそろ胃も空腹を訴えてきた、他の整備兵も我先にと食堂へと向っている。

ここは日本…：扶桑皇国ではないが食卓に並んでいるのは和風料理。まず日本人にとって絶対に欠かせない白い炊き立てのご飯、豆腐とネギの味噌汁、焼き魚、お浸し、そして…：納豆。

「頂きますつと」

儀國は早速ご飯へと箸を勧めた。

なんて贅沢、なんで豪華なお昼ご飯…。

どんな料理が出るのかと思っていたが、好物である和食が出てきている。

米の軟らかさも自分好み、味噌汁も大好きな赤だし、魚も焼き具合と塩の味付けもいい塩梅だ。

「おかわり」

無論、箸は進む。空腹の状態にいるから尚進む。

お代わりも当然、二杯だろうと三杯だろうと関係ない。入るまで食べる、胃が満腹を訴えるまで食べる、ただそれだけだ。

「おかわり」

他の席に着いている整備兵達から嫌そうな声上がる。

見ると皆、納豆が出ている事に対して不満の声を挙げていた。

外国人に限らず、日本人でも納豆が嫌いだという輩は少なからず要る。

その原因は第一に納豆が放つ独特の臭い、そして強い粘り気。

何故納豆が食べられない？そんな疑問を抱きながら、儀國は納豆を嫌がる整備兵達に寄こすように要求する。

次々と自分のも食ってくれと、納豆が集ってくる。

その数実に30人前。

納豆が好物である自分にとっては、有り難いことだ。

「どうだ？この基地は。少しは慣れたか？」

隣の空席に安藤が腰を下ろす。

「ええ、大分は。おかわり」

安藤の問いに答え、おかわりを要求する儀國。

「そうか、それならいい。しかし、アレだな。

新人にも関わらず、長年もこの整備兵を務めてきたかのように見え
たぞ」

納豆をかき混ぜながら安藤が言う。

刹那、基地内に警報が鳴り響く。

警報が鳴り響いた途端、楽しく話し合い笑みを浮かべていた整備兵達の表情は真剣なものへと変わる。

どうやら敵さんのお出ましらしい。

食事中だというのに襲ってくるとは、何とも礼儀知らずなことか。

ネウロイは知的生命体であると言われているが…空気を読むというスキルは習得されていないらしい。

「雅史！ハンガーへ急ぐぞ！」

「了解」

気の抜けた返事と共に、儀國は安藤と共にハンガーへ急いだ。

|||||

ハンガーへ急ぎ、

ストライカーユニット出撃前の最中チェックを行う。

と、同時にこの隊のウィッチ達がハンガーへとやってきた。

ゲルトルート・バルクホルン大尉。

エーリカ・ハルトマン中尉。

フランチェスカ・ルツキー二少尉。

シャーロット・イエーガー大尉。

坂本 美緒少佐 の計五人が出撃準備に入る。

遅れて残りのメンバーがハンガーへとやってくる。

サーニヤ・V・リトヴァク中尉。

ペリーヌ・クロステルマン中尉。

ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ中佐。

エイラ・イルマタル・ユータイライネン少尉。

リネット・ビシヨップ曹長。

そしてストライクウィッチーズ主人公…宮藤 芳佳軍曹。

彼女が後からハンガーへやってきた。

どうやら今回は全員で出撃し対処しなければならない相手らしい。ネウロイ

となれば、出現したネウロイは大型クラスか…。

「行くぞ、全機出撃!!」

「了解!!」

坂本の号令の下、ウィッチ魔女達は一斉に空へと飛び立つ。

その後ろ姿を、儀國は白いハンカチを振って見送った。

「さてと、それじゃ俺達はさっさと昼飯…」

「馬鹿、ここで待機だ」

「やっぱりツスカ…あゝ腹減った、飯食いたい」

儀國は空腹を訴える腹部を擦りながら愚痴を零した。

正直、まだ食べたりない。

此方の胃は、まだ満腹中枢がストップを掛けるまで食べていない。普段一人で米六合分食べる身にしたら、まだまだ食べたりなかった。

「お前散々食ってただろ！いい加減にしろ！」

「イテツ！！……殴ったね、親父にもぶたれたことないのに！」

自分にしか分からないネタを披露した所で相手に通じる筈もなく……。

結果もう一度拳骨を頭にお見舞いされた。

ジンジンと頭が痛む、触れば小さく膨れたタンコブが二つ出来ていた。

「……………ッ」

鼓動が跳ね上がる。

身体を突き刺されるような感覚、これは…そう、殺気だ。

何者かが此方に対し殺気を向けていることに、儀國は感じ取った。

他の整備兵達は殺気の事に気付いていない。

それに加えこれだけの殺気を放てる相手がいるとは、予想外のこと。人間か、それともネウロイか…。後者の可能性は……まずないだろう。

ネウロイが殺気を放つなぞ聞いたこともないし、そんな設定もない。となればやはり自分と同じ人間か…。

疑問なのは、この世界に来て恨みを買われる様な事をした記憶はないということ。
。 いったい誰が……

その時、基地に凄まじい爆発音と衝撃が響き渡った。

「な、何事だ!？」

慌てふためく整備兵達。

「……やれやれ」

面倒臭そうに、儀國はハンガーから出て行く。

「お、おい何処に」

「トイレですよ。いざって時用を足しておかないとダメでしょ?」

安藤の問いに答えした後、そのままハンガーを後にした。
向かうは殺気の主の所へ。

恐らくは、先程の衝撃は殺気の主によるもの。

どんな理由で、何の為にこの基地を狙ってきたのか。

どちらにせよ、ウィッチ達が全員出払っている今対処出来るのはこの基地で一人しかない。

そう、自分しかないのだ。

この基地が崩壊したら、自分は路頭に迷うことになる。
それだけは何としても避けたい。

|| || || || || || || ||

ハンガーを後にし、着いた場所はビーチの砂浜。
アドリア海が広がり、波打つ音だけが静かに流れている。
そんな空間に似付かない輩（敵）が一人……。

「お前か、俺に殺気を放っていたのは……」

目の前の敵を儀國は見据える。

殺気の主。

それは予想を裏切り、前者ではなく後者の方であった。
殺気を放ち、基地を襲撃した者の正体はネウロイ。

通常のネウロイではなく人型……そして、ただの人型でもない。
外観からして抱いたイメージは騎士。
重量感溢れる甲冑を身に纏った姿を連想させるフォルム（身体）。
頭部も兜の様なデザインになっている。

亜種……そんな言葉が、儀國の脳裏に浮かび上がる。

「……………」

初めて眼にする敵。

この世界での敵は誰が言うまでもなく、ネウロイ。それは誰もが知っている。

そして人型ネウロイは第一期より登場し、その存在を公にしている。

だが、この人型ネウロイは一体なにか？
こんな異質な姿形をしたネウロイはどの話、作品にも登場していない。

そして、本来の攻撃方法であるビームの射撃。

その破壊力は凄まじいのは認識済み、ウィッチ達のシールドでなければあのビームを反射させることは出来ない。

しかし、その射撃として放つビームは今や近距離戦闘に適した形にその姿に相応しい武装…剣へと変えていた。

赤く発行する剣が、ネウロイの右手より発現する。

本当に、このネウロイは何者なのか。

そんな疑問を抱きつつも、儀國は騎士型ネウロイを静かに見据える。

何はともあれ、このネウロイは敵だ。

ウィッチ達が撃墜しに向かったネウロイは、恐らくは困なのだろう。本命はこの基地を落とすに来たこっちの方。

何故殺気を向けられなければならないのか、その謎が未だに残っている。

だがそれも、もう…どうでもよくなる。

敵を眼にしたら迷わず、そして容赦なく叩き潰せ。

師の教え通り、ただ相手^{ネウロイ}を潰すだけだ。

そしてこれから死に逝く者に、余計な感情や思考は必要ない。

「やれやれ…本来なら、俺は見てるだけでいいんだけど…」。

お前等の相手は普通ウィッチだろ？

まあいいや、ウチの部隊の魔女達が出払ってるなら…俺が相手する

「しかないよな？」

青年は口元を歪める。

敵に対し不敵な笑みを浮かべるソレ（顔）は、まるで悪魔を思わせる顔。

これから獲物をいたぶり殺す、そんな笑みを浮かべたまま。

儀國の全身から、青い炎が噴火する火山の如く燃え上がった。

|| || || || || || || || ||

空を駆る11人の魔女。

鋼鉄の箒の持つ力を最大限にまで使い、魔女達は疾風となりて青き空を駆り抜ける。

「クソツ！まさか囷だったとは！」

坂本が焦りを見せながら言った。

大型ネウロイの出現。

過去最大級と言えるネウロイの出現に、第501統合戦闘航空団に所属するウィッチ達全員を率いて出撃した。

この基地へと向かって飛来する大型ネウロイ。

そのネウロイに自分を含めて11人で対処。

周囲の島や街への被害は零。

スムーズよくネウロイの撃墜に成功し、安堵の息を漏らした。

だが、そこで安堵の息を漏らすのは早かった。

彼女の発言により、全員に緊張と最悪の展開が脳裏を過ぎったのだ。

サーニヤ・V・リトヴァク……階級は中尉。

彼女の固有魔法は「魔導針」。魔法力によって形成されたアンテナによる広域索敵能力。

その魔導針が、新たなネウロイの気配を捉えた。

それが今、私達が急いで帰投している理由でもある。

そう、その新たなネウロイは自分達、第501統合戦闘航空団の基地から反応した。

先程撃墜したネウロイは囷、本命は基地の方だった。

基地を護れる者は誰もいない。

所属しているウィッチ達は出払っている状態。

いるのはストライカーユニットの整備を担当する整備兵や施設班の者達のみ…。

「見えた!!!」

坂本の視界に基地の姿が入る。

一箇所から煙が上がっているが、基地はまだ全壊していない。

とりあえず基地が無事な事にホッと胸を撫で下ろす。

だが、この基地の何処かにはまだネウロイがいる。

「サーニヤ!」

「ビーチの方角に一つです…！」

サーニヤの魔導針はネウロイの位置を捕捉する。
その言葉に皆が一斉に砂浜の方へと降下した。

ビーチへと降り立つ。

そこでは信じられない光景が魔女達を出迎えた。

「これは……」

バルクホルンは視界一杯に広がる惨状に言葉を失った。

焼け焦げた砂浜、大きく破壊され大小の破片が散らばっている岩。
まるで爆撃でも受けたかの様な傷跡が、あちらこちらに残されている。

そんな中、今回の本質がそこにいた。

「人型のネウロイツ…！」

両手にしたMG42をバルクホルンは構える。

砂浜に佇んでいるのは一体のネウロイ。
かつてブリタイアで遭遇した人型ネウロイとは大きく形が違っている。

人の形をしているが、その格好は我々ウィッチを真似た姿ではない。
中世の騎士を連想させるような…そんな姿をしていた。

いずれにせよ、敵が目の前にいるのだからするべき事は一つ。
これ以上被害を出さない為にも、ここで撃墜する他ない。

「……な、なんだ!？」

それは突然起きた。

人……騎士型ネウロイの身体の至る所から小さな青い炎が発生。
そして瞬く間に巨大な炎となり、騎士型ネウロイの身体を飲み込んだ。

騎士型ネウロイが苦しんでいる。

ネウロイ独特の声で、断末魔にも取れる叫びを上げて…。

ネウロイの再生能力を凌駕する程の凄まじい火力。

青い炎はものの数秒で、騎士型ネウロイの身体を跡形もなく焼き尽くした。

「……」

その場にいた誰もが目の前で起きた現象に、啞然とした表情を浮かべている。

「……青い、炎だと？」

信じられない、と言いたげな表情でバルクホルンは呟く。

皆が啞然としている中、頭の中であの時の記憶が呼び起こされる。

あの燃え盛るカールスラントの街で見た、青い炎を操る男の存在を……。

|| || || || || || || || || ||

その日の晩、夕食を終えた魔女達はミーティングルームに集っていた。

本来ならばこの時間帯はくつろぐ時間帯でもある。

けれども、この日は皆真剣と疑問が入り混じった、複雑な表情を浮かべていた。

最初の課題はあの人型ネウロイ。

トラヌヤス作戦で新たなネウロイの巢の攻撃により消滅したネウロイ。

それとはまた別タイプのネウロイが出現した。

その姿から新型を“騎士型ネウロイ”と呼ぶ事にした。

詳しい情報は…現時点では一切不明。調べようにも、青い炎によって跡形もなく燃え尽きてしまった。

そして騎士型ネウロイの話題は簡潔に終わり、主体となる話題へと切り替わる。

「あの青い炎……また見ることになるとはな」

「えっ！？ バルクホルンさん、あの青い炎を見たことがあるんですか！？」

「ああ。私だけじゃなく、ミーナ中佐やハルトマンも見ているぞ」

宮藤の問いに答え、バルクホルンは懐かしむ様に、そっと口を開く。

あの時の私は…冷静さを失っていた。
ネウロイに侵略され燃え盛る故郷、見慣れた街並みも、皆全てが炎
によって焼かれた。
そのことで冷静さを失い、危うく罪を犯すところだった…。

「あの時、私が撃墜したネウロイの破片の下に妹が…クリスがいた
んだ」

炎に包まれた街の上空に現れたネウロイ。
冷静さを失い怒りに心を支配されたあの時の自分は、ただネウロイ
の撃墜だけを考えて動いた。

結果ネウロイは撃墜。

コアを撃ち砕いたことでネウロイは白い破片となって、燃え盛る街
へと降り注ぐ。

その燃え盛る街に、幼かった妹^{クリス}がいた。

その姿を視界に捉えた時、ようやく失っていた冷静さを取り戻した。
大切な妹がいる、その頭上には撃墜したネウロイの破片が…今正に
落ちようとしていた。

その後どうなるか、誰が言わなくても想像出来る。

妹の名を力一杯に叫び、助けに向かった。

もう間に合わない、それを理解していながら…無駄だと分かっ
ていながらも。

そしてネウロイの破片が妹の頭上に落ちようとして…

「そこで私達は、あの青い炎を見た…」

突然、一人の男が妹の前に現れた。
するとその男から巨大な青い炎が燃え盛り、クリスへと降り注ぐネウロイの破片をを跡形もなく、一瞬にして全て燃やし尽くした。

…青い炎を放ち、妹を護ってくれた謎の男。
果たして何者なのか…、その場にいた自分を含め、ミーナとハルトマンもそう思っていた。

しかし、そう思ったのも束の間。
何者であろうと、大切な妹を助けてくれたことには代わり無い。
つまり、命の恩人なのだ。

礼を言いに行こう、そうして降り立ったが…男の姿は既になかった。
クリスの証言によれば、突然倒れて光の粒となって消えたと言う。
にわかに信じられない話だった。

だが、妹が嘘を言うとは、バルクホルンには考えられなかった。

その後も、妹を護^{クリス}ってくれた…青い炎を操る男の行方を調べたが、
結局見つけることは出来なかった。

情報提供者は一人もおらず、此方の見間違えなのでは…と周囲からは言われた。

今でもクリスは言う。あの人は神様に使わされた天使様だ、と…。
天使：そんな非現実的なものはこの世に存在しない。
いるものならこの眼で見たいものだ。
が、クリスを護ってくれた青い炎の男は、正に天使だと自分も思えた。

戦場で冷静さを失うと言う、軍人としてあるまじき失態を犯し、危うく大罪を犯すところだったところを……青い炎を操る男に護られた。

だから自分にとって、その男は妹の言うように天使である。

「そんなことが……」

宮藤の言葉に、バルクホルンは静かに頷く。

「ああ。クリスが言うには、男は自らを“魔術師”と名乗ったそう
だ。

風のように現れ、光となって消える……クリスは天使だと言ってはしゃいでいたな」

「その青い炎を操る者が……この基地を護った、か」

バルクホルンの話を聞いていた、坂本が口を開く。

バルクホルンの妹を護ったという、青い炎を操る謎の男。

その謎の男が、この基地を護りあの謎の人型……騎士型ネウロイを斃した。

基本、ネウロイはコアを撃ち砕かなければ自己再生能力によって何
度でも再生する。

しかし、あの青い炎はそれすらも凌駕する力でネウロイを焼き尽く
した。

男性でありながらウィッチと同様……否、それ以上の力を持つ男。
果たして何者なのか。敵でないことは間違いないが……

そんな時、今まで一言も語らず、考える仕草を見せていたミーナが静かに口を開いた。

「まさか……やはり、彼が？」

「中佐？」

「……一人だけ、見当がついていると言えば、ついているわ」

その言葉に、皆の視線が彼女^{ミーナ}へと向けられた。

「さつきも、バルクホルン大尉の話の通り、私達は青い炎を操る男に逢っている。」

その男なんだけども……この基地にいる、という可能性があるの」

遠目であつたからハッキリとまでは見ていない。

だが、その時の男と顔が似ていると思う男が、この基地にいる。その男は最近新しく配属されてきた……。

「その者の名は？」

「……儀國 雅史。ここに新しく配属された整備兵よ」

|| || || || || || || || || ||

謎の騎士型ネウロイが襲撃してきたその日の夜。

時刻は午後9時過ぎ。基地の明かりは消え失せ、静寂の時間が訪れる。
聞こえてくるのは静かな波打つ音のみ。
その音を聞きながら……砂浜に座り、視界一杯に広がるアドリア海を眺めた。

…これと言って理由もない。
ただ、なんとなく…眠れないから。
こうしてココで夜空を見ている、ただ…それだけ。

「……………」

波打つ音をBGMに聞きながら、儀國は思考を働かせる。

昼間に邂逅し、一戦交えた、あのネウロイ。
騎士の様な形に、本来放出する筈のビームを剣の形に変えて闘いを挑んできた、異質なネウロイ。

あんなネウロイがいるとは、本当に予想外なことだ。
この世界は果たして何か？

アニメ（二次元）の世界の中に紛れ込んでいる…そう考えていいのだろうか？

それとも、もっと別の…何か異質な世界と考えるべきなのか。
自問したところで、その答えは無論導き出されない。

「ハア……どちらにせよ、暫くは整備兵暮らしだな」

そのまま大の字になって砂浜に寝転がる。

寝転がったことで視界は海から天空へ。

…綺麗な夜空だった。

例えるのならば宝石箱の中にいるかのよう。

漆黒の空に大きな月が神々しい金色の輝きを放つ中、その輝きに混じって幾つもの無数の星々が煌いている。

こんなにも綺麗な夜空を見上げたのは、いつ頃だったか…。
そんなことを、儀國はふと思った。

第一章 第二節：襲撃（後書き）

とりあえず、投稿完了しました。

一先ず、ウィッチ達との邂逅までは今週中に投稿したいと思っています。

これからも皆様、応援よろしくお願いいたします！

すわっ！！

第一章 第三節：脅迫（前書き）

修正ver第三節です。

ここから大きくストーリー内容が変更されています。

そして、儀國の性格も…。

どうぞ!!!

第一章 第三節：脅迫

翌朝、いつもの様に起きて食堂で朝食を摂る。
今朝はパンとスープ、サラダとハンバーグだった。
朝から意外とボリュームのある食事である。

ただ一つだけ、残念なことがあるが…。

「頂きますつと……って、今日の朝飯はパン食か」

「ん？ 儀國はパンは好きじゃないのか？」

「嫌いつて訳でもないけど……あんましな」

整備兵の質問に答え、焼きたてのパンに手を伸ばす。

基本、自分は朝はご飯派だ。パンというのはどうも好きになれない。
かと言って全く食えない訳ではない。

ただ、パンのあのパサパサ感がどうも好きになれないだけ。

「
」

整備兵達の声で賑わう食堂。

その中で、昨日の話について盛り上がっていた。

新たなネウロイの出現による襲撃。

被害は少なく、基地全体の機能としては全く問題なし。

今施設班が襲撃を受けた所を必死に修復作業を行っている。

…中世の騎士を思わせる形をした人型のネウロイ。

昨日手合わせし、その戦い方は本来のネウロイとは逸脱した戦い方であった。
外観相応、騎士として、剣に形を変えたビームで筋のいい斬撃を放ってきたあのネウロイ。

実力的には大した事はなかった。

何か特別な力を持っている訳でもなく。

ただ攻撃方法が射撃と言う遠距離闘法から、斬撃と言う近距離闘法に変わっただけ。

あの程度のネウロイならば、ウィッチでなくても戦い方次第で男性でも勝てそうな気がする。

「おい儀國」

と、安藤の声に儀國はパンを銜えたまま振り返る。

「昨日聞き忘れていたが…お前あの時何処に行っていたんだ？」

「いや、だから普通にトイレに行っていましたけど？」

「……本当か？」

疑いの眼差しを向けてくる安藤。

トイレに行っていたのは言うまでもなく嘘。

しかし、ここは騒ぎを起こしてはならない。

儀國はワザと不満げな表情を浮かべて、安藤に答える。

「何で疑うんですか……」

「いや、随分と長いトイレだったからな。それにしても……軍人として、あんな非常時にトイレに行く奴を見たのはお前が初めてだ」

「そりゃどうも。いや、腹が急に痛くなったもんで」

「褒めてない、後あんなに食うからだッ!!」

頭に拳骨が落ちる。

整備兵達の笑い声が食堂に溢れた。

|||||

朝食後、いつもの様にストライカーユニットの整備作業に入る。自分が担当するのは、宮藤のストライカーユニットとなった。

それ以外は昨日と同じ作業。

ストライカーユニットを解体してメンテナンスして再び組み立て直す。

それだけで約三時間程度の時間が経過する。

ストライカーユニットの整備が終われば丁度昼食の時間。

今日の昼食はパスタ、ペペロンチーノだ。

ガーリックスライスと赤唐辛子。

程よい辛さが口の中に広がる。

ここの料理長はいい腕をしている。

味は言うまでもなく美味しい。

満足りてにパスタを食べながら、お代わりを要求する儀國。

「それにしても…随分と楽だな」

二杯目となるペペロンチーノを食べながら、儀國はふと口にする。

ここには衣食住全てが揃っている。

仕事も楽と言えば楽な方。

ウィッチ達のように訓練もなければ出撃する必要もない。

仕事と言えばストライカーユニットをひたすら整備するだけ。

それだけで給料が貰えるから何とも楽な仕事だ。

ただ一点、不満を挙げるとするならばゲームやマンガがない、と言った所か…。

夜は非常に退屈な時間となる。

本来ならば意味もなく徹夜でゲームをし過ごしていた、パソコンと向かい合いインターネットをしていた。

その本来していた事が出来なくなると、やはり退屈で仕方がない。

そう言った意味では今すぐにでも、元の世界へと早く帰りたい。

…その肝心な方法は、まだ見つかっていないが…。

「おい儀國、ミーナ中佐がお前を呼んでるぞ。早急に来い、だそうだ。」

お前…何かしたのか？」

遅れて食堂にやってきた安藤。

隊長から呼び出しを受けた。

「おいおい、こっちは今飯中だぞ？つたく…」

儀國は呆れながら、二杯目のパスタを急いで口へと掻き込む。

ネウロイだけではなく、ミーナも空気を読めないのか。
そんな事を思いながらも、ミーナの待つ執務室へと向かった。

|||||

ミーナから呼び出しを受け、渋々と執務室へ。

執務室へと来た途端、早速質問が始まる。

正面にはミーナ、その左隣に坂本、逆の右隣にバルクホルンが立っていた。

「それで、俺に何の用ですか？ 飯食つてた最中なんですけど」

只ならぬ空気がこの場を支配していた。

ミーナはとてもしい笑顔を浮かべているが、その裏では隊長としての覇気を感じる。

「貴方に聞きたい事があります。昨日、私達が出撃した後、貴方は何をしていましたか？」

「何をしていたって…そりゃハンガーで待機ですよ。

でも途中で手洗いに行かせてもらいました。

勿論許可は貰いましたよ？」

一応安藤には嘘だがトイレに行くということは伝えてある。他の整備兵にも食べすぎだと言って笑われた。周囲がそう証言しているのだ、嘘とは思われない。

「そう、それは他の整備兵からも聞いています」

「でしようね」

「…貴方に率直に質問します。貴方は魔法が使える…そして昨日、基地を襲撃した人型ネウロイを斃したのは貴方では？」

「…いやいや、中佐は随分と冗談が好きなようで」

口元を緩め、儀國は言う。

「考えてみても下さい中佐。俺は男であって魔女じゃない、ただの整備兵。」

男が魔法を使えると…中佐はそうお考えですか？」

この世界で当たり前のルールを口にした。

魔法が使えるのは魔女達、即ち女性だ。男性はそんな特殊な力を所持していない。

だからこそネウロイに挑んでも勝てない、脇役程度で終わってしまうのだ。

「…貴様、嘘は言っていないだろうな？」

不意に、バルクホルンが尋ねてきた。

「お前は以前、あのカールスラントの街で私の妹を助けてくれたんじゃないのか？」

「え……？」

随分と可笑しな事を口にする。

儀國は思わず疑問の声を出していた。

バルクホルンの妹：クリステイアーネ・バルクホルン。

彼女はカールスラントの街でバルクホルンが撃墜したネウロイの破片の浴び、精神的ショックもあって昏睡状態に陥った。

第一期ではバルクホルンは給与の全てを治療費に回していた。

しかし無事昏睡状態から回復し再会を果たしている。

そんなエピソードだった。

そんな彼女の妹を助けた記憶など、自分にはない。

それにその頃のカールスラントはネウロイの侵略を受けて激戦地区となっている。

誰か好き好んで、そんな危険な場所に誰がわざわざ赴く？

ウィッチや兵士でもない人間が行くなど、自殺行為と同じことだ。

仕事であった場合話は変わってくるが…。

兎に角、カールスラントには行っていない。

バルクホルンの妹も助けていない。

それだけは確実に言える。

「有り得ないですよ、絶対に。俺はカールスラントには行つたとはありません」

断言する儀國。

バルクホルンは何も言わず、けれども何か言いたげな表情を浮かべていた。

暫くの沈黙が続き、ミーナは軽く息を吐くと口を開いた。

「……そうですか、では話は以上です。」

ごめんなさい、食事中にいきなり呼び出したりして」

「いえ、それじゃあ失礼します」

敬礼をミーナにし、部屋を後にした。

「ふう……」

思わず安堵の溜息が漏れる。

何とか嘘を通し切ることが出来た。

ミーナという女性を少し侮っていた。

あれだけの覇気を顔に出さず笑顔を作っていた。

流石はこの第501統合戦闘航空団の隊長を務めるだけの人物である。

隊長格という存在は、決して甘く見てはならないようだ。

「さてと、早く戻って昼飯の続きといくか」

途中で中断されてしまった昼食を摂りに儀國は食堂へと戻った。

敬礼をし、彼（儀國）が執務室から出て行く。

その姿を見届けた後、ミーナは小さな溜息を吐いた。

「……どう思う？」

「奴は絶対に嘘を言っている！間違いない！」

ミーナの言葉に、バルクホルンが声を荒げて答えた。

あの男は表情一つ変えず、自分達の質問に答えた。

多少脅しを掛ける様に、威圧感を放ってミーナも質問した。だがそれを、あの男は難なくと対応した。

しかし、あれは絶対に嘘だと思う。

明確な理由を述べよ、そう言われれば嘘だと決定付ける物など何も無い。

ただ己の勘が…嘘を吐いている、と…そう告げている。

「どうする中佐!？」

「……そうね、暫く彼の様子を見ることにしましょう。でももし、本当に彼ならば……」

ミーナは静かに瞳を閉じる。

ここ最近になり、ネウロイもより強力な物が出現している。
もし、儀國 雅史が……彼があの子炎を操る男だしたら。
今後の戦いで自分達は大きな戦力を得る事となる。

その為には、まず青い炎を操るという証拠を押さえなければなら
ない。

今の彼（儀國）に問い詰めたところで、結果は今と変わらない。
違うと否定されるがオチ。

上手く、何とかして彼への協力を得なければ…。

|||||

翌朝、今日も整備兵としての勤めが始まる。

「おかわり」

「おい儀國、お前はいつも食いすぎだ！」

食堂で朝食を安藤がストップを掛けるまで食べて

「それじゃあ飯を食ったし一休み一休みと……」

「これから仕事だ、さっさと行くぞ！」

食後の休憩をしようとしたところを、安藤に怒られて渋々とハンガ
ーへ行き

「い・ま・に！ 言葉も何もなくなつて、駆け出すブルースが」
「なかなかいい歌だな、その歌。聞いたことのない歌だが：何て歌だ？」

「ん？ “茜色が燃えるとき” ってタイトル。
俺の好きな曲の一つだな」

「お前等仕事中だぞ！！」

自分が好きな歌を唄いながら仕事をし、それを聴いて興味を示した仲間に歌詞を教え、真面目にやれと安藤に拳骨を落とされる。そんないつもと変わらない一日が今日も始まるうとしていた。

だが、今日はそのいつもと変わらない一日に、ちょっとした変化があった。

「ん？」

何者かの視線と気配を感じ、儀國は整備作業をしていた手を止める。

背中に突き刺さる何者かの視線。

気配を追って振り返れば、滑走路へと続く出入り口で何かが動いた。視線は消え、気配はここから遠ざかっていく。

「どっしした？」

「……いや、何も」

儀國はストライカーユニットに視線を戻し、整備作業を再開する。

自分に向けられた何者かの気配。

敵意や殺気は一切感じられなかった。

だが、微かに魔力を感じた。

誰かまでは分からない。だが、相手が誰なのかは分かった。

この隊に所属しているウィッチ達、その内の誰かが…此方に視線を向けていた。

基本、ウィッチとの交流は禁じられている。

そんなルールがあるにも関わらず、整備兵が働いているこの場所に
来るウィッチ…。

…脳裏に、一番確立が高いウィッチが浮かび上がった。

フランチェスカ・ルッキーニ、階級は少尉。

年齢は13歳と、この部隊で一番の最年少ウィッチ。

自由奔放、他のウィッチよりも子供であるルッキーニならば、来て
いたとしても違和感はない。

何故来たか…そんな疑問はどうでもよかった。

子供がただ興味本位で遊びに来た、そう思えば自然と納得出来る。

儀國はストライカーユニットの整備作業を続ける。

そして……

「悲しみにの果てに 燃え上がるまゝで」

全員で合唱し、安藤には呆れられながらも本日二度目の拳骨が落ち

た。

|| || || || || || || ||

…気のせいだ。その時は、そう思っていた。
けれどもそれは気のせいではない、そう気付くのに時間は要らなかつた。

「チツ……またか」

苛立ちを見せながら、整備作業を中断する儀國。

…あの時から、慣れていた環境に悪い意味で変化が訪れた。
今日も今日で感じた気配と視線。

その気配を察知し振り返れば、その気配は颯爽と立ち去っていく。
そんな毎日がここ最近続いている、今日で三日目だ。

整備作業をしている時だけではない。

休憩時間中庭でぼんやりとして過ごしている時、廊下を歩いている
時等等など…。

兎に角、行動する度に何者かの気配と視線を感じる。

最初はその内終わるだろうと、放置していた。
けれどもそれは収まる所か日に日に酷くなっていく。

これは遊びでも何でもない。

理由が何にせよ、俺は“監視”されている。

何故監視される必要があるのか？

何故監視するように、この部隊の隊長はそう判断を下したのか？
ここままでは、便所にまで監視の目が届くかもしれない…。

いずれにせよ、これでは落ち着いて毎日を過ごしてられない。

常に見られていると言っことから与えられるストレス。

そのストレスも…限界点に達しようとしていた。

「……仕方が無い。少しばかり釘を刺しておくか」

これ以上生活を乱されたくは無い。

少しばかり、脅しを掛けることに決めた。

「あ、動いた！」

ターゲットを捕捉。

昼過ぎ、何処かへと一人向かうターゲットの姿。

その姿を視界に収めつつ、尚且つ相手に悟られないように…。

フランチェスカ・ルツキーニは任務を実行した。

ミーナ中佐が全員に言い渡した指示。

それは新しく配属された整備兵、儀國 雅史の監視。

中佐曰く、あの時に見た青い炎を操る男の顔が…今回のターゲットではないか、と。

ハッキリと見た訳ではない、だがとても似ている。

そう中佐は言っていた。

そして今日で三日目を迎える。

監視をしているが未だに収穫なし。

ターゲットも意外と鋭く、警戒してなかなか尻尾を出そうとしない。

結果が出ないことにイライラしている大尉。

人違いなのか：そう思い始めている中佐。

男でありながら魔法が使える、魔術師の存在に興味を示すその他。

他のメンバーも監視に当たっている。

けれども結果は皆同じ、決して尻尾を男（儀國）は出そうとしなかった。

「
」

上を見上げる。

二階建ての建物、その二階の廊下の窓から見えるパートナーの姿。

頷くシャーリー、そして窓から姿を消す。

現在、シャーリーと共に行動している。

建物からシャーリーが、そして自分は直接ターゲットの後を追う。

そう言った作戦で任務を遂行している最中なのだ。

こういった任務は面白そうだから、普段よりも熱が入る。

「
」

物陰に隠れつつ、ルッキーニは儀國 雅史の後を追う。

「あれれ？」

ルツキーニは周囲を見渡す。

儀國 雅史の姿が消えた。

確かに今、そこを曲がったばかりなのに。
辺りを見回しても儀國の姿は何処にも見当たらない。

いったい何処へ…

「動くな。動けば…このままお前の首を押し折る」

「ッ！！！」

自分が追っていた者の声が、“後ろ”から聞こえた。
そして首には男の手が拘束している。

只ならぬ威圧感に、ルツキーニは動けずにいた。

仮にも自分は軍人だ。

徒手空拳による訓練は受けていると言えは受けている。

けれども、それをした所で無意味に終わる。

少しでも動けば間違いなく、一瞬にしてこの首は男の言う通り押し折られている。

だから下手に動けない。動けば…殺されてしまう。

シャーリーに助けを求めようと視線を上に向ける。

けれどもシャーリーの姿は何処にもない。

それもその筈。

今いるこの場所は建物側からすれば、完全に死角となっている。基地内に生えている木や柱、それらが全て邪魔している。

「……………」

下手に声も出せない。

この状況を一体どうやって切り抜ければいい？

慌てふためくルツキーニ。

すると突然

「ってあれ？ お前は……………」

首を拘束していた手の力が緩む。

「何だ、フランチエスカ・ルツキーニ少尉でしたか。

いやてつきり、何処かのスパイか何かかと…思っちゃいました」

そう言つて男の手は完全に拘束を解いた。

そしてあの威圧感も消える。

拘束が解かれた時、ルツキーニは慌てて儀國から大きく間合いを取った。

「どうしたんですか？ 誰かを追っているようでしたけど…」

「べ、別に！ 誰も追ってないよ！！」

監視していることを、絶対にターゲットに悟られてはいけない。
一刻もこの場を離れてシャーリーと合流したい。

「そうですか。ところでフランチェスカ・ルツキー二少尉。

俺…私はですね、拘束されたり知らない人から詮索されるのが大…
いや、超が付くぐらい嫌いなんですよ」

「ふ、ふん……」

「それでね、もしそんな事をされたりしたら…ある事をしているんです」

「へ、へ…それってな、何？」

…聞きたくない。

聞きたくないが、ついつい返答を求めてしまった。
そして相手は口元を緩め……

「……例外なくぶち殺している」

悪魔の笑みへと変貌した。

「…ッ！！」

「俺はね…自分のことを詮索されるのが非常に嫌いだよ。勿論、
その詮索するヤツもだ。

何を企んでいるかは知らない。

けど、これ以上人を監視したり付回すのはやめてもらいたいな。

儀國は頭を掻きながら、逃げていくルツキーニの背中を見送った。

第一章 第三節：脅迫（後書き）

修正ver第三節でした。

とりあえず…。

こんな脅しは自分から正体バラしてるようなもんじゃねーか！？
と、言うツツコミが来そうなので、先に言うっておきます。

いいんです！！ これです！！！！

皆さんだって、親しいご友人の方にも言えないことってあると思
います。

それを無理矢理とか何度も聞かれたりしたら怒る…それと一緒に
です！！

…まあ、これはあくまで自分の考え方なんで、どうかは分かりませ
んけど。

兎に角、そういう事において下さい。

それでは…すわっ！

第一章 第四節：悪魔の饗宴（前書き）

いよいよ、ウィッチ達と本格的な出会いを果たします。

前作と修正verとの違い、ご覧ください。

それでは…どうぞ…！

第一章 第四節：悪魔の饗宴

整備兵としてこの基地：第501統合戦闘航空団に務めて早一週間が過ぎる。

基地の雰囲気にも今ではすっかりと慣れ、多くの仕事仲間と楽しく仕事をしている。

上司の安藤も最近では口煩く言わなくなった。

大方、諦めたのだと思う。

最近では唄わないと、今日は唄わないのか、と言ってくるぐらいだ。

そして整備兵の仲間達とは雑談を交わしながら、自分が好きな歌を教える。

今日の午前の整備作業では『here comes the rain』を教えていた。

そんな日々を過ごしながら、整備兵として務めている。

あれから急に気配も視線も感じなくなった。

ルッキーニがミーナに報告した、のかは定かではないが…。
兎に角、監視から解かれたのは有り難い。

「rain…here comes the rain……」

「おい見ろよ儀國」

不意に、一人の整備兵に話しかけられる。

気分よく唄っている所に邪魔が入った、そんな不満を心の中で言いながら視線を向けた。

「どうした？」

「この記事さ」

男が持っていたのは一部の新聞。

デカデカと載せられている写真、その写真に写し出されているのは一体のネウロイ。

ただのネウロイではない。

人型……それも騎士の様な形をしたネウロイであった。

自分が屠ったあのネウロイ以外にも、別の騎士型ネウロイがいたようである。

デザインは大きく異なり、騎士……と言うよりも死神を連想させる。手には大鎌の様な物も携えているし……。

これもまた、ビームを大鎌の形へと変換させた物なのだろう。

儀國は新聞に眼を通す。

昨日アフリカにて突如出現した謎の人型ネウロイ。

今までのネウロイとは大きく異なり、大鎌を思わせる武装を突出。近距離における戦闘へと持ち込んでくる。

第31統合戦闘飛行隊がこれと接触、交戦を開始する。

しかしネウロイの撃墜は成功出来ず、第31統合戦闘飛行隊はダメージを負った。

機能的には問題ないとのこと。

アフリカの星こと、ハンナ・ユステイナー・マルセイユ大尉は「ネ

ウロイに生かされたという屈辱を受けた、その屈辱を必ず果たすとコメントしている…。

と、新聞にはそう書かれていた。

「ふん……」

「凄いだろ？ あのアフリカの星がだぞ？」

「別に、興味ないな」

新聞をその整備兵に返す。

そう、自分にとってこの記事の内容は本当にどうでもいいことだ。

アフリカの星が負けようと、新たな騎士型ネウロイが現れようと、自分には何の関係もない。

挑まれれば容赦なく叩き潰す、だが…それ以外では決して動かない。動く理由がない、というのが主な理由だ。

ネウロイを斃すのはこの世界の住人…ウィッチ達。

この世界に住む人間がどうにかすればいい。

「おいおい、お前は何とも思わないのか？」

「思わないな。アフリカの星が負けようと、俺達ができる事はストライカーユニットの整備のみ。

それにアフリカの星以外にもエースは沢山いる、死んだのならばまだしも生きてるんだ。

そう驚くことでもない」

「そりゃそうだけど…」

「儀國の言う通りだ」

安藤がやってくる。

「俺達がすべき事は、ウィッチ達が出撃した際に不備が起きないように。」

万全な状態で闘えるように整備する事。

さあお前達、手が止まっているぞ」

安藤の号令の下、整備兵達は作業へと戻る。

それに続いて、歌を口ずさみながら儀國も作業へと入った。

昼過ぎ、作業も一段落し休憩時間。

することがなくなった今、適当に基地内を歩いて時間を潰している。

「はぁ……暇だ、マジで暇すぎる」

仕事をしていたり楽しい時間は直ぐに過ぎ行くが、退屈な時間は時間の流れが非常に遅く感じる。

仲間達とのトランプゲームも飽きてきた。

本を読もうとも思ったが…この世界にマンガなんてものはない。

あるのは活字が並べられた難しい本。

活字は嫌いだ、読んでいて眼が痛くなるし頭も痛くなる。

「せめてPSPでもあればな……」

「でねでね……うじゃっ……」

前方からルツキーニとシャーリーのコンビが歩いてくる。

と、此方に気付くや否やルツキーニは脅えた声を上げて、シャーリーの後ろに隠れた。

「……………」

シャーリーは無言で見据えてくる。

警戒している、のだろう。

その彼女の後ろに隠れたルツキーニは、少しだけ顔を覗かせて様子を伺っていた。

「……………」

儀國はそんな二人を気にせず、そのまま無言で横切る。

話す事は何もないし、向こうとて用はない筈。

あの二人の様子からして、ルツキーニは皆に話したようである。

ならば皆も、己の命の安全の為に余計な詮索は避けようとするだろう。

…冗談だと言う事は、ちゃんと伝わっているのか。

そんな心配が脳裏に過ぎる。

今日は珍しく、この隊のウィッチ達によく出会う。

宮藤、リーネ、ペリーヌ、坂本、エイラ、サーニャ…の計六人と出

会った。

すれ違う度に宮藤とリーネには脅えられた眼で見られ、ペリーヌと坂本には警戒心を剥き出しに見つめられ、エイラはサーニヤを護るが如く前に立ち睨んでくる始末。

…ルツキーニが冗談で言った、という部分を皆に伝えていないことが確定した。

「…完全に悪者になったな、俺……」

釘を刺す為に言ったとは言え、もう少しやわらかく言えばよかった。口は災いの元、後悔先に立たずとは正にこの事。後悔してももう遅い。

「……まあ、いいか」

関わってこないのなら、それでいい。お互い干渉しない方がいいのだ。この世界で英雄になろうとも、なりたいとも思わない。

自分はただ、元の世界へと帰りたい。ただ、その日が来るのをこうして待っているに過ぎないのだから……。

|| || || || || || || || || ||

夜が訪れる。

今日も今日で砂浜へと向かう。

今日も砂浜に横になって、そして夜空を眠くなるまで見上げる。
もはや日課となっている。

「……………ん？」

儀國の視界にある物が映る。

どうやら今日は先客が居るらしい。

夜の砂浜、そこに居たのはこの部隊の隊長。

ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ中佐。

彼女は夜のアドリア海に向かって唄う。

綺麗な声で、波の音と共に……リリン・マルレーンを彼女^{ミーナ}は唄っていた。

テレビ越しで聞くのと、生で聞くそれは随分と違う。

実際にこの耳で聞く彼女の歌声は、心に何か響く。

感動……ではない、確かにプロ並だとそこは認める。

けれども別の何かが、心の中にあっただ。

例えるのならば、そう……それは何処か、“懐かしい”。

まるで、心に印象深く残っていた幼い頃の記憶が……長い時を経て甦るかの様な。

そんな感覚を、儀國は感じていた。

ミーナの歌が終わる。

と、彼女は此方に気付き少し驚いた様子で顔を向けた。

「……とてもお上手でしたよ、ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ
中佐」

儀國は拍手をしながら感想を述べた。

「有難う。…いつからそこに？」

「今来たばかりです。まあ眠れなくて散歩してたらたまたまって
ヤツですよ。それじゃあ、俺はこれで」

早急に立ち去る儀國。

ウィッチとの交流は禁止。

この場に留まっていたら何を言われるか…。
ただでさえ、訳も分からず監視されていたくらいだ。

何か言われる前に早急に立ち去るのが得策。
儀國は踵を返し、この場を後にしようとし

「待ちなさい、儀國 雅史さん」

隊長に呼び止められた。

「……俺に、何か用ですか？」

背中をミーナに向けたまま、儀國は尋ねる。

「…貴方はやはり、あのカールスラントの街でクリスマスちゃんを助け
た…」

「またですか。だから知りませんよ、そのクリスって人は」

「……………」

「誰かと、きつと勘違いなさってるんですよ中佐は。」

それじゃあ、今度こそ俺はこれで

偶然か、必然か…。

もし後者だとしたのなら、この世界の神様と言つのは意地悪な性格をしているらしい。

気配もなく、音もなく、それは突如としてこの場に現れた。

「こ、これは…!」

「人型…いや、騎士型ネウロイか」

ビーチに姿を現したのは、以前斃したのと同型のネウロイ。ただ、その数は以前の倍。

砂浜に…二人を取り囲むように。

凡そ100体程の騎士型ネウロイが四方にいる。

手からは赤く発光するビームブレードが突出する。

「い、いったい何処から……………」

「……………」

ミーナが驚愕している中、儀國は静かに思考を働かせる。

ミーナの言う通り、この騎士型ネウロイ達は一体どうやってこの基

地に現れたか。

監視の眼を掻い潜り、察知されることもなくどうやって…。
…現時点で考えられる説が一つだけ、脳裏に拳がっている。

この騎士型ネウロイ達が姿を現した際、一瞬だけ微弱な魔力を感じた。

経験上からして、この手の類は一つに絞られる。

『召喚』：術者の魔力によって製作した傀儡を呼び出すか。或いは、魂の契約を交わした幻獣を呼び出すか。

今回の場合、この可能性が非常に高い。

だが、大きな疑問が出てくる。

それをどうやって成したか、と言う疑問だ。

この世界には“固有魔法”という設定（魔法）がある。

ウィッチ達が保有している最大の武器とも言える設定。

様々な系統としてあるが、どの魔法にも必ず魔力を用いる。

つまり、召喚魔法と言う魔法カテゴリーがあつたとしても、それを発現するには勿論魔力を必要とするということ。

と、なれば一体誰が？

ネウロイは彼女達ウィッチの様に魔法は使えない。

使えないのにどうやって、それを成し遂げられた？

ネウロイではない、第三者（魔女）がしたとも、まず考えられない。

ネウロイはこの世界にとって脅威、駆逐せねばならない存在。

その脅威に加担する人間は、まず誰一人としていない。

そんな事をすれば、そいつは人間に反旗を翻した咎人となる。

一体、どうやってこのネウロイ達は現れたか。

術者の姿はない、気配も同様：感じられない。

答えは…導き出されない。

…いや。もし、自分が間違っていたとしたら？
今俺は、ネウロイは魔法を使えないと考えている。
この事こそが、大きな誤りだとしたら…？

「ってそんな事よりも…今はこいつ等を、だな」

思考を一時中断し、儀國は敵を見据える。

逃げ道は何処にもない。

袋のネズミとは正にこの事を差す。

この危機的状況、乗り切れない…という事はない。
相手は雑魚だ、雑魚相手に臆する必要は何処にもない。
だが、それは自分一人なら…の話である。

隣にはお荷物^{ミーナ}がいる。

今ここで力を使えば、完全に自分が魔法を使える…即戦力として使える人間だと知られる。
そうなれば、彼女達は絶対に軍の戦力としようとしてくるのは、言うまでもない。

「さてと…中佐、この状況どうします？」

「……………ッ」

儀國の問いに、ミーナは答えない。

打開策はない、そう捉えていいのだろう。

それもその筈、ミーナからしてみればこの状況は最悪でしかない。

唯一戦えるのは魔女である自分だけ。

しかし、ストライカーユニットもなければ主武装であるMG42もない。

固有魔法もペリーヌの雷撃トネールや、ハルトマンの疾風シユトルムの様な戦闘向けではない。

更に隣には戦力外の整備兵がいる。

こんな状況で切り抜けられる筈などない、と…そう思っているのだろう。

「ッ！」

一体の騎士型ネウロイが、ビームブレードを振り上げてミーナに襲い掛かる。

“……仕方ない”

実に不本意である。

不本意ではあると思いつつも、儀國は動いた。

「燃え尽きる」

ミーナに襲い掛かった騎士型ネウロイの頭部を鷲掴みにし、その状態で「煉獄の青焰Belphesor」にて燃やし尽くす。

瞬く間に、青い炎に包まれた騎士型ネウロイ。

鷲掴みにしている手の中で、騎士型ネウロイは跡形もなく燃え尽きた。

「あ、青い炎……!!！」

「ハア……目立ちたくないから、ずっと演技し続けてたんだけどな。まあいい、お前等……俺に挑んだからには、生きて帰れると思うなよ？」

全身から青い炎を昇らせて、儀國は不敵な笑みを浮かべる。

と、ミーナに振り返り

「アンタはそこから動くな。アンタが死んだら、この基地の士気が大幅に下がってしまうからな……。」

とりあえず……今だけは俺がアンタを護ってやるよ、中佐」

一瞬だけ口元を優しく緩め、そして騎士型ネウロイ達へと青年は視線を向ける。

その表情は無慈悲。

黒き輝きを宿す二つの眼は、生けし者の魂を狩る「死神」の眼へと変貌していた。

それは突然だった。

サーニヤの魔導針がネウロイの気配を捉えた。その数は凡そ100体程だと、彼女は告げる。

「先日の件と言い……一体どうなっている!？」

坂本はストライカーユニットを纏いながら、愚痴を零す様に言う。
今までこんな事なかった。

どうして誰もネウロイの接近に気付けなかった？
この基地への接近を許してしまうなど、一生の不覚である。

騎士型ネウロイの出現、青い炎を操る男、そして突然の奇襲。
全ては、トラヤヌ作戦が失敗し新たなネウロイの巣が出現してか
ら…。

ネウロイも、ブリタニアにいた頃よりも強力な物になっている。
それにもう一つ、最悪の展開が坂本の頭にはあった…。

「ミーナ…無事でいてくれ！」

隊長であるミーナの姿が何処にも見当たらない。
ビーチにネウロイ気配を感じるとサーニヤは言う。

嫌な予感がした。

何故ビーチにネウロイ達が集結しているのか、それは分からない。
だが、ミーナの不在と関係していたとなれば…。

もしそうだとすれば、ミーナが危ない。

「行くぞ！全機出撃！！」

「了解！！」

坂本は皆に号令し、ビーチへと向かって滑走路を飛び立った。

ビーチへと直ぐに付く。
そこで信じられない物を眼にした。

「青い炎…！！」

バルクホルンが叫んでいた。

か弱き一人の魔女を護らんと、たった一人の男が青き炎を放ち敵を一瞬にして燃え散らす。

その光景はまるで、地獄に住まう悪魔が煉獄の炎を以って暴れ狂うが如し。

見当がついていると、彼女が口^{ミナ}にしていた男が。

人型ならぬ騎士型ネウロイ達を、青き炎を轟々と燃え上がらせ、次々と屠っていた。

絶対的な強さ、この世のものとは思えない程の恐怖感。

それを以ってして敵を殲滅する、この基地に配属された新米の整備兵：儀國 雅史。

扶桑皇国にこれ程の強さを持った者が…。

魔女でないにも関わらず、魔法が使える男が居たとは…。
坂本は息を呑んだ。

事実上、ネウロイを斃せるのはウィッチだ。

従ってネウロイが出現したのならば、それを撃墜しに行くのが我々ウィッチの役目。

だが今回は、自分達が出る必要は無い。

…否、出る幕すら最初から用意されていない。

青き炎を躍らせ敵を葬るあの男は、我々の加勢を必要としていない。戦力外とすら思われていても、可笑しくは無い筈。

だからこうして、上空からその姿をただ、見つめているしかなかった。

出勤してから二分後、ビーチに出現した騎士型ネウロイ達の姿は消えた。

跡形もなく、物質が燃える臭いや煙すらも上がらず。完全に、青き炎によって…葬り去られた。

悪魔の饗宴が今、終わりを告げた…。

|| || || || || || || || || ||

魔女達は砂浜へと降り立つ。

つい先程まで繰り返されていた、悪魔の饗宴。

青き炎と踊っていた男は、やれやれと…心底不機嫌そうな表情を浮かべていた。

「やはり、お前だったのか…」

バルクホルンはゆっくりと、青き炎を操る男（儀國 雅史）に近付

く。

自分は違う、人違いだと口にしていた男だったが、やはりこの男だった。

自分の勘は、決して間違っていないかつたと証明された。

大切な妹を助けてくれた、そして今大切な家族の一員である彼女をミーナ護ってくれた、天使。

だが、今の戦い方を見るに…その姿あまりにも天使から掛け離れている。

強いて言えば…そう、あれは悪魔だ。

「まったく…全員に見られた訳か」

儀國は大きな溜息を吐く。

そして振り返り、後ろで力なく座っていたミーナに手を差し伸べる。

「立てるか？ 隊長さん？」

「え……ええ……」

啞然とした様子のまま、ミーナは差し出された手をゆっくりと掴む。そして立たされてからも、啞然とした様子は消えなかった。

「さてと……とりあえず面倒な話は今度にしてくれ。そろそろ眠たくなってきた」

大きな欠伸を零し、ビーチから儀國は立ち去ろうとする。

「ま、待て！お前には聞きたいことが

」

バルクホルンは慌ててその後を追い掛ける。

その時だ。

急に儀國が踵を返し、此方に向かってきた。

人間とは思えないそのスピード、銃弾が迫ってくるかと思わせる迫力。

同時に、背後から少佐やミーナの叫び声が聞こえた。

何を叫んでいるのか、それを確認しようと思いついた際向かってきた儀國に身体を押される。

「うわっ！！」

受身も取れず、そのまま砂浜に倒れこんだバルクホルン。

何をする、そう問おうとし身体を起こした時

「……えっ？」

私は我が眼を疑った。

儀國の左肩から赤い液体が勢いよく噴出す。

その液体が顔に付く。

触れなくても分かる。この独特な鉄の臭いと色、これは……血だ。

その背後：赤く発光する刃をした大鎌を手にした……異形の者の姿があった。

それも、誰かが説明しなくても分かる。

あの漆黒に染められた身体に、騎士を思わせる姿。

新手の怪異……騎士型ネウロイだ。

「ちいつー!!」

儀國は舌打ちをし、全身から青い炎を放ち異形の者を飲み込もうとする。

しかしそれよりも早く、大鎌を手にした騎士型ネウロイはその場から離脱。

煙の様に姿を消した。

「き、消えた……だと!？」

少佐は背中の扶桑刀……烈風丸を払い警戒する。

「お、お前……私を庇って……」

「た、たく……迷惑掛けんじゃねえよ、この……バ……」

不敵な笑みを私に浮かべた。

そしてそのまま儀國は力なく、私の目の前でゆっくりと倒れた。

左肩から留まることなく流れ出る生命の源。

見る見る内に顔色も悪くなり、呼吸も荒くなっていく。

「おい、しっかりしろ!!」

「宮藤、すぐに治療を!!」

「は、はい……」

少佐の迅速な指示の元、各々が動く。

治療に当たる宮藤、ペリーヌとリーネは基地へと戻り医師のアレッシアへと連絡。

その間、私はどうすることも出来ず。

ただ、宮藤が儀國を治療しているのを見つめているしかなかった…。

第一章 第四節：悪魔の饗宴（後書き）

まあ、こんな感じでとりあえず全員と邂逅を果たせました。
如何でしょう？

さてさて、何とか今週中に第一章を描ききることが出来てホッと
しています。

来週からは一週間に一話、のペースで更新していこうと思います。
何曜日、までかは分かりませんが…。

以上第一章でした。

すわっ！！

第二章 第一節：対面（前書き）

第二章 第一節です。

前作で言つと：Act 5、でしたっけ？

ここも大きく話が変わっています。

それでは、どうぞ。

第二章 第一節：対面

目覚めは最悪。

左肩に走る痛みと、耳障りな雨の音に意識が呼び起こされる。

いつもなら窓から差し込む太陽の日の光で、清しい朝を迎える。

だが今日は生憎と雨。

いつもはアドリア海の上は雲ひとつない快晴の空が広がっている。

今日はその空も曇天、どんよりとした雲に覆われ地上には雨が降り注ぐ。

雨は天使の涙：誰かがそんなバカらしい事を言ったのを、ふと思い出す。

眼を開ければ無機質な天井がまず出迎えた。

身体の背面には柔らかく、心地のよい感触。

ベッドに横たわらせていた身体を起こし、周囲を見渡せば医療器具や薬品が詰められた瓶を沢山並べた棚が見える。

儀國は瞬時に理解する。

ここは、今寝ていた場所は医務室なのだ。

「アイツ……」

何故医務室で眠っていたのか、それは言うまでもなく理解している。左肩を保護するように巻かれた包帯。

その傷を擦れば、昨日の出来事が鮮明に甦る。

バルクホルンに襲い掛かろうとし、それを庇う事で負ってしまったこの傷。

ヤツは：あの騎士型ネウロイはアフリカに現れ、第31統合戦闘飛行隊と交戦したというネウロイ。

手には剣ではなく大鎌、差し詰めビームサイズと言った所だろう。しかし問題はそこではなく、ヤツ自身のスキルだ。

バルクホルンの背後に現れるまで、全く気配を感じられなかった。

気配遮断や、不可視と言った類の技術スキルじゃない。

あの時、騎士型ネウロイの刃を受けて「煉獄の青焰」Belphégorで反撃に出た時だ。

アイツは……一瞬にして姿を消した。

ベルフェゴールの炎に飲まれる前に、一瞬にして逃れた。スピード云々ではない。もっと別の何か…。

「…イテエな、肩」

左肩が痛む。

激痛、とまでは言わない。動かせば僅かに痛みが走る程度。傷自体は、そんなに深くは無い。

身体機能も正常、問題は見られない。

だが、肉体面よりも内部面に大きなダメージを負っていた。

「むっ？ 目が覚めたのか」

不意にドアが開き、一人の女性が医務室へと入室してくる。

右目の眼帯に白い軍服、背中に一振りの日本（扶桑）刀を携えた女性。

坂本 美緒少佐であった。

坂本 美緒の案内の下、儀國は基地内を歩く。

その間、坂本 美緒より目が覚めるまでの経過を聞いていた。

あの騎士型ネウロイに傷を負わされてから、三日間も寝込んでいたこと。

その間、宮藤に始まりミーナとバルクホルンも暇さえあれば看病に来ていたとのこと。

そして今、新型…騎士型ネウロイについて対策を練っていること…。

「三日間も寝ていたのか…どうりで」

胃が異常に空腹を訴えているわけだ。

儀國は腹部を擦る。

「で、これから何処へ？」

個人的には、物凄く飯を食いたい気分なんですけど？」

「それは話が終わってからだ。ミーナ中佐や他の者達も既にミーティングルームに集っている」

「げっ…マジかよ……」

そうこうしている内に、目的の場所へと着いた。
ミーティングルームの扉が開かれる。

その先には隊長を始めとする、ウィッチ達が集っていた。
入室したと伴い、全員の視線が此方へと向けられる。

…居心地が悪い、儀國は不満げに眉を寄せた。

「目が覚めたんですね、よかった」

「おかげ様で…なんとか」

坂本が入り口に立つ。

話を聞くまでは逃がさない、そういうことだろう。

「で、何故俺をここへ？ 整備兵がウィッチと交流を持つ事は禁止
されている筈…」

「…貴方に色々と聞きたい事があります」

やはりか…、儀國は心の中で軽く溜息を吐いた。

こういふのがあるから、極力バレないようにしていた。

けれどもバレてしまった以上、“ある程度”は正直に話すしかない。
ここが唯一の家、追い出されたりされたら生きていけない。

「…条件が三つ。

一つ、今日は質問だけ。面倒な話はまた今度。

二つ、俺の存在をこの部隊以外に公にしない。

三つ、質問するのは構わないが、答えられないことは答えない。

この条件が呑めたらで。何分、いろいろとありますから」

「……いいでしょう」

ミーナも提示した条件に承諾。

こうして空腹の中、彼女による尋問が始まった。

聞きたいことは山ほどある。

三日間の深い眠りに就いていた彼が目覚め、早速その聞きたい事を尋ねる。

青い炎を操る男：儀國 雅史。

その素性に、ミーナは質問を始めた。

「まず最初に、貴方は何者なの？」

「何者：か。強いて言えば魔術師、と言ったところですかね」

「魔術師……男性でありながら私達ウィッチと同じ様に魔法を使えるなんて。」

未だに信じられないわ」

「そう不思議なことでもない。魔術回路さえあれば、誰でも魔術は使える。才能の有無とかも大きく関わってきますけどね」

「魔術：回路？」

聞きなれない言葉に、ミーナは眉を寄せる。

すると相手も不思議そうな表情を浮かべて、眉を寄せた。

「魔術回路を知らない？ 知らないで魔法を…使っている？」

「え、ええ……」

「……ちょっといいですか？」

そう言っつて儀國は右手をそつと差し伸べた。握手してくれ、そういうことだろう。

ミーナはそつと、差し伸べられた手を取る。

一瞬だけ、静電気が発生した。

小さな放電音が鳴り、右手全体に小さな電流が走る。

「……なるほど。次は…宮藤軍曹、手を」

「えっ？ わ、私ですか？」

突然の使命に驚きながらも、彼女も彼と握手を交わす。

そしてまたも小さな放電音が鳴り、一瞬だけの痛みに表情を歪めた。

「…そういうことか」

握手した手を眺め、納得した様子で頷く儀國。

この作品を眼にしてから、ずっと抱いていた疑問があった。

魔女という存在、魔法と言う存在について。

そして…二十歳で魔法力を失うという、不可思議な現象（設定）。

魔術回路を知らない、なのに魔法は使えている。
この矛盾は二人の魔術回路を調べることで答えを知れた。

魔術回路は魔術師が魔術を行使する為に必要不可欠な機関。
魔術師ならば誰もが持っている。

自分も一応ではあるが、ソレに含まれている。

そして、魔女である彼女達も魔術回路はあった。

だが、そこに見つけた大きな問題。

その問題こそが、魔法力を失うという原因に繋がっていた。

二十歳で魔法力を消失するというのは、偶然のタイミングか否か。
そこまでは分からないが、原因はこの問題である。

「…貴方は今、私と宮藤軍曹に何をしたのですか？」

何を納得し、そういうことなのか…。

ミーナはその事について答えを求めた。

「……一言で言えば、魔法力減衰の原因の解明…とえばいいでしょう」

「何!？」

ミーナが答えるよりも先に、坂本が声を挙げていた。

いざと言う時に彼が逃げ出さないようにと、出入り口を塞ぐ役を買って出てくれた。

その役目を放棄し、美緒は儀國さんの元へと歩み寄ると両肩を掴ん

でた尋ねていた。

そんな様子を見て苦笑いを浮かべながら、坂本を見るミーナ。

…魔法は20歳を越えれば魔法力を失うと、そう古より伝えられてきた。

彼女（美緒）は20歳、現にネウロイとの戦闘に辺りシールドを展開出来なくなっている。

…魔法力減衰は魔法にとって致命傷であり、逃れられない運命。

宮藤さんの様な一部例外も見られるが、その多くが魔法力を失い引退している。

その逃れられない運命に抗う術を、彼（儀國さん）は見つけたと、そう口にした。

この事を聞いて、美緒が黙っている筈が無い。

「どういうことだ！？ 教えてくれ！！」

「…黙秘権を行使します」

「何だと！？」

「答えられない部分は答えられない、これが条件だった筈…」。

それを破るのならば、話はここで終了させてもらいますが…どうしますか？」

「な、何故だ！？ 何故答えられない！」

「…坂本少佐、約束は約束です。下がってください」

「ッ……」

約束した以上は守らなければならない。

私がそう言つと、美緒は悔しそつに彼から離れた。

「儀國 雅史さん、貴方に質問します。何故、教えられないのですか？」

「何故…ね、答えは簡単ですよ中佐。」

俺は…アンタ達の事を信用していない、それだけだ」

礼儀正しい口調から、素の口調で彼は喋り出した。

「俺はね、自分が信用した相手にしか協力しない主義なんだ。」

俺はまだアンタ達を信用していない、その逆も然り。だから答えない。

それに、馴れ合うつもりも更々ないし…」

儀國は素の口調で喋る。

アニメを通し、彼女達がどんな人間なのか…それは知っている。

けれども、それは彼女達に与えられた役割（設定）。

与えられた役割を演じているだけに過ぎない。

だが、今は違う。

テレビと言つ、画面からの客観的視線による捉え方をする訳ではない。

今は一人の人間として、向かい合い、コミュニケーションを取っている。

己のこの眼で見て、この身で感じて、信用に値する相手であるかどうか。

だから俺は彼女達を、信用していない。

女と言う生き物は、そう易々と信用してはいけないとあの時に学んだ。

ミーナ達と馴れ合おうとするつもりもない。

この世界はあくまでストライクウィッチーズ、活躍するのは魔女。俺や、その他の野郎が活躍していい話じゃない。

それに、俺こと儀國 雅史という人間はこの世界に存在していないのだ。

「それにな、アンタ達は信用してない男の話を聞いて…それで納得できるのか？ 信じられるのか？

そうでなくとも、そんな眼を向けてくるヤツに…自分のことをペラペラと喋ると思うか？」

「……………」

「そういうことだ。俺からは、もう話すことは何も無い。そろそろ行かせてもらうぜ、腹が減ってるんだ」

ヒラヒラと手を振りながら、彼は出入り口へと向かって歩き出す。

出入り口を塞いでいた美緒が動く。
が、

「な……………」

「いつの間にも後ろに!?!」

思わず、我が眼を疑うミーナ。

彼は…美緒の背後に立っていた。

横切つてなどいない、気が付いたら後ろに立っている。

そして美緒の愛刀である烈風丸を手にしていた。

それを見た美緒の眼が変わった。

「な、何をしている!？」

美緒は慌てながら烈風丸を取り返そうとした。

烈風丸はただの扶桑刀にあらず。

刀身に術式を練り込み、少ない自身の魔法力を込めて打ち上げた一振り。

そして一晩かけて名付けたものだ。

ネウロイのビームをも切り裂く切れ味を持つ烈風丸。

だが、それは使い手の魔法力を吸い尽くす…諸刃の刃でもある。

烈風丸はただの扶桑刀にあらず、妖刀だ。

その妖刀を、儀國は手にしていた。

烈風丸が儀國の魔力を吸い取ろうとしているのが一目瞭然だ。

これが魔法力を吸う量は尋常ではない。

下手をすれば、一瞬にして魔法力全てを奪われ兼ねない。

「ふん、コイツが……」

「儀國! 今すぐそれを手放
」

「 黙れ、烈風丸」

一喝、儀國は烈風丸に向かって威厳と威圧感ある態度で命令した。

するとどうか、今にも儀國の魔法力を吸い取るうとしていた烈風丸が、それを止めた。

「刀如きの分際で俺に牙を剥くとはな…どうやらコイツはとんだじやじゃ馬らしい」

不適な笑みを浮かべて、儀國は烈風丸を軽く振るう。

「ば、馬鹿な…一体どうやって…」

「コイツ、一晩かけて烈風丸って名付けたんだってな。

…俺は正直言ってダサイと思うが、コイツ自身は気に入ってるようだ」

そう言つて烈風丸を返してきた。

正確に言えば、気が付かぬ間に背中の鞘に収められていた。

高速や音速と呼べる域の話ではない。

まるで世界の時を止められていたかの様な…。

兎に角、動いた瞬間すらも見れなかった。

それに、何故儀國はあの刀の名前を知っているのか。

烈風丸の名も、その名付けた時のこともは、儀國除きこの場にいる者にしか知らないこと。

それなのに何故、あの男はその全てを知っている…？

皆が啞然としている中、男（儀國）はヒラヒラと手を振りながらミーティングルームより立ち去る。

本当にあの男は何者なのか。

その疑問だけが、坂本の頭の中で一杯になっていた。

ミーティングルームより食堂へ。

話を無理矢理切り上げて、空腹を訴え続けている胃を何とかしに、食物を求めに食堂へと急いだ。

情けの無い音が鳴り止まず、腹部より鳴っている。

ミーティングルームでミーナ達と話している際、よく鳴らなかったものだ。

儀國はそう思った。

食堂へ辿り着く。

と、三日ぶりに整備兵仲間の顔を見た。

食堂へ足を踏み入れた瞬間、皆が一斉に此方を見る。

「おっ！ ようやく起きたか、遅いぞ儀國」

「三日間も眠ってたんだってな、腹減っただろ？」

皆が暖かく出迎えてくれた、その事に儀國は純粹に喜んだ。

そして並べられる大量の料理。

三日間も何も飲まず食わずだった自分に、料理長が腕を振るってくれたと言う。

有り難い。

そして自分は良き仲間を持った。

その事に感謝しながら、儀國は並べられた料理に喰らい付いた。

食事中、他の整備兵達は魔術の話で持ち切りだった。

「スゲーよな！　なあ儀國、もう一回見せてくれ！」

「あのなあ、オモチャじゃないんだけど……まあいい、ホレ」

儀國は呆れながら、右手より「煉獄の青焰^{Belphegor}」を発動。

青い炎を燃え上がらせ、一人の整備兵が銜えていた煙草に火を付ける。

周囲から歓声上がる。

その様子は、幼い子供が初めて眼にした物に興味を示し興奮する……そんな感じであった。

「青い炎つてのがまたカツコイイな！」

「けどいいよなあ……」

一人が不意に、羨ましそうに言う。

「魔法が使えたらさ、ウィッチとの交流も可能になるだろ？」

下心全開で男は言う。

ウィッチとの交流は禁止、それを守って各々整備兵として仕事をしている。

しかし、やはりそこは男の性。

いい女、可愛い女の子には…やはりどうしても眼も行くし、口説きに行きたくなる。

基本ウィッチは皆可愛い子達ばかりだ。

男として生まれたからには、やはり可愛い女の子と交際したいと思う。

けれども彼女達はウィッチ。

魔法力減衰を防ぐ為に、純潔を汚されない為に交流禁止令がある。

口説きたい、けど口説けない。

そんな苛立ちを押さえつけながら、整備兵達は日々妄想し、そして虚しさに嘆く。

因みに、自分はその類に人間では無い。

「…そうでもない」

羨ましがる男に、儀國は答えた。

「下手に力なんか持たない方がいい。あるが故に巻き込まれることだっただけである。」

人間平凡に生きるのが一番ベストなんだよ…」

そう言って、儀國は食事を続けた。

|| || || || || || || || || ||

夜、いつもの如くビーチへと足を運ぶ。

「煉獄の青焰Beelzebub Room」、解放ッ！！」

「煉獄の青焰Beelzebub Room」を解放する。

右手から青い炎が発生し、轟々と燃え上がりだした。

「……クソッ、これが今の俺の限界か」

悔しそうに、儀國は呟く。

あの騎士型ネウロイに受けた傷により、本来の力を発揮出来なくなつた。

あの時に受けた一撃は肉体面を傷つけるのが目的でなかった。

“ 魔術回路にダメージを与える ” ことがヤツの真の狙いだつたのだ。

魔術回路は、魔術を行使するに辺り必要不可欠な存在もの。

魔力の生成に始まり、魔術を行使する為に必要な工程：習得した魔術の術式の選択及び形成、魔術の発現を行う。

言い換えればパソコンだ。

インストールされているプログラムを起動させるパソコン、それが魔術回路である。

その魔術回路パソコンは今、深刻なダメージ（ウイルス）によって犯されていた。

必要最低限の機関は無事、何とか稼動していてくれる。

しかし魔術回路の大半が酷く損傷している。

自己修復機能は勿論フル稼働。けれども魔術回路は一向に直らない。

魔術回路が治らないとされる原因は、恐らく…

「呪い……か。つたく、面倒な事を……」

あの攻撃が回復不可能の効果を持ったものだとすれば、納得がいく。
魔術回路の修復を妨げている傷ダメージ。

苦手な解呪を試してみたが、案の定効果はなし。
デイスベル

となれば、これを解呪する方法は一つしか残されていない…。

…あの騎士型ネウロイを斃す。

それ以外に方法はない。

どの道、この状態のままでは満足に闘えない。

「地獄の七焰」Hell Fireの六つは魔術回路の損傷により使用不可能。

唯一使える「煉獄の青焰」Belphégorも本来の力を発揮出来ない状態。

レンジも大きく下がり、完全に近距離戦闘用と降格してしまっている。

…騎士型ネウロイは、厄介な力を“二つ”持っている。

一つは不治の呪い。そしてもう一つは未だ謎の多い、速さとは違う何か。

あのネウロイは恐らく、かなりの強敵となるだろう。

そんな相手に、自分はウィルスに犯されバグだらけでこの有様。

こんな状態で、俺は勝てるのか…。そんな不安が一瞬、脳裏に過ぎる。

「……いや」

首を振り、邪念を振り払う。

勝てるのか……じゃない。

勝つ……、勝つしか自分には道が残されていない。
決意を新たにし、儀國は拳を力強く握り締めた。

「……………ッ！」

何者かの気配。

背後、距離は凡そ4 m前後。

「誰だ!?!」

「煉獄の青焰」Belphégorを発動した状態で、儀國は何者かに言い放つ。

暫くして、岩陰から一人の少女がゆっくりと姿を見せた。

「お前は……………」

「……………」

姿を見せたのはゲルトルート・バルクホルン大尉であった。
バルクホルンは申し訳なさそうな表情を浮かべたまま、顔を俯かせている。

「…どうしたんですか大尉、こんな時間」

「…私の責任だ」

「えっ?」

「少しだけ、話を聞いてしまった。
その「煉獄の青焰」^{Beiphessor}と言った青き炎…本来の力を出せない状態なの
だろう?」

「……ああ、まあな」

儀國は正直に答えた。

騎士型ネウロイの攻撃を受け、それが原因で魔術回路の殆どが機能
しないこと。

本来の力が八割方発揮出来ないこと。

それらを全て、バルクホルンへと伝える。

話し終え、バルクホルンは更に申し訳なさそうな表情を浮かべた。

「…すまない! お前が私を庇ったばかりに…!」

「止めてくれ、そう言うのは嫌いなんだ」

「しかし…!」

「あれは俺が勝手にした行動だ。お前は何も関係ない」

そう言うと、彼女は黙り込んだ。

暫しの静寂、波打つ音を3回程聞いて…

「儀國……」

ゆつくりと、バルクホルンが口を開いた。

「何だ？」

「この恩は必ず返す。例えこの命に代えても…必ずだ」

「いや、要らない」

ハッキリと、儀國はバルクホルンの申し出を断わる。

申し出た本人は呆気にとられた顔を浮かべていた。

「命に代えてでも、俺に恩を返す…なんて馬鹿な考えは止める。

お前には、待っているヤツが沢山いるだろ？」

そいつ等の為にも、お前は生きなければならぬ…そうだろうか？」

それを言ってしまうば、他の皆だつてそうだ。

皆には大切な家族や帰りを待つ者達がいる。

その者達の為にも、彼女達は怪異と戦い続ける。

世界の平和の為に…。

待っている者達の元へと帰る為に…。

自分には…帰りを待っていてくれるヤツなはいることにはいる。

だが、正直言つて待っていてほしくない。

…兎に角。そんな男の為に、命を対価として差し出す必要など…何処にもない。

「儀國…」

「そういう事だ、命は…大切にしろよ」

言いたかった事だけは言えた。

もうここに居る必要も、彼女と話す必要もない。

儀國はバルクホルンを横切り、ビーチを後にする。

「待ってくれ！」

後ろからバルクホルンが追いかけてくる。

目の前に立ったバルクホルン、その顔は…真剣であった。

「お前は、私達を信用していないから、お前を信用していないから協力しない…そう言ったな？」

「…ああ」

「…私はお前を信用している。妹を、ミーナを、そして私を護ってくれたお前を…儀國 雅史という魔術師を、私は信用していると心より誓う。

そして、必ずお前にも信用されるようにしてみせる！」

不敵な笑みを浮かべて、バルクホルンは言い放った。

そしてそのまま、ビーチを立ち去っていった。

残された儀國は頭を掻きながら、走り去っていくバルクホルンの背中を見送る。

「だから、俺はお前の妹を助けた覚えはないって…あれ？」

ふと、脳裏にある記憶が甦る。

それはこの世界へと来る前に見た、あの夢の出来事。

今冷静になって思い返せば、あの燃え盛る街はカールスラントではないか？

それにあの時助けた少女も、よく顔を思い出せば…。

「……………助けてたのか、俺」

…夢の中での出来事は、幻想ではなく現実であつたらしい。
知らぬ内に少女クリスを助け、彼女達ミーナに見られていた。

だからミーナも、見覚えがないかと口にしたのかと、儀國はようやく理解出来た。

「…まあ、どうでもいいか」

大きく伸びをしながら、儀國もこの場を後にする。

第二章 第一節：対面（後書き）

第二章 第一節でした。

今回は直ぐに仲良くならず、あえて突き放しました。

その理由は、物語で語られるんですが：まだまだ先です。

それでは、すわっ！！

第二章 第二節：冷酷な男（前書き）

第二章 第二節です。

今回、自己解釈…というか、ご都合主義が発動します。
注意されたし。

後、今回ちょっと短いです。

第二章 第二節：冷酷な男

翌日。

その日は本当に偶然、たまたまだった。

起床時間を知らせる起床ラッパと言うものがある。

起床時間になればそれを知らせるラッパが基地全体に鳴り響くシステム。

つまりは目覚まし時計。

その目覚まし時計よりも早く起きてしまうことが、誰にだってある。今正に、それだ。

「何で起きてるんだ……俺」

アドリア海から昇りかけている日の出を見て、儀國は呟く。

この日は何故か、起床時間よりも早くに起きてしまった。

二度寝をしようとも眠気が来ない為に、夜まで眠りへと誘われることはない。

まるで高齢者……。

そんな事を、ふと思う。

何はともあれ、起きてしまった以上ボンヤリとして時間を過ごすのも勿体ない。

昔から時は金なり、と言う。

流れ過ぎ去った時間は戻ってこない、だからこそ人々はその刻を大切にする。

悔いの残らないように、無駄がないように…。

「……走るか」

儀國は基地の周辺を走る事にした。

朝食までまだ時間は充分にある。

それに、朝食前に運動をしてエネルギーを消費した分だけ、それだけ食べる料理の旨みも増すというもの。

久し振りのランニング。

儀國は基地周辺を駆け足で周った。

基地の周辺を走り、寄り道を。

夜、いつも暇潰しに訪れているビーチへと足を向ける。

「あれは……」

ビーチに朝早くから、扶桑のウィッチの姿が一人。

坂本 美緒、朝早くからの自主訓練は彼女の日課。

その場所がここだと言う事は、今初めて知った。

彼女（坂本）は静かに瞳を閉じ、いつも肌身離さず携えている扶桑

刀：烈風丸を構えていた。

居合い（抜刀術）：鞘走りをする事によって剣速を加速させ一刀の元敵を切り伏せる、言わば一撃必殺。

しかし外せば、無防備な我が身に白刃を受けるといふハイリスキな技。

暫し静寂の時間が流れる。

そして、閉じられていた彼女の眼が見開かれた時

鞘より払われた烈風丸。

坂本の魔力を帯び、仄かに白く輝く刀身が姿を現す。

「烈風斬!!」

叫びと共に一刀が打ち落とされる。

唐竹に振るわれた烈風丸。その斬撃に従い白い魔力刃が放出される。

白き魔力刃は海を奔り、モーゼの如く海を割る。

「それが烈風斬か……」

儀國は無意識の内に声を漏らしていた。

初めてこの肉眼で見た烈風斬。

一言で言い表すとすれば、それは“大した”ことはない。

この世界で彼女の振るう烈風斬は、それは強力無比な力なのだろう。しかし、あの程度では誰も驚かない。

魔法力減衰もそうだが、根本的な所から…彼女（坂本）は間違っている。

「ッ!? 儀國……見ていたのか」

「まあ起床時間よりも早く起きてしまったので……ランニングしてたんですよ」

「ほう、自主訓練とは感心だ。ハッハッハ!」

相変わらずと言えれば相変わらず。

坂本 美緒という女性キャラはこういうヤツだ。

「ところで儀國、お前に聞きたい事がある。

黙秘権は使わせんぞ、上官命令だ」

上官として、軍人としての態度を以って坂本は命令する。

昨日の記憶が甦る。

烈風丸を一喝しただけで支配し、更にはその名すらも当てて見せた。そのカラクリを知りたい。

黙秘権などと言う、ふざけた条件を使われる前に先手を打つ。

上官としての命令ならば絶対に従わなければならない。

それを破れば、下手をすれば軍法会議ものとなる。

流石にこの男も、軍法会議沙汰になるのは避けようとする筈。

坂本は儀國の眼を見据えて、ハッキリとした口調で命令を下した。

ここで立場を利用してきた坂本。

昨日の場合は、何か言われる前に先に条件を取り付けた。

が、相手（坂本）はその条件を提示させないようにと、先手を取って出た。

もしここで断われれば、恐らく坂本は軍法会議だの何だのと此方が不利になる条件を突き付けてくる筈。

…上官からの命令ならば、嫌でも仕方が無い。

「……………何ですか？」

「昨日のことだ。何故お前は私の烈風丸について知っている？」

「……………そうですね、それなら」

黙秘権は使えない。

ならばそれを教える条件を提示すればいいだけのこと。
彼女には絶対にクリア出来ない条件を、だ。

「俺もタダでは教えられません。

ですから少佐がこれを出来たら、教えてあげますよ」

儀國はそつと手を差し出す。

烈風丸を渡せ、そういう意味なのだど理解した坂本は、静かに烈風丸を手渡す。

手渡した烈風丸を受け取る儀國。

その表情に何の変化も訪れない。

やはりこの男は、烈風丸を完全に支配している。

坂本は烈風丸を手にする儀國を見据える。

そんな中、儀國はそつと烈風丸を構えた。

構えたと言つても、無行の位の構えと呼ばれるもの。

だらんと脱力した烈風丸を携えている腕。

その状態で、儀國はアドリア海を静かに眺める。

一体、これから何をしようとしているのか…。

坂本は儀國の行動を静かに見守った。

烈風丸を手にし、儀國は思考を働かせる。

「なるほど…」

改めて坂本の愛刀である烈風丸を手にし、そのカラクリが理解出来た。

烈風丸の刀身に練り込まれているという術式、それは物体への魔力付加の補助。

魔のクロエこと、黒江 綾香大尉が得意とする「秘剣・雲曜」。
その威力は大型ネウロイをコアごと一刀の元、切り伏せるとい

坂本によれば、物体への魔法力付加は念動系でない彼女にとっては至難の業だ、と。

それを補助するのが、この烈風丸に練り込まれているという術式。念動系でないという事を補う為の補助パーツ的な役割を果たしている。

物体への魔力付加…強化と言うのは高等技術である、と言うことはこの世界でも共通しているようだ。
無機物だけでなく、有機物なら尚更その難易度は跳ね上がる。

…ただ、そのせいで烈風丸という暴れん坊が出来上がったようだ。
この刀は、今の坂本にはかなりの重荷となる。

俺の様に“血”を持っていなかったとしても、不完全な状態の坂本はやがてはジャンクヤード行き。

「まあ、いいか……」

思考は中断させる。

まずは、坂本への課題を出す。

儀國は手にした扶桑刀を縦に振るった。

「なっ……」

坂本は啞然とした表情を浮かべる。

凄い、月並みの言葉ではあるが……この言葉しか思いつかなかった。

烈風丸を手にした儀國は、無行の位の構えから、静かに唐竹に振るった。

何の変哲もない、普通の唐竹斬り。

だがそれは紛れもない、扶桑皇国に古来より伝わる奥義……烈風斬。自分が繰り出す物とは比べ物にならない。

巨大な白き魔力刃が海上を疾走し、大海を切り裂く。

「まさか……それは真・烈風斬!？」

烈風斬には更にその上を行く烈風斬がある

それは自分も会得しなければならぬ、古より扶桑皇国に伝わる秘奥義。

烈風斬を超える烈風斬……その名も真・烈風斬。

それを極められれば、如何なるネウロイが襲来しても一撃で粉碎出来る。

今の儀國が放ったソレ（烈風斬）は…真・烈風斬ではないのか？

坂本は驚愕と興奮の中、儀國に早速問い詰めた。

「儀國：お前は真烈風斬を会得しているのか！？」

「今のが出来たら、教えてやらなくてもない。期限は一週間だ」

「何だと！？」

儀國が提示してきた条件。

それはあまりにも難題な条件であった。

自分自身が今、魔法力減衰の中会得しようとしている秘奥義…真・烈風斬。

それをこの男は一週間という短い期間内で習得してみせると、そう提示してきた。

幾ら何でも無理難題過ぎる。

「言っただろ？俺はお前達を信用していないから答えない、とな。

ああ…そうそう、因みに今を出すのは魔法力の消費量は一切関係ない。

じゃあ、せいぜい頑張ってくれ」

挑戦的な笑みを浮かべ、儀國は私が背中に背負った鞘に烈風丸を収める。

そしてヒラヒラと手を振りながら基地の方へ、それに伴い起床ラッパが鳴り響く。

「真・烈風斬を…一週間で会得してみる、だと……？」

坂本は鞘に収められた烈風丸を静かに払うと、静かに刀身を眺めた。
烈風斬を超える真・烈風斬…。

それを一週間で会得しろと条件を突き付けてきた儀國。
魔法量の使用量は一切関係ない、即ち魔法力を沢山注ぎ込めばいい
と言う訳ではないということ。

ではどうやって…？

魔法力関係無しに、どうやってあれだけの技を繰り出せる？
そのカラクリの謎に、私は頭を悩ませた。

「……………」

暫くして、坂本は烈風丸を再度鞘に収めてその場を後にした。

考えるべき点は幾つもある。

だが、まずは朝食を摂取するのが先決。
何事も朝から始まる、朝食をしつかりと摂らねば一日満足に動けな
い。

坂本は駆け足で食堂へと向かった。

|||||

朝食後。

整備作業へと入ろうとし、早速隊長より呼び出しを喰らった。
今度は一体何の用だ。

そんな事を思いながら、儀國は渋々と執務室へと足を運ぶ。

「失礼します…」

不機嫌である事を声に現し、儀國は執務室へと入室する。

「待っていました、儀國 雅史さん」

「それで、何の用だ？」

素の口調で儀國はミーナに尋ねた。

段々と礼儀正しい口調と言うのが面倒になってきた、というのが本音。

素の口調で何度か話している。

たかがこれしきで、流石のミーナも咎めはしないだろう。

「率直言います。これからの貴方の処遇ですが」

「お断りします」

ミーナが言い切る前に、儀國はハッキリと断わる。

何を言おうとしているのか、ミーナの口から言われずとも想像出来る。

十中八九、コレと見て間違いないと断言出来る。

「…まだ私は何もい」

「俺をウィッチ同様、ネウロイとの戦闘に参加させる…じゃないの

か？」

「……………」

ミーナは何も答えない。

その反応はそつだ、と物語っているも同じ。

「やはりな。…………勝手にしろ。けど、俺は好き勝手にやらせてもらう。」

アンタの命令を聞くつもりはないし、お前達とは馴れ合つつもりはない。

そもそも…興味ないんだよ」

「…………それはどういう意味かしら？」

「言葉通りの意味だ。俺にとつちや、本当に興味ないんだ。」

ネウロイが侵略してこようが何だろうが。

この世界が滅びようが、俺には何の関係もないことだからな」

「なっ!?!」

儀國の言葉を聞いて、ミーナは驚愕の表情を浮かべる。

それに伴い、怒りが芽生え始めた。

自分達魔女の力をも超える力を、儀國 雅史という男は持っている。にも関わらず、この男は興味がないと断言した。

ネウロイはこの世界にとって敵、斃すべき相手。

ネウロイの侵略を受けて、多くの国が多大な被害を受けた。

多くの人間が、仲間が死んだ…殺されていった。

そして故郷も、今は亡き大切な人も……全てネウロイによって奪われていった。

なのに、なのにこの男は……。

「俺はね、この世界で正義のヒーローになりたいとか…英雄になりたいとか、そんな事最初から思っっちゃいない」

自分はそこまで正義感の強い男ではない。

ゲームやマンガなら、その世界で困っている人を助けようと立ち上がるだろう。

でなければ物語が進まないからだ。

だが、それは所詮架空での話。

生憎と、自分こと儀國 雅史はお人好しな性格ではないのだ。

挑まれば買う、それ以外は知らない。

何故なら、自分に関係がないから。

「今回はアンタの命令を聞くだけ。けど、それは形だけの話だ。

俺のこの世界での役割はあくまで整備兵だからな。

それ以上の事をするつもりはない。空を飛んで、バケモノを斃すのはアンタ達魔女の役目。

俺の場合は、喧嘩を売られるか否かが分かればそれでいいんだ」

「…では、貴方の故郷や大切な人がネウロイに奪われても！

貴方は今と同じ台詞が言えますか！？」

「ああ、勿論…。護るべき故郷も人も、この世界には存在しない。

それに、ネウロイがこの世界を支配したら…それはこの世界に定められた運命ってヤツだろ」

ミーナは啞然とした。

同時に、儀國 雅史という男について理解する。

この男は冷酷。

氷の様に冷たく、暖かさを失い凍り付いた心の持ち主。

青い炎で騎士型ネウロイ達を葬り去った時の姿の通り…悪魔だ。

ネウロイを絶対的悪と見ず、喧嘩の売り買いで決め付けているその思考。

とてもじゃないが、異常すぎる。

「話はそれだけだな？ じゃあ、俺は戻らせてもらっぜ」

そう言って、儀國は返答を言う前に執務室から立ち去って言った。

一人残された私は、鈍痛が走る頭を抱えていた。

|||||

今日もまた、夜のビーチへと訪れる。

「……………」

砂浜に座り、今日の出来事を振り返る。

ミーナに呼び出しを受け、一方的に執務室を後にしてから、特に問題はなかった。

あれからミーナや坂本が何かを言ってくる事もない。
ただ、皆からの視線が変わっただけ。
基地内ですれ違う度に皆が此方へと向ける視線は……軽蔑。

彼女達にしてみれば、ネウロイは絶対的悪。

悪は滅ぼさなければならぬ物、それは何処の世界でも同じ。

だがその悪を、興味がないと断言したのだ。

軽蔑の眼を向けられるのは、まあ無理もないというものである。

ただ一人だけ、そんな眼を向けない者がいた。

「ここで何をしている」

「アンタか……」

クリスの姉、ゲルトルート・バルクホルン大尉。

彼女だけは、軽蔑の眼を向けなかった。

「…何しに来たんだ？」

「何となくだ、少し眠れなくてな。お前こそ、こんな所で一人何を
しているんだ？」

「…別に、ただの暇潰し」

隣に腰を下ろしたバルクホルンに、儀國は答えた。

…今でも意外と思っている。

規律に厳しい、シャーリーからは堅物のカールスラント軍人と呼ば
れる程、ゲルトルート・バルクホルンという女性キャラは規律に煩い。

今日の一件、バルクホルンの耳にも当然入っている。

そこでハルトマンに一喝する様に、「それでも貴様は軍人か!？」と、怒鳴ってきそうな所だが…何故かバルクホルンはそれをしようとしないう。

言われる覚悟はしていた。

が、規律キャラがそれをしてこないというのは…ある意味恐怖を感じる。

「…儀國」

不意に、バルクホルンが尋ねてきた。

「お前は何故、ネウロイと戦おうとしないう？」

「…隊長さんから話は聞いている筈…」

「ああ、ミーナ中佐より聞いた。中佐の言う通り、お前が言っている事は怒りを憶える、それに…冷酷な人間だとも思わせる。だが、お前は一体何を隠している？」

執務室での一件を、ミーナよりバルクホルンは聞いていた。

興味がない、どうでもいいと答えた儀國に、皆の反応は言うまでもなく。

軽蔑と怒り、非難する声が次々と上がった。

無論、自分も同じ。

扶桑皇国軍人でありながらも、軍人としてあるまじき発言、態度。

これは許されるものではない。

だが、あの男は本当に本心からそれを言ったのか…。
そんなことを、バルクホルンはふと考えた。

と、言うのも…：昨晚の時に見た儀國のあの眼。

何処か遠くを見つめる眼。

けれどもそれは私達と同じ世界…ではなく、違う世界を見つめて
いるかのよう…。

そんな印象を受けさせる、悲しい眼を…：儀國はしていた。

だからこそ考えた。

何か、自分達の想像を遥かに超える秘密を抱えているのではないか。
その秘密があるからこそ、儀國は我々に非協力的なのではないか、
と。

「…隠している、か。別に、何も隠しちやいない。
言っただろ？信用していないから喋らないと、な」

夜空を見上げながら、儀國はバルクホルンの問いに答える。

隠しているつもりは毛頭無い。

ただ、言ったところで誰が信じられる？

夢物語や妄想癖のある男としか、誰も思わないだろう。
だから、言わないだけである。

「…さてと、そろそろ寝るとするか」

大きな欠伸を零し、儀國は腰を上げる。

それに伴い、隣に腰を下ろしていたバルクホルンも腰を上げた。

「……お互い明日も早い。寝坊なんてするなよ？」

「ふっ…ああ、お互い様にな」

二人はビーチを後にし、各々宿舎へと戻っていく。

そして時は訪れる。

新たな闘いの幕が、ゆっくりとその開幕の時を迎えようとしていた…。

第二章 第二節：冷酷な男（後書き）

第二章 第二節でした。

今回烈風丸についてですが、独自の考えで設定を書かせて頂きました。

まあ、タグにもご都合主義とありますので…笑って許して下さい。

それでは…すわっ！！

第二章 第三節：勢いを失った炎（前書き）

第二章 第三節です。

なんか書けちゃいましたので、投稿します。

今回はバトルがメイン…ですか？

後、今回グダグダとしています。

第二章 第三節：勢いを失った炎

朝早くから、第501統合戦闘航空団基地には緊迫した空気が流れていた。

時刻にして10時。

朝食を食べ終え、これから仕事へと入ろうとしていた…正にその時、基地全体に闘いを知らせる警報が鳴り響く。

ネウロイの襲撃、ウィッチ達の出撃の時が訪れた。

司令部、そこではウィッチ全員が集められていた。

「今回の敵は2機、中型ネウロイがこの基地へと向かって飛行中とのことです」

ミーナは現状を伝える。

出現したのは中型のネウロイ。

ただ、今回は厄介な事に2機がこの基地へと向かって来ているという事。

今までならばネウロイは1機ずつしか出現しなかった。

だが、ネウロイも日に日に進化している。

これは、恐らくネウロイの新たな知識による行動なのだろう。

「今回は全員で出撃します。第501統合戦闘航空団、全力出

」

出撃命令を下そうとした、正にその時。
新たな警報が基地全体に鳴り響き、通信が入る。

《て、敵基地後方より突如多数出現！お、多い…なんて数だ！》

「なんですって！」

見張り台。

基本観測班がこの基地に搭載されているレーダーを駆使しネウロイを感知している。

だが時に、レーダーに映らないネウロイも出現する。

そう言った場合は、肉眼で探さなければならない。

その為の見張り台だ。

見張り台では、数人の観測班が基地の裏側…ロマーニヤ本土へと繋がる道。

そこを全員、双眼鏡を除きながら慌てふためいていた。

「見せてくれるか？」

「あ、お前は…整備班の」

一人の観測班から双眼鏡を借り、それを覗く。

レンズを通し見えるその先に光景。
ビーチにも現れた騎士型ネウロイの姿が映る。
数は凡そ100体と、あの時と同じくらい。
騎士型ネウロイ達は低空飛行をしながら、この基地へと進軍していた。

「あのネウロイ……か、となれば」

儀國は左肩にそつと触れる。

脳裏に甦るのはあの大鎌を携えた騎士型ネウロイの姿。
あの時もそうだ。多数の騎士型ネウロイが出現し、そして…ヤツが現れた。

あの騎士型ネウロイさえ斃せれば、魔術回路に掛けられている呪いを断ち切れる筈。

ならば自分が相手をするしかない。

これは個人の問題。決して魔女達の為でも、この世界の為でもない。それに、別の中型ネウロイが2機…この基地に向かっているという。ならばそつちは魔女に相手をさせれば問題ない。

…誰の手も借りない。俺には誰からの助けも必要ない。

今までもそうしてきた様に、独りの力で戦い抜く。

頼れるのは…自分の力のみ。他は、一切頼れない。

儀國は覗いていた双眼鏡を観測班の男に返し、見張り台を後にする。

司令室では軽い混乱が起きていた。

基地へと向かって飛行している中型ネウロイが2機、そして基地後方より突如出現した騎士型ネウロイが100体。

ミーナは焦りを隠しながら思考をフル稼働させる。

この現状を以下にして対処するか。

相手は中型のネウロイ、数は2機。

中型ネウロイならば数少ない戦力でも、経験と技術によってカバーできる。

だが今回は2機、流石に2機相手に数少ない戦力で出撃させられない。

しかし、基地後方に出現した騎士型ネウロイもある。

この基地へと向かって来ている騎士型ネウロイ、そこに戦力を派遣することは出来ない。

中型ネウロイを斃して直ぐに帰投したでは…間に合わない。

どうする、一体どうすればいい？

と、司令室のドアがノックも無しに開かれる。

慌てた様子で入ってきたのは一人の整備兵。

儀國の先輩に当たり、同じ扶桑皇国の出身者…安藤さんであった。

「ノックも無しに何事ですか!？」

「す、すみません! で、ですが…儀國のヤツが一人で出撃しました!！」

「なっ…!！」

「騎士型ネウロイは俺一人で相手をすると行って、そのまま…!!」

彼の報告に、思わず目眩がした。

命令を聞かずしての独断専攻。確かに、好き勝手にやらせてもらうとは言っていたけれども、まさか本当にやるなんて…。

…けど、これで安心して戦える。ミーナはそう考えた。

彼の力は強大。私達の助力無くしても、十分に戦える。

例え騎士型ネウロイが100機200機現れようとも…あの青い炎が全てを燃え散らす。

ならばここは彼に任せて、私達は中型ネウロイの対処に集中すれば良い。

ミーナは全員に出撃命令を出そうとした。

だが、それを遮る様に一人のウィッチが声を挙げる。

「無茶だ！ 中佐、私も儀國と共に騎士型ネウロイの対処に当たる！」

声を挙げたのはトゥルーデだった。

バルクホルンは焦っていた。

儀國の独断専行は、あまりにも自殺行為だからだ。

「何でだよ？ 別にアイツ一人でも、なんの問題もないだろ」

「貴様は何も知らないから、そんな事が言えるんだろう!!」

いいか、あいつは…儀國は」

儀國は自分の責で本来の力が出せない状態。

あの燃え盛る巨大な青い炎を生み出すことが出来ない、ということを知っているのは…この中で恐らくは私だけだろう。

儀國のあの性格からして、きつと誰にも言っていない筈だ。

だから勝手気ままなりベリアンを含め、ミーナ達もきつと知らない。

「あの時、私を庇ったせいで……私のせいで本来の力が出せないんだ！！」

本来の力を出せない状態でアイツが一人で戦うことは、自殺行為に過ぎない！

中佐！ 私も儀國と共に戦う許可を」

「あ、あの…」

不意に、報告に来た整備兵が恐る恐る口を開いた。

「あのですね？ 実は儀國のヤツから伝言を預かってまして…」

「何だ！？ 早く言え！」

「は、はい！ 実は……」

|||||

基地裏側通路。

陸路で物資を搬入する時に使われるこの道。

通路の横にあるのは、古来ロマーニヤより使われていた技術…サイフォンの原理を用いて水を運ぶ水道橋。
そしてこの橋を渡り、その向こうにはロマーニヤがある。

「……………」

儀國は静かに、前を見据える。

橋を越えたすぐその先。

100体の騎士型ネウロイ達が低空飛行で此方へと向かってくる姿が視界に入った。

相手も此方の姿を視界に入れたのか、低空飛行を止めるとその場に静かに立つ。

そして立つなり、ビームブレードを突出し各々戦闘態勢へと入る。

「Beelphogor煉獄の青焰」、解放」

「Beelphogor煉獄の青焰」を呼び起こす。

呼びかけに応じ、青き炎は右腕で轟々と燃え上がり始めた。
ベルフェゴール

…あまりにも極小。

右腕全てを包み込むように燃え上がっている今のベルフェゴールは、下級悪魔としか思えない程弱い。

「……………」

だが、やるしかない。

幸いにも、相手は何度も斃している相手。

即ち雑魚だ。

雑魚相手ならばこの程度で充分過ぎる。

「来いよ…テメエ等全員、俺が叩き潰してやる」

挑発的な笑みを浮かべて、儀國は言う。

その言葉を合図に、騎士型ネウロイ達は一斉に儀國へと飛び掛かった。

「
」

もう一度、儀國は己の状態を改めて分析及び整理する。

魔術回路の約80%がエラーによって侵されている状態。

自己修復作業をしているが解消される目処は無し。

従って、「地獄の七焰^{Hell Fire}」の殆どが使用不可能の状態。

唯一使える「煉獄の青焰^{Belphégor}」も本来の力を発揮出来ず。

“切り札”は…特に問題は無い。いつだって使える。

だが、今使う時ではない。

寧ろ雑魚相手に使いたくない、これは本当にいざと言う時の切り札。以上の事を踏まえての結論。

「煉獄の青焰^{Belphégor}」のみで、この場を切り抜けるしかない。

「燃え尽きる！」

数体の騎士型ネウロイの繰り出した斬撃を回避し、間髪居れず「煉獄の青焰^{Belphégor}」を儀國は叩き込んだ。

瞬く間にベルフェゴールの青き炎に包まれた騎士型ネウロイ達は、

そのまま跡形もなく燃やし尽くされる。

…これだけはハッキリと言える。

自分はこの世界にて、恐らくは“最弱”の位置に立っている。

ウィッチの様に空を飛んでの激しい空中戦は無論出来ない。

対応策はあるが、一言で表せれば設置式の砲台。

ネウロイの猛攻を素早く回避し、攻撃するという技術は持ち合わせていない。

故に最弱の位置に立つ。

しかし地上戦ならば…。

空を飛ばず、地に足を着けている者ならば…。

俺は誰にも負けない。

人の形をし、近距離戦闘での闘いならば尚更だ。

青年は、そう自負していた。

「チツ、雑魚共が…」

騎士型ネウロイ達の戦闘能力は低くは無い。

剣を振るう速度、身体技能、どれを取っても一流だ。

だが、所詮敵ではない。

この程度の事ならば、幼少期より何度も経験している。

「ウゼエんだよ…!!」

次々と騎士型ネウロイを葬り去る儀國。

若干の苛立ちを見せながらも、「煉獄の青焰」^{Belphegor}を以って燃やし尽く

していく。

青い炎が舞い、その舞に合わせて魔術師は踊る。数は半分ほどまで減らせた。

残り半数、雑兵相手に時間をかけ過ぎている。

本来の力を出せない事が、ただ今は恨めしい。

それに、ここで人間とネウロイというスペックの差が現れだした。

「ハア……………ハア……………」

息を切らしながら、騎士型ネウロイ達を見据える儀國。

幾ら強大な力を所持していたとしても、所詮この身は人間だ。

怪物の様に強靱な肉体でもなければ、特殊な改造が施されてもいない。

決められた数の骨、血肉、神経、内臓で構成された、至って普通のヒト。

体力にも限界がある、魔力の生成が徐々に追いつかなくなってき始めた。

この状態での長期戦は、敗北（死）を意味する。

対して、ネウロイにスタミナ等と言う概念は…きっと存在しないのだろう。

ネウロイが疲れている所など、見た事などない。

だからヤツ等は、無限に行動することが出来る。

そう言った点では、ネウロイは完璧な生命体と言えるだろう。

「ハア……………マジで面倒だなッ！」

余計な思考は今には要らない。

今はただひたすら、敵を斃すことだけに専念すること。

敵をただ無心に燃やし尽くす、今はそれだけを考えて動けばいい。

呼吸を無理矢理整え、儀國は青き炎を纏いし右腕を振るった。

数も徐々に減つてき始めた。

後少して騎士型ネウロイ達は全滅する。

そう思つた矢先、予想外の展開が起きた。

「何：！？」

斃した筈の騎士型ネウロイが、新たにまた姿を現した。

また100体程の騎士型ネウロイが増援として、敵残存兵力に加わる。

その真上、今対峙している騎士型ネウロイとは違う：別の人型ネウロイが浮んでいた。

その姿は、あの死神ではない。

だが、そのフォルムはあの死神の様に上級位を思わせる。

將軍：騎士団長、そんな単語が脳裏に浮かび上がった。

そのネウロイは左手から現したビームブレードを、ゆっくりと天に掲げる。

すると、地面に赤き魔法陣が展開され、そこから騎士型ネウロイが次々と召喚されていく。

「この気配：魔力か。じゃあ、お前がコイツ等の親玉ってことか」

疲労を露にしながらも、不適な笑みを浮かべて上空のネウロイを見据える儀國。

ネウロイは魔法を使えない、そう考えていた事はやはり誤りであった。

あの騎士型ネウロイは魔力を所持している…魔法を使役出来る。

見たこともない、赤い魔方陣。文字も術式も、どの資料にも乗っていない奇怪な物。

そして、あの騎士型ネウロイが保有している魔法は言うまでも無い…「召喚」だ。

下級兵を召喚し使役出来る魔法。それが、ヤツが所持している力。

「…ハア、本当にウゼエな……」

何とも厄介な敵が現れたことだ…。

儀國は心の中で悪態を吐いていた。

ビームなどと言う光学攻撃に加え、更にウィッチ同様魔法まで使役出来る。

これはもう、反則としか言いようが無い。

何はともあれ、敵が増えたという現実からは回避出来ない。

そして、あの上空にて高みの見物をしている奴を斃さなければ、また無尽蔵に敵が出現する。

しかし、それをしようとも増援が加わったこの騎士型ネウロイの大群がいる。

コレを何とかしない限り、ヤツの顔面へ拳を叩き込むことも出来やしない。

“こんな時……『刀』さえあればな……”

騎士型ネウロイの大群が容赦なく向かってくる。
儀國は舌打ちを零し、騎士型ネウロイ達を見据えた。

幾多に重なる銃声が上空より響き渡る。

黄色に輝く閃光が中空を切り、騎士型ネウロイ達へと襲い掛かる。

上を見上げれば、空を駆る11人の魔女の姿が。

中型ネウロイを撃墜しに出撃したウィッチ達が、ようやく基地へと戻ってきた。

「ふん……随分と遅い到着だな」

ここぞと、儀國は動く。

何はともあれ此方にも増援が加わった。

ならば今が反撃の時。

雑兵共を一気に粉碎し、隊長の首を落とすがのみ。

ウィッチ達の上空援護射撃を受けながら、魔術師は雑兵を蹴散らしつつ、前へと一気に駆け抜ける。

そして一体の騎士型ネウロイの頭上に跳び乗り、一蹴り。

上空へと跳躍し、隊長格の騎士型ネウロイへと向かう。

「燃え尽きる……！」

ベルフェゴールを従えた右腕で、儀國は鋭い拳打を繰り出した。

…虚しく、青き炎を纏った魔術師の拳は中空を切る。

標的が突然目の前より消えた。

それと同時に、召喚された雑兵達も次々と消えていく。戦場と化していたこの場所に残されたのは、魔術師と11人の魔女達のみ。

「……………」

地上へと降り立ち、儀國はあの騎士型ネウロイが居た上空を見上げる。

…逃げたのか、それとも見逃されたのか。

それは分からない。

だが結果であれ、基地への被害は回避出来た。

それだけは紛れも無い事実。

勝ったとは言えないが、結果オーライだ。

「何とかなった…な」

と、上空から一つのプロペラ音が聞こえてくる。

降りてきたのは隊長のミーナ。

ミーナは地上へと降り立ち近付いてくるや否や、

「……………！」

肉を鋭く弾く音が鳴った。

右頬に痛みが走り、熱を帯び始める。

目の前ではビンタをし、怒りの表情を浮かべているミーナの姿があった。

「…どうして独断専行をしたのですか？」

ミーナは静かに、そして怒りを表しながら儀國に尋ねた。

「好き勝手にやらせてもらおう…そう言った筈ですけどね」

儀國は相変わらず素っ気無く言葉を返してくる。

それを気に留めることなく、ミーナは次の質問へと移る。
最初よりも、怒りを露にしながら。

「…どうして黙っていたんですか!？」

私は今怒っている。

独断専行をした事は勿論そう、けれども一番の理由は…今の状態を誰にも話さなかったこと。

司令室でトゥルーデの口より初めて知らされた、儀國の状態。

先日に出現した騎士型ネウロイの攻撃を受けたことで、魔法の殆どが使えなくなったこと。

あのベルフェゴールと呼ばれる青い炎も、私達が眼にしてきた様な巨大な炎を…本来の様に力を発揮出来ない状態であるということ。

トゥルーデが焦るのも無理はないと理解した。

本来の力が出せない状態の上に、単独で騎士型ネウロイの殲滅に当たるなど…彼女の言葉通り自殺行為のなにもでもない。

すぐに部隊編成を行おうとした。

が、安藤さんが預かった伝言を聞いて、結局全機中型ネウロイの対処へと向かった。

『俺はあの騎士型ネウロイ共の相手をする、だからお前達は中型の

方を斃して来い。

これはお前達の為でも、この世界の為でもない。全ては俺自身の為別に信用されようとも、されたいとも思っていない。俺の事を信用できないのならそれでいい、だったらさっさと片付けて戻って、後はお前達が何とかしろ』

…元より、迷っている時間は私達になかった。

時間が過ぎれば過ぎるだけ、この基地が危険に晒されるだけ。

だからここは、彼の力を信じて私達は中型ネウロイの撃墜に向かった。

トウルーデだけは最後まで、儀國さんの援護に向かうことを口にしていただけでも。

美緒の説得によって、渋々中型ネウロイの撃墜に出撃してくれた。

そんな中、誰よりも専攻してネウロイの撃墜に力を出していた…。

「そんなことか…くだらない。話した所で何になる？」

アンタ達に話したら、何かが変わってくれるのか？」

「だからって…本来の力を出せない状態なのに一人で戦うなんて無茶過ぎるわ!!」

中型ネウロイを撃墜し、急いで基地へと戻った時。そこは激戦地区と化していた。

青い炎を、ベルフェゴールを従えて孤軍奮闘する魔術師の姿。

そんな魔術師に、容赦なく襲い掛かる騎士型ネウロイ。

本来の力が出せずとも、やはり悪魔と思っただ男の戦闘能力は異常なまでに高く。

次々と騎士型ネウロイ達をこの世から葬り去った。

…だが、そんな彼とて無傷だったわけではない。

強大な力を携えていたとしても、所詮は人の子。命が無限にあるわけでもなく、ましてやネウロイの様に自己再生能力を持つているわけではない。

心臓を穿たれるが、頭部を破壊されるか、或いは…生命の源が多量に失われるか。

人間と言う生物は非常に強く、そして…とても脆い。

儀國さんの頬や腕、足にはネウロイの刃を受けて切り裂かれた傷跡が幾つもある。

切り裂かれた衣服、そこから露出している肌からは今でも血が流れ出ていた。

致命傷ではないものの、その傷はとても痛々しい。

本来の力が出せる状態ならば、こんな負傷などきつとしていない。

「こんなの…無茶でもなんでもない」

「貴方がそうでも、私達からすれば無茶でしかありません！

今回は無事でも、死んでいた可能性もあったのよ!？」

「…そうだな。けど、それだけの事だろうか？」

もし仮に、俺が奴等に殺されていたとしたら…俺はそこまでのヤツだったと言う事に過ぎない」

「……………ッ!」

「…死など、常に覚悟している。今更怖いとも、何とも思わない。それは…お前達も同じ筈だ」

言葉を失った。

夜　　。
他の部屋の明かりが消灯している中、一室だけまだ明かりが点いていた。

執務室、そこでミーナは机に向かってペンを走らせる。

今日の出来事の報告書の製作、つまりデスクワークだ。無論、内容は新たなネウロイの戦法。

加えて新型ネウロイの出現、今回は此方がメインである。

そして彼からの証言の元、自分なりに纏めた戦闘能力及び保有技能。

「魔法を使う新型、騎士型ネウロイ……か」

ペンを走らせている手を止め、ミーナは呟く。

彼からの証言によれば、相手は魔法も使ったとのこと。

見たことも無い魔法陣を展開し、そこから騎士型ネウロイを呼び出す。

彼はその魔法を「召喚」と口にしていた。

…正直言って、信じられない話でもある。

ネウロイが私達ウィッチと同様魔法を使うなんて事例は今までにない。

こんな報告書を書いても…上層部はきっと信じないだろう。

「…今日も、儀國さんは居るのかしら」

ふと、ミーナは儀國の事を思い浮かべる。

冷酷な悪魔の様な男。

けれどもそんな男に、私はあの時護られていた。

あの時に見た彼の表情はとても暖かく、そして優しさを感じた。

「……………」

暫く考えた後、ミーナはデスクワークを一時中断した。

そして執務室を後にし、ビーチへと赴いた。

ビーチに辿り着く。

と、そこにはやはり…彼の姿があった。

「儀國さん」

ミーナは男の名を呼ぶ。

すると砂浜に一人佇んでいた儀國はゆっくりと顔を振り向かせた。

彼の頬や腕には包帯が捲かれたり、ガーゼが貼られている。

宮藤さんの治療の申し出を断ったが、後に医務室にて治療した、とウィッチ専門医であるアレクシア・コルチより話を聞かされていた。とりあえず、傷の処置だけはしてくれてよかったようなので安心した。

「中佐か……こんな時間に何の用だ？」

「少し休憩です。それよりも、貴方に聞きたい事が」

「あれ以上何を話せと？ もう何も話すことはない」

相変わらず素っ気無い態度で、儀國は言葉を返してくる。

そんな儀國に対し小さく溜息を吐くと、儀國は踵を返した。

「さてと、それじゃあ俺はもうそろそろ行く。アンタもさっさと仕事するなり、寝るなりしたら？」

…相変わらず、彼の言葉は素っ気無い。

だがその素っ気無い言葉の中には確かに、気遣いの優しい言葉が含まれていた。

「…そうね、そうするわ。儀國さん」

「……それから」

先にビーチを後にしようとした儀國が、背中を向けたまま、

「名前…儀國でいいから。アンタと俺は同年代だろ？ 同年代のヤツから“さん”付けで呼ばれるのは、嫌いなんだ…」

「……そう、分かったわ。“儀國”」

「…それじゃあ、俺は先に寝るから。じゃあな、“ミーナさん”じゅっきゅっさい」

そう言っただけで儀國はヒラヒラと手を振りながら、ビーチを後にした。残されたミーナは

「」

怒りを露にした黒い笑みを浮かべて、皮膚が破れんばかりの万力を以って拳を握り締めていた。

何を言ったのか、瞬時にその意味を理解出来てしまった。理解出来てしまった自分が憎い、発言をしたあの男が憎い…。

「うふふ……憶えてらっしゃい、儀國“さん”」

黒き笑みを浮かべたまま、ミーナもビーチを後にする。

その心の中では男に対する制裁を如何な物にするか、それだけを考えていた。

第二章 第三節：勢いを失った炎（後書き）

第二章 第三節でした。

今回長い上に、何かグダグダしちゃいました…。

やっぱり、書くのって難しいです。

次回は恐らく…来週の金曜日ぐらいに更新ですかねえ。

それでは！

すわっ！！

第二章 第四節：休息（前書き）

第二章 第四節です。

今回、ウィッチとの絡みは殆どありません。

第二章 第四節：休息

週休二日、なんて物はこの世界には存在しない。
だが休みは必ずある、それは何処の世界にも共通する部分だ。

「と、言うわけで休みんだけど…何したら言い？」

「俺に聞くな」

儀國の質問に、呆れた様子で安藤が返す。

今日は休暇の日のようだ。

つまり今日一日仕事をしなくていい、ということ。

普段ならば何をしようか、何処に出かけようか…そんな事を考える。
だが今は、そのどちらも考える気にはなれなかった。

「……超退屈なんだけど、俺超退屈なんだけど」

「俺が知るか。後、二度も言うな」

相変わらず、安藤に言っても素っ気無い言葉で返される。

この世界には娯楽と言う娯楽が殆ど無い。

当たり前と認識していた物が全くない。

街に出れば時間を潰すのに最適なゲームセンターもない。

インターネットとマンガをダラダラと読んで過ごし、ジュースやアイスを買っていたインターネットカフェもない。

つまり、今休みを貰っても退屈極まりない。

休みと言えば、日頃労働によって疲れた身体を癒すのが基本だ。それが、休みの本質でもある。

だが生憎と、身体は全く疲れを訴えていない。時間はまだたっぷりとある。いつたい何をして過ごせばいい？

「暇なら街にでも出掛けたらどうだ？ お前、まだローマに行った事ないだろ？」

「街……か」

安藤の提案に儀國はなるほど、と表情を変えた。

言われて見れば、確かに一度も行った事はない。

この世界は勿論、あつちでもローマには行った経験はない。基地裏側の通路は本土へと通じ、そのまま行けばローマの街に着く。

167

時間を潰すのならば外出と言う手があった。だが、それには大きな問題が出てくる。

「どうやって行けばいい？」

そう、移動手段が儀國にはないのだ。

「お前…車の運転は出来るのか？」

「一応ね。けど…車ならオートマだけだし」

「オー…トマ？ 何だ、それ…」

運転免許は持っていることは持っている。

普通自動二輪、普通自動車免許の二つを取得している。しかし免許はあっても、肝心な乗り物を持っていない。

それにこの世界の車はミッション車（MT）主体だ。

クラッチやギア操作経験は皆無。

オートマ車（AT）での運転しかしたことがなかった。

それに、オートマ車（AT）など、この世界（時代）にあるはずが無い。

…知人からは言われていた。

免許を取るならば、絶対にMT車にしておけ、と。

あの頃の自分は、車よりもバイクの方が好きだ、と答え結局MT車には乗らなかった。

それがまさか、こんな形で仇となって出るとは思いもしなかった。

「せめて、俺のバイクがあればな…」

今頃、家の車庫にて静かに眠っている愛車の姿を思い出す。

せめてアレさえあれば…。

「で、どうしたらいい？ 安藤」

「俺に聞くな。自分で考える」

安藤に素っ気無く言葉を返された。

結局、移動手段が見つからない為に“歩いて”いくことになった。距離からしてかなりある。

安藤曰く、車で二時間程度で着く…らしい。

その車で二時間程度の道程を歩いていくのだ、その倍の時間を費やすのは当然のこと。

けれども、これしか方法がなかった。

「ハア……面倒だな」

長距離を歩くことなど、儀國にとって何の苦でもなかった。

幼少期より受けてきた訓練では、もっと長い距離を走った。

軍隊並のサバイバル訓練。

食料や寝床は自分で確保しつつ、指定された場所に制限時間内への到達。

幼い子供に出来る筈がない、それをやらせる方もやらせる方だ。

しかし、それを乗り越えてこそ今の強さがあると、儀國は思っていた。

「……………ちよつと走るか」

穏やかな時間が流れている。

上を見上げれば今日も雲ひとつない快晴の空。

広大な青き空を優雅に泳ぐ鳥達。

暖かな陽射しを放つ太陽。

肌を優しく撫でる、時折吹く風は心地良く。
その風に揺らされ、互いの身（草）を擦り合わせ優しい音を奏でる
野原。

本当に今が、^{ネウロイ}怪異との戦争中なのかと疑いたくなる程の、平和な時
間。

毎日がこうであればいい、と思うのはこの世界に住まう誰もが思っ
ていること。

ネウロイとの戦争は、未だに終わりを見せる気配を感じさせない。

「……あ、見えてきた」

儀國の視界に街の姿が映る。

ローマの街がようやく見えてきた。

走って約一時間半。

思っていたよりも早めに着くことが出来た。

時間はまだ沢山ある。

出掛ける直前に立てた計画に、^{プラン}今の所問題点は見られない。

「さてと、行動開始とするか」

ゲームセンターやインターネットカフェがない上での娯楽。
果たして何があるか、と儀國は楽しげに笑った。

|| || || || || || || || || ||

ローマの街に着く。

ここは本当に戦争中なのかと、そう問いたくなる衝動に駆られる。それぐらい、ココには平和な空気が流れていた。

ローマの街を行き交う老若男女。楽しそうに、穏やかな時間の元、皆のんびりとしている。

「まあ、こう言った雰囲気は嫌いじゃない」

東京や大阪の様に人が大勢いる場所も嫌いではない。けれども、こう行った静かで穏やかな場所も好きだ。儀國は早速、ローマの街を観光する事にした。

最初のプランは洋服店。

そう、私服の購入だ。

この世界には、自分の物と呼べる物が一切ない。今私物として言える物はあのダサイ制服が何着と、寝心地の悪いベツドのみ。

街に赴く際も、このダサイ服を着ている。

幸いなことに、その資格好に誰も口を出したりはしていない。

この世界だから許されること。

もし、これがあの世界だとしたならば…。

その時は間違いなく、後ろ指を差されていたに違いない。

「…ここにしてみるか」

眼に入った一件の洋服店。

この世界年代は1945年代。自分の服装は言うまでもなく2011年度の物。

66年もの時が掛け離れている中、自分が気に入る服装はあるのか。なかったとしても、せめてこの服よりもマシな物が欲しい。

そう言った思いで、儀國は店のドアを開いた。

「いらつしゃいませ〜」

ドアを開いた矢先、この店の店主らしき若い男性が出迎えた。

「服が欲しい。とりあえずこんな」

予め欲しい物を紙に書いてリストアップしていたのを、読み上げていく。

それに従って、男性店主がいろいろと服を薦めてくれた。

何も派手な服装は要らない。

地味かつ、個人的に良いと思ったものが何着かあればそれでいい。

そして男性店主の薦めの元、いくつか服を購入。

納得かつ満足のいく買い物を終えて、再びローマの街を回る。

店を後にした後も、儀國は色んな店を見て回った。

途中、いい服を見つけたので購入。

黒の皮製のロングコート、値段的にもいいし、何より自分好みのデザイン。

無駄な装飾や派手さもなく、シンプルなもの。

そして、何気なく路地裏へと入ると…。

「ん？」

「お兄さん、いらっしやい。見ていつとくれ」

人気のない路地裏。そこでぽつんと開かれている露店。黒いスーツに黒い帽子、黒のサングラスと…上から下まで黒尽くめに身を飾る怪しげな男が声を掛けて来た。

「どう？　ここじゃ他の店じゃ滅多に買えない物ばかりが揃ってるよ。お値段も格安よ」

「ふ〜ん…」

並べられている商品を、儀國は興味なさ気に見つめる。

…どれを見ても怪しげな物ばかり。

分かりやすく言い表せば、どれもが曰く付き、と言うような物。今まで見てきた商品とは違う、負を波動をどれからも感じる。どの道、欲しい商品はないから買うつもりもない…、

「……いや、ちょっと待ってくれ」

あるモノに眼が行く。

視界に入ったのは一振りのナイフ。

全長約29cm、刃渡り約16cm前後。

デザインも西洋と言うよりは東洋、扶桑の色が強く現れている。ただ、このナイフは…、

「ふ〜ん、随分と人を斬ってきたんだな、コイツ」

「……お分かりになりますか？」

「ああ。コイツ、人を266人も殺してる。相当の恨みや狂気を込めて作られたようだな。」

コイツは今でも血を…いや、戦いを訴えている。このナイフの製作者はよつぽとの殺人狂なのか、それとも戦闘狂なのか…。

いずれにせよ、コイツは常人じゃ扱えない」

儀國はにやり、と口元を緩める。

そして手にしたナイフの切先を、露店商の男へと静かに向けた。

「コイツ、貰う」

「……いいんですか？　そこまで知っておきながら買うなんて、正気じゃありませんよ」

「その正気じゃないものを、お前は売っているんだろう？」

それに、俺はこう言った暴れ馬の方が好きなんだ。

暴れ馬を乗りこなせてこそ、初めて立派な馬乗りって言えるようにな。

幾らだ？」

「…御代は要りません。どうぞ、持って行ってください」

「そりゃ有難い、そんじゃ」

ナイフを鞘に収め、儀國は路地裏を後にする。

と、男が呼び止める。

|| || || || || || ||

ローマで休暇の時間を満喫し、儀國は基地へと戻る。

無論、交通手段は徒歩…自分の足だ。

来た道に従って、基地へと向かってのんびりと歩く。

空は日が傾き始めた頃、もうすぐ夕焼けが美しく辺りを赤く染める。

「まあ、なかなか楽しかったな」

ローマでの時間はそう悪いものではなかった。

基地に居る時の様に、ウィッチから向けられる軽蔑の眼を受けることもない。

穏やかで、のんびりとした空気の中満喫することが出来た。

次の休暇も是非、ローマの街で過ごしたいものだ、儀國は満足気に笑みを浮かべた。

基地裏側通路へと辿り着く。

着いた頃には、空は夕焼けで赤く染まっていた。

もうすぐ夕食の時間でもある。

「今日の飯、何だろうな」

今日の献立を楽しみにしながら、食堂へと向かう。

と、その途中二人のウィッチが視界に入った。

エイラ、サーニヤの二人組。

この時間帯だ、彼女達も食事を摂りに行くこととしているのだろう。向こうが此方に気付く。

けれども儀國は気にせず、そのまま真つ直ぐと歩く。

話しかける事は何もない、話をする必要もない。

魔女と整備兵との交友は禁止、破れば軍法会議で撃たれる運命。自分とてそれは例外では無い。

魔術師だろうと何だろうと、深くは関われない。

尤も、最初から深く関わる気などないが。

「……………」

「……………」

無言で、お互い横切る。

儀國は眼を合わせることなく、そのまま二人を横切った。

最初から視界に映ってなどいないと、そう言い表すように。

一方で二人…主にエイラは睨んでいた。

サーニヤを護るように。その姿は、宛ら姫を護る騎士の様。

そして完全にすれ違い、お互いに向かうべき場所へと向かっていく。

「……………」

小さく、儀國は溜息を吐いた。

背中からは未だにエイラの視線が突き刺さってくる。

そこまで嫌われるような憶えはないと言つのに。
一体自分が何をしたと言つのやら……。

儀國はやれやれと、再び溜息を吐いて食堂へと向かった。

|||||

人っ子一人いない、夜のビーチ。

そこで儀國は今日の出来事を振り返る。

「……………」

ローマの街での出来事。

服のオーダーメイドの注文、気に入った服の購入、本場ピザの味。

そして本日一番の買い物は…露天商でアルヴァヌと言つ男から貰つたこのナイフ。

いい買い物が出来た、と心底思う。

また次の休みにも、是非ローマの街に行こう。

「ふうん、本当に居たんだ」

「……………アンタか」

珍しい訪問者の声に、儀國は首を振り返らせた。

エーリカ・ハルトマン、階級は中尉。

普段はずぼら、何に対してもやる気無し。

自分が言つのもアレだが、全く軍人らしくない。

そんな軍人らしくない彼女だが、これでもスーパーエース。^{ハルトマン}

そんなスーパーエースが何をしに来たのか…。

「……何故ここに？ 何か用でもあるのか？」

「トウルデーから聞いたよ、夜になるといつつもここでもぼんやりしてるって」

「……質問の答えになってない」

「相変わらず素っ気無いなあ。女の子にモテないぞ？
いい男が、そんな顔してちゃ駄目だよ」

「お前に心配されることじゃない。それで、本当に用件は何だ？
何もないのなら、さっさと」

「…お礼を言いに来たの」

「お礼？」

ハルトマンの返答に、儀國は眉を顰めた。

礼の言葉を送られる様な事はしていない。

一体何に対し、彼女は礼を言おうとしているのか…。

「前にね、トウルデーとミーナのこと護ってくれたでしょ？」

「…ああ、あの時か」

大量の騎士型ネウロイの奇襲に遭い、大鎌を携えた騎士型ネウロイに傷付けられ、呪いを与えられたあの日の出来事。随分と前の記憶を引っ張り出してくる、儀國は呆れを含みつつ口元を緩めた。

「あの時、トゥルーデとミーナを護ってくれて、有難うね」

「…別に、護りたいと思って護ったわけじゃない。それに、礼を言われるような事もしていない」

「…本当に素っ気無いな、儀國は」

「馴れ合うつもりはないと…そう何度も言ってるんだけどな」

ハルトマンは相変わらず素っ気無い態度で返してくる儀國に、呆れていた。

信用していない、信用されていないから真実を口にしない。

ネウロイも興味なし、喧嘩を売られれば買ってそして勝つ、それだけだと口にした男。

…だけ。

そんな事を口にしてしている男だが、あの時確かに身を挺して大切な友人を護ってくれた。

その事に変わりはない。

儀國は、大切な友人達を護ってくれた恩人でもある。

だから礼を言うのは、友人として当たり前のこと。

ただ、その言う時が随分と遅れてしまったけれども…。

「でも、やっぱりアリガトね」

ハルトマンはもう一度、儀國に礼の言葉を述べた。

「…さてと、そろそろ寝るか。」

お前も早く寝ろ、明日も早いんだろっ?」

そう言い残して、儀國は立ち去った。

残されたハルトマンは

「本当に…優しいのか優しくないのか、どっちなんだよ…」

素っ気無いことには変わらない。

けれども、そこにある確かな優しさ。

それを素直に出せないのか、それとも無自覚なのか…。

そんな儀國に、呆れつつも微笑ましく笑みを浮かべていた。

第二章 第四節：休息（後書き）

第二章 第四節でした。

今回の話はEXみたいな話です。

次話では再び激闘へと移っていきます。

それでは。

すわっ！！

第二章 第五節：契約、招かざる客（前書き）

第二章 第五節です。

最近、サブタイトルで物凄く悩みます…。

サブタイトルとストーリーの関連性があまりないような気がする…。

第二章 第五節：契約、招かざる客

銃は嫌いだ。

銃と言う存在は、どの世界においても常識である武器。

何より、どんな武器よりも強力なのが特徴的だ。

相手に照準を合わせてトリガーを引く、たったこれだけの動作でいい。

子供でも出来るこの動作一つで、人を簡単に殺せるのだ。

…銃は嫌いだ。

この手で殺したと言う感覚がやってこない、と言っのが理由だ。

刀や剣で敵を斬り殺した時、柄を握る手には必ず殺したという感覚が伝わってくる。

だが、銃にはそう言った感覚がない。

けれども確実に人を殺められるという恐ろしさを兼備えている。

「……………」

ベッドと机以外何もない、殺風景な自室。

ベッドに横たわり、手にしたナイフをぼんやりと見つめる。

白銀に煌く刃、地肌にはんやりとした自分の顔が映し出される。

昨日、怪しげな露店商でタダで貰ったナイフ。

266人もの人を斬り殺し、今も尚血と戦いを訴え求めている妖刃。正直言つて火力不足の状態である今、この武器の入手は非常に有難い。

銃は…最初から使う気はない。

一般人が持つなら、銃を持った方が利口だろう。
銃とナイフ、殺し合いをするに当たりどちらが有利となるか。
その場の環境や所持者の状態云々も大きく左右されるが、それでもやはり銃を持っている人間が有利に立つ。

が、それは一般論での話だ。
一般論が全く無意味となる、規格外というモノがこの世には存在する。

常識破り、非常識な人間。
その非常識な人間というカテゴリー内に、自分も含まれている。
だから、銃を使って相手を殺すよりも、手に馴染むナイフみたいな刃物の方が相性がいい。

…しかし、贅沢を言えば刀が一振り欲しいところではある。
ナイフよりも、刀の方が欲しかった。

「…さてと、そろそろ朝飯だな」

ベッドから身体を起こし、整備兵の服装へと着替える。
そして鞘に収めたナイフを腰に。
儀國は食堂へと向かった。

「烈風斬!!」

アドリア海に向けて、魔力を込めた一撃を落とす。
空を切る、魔力に包まれた白銀の刃。海を奔り、割り、波を作る魔力刃。

数m程突き進んで、白き魔力刃は静かに消える。
割れた波もまた元通りになり、いつもと同じ動きを演じる。

「ハア……ハア……」

肩で息を切らしながら、広大な青い海を見据える。

…この程度では駄目だ。坂本は悔しさを表情に表し、拳を握り締める。

儀國の放ったモノより数段、いや…数十段衰えている自身の烈風斬。この程度のモノしか生み出せないのでは、言うまでもなく不合格。課題を出されてから今日で丁度一週間。

与えられた課題は……言うまでもない。

儀國の言った、“魔法量の消費は一切関係ない”、このヒントを元に色々と思考を働かせ、そして実践した。
が、何も知ることでも得ることも出来ず。

ただ時間だけが悪戯に過ぎ、そして少ない魔法力が消費されていった。

「私には…無理なのか？」

儀國の様に、私は戦うことが出来ないのだろうか？

そんな事を、ふと考える。

…いや、出来る出来ないの問題じゃない。

弱気になるなど、私らしくない。どんな苦境に見舞われても、私は何度も乗り越えてきたではないか。

諦めるにはまだ早い。

坂本は呼吸を整えた後、静かに烈風丸を構え直す。そして、再び烈風斬をアドリア海に向けて放った。

|||||

「つーわけでき、刀が欲しいけど…何とかしてくれないか？」

「俺に言っな」

あれから儀國は安藤に相談していた。

相変わらず、安藤は素っ気無く返してくる。

「だからさ、刀がどうしても必要なんだって」

それは、今後の事を考えてのことでもある。

ナイフを手にしたとしても、火力不十分であることには変わらない。

その為にはやはり、ナイフよりも強力な武器が必要となってくる。

その武器が、今尤も欲している日本ならぬ扶桑刀だ。

扶桑刀が一振りでも手元にあれば、大きく戦力は変わってくる。

刀さえあれば誰にも負けないと断言してもいいぐらいだ。

だから、と安藤に相談を持ち掛けた。

結果は、今に至る…。

「俺に言われても、何とか出来る訳がないだろう？」

「…だよなあ」

安藤の言う通り、明らかに相談を持ちかける相手を間違えている。となれば、一体誰にこの事を相談したらいいのか。相談を持ちかける相手の条件として、やはり刀を持つ者

「アイツしか、いないか……」

思い浮かんだ一人の人物。

眼帯をし、男らしい笑い声を出している扶桑の大和撫子。以前に、その人物しかこの基地では思い浮かばない。

この際背に腹変えられない。

問題は、彼女が承諾してくれるかどうか。

交渉する手段はある事にはある。

その交渉に相手が応じなければ、成立しない。

「……仕方ない、一回言ってみるか」

「……………」

一人の男を捜して、坂本は基地内を徘徊していた。

結局、提示された条件をクリアすることが出来なかった。烈風斬を超える真・烈風斬…、それを会得する事は不可能に終わった。

だが、坂本は諦めていなかった。

提示された条件はクリア出来なかった事は認める。けれども、それで諦める自分ではない。

相手が整備兵だろうと何だろうと、儀國は自分よりも遙かに強い力を持っている。

その相手に教えを請うのだ。

相応の覚悟と態度は、心しているつもりでいる。

宮藤、リーネ、ペリー又三名の昼の訓練を終え、今は休憩中。

そして今、他の整備達の情報を元に中庭へと向かっている。

「いた！」

儀國の姿を捉える。

向こうも此方に気付いたのか、ゆっくりと歩いてきた。

5歩分程度の距離を置いて、対峙する。

「儀國……………」

「……………そういえば、今日で一週間だったな…。

それで結果は…まあ、言うまでもないか。

なあ坂も

」

儀國が言い終える前に、素早くその場に土下座する。

儀國は驚いた様子で、眼を少し見開いていた。

「儀國！ 頼む、私の師となってくれ！！！」

坂本は直ぐに用件を言った。

強くなるには、誰かに教えてもらうのが一番。

自分で考え、行動するよりも教えてくれる者がいる方が充分良い。

その教えを請いてもらう者が、儀國だ。

上官や部下という立場は、今は関係ない。

儀國は、私よりも遥かに強い。その相手から教えを請いてもらう許しを得るのだ、これぐらいは当然というもの。

「勿論、相応の見返りはする！ だから儀國：私にどうか真・烈風斬を！」

「……………」

儀國は暫く考える仕草を見せた後、その場に腰を下ろした。
正確に言えば、私と同じ正座をした。

「相応の見返りをする…か。なら丁度良い。坂本、取引をしないか？」

「え…？」

|||||

世の中は等価交換で成り立っている。
ソレを得るには、ソレと相応の対価を支払わなければならない。
それが、世界の理。

「なるほど、そういうことが」

「ああ、悪い話じゃない筈だけど？」

「いいだろう、では用意するとしてよう」

「成立だな」

坂本は儀國との“取引”に応じた。

儀國から突如持ちかけられた取引。

それは扶桑刀を一振り寄越して欲しいというもの。

使用用途は、不完全な状態である自分の強化。

その対価として、何故真・烈風斬を出せたか教えると…：そう儀國は取引を持ちかけてきた。

坂本にとって、この取引を断わる理由は何処にもなかった。

寧ろ有り難いぐらいである。

此方は教えを請いに、儀國は扶桑刀を手にする。

今回の取引は、儀國の言う通り互いに利益のある話。

「先に言っておく。俺はお前等を信用してないが、交わした取引は必ず守る。

それだけは…絶対に誓う。

それともう一つ。俺はどうやったかをネタ晴らしするだけであって、手取り足取り教えるワケじゃない。

それだけは、理解しておいてくれよ？」

未だに儀國は、此方の事を信用していない。

ただ、その男の眼は嘘を言っている眼をしていない。
真っ直ぐで、濁りが一点もない澄んだ…綺麗な眼をしている。
その言葉を、信用する価値ある眼だ。

「…私も、お前との取引を破るような真似を絶対にしない。お前が
納得する一振りを、必ず用意しよう、我が魂に誓う」

坂本も誓いの言葉を立てた。

隻眼を見れば分かる、坂本は嘘を言っていない。

絶対に誓うと、強い意思をハッキリと感じ取れる。

坂本の言葉、信用するに値する。

儀國は静かに頷いた。

「じゃあ、そういうことだ。いつぐらいで届く？」

「少なくとも、十日間以上は掛かるだろう。何、心配するな。私に
任せておけ」

ハッハッハ、と笑う坂本。

そんな坂本に苦笑いを浮かべつつ、儀國は今回の取引が成立したこ
とに満足していた。

そんな様子を、隠れて見守る者が居た。

「さ、坂本少佐とあんなに楽しそうに話すなんて……！」

少女は目の前で起きている出来事に苛立ちを見せていた。

自分が尊敬し、慕っている上官。

その上官と何やら楽しそうに話している、得体の知れない男。

青き炎を放ち、悪魔の如く冷徹な心の持ち主。

…そんな男が、尊敬する上官と喋っていることが、ただただ少女は
気に食わなかった。

暫くして、男と上官は別れる。

…もし、あの男がこの部隊の一員でなければ…。

「……………あつ、坂本少佐！」

少女はふと我に帰り、立ち去っていく上官の後ろ姿を慌てて追いか
けた。

|||||

取引の日から、三日後のある夜

「……………」

夜のミーティングルーム。

背中を壁に預け、両腕を組み、儀國は静かに待つ。

理由は簡単、いきなり坂本に呼び出された。

夜、正確に言えば夕食後のミーティングルームはウィッチ達の寛ぎ

の場。

現在進行形で、ウィッチ達から何でお前がいると言いたげな、嫌な視線を浴びている。

……本当なら、こんなとこ一秒たりともいたくない。

無言の中視線を浴びる、というのはなかなか疲れる。

アイツもアイツだ、何故わざわざこんな場所に呼び出す必要がある？ たかが刀を渡すだけなら、ここでなくてもいいだろうに。

これは…地味な嫌がらせ、と言うことなのだろうか。

それを我慢して、そしてなかなか現れない坂本に苛立ちを感じながら、静かに待つ。

そして待つこと五分

「待たせたな儀國」

ミーティングルーム、坂本が二振りの扶桑刀を持ってやってきた。十日以上は掛かると言っていたが、予想以上に早く届いたようだ。ようやく来たか、と言わんばかりに。壁に持たれていた儀國は大きな溜息を零しつつ、坂本へと歩み寄る。

「これが、俺が頼んだヤツか？」

「いや、違う」

ハッキリと、坂本は否定した。

ならば、この二振りの扶桑刀は何なのだろうか？

取引をし、寄越して欲しいと頼んだものではないとするならば、これは一体…。

「儀國、少し私の模擬戦に付き合ってくれ」

「は？」

「お前の実力が気になってな。同じ刀を振るう者として、是非手合わせをしたくなってな」

坂本は手にした刀の一振りを儀國に手渡す。

真剣ではない、刃を潰した訓練用の模造刀。

同じ刀を振るう者として、儀國 雅史の実力を知っておきたかった。儀國は…強い、間違いなく。

その儀國と手合わせをすることで、何か強さの秘訣を得られそうな気がする。

「…遠慮しとく」

不機嫌そうに儀國は言ってくる。

予想が外れた、と坂本は一瞬だけ驚いた。

予想では、約束の内容以外の事をすると言った憶えはない、と言っていると思っていたからだ。

「ほう、何故だ？」

「単純に実力の話。

俺自身も手合わせ出来る相手がいたら嬉しいけど。

お前じゃ話にならない。つか、約束のブツはまだなのか？」

「言ってくれるな…儀國。」

約束の品はまだ待ってくれ。必ずお前が気に入る物を手に入れよう」

「あの、坂本さん。一体…儀國さんと何を約束したんですか？」

宮藤が坂本に尋ねる。

宮藤の質問に、坂本は嬉しそうに語る。

儀國との取引。

儀國より真烈風斬の伝授してもらおうこと。

その条件、取引内容として扶桑刀を一振り寄越す。

宮藤やリーネ達は驚きの声を挙げた。

それもその筈。

自分でさえ習得出来ない秘奥義を、男である儀國が極めているのだから。

ただ一人、不満げに反論する少女がいた。

「納得いきませんわね、貴方の様な野蛮でがさつ方が、少佐に教える？」

少女は実に気に食わないと、男（儀國）に視線を向けた。

「…何が言いたいんだ？」

「言葉通りですわ。貴方の様な方が何を教えると仰るのですか？」

少佐に“教えられる”、の間違いではなくて？ 儀國 雅史さん？」

ペリー又は不満を男にぶつける。

納得が行かない。

この男は確かに強い、あの青い炎はネウロイをも簡単に跡形もなく焼き尽くす。

が、戦闘能力が高い以外は最悪の何物でもない。

上官に対しこの態度。

敬語は最初の頃だけ、今では友達感覚で話す口調ぶり。時には見下す様な発言さえも平気です。それを詫びる様子もなし。

更上官に対し階級を付けて呼ばない。

呼ばないどころか挨拶もしなければ、目線を合わせようとしません。まるで、最初から眼中にないと…そう言っている風にも感じ取れる。

加えて…自分が尊敬する上官に対してもあの様な態度。それが気に食わない。

そんな男から尊敬する上官が教わるという事も、儀國 雅史という存在全てが…。

「……昔から弱い犬ほどよく吠える、って言うよな。まるでお前の様な…いや、お前のことだな、ペリ犬^{いぬ}」

呆れた表情を浮かべて、そして挑発的な言葉で返してくる男（儀國）。

そんな男の態度と言葉に、ペリーヌの怒りは爆発した。

「な、何ですって!!」

「言葉通りの意味だ。今正に、現在進行形だろ？」

「キイイイイイツ!! 許しませんわ! 貴方、今すぐ決闘ですわ!」

「クロステルマン中尉!」

ミーナが仲裁に入る。

階級で呼ぶ時は怒っている証拠。

上官(中佐)からの命令ならば、納得出来なくても引くしかない。ペリー又は渋々と引き下がった。

「それで、結局どうするんだ?」

少し不満げに、坂本は儀國に尋ねる。

就寝時間までまだ時間は充分にある。

全てでなくとも、教えられる範囲で構わないから教えてもらいたい。

「……ハア、仕方がない。口で言っても理解しなさそうにないし……一度だけな」

「そうか! では早速始めるとしよう!」

溜息を吐き、静かに儀國はミーティングルームを出て行く。

それに続いて上機嫌で、坂本もミーティングルームを後にした。

|| || || || || || || || || ||

ビーチへと赴く坂本と儀國。

向かい合う様に二人は立ち、その様子を他のウィッチ達が見守る。

「では、始めるとしようか！」

やる気十分の坂本。対しやる気不十分の儀國。

坂本は早速手にした模造刀を鞘より払う。

「だ、大丈夫かな……」

宮藤は二人を見て不安を抱いていた。

これから模擬戦に用いられるのは模造刀。

刃は潰してあるから人を斬ることは出来ない。

けど、人を壊すことは出来る。打ち所によっては命さえも奪える。

それに切先は本物の扶桑刀同様鋭く尖っている。

模造刀と言っても、尖った金属を振り回すわけだから、凶器である

ことには変わらない。

もしアレが突き刺さったりでもしたら……。

……尤も、刺突の使用は反則だから関係ない。

二人も、流石にそれは考えている筈……。

「どうした？ 始めるぞ」

「ああ、だからさっさと始めてくれ。こっちはもういいんだけど？」

素っ気無く、心底面倒くさそうに儀國は言う。

そうは言っても、今の儀國の体勢は構えと呼べるものではない。

無行の位でもない、以前に：儀國は扶桑刀を鞘より払っていない。居合いの構えでもなく、ただ普通に“持っている”だけ。

「？ 何故刀を抜かない」

「抜く必要ない。お前は俺に一太刀も浴びせられずに終わる」

「：ほう、では：遠慮なく行かせてもらっても、いいのだな？」

「最初からそのつもりで。来いよ坂本」

「では：行くぞ！！」

模造刀を構え、坂本は砂浜を駆ける。

初撃、上段構えからの唐竹。

儀國は僅かな体捌きで紙一重に避ける。

二撃、唐竹に打ち落とした模造刀。

素早く縦向けの刀身を横に寝かせ、追いつきの表切り上げへ。

更に刀を返し、裏切り上げへと運剣を繋ぐ。

それをも、儀國は軽々と避ける。

“何故だ！？ 何故当たらない！？”

坂本は模造刀を振るいながら、当たらない事に疑問を抱いていた。

まるで風と闘っている様だった。

実体を持たず、常に形を変える風。

今の儀國は正にそれだ。

「何だと…!?!」

追い打ちを掛ける様に、更に信じられないものを眼にした。人間には五つの感覚がある。

味を知る為の味覚、音を聞き取る為の聴覚、匂いを掻き分ける為の嗅覚、痛み等を知る為の触覚、そして…視る為の視覚。

この五感の内、儀國は自ら視覚を封じていた。

視る、と言う感覚を失えば、それでどれだけの影響が出るかは言うまでもない。

それだけでなく、人間が持つ五感の内一つでも消失するだけで後の生活に支障が出てくる、

にも関わらず、儀國は完璧に避けている。

何故此方の攻撃が視えているのか。

エイラのように未来予知の様な力でも、この男は持っているのか？そんな疑問を抱きながらも、坂本は模造刀を振るい続ける。

「何処を狙ってる？　しっかり狙えよ、坂本」

「くっ!?!」

しかし、何度振るってもその刃は決して儀國に届く事はなかった。

「とりあえず、終わりにするか」

3分程して、儀國は模擬戦を中断させた。

「ハア……ハア……ハア……」

息を切らし、片膝を砂浜に着く坂本。

その傍らで心配そうに心遣うペリーヌ。

「ハア……ッ……」

結局、一太刀も儀國に浴びせることが出来なかった。

宣言通りの結果に、ただただ悔しく感じる。

儀國は一度たりとも、模造刀を鞘より抜刀していない。

全て此方の斬撃を見切り、そして避けた。

しかも視覚を封じた状態で、だ。

鞘で受け止めたりと言った、防御行動も一切していない。

それに加え息を切らしている私に対し、儀國は平然とした態度を取っている。

圧倒的な実力の差。

儀國の言う通り、今の私では模擬戦を務めるには役不足。

「だから言っただろ？ お前じゃ絶対に無理だつて。

お前じゃ、俺の練習相手も務まらない。

くだらないことをせず、お前は早く取引の品を持ってくればいい」

「くっ……！」

…悔しい。だが、事実だ。

結果は誰から見ても完敗。

儀國から模造刀が返され、それを静かに受け取る。

「……っと。どうやら敵さんがお出ましらしいな」

不適な笑みを浮かべて、儀國は空を見上げる。

それに釣られて上を見上げる。

すると、満月を背に浮ぶ異形の者が一人、

「ネウロイ!?」

騎士型ネウロイが夜空に浮き、見下ろしていた。

第二章 第五節：契約、招かざる客（後書き）

第二章 第五節でした。

次話では、タイムマン勝負をメインとした話になる予定です。
頑張って書きます。

すわっ！

第二章 第六節：『剣』（前書き）

第二章 第六節です。

今回は十割が私の抱いていた妄想（？）で構成されたシナリオです。

…自分でも何言ってるのか分からない…。

兎に角、どうぞ!!

第二章 第六節：『剣』

ゆっくりと、空より降りてくる騎士型ネウロイ。

そして右手よりビームブレードを現すと、その切先を坂本へと向ける。

…殺気の矛先は言うまでもなく、坂本本人に向けられている。他のネウロイの姿はない。今“このビーチ”にある気配は、目の前の一機のみ…。

「坂本、相手さんはお前を指名らしいぞ。どうするんだ？」

「…待ってくれと言って、待ってくれる相手ではあるまい。それに、挑まれたのならば…闘うしかないな」

手にしていた模造刀を投げ捨て、背中の烈風丸を鞘より払う。正眼の構えを取り、坂本は騎士型ネウロイを見据えた。

「美緒！」

「案ずるなミーナ。私は、負けはしない！」

言い終えたと同時に、騎士型ネウロイが動く。

剣へと変換させたビームを、坂本に向けて打ち落とす。すぐさま、烈風丸で受け止め罅迫り合いへと持ち込んだ。

「早いな…」

儀國は騎士型ネウロイの身体能力の高さに関心した。

騎士型ネウロイの振るう剣：ビームブレードは通常の剣よりも遙かに長い。

ロングソードで全長約80cmから1m前後、対し騎士型ネウロイの剣は2m以上はある。

人間が扱う武器で例えるとするならば、あの騎士型ネウロイの振るう剣はツヴァイハンダーだろう。

その武器を、あの騎士型ネウロイは軽々と振るった。

あのビームブレードに、本来の剣の様に重量感があるかどうかは置いておくとしても。

あの手の武器を軽々と、そして素早い動きが出せることは凄いと素直に認めよう。

そして…騎士型ネウロイの剣を受け止めた坂本は案の定…、

「ぐっ……くう……」

苦悶の表情を浮かべ、鏢迫り合いをしている坂本。

受け止めたはいい。だが、その身に掛かる重みは生半可なものではない。

徐々に坂本の片膝が曲がる、今にも砂浜に着きそつだ。

「ぐっ……ハアアアアアッ！！！」

気合の叫びと伴い、坂本が騎士型ネウロイの剣を押し返す。

鏢迫り合いが解け、双方間合いを空けて見据える。

「ハア…ハア…」

息を切らしながら、何とか呼吸を整えようとする坂本。

一方騎士型ネウロイは平然とした様子。静かに剣を構え、そして再

び坂本に向かって地を駆る。

長剣による鋭く重たい斬撃が坂本に襲い掛かる。一度や二度じゃない、連続して…流れるように何度も、赤く長い刃が中空を奔る。

坂本は、何とかそれを見切り避けている状態。

受け止めるのは得策ではない、それは坂本も理解しているようだった。

あれだけのパワーを秘めた一撃を出すのだ、もし受け止めれば坂本のパワーでは踏み止まられず、その身体は吹き飛ばされる。仮に出来たとしても、烈風丸の強度が耐え切れるかどうか…。

坂本は全く手が出せずじまい。防戦一方を強いられている。

「くうっ……!!」

「なかなか強いな…あの騎士型ネウロイ」

…この勝負、圧倒的だ。

誰がどう見ても、坂本が勝利する確率は“少ない”。

ツヴァイハンダー級の長剣を軽々と振るう騎士型ネウロイ。

リーチ、スピード、パワー、どれを取っても坂本よりも遙かに上。

それに体力の差もある。

坂本は、先の鏝迫り合いだけでかなりの体力を消耗している。

そこに絶えず続く騎士型ネウロイの斬撃、坂本のスタミナは削られていく一方。

この勝負、坂本の敗北が極めて高い。

しかし…、

「美緒！！」

「少佐！！」

ミーナとペリー又が叫ぶ。

そして宮藤が此方へと向かって口を開いた。

今にも泣きそうな顔を浮かべて…。

「お願いです儀國さん！ 坂本さんを助けてください！！」

「…断る。助ける義理がない」

「なっ…貴方は坂本少佐を見捨てるおつもりですか！？」

ペリー又は儀國に食って掛かった。

坂本少佐が一人で戦っている。

その間、私達はハンガーへと戻り、武装をして戻ってこなければならなかった。

けれども、相手は想像以上に強い。

このまま坂本少佐を一人この場に残し、そしてハンガーへと行きここへと戻ってくるまで時間が掛かり過ぎる。

今すぐにでも加勢に入る必要がある状態、ストライカーユニットを取りにいく余裕なんてない。

けれども、ここには即戦力として動ける輩がたった一人だけいる。

生意気で…冷酷な男、儀國 雅史。

整備兵であり、魔術師を名乗り、ベルフェゴールと言う悪魔の名が付いた青い炎を操るこの男ならば、今すぐにも坂本少佐を助けら

れる。

この男に頭を下げる、ということとはしたくない。

が、状況が状況だけに…嫌でもやるしかない。全ては坂本少佐の為…。

そして私よりも先に、宮藤さんが儀國 雅史に悲願した。

彼女とは同じ上官を慕う好敵手。だからこそ、上官に対する思いは同じ。

が、儀國 雅史はそれを拒否した。

「見捨てるも何も、俺達は仲間ですらない。仲間じゃないヤツを助ける義理が、何処にある？」

それにアイツは、負けないうって断言しただろ？
なら黙って見ている」

思わず殴りそうになった。

けれども、そんな私よりも先にバルクホルン大尉が動いた。

「儀國！！ 貴様ツ！！」

バルクホルンは儀國の胸倉を掴む。

使い魔の尻尾と耳が現れ、怪力を発動させた状態で、今にも殴り掛からんとしていた。

その様子を、誰も止めようとはしない。

「…なんだ？」

「…私はお前のことを信用している。だが、今回ばかりは見過ごせん！」

お前はそれだけの強大な力を持ちながら、何故戦おうとしない!!
お前は…目の前で人が、仲間が、坂本少佐がネウロイにやられるの
を見ても、何も思わないのか!？」

バルクホルンは叫ぶ。

今まで我慢してきたが、もう我慢できない。

この男がここまで冷酷な男だとは、思わなかった。
私やミーナ、クリスを助けてくれたのに…何故?
気まぐれで助けたとでも言うのか…。

「そんなことか、くだらない。戦場に立った時点で、ソイツはもう
立派な戦士だ。

男女も子供大人も関係ない。戦場に立てば必ず誰かが死ぬ。

弱いヤツから死んでいき、強いヤツが生き残る…戦場の道理だろ?
今回の場合、その弱いヤツがアイツってだけの話だ」

「くっ…!!」

バルクホルンは儀國の胸倉より手を離す。

こうやって話していても意味がない。そう判断し、ハンガーへと急
ぐことを決めた。

幾ら烈風丸を携えている坂本少佐と言えど、一人で闘うことは危険
すぎる。

だが、ハンガーへと向かおうとする私を儀國は手を掴み制止する。

「この手を離せ、儀國ッ!!」

「…感じないのか? この殺気」

「何？」

「…俺達の行動を監視しているヤツがいる。もし、ここで下手に動けば容赦なく攻撃してくるだろう。」

かなり遠くの方にいるが、そうでありながらいつでも殺せるぞと、殺気が物語っている。

大方、相手はアイツの仲間だろうな…。

それでもいいなら、ハンガーなり何処となりと行けばいい。その時殺されるのはお前か…それとも坂本かってだけの話だがな」

「なっ…！」

「これはアイツの作戦なんだろう。」

一対多数の戦いは明らかに自分達が不利、けれど一対一での環境なら勝てる。

順番に一人ずつ、戦力のある者からの確に仕留めていく。

そして、邪魔が入らないように仲間に見張らせる…か。なかなかいい作戦だな。

坂本の烈風斬の恐ろしさは、ネウロイも認めているらしい」

儀國の言葉に、誰もが言葉を失った。

もし、今の言葉が真実だとするならば。私達はどうすることも出来ない。

姿が見えないが、此方の動きを監視し動けば攻撃してくるといふ敵の存在。

そして目の前では、騎士型ネウロイの猛攻に防戦一方を強いられる坂本少佐。

絶望的としか言えないこの状況、なす術がない…。

「それにしても、随分と遊ばれてるな。こんな回りくどいことをせず、今俺達を攻撃してこればいいと言うのに。」

この戦い、ひよっとすると相手にしてみればゲーム感覚なのかもしれないな……」

「……儀國さん。これは隊長命令としてではありません。一人の間として貴方をお願いします。どうか少佐を……美緒を助けて。今頼れるのは……貴方しかないの」

ミーナは儀國へと助けを求めた。

この状況を打破するには、やはり彼の力しかない。

あのビームを大鎌へと形を変えた騎士型ネウロイに受けた傷より、本来の力が出せない。そう言う彼でも、この場にいる私達よりも戦力なのは言うまでもない。

私はもう、大切な人を失いたくない。

大切な仲間を、家族を、美緒を……私は失いたくない。

「なあ……隊長さんよ。アンタはさ、アイツのことを信じていないのか？」

不意に儀國が尋ねてくる。

「えっ？」

「さっきから思ってたが、お前らはアイツを全く信じていないな。何故、アイツがネウロイに負けることを前提に物事を考えている？ いつ、アイツとの戦いに勝敗が着いた？」

「そ、そんなこと……」

ミーナは反論しようとした。

誰がどう見ても、彼女一人では勝てないのは明白。

だが男は……、儀國は続けて言う。

「見る、あいつの眼を。一度でも敗北の……絶望の眼を浮かべたか？あれだけの窮地に立たされながら、アイツは一度も諦めた眼をしていない。

寧ろ、楽しんでいるようにも見える。

それに、あの動きに徐々に慣れつつあるのが分からないか？」

「美緒……」

言われて……確かに、とミーナは思った。

騎士型ネウロイの猛攻に防戦一方の美緒。

その眼は……決して弱気を見せていない。寧ろ生き生きと輝いて見える。

まるで、宮藤さんやリーネさんを訓練している時のような、そんな眼。

それに避けるのに精一杯だった表情も、今では少し余裕すら感じられる。

「まったく……俺よりも付き合いの長いお前らがアイツを信じなくてどうする？」

それにな、勝敗って言うのはどっちかが倒れた時点で初めて決まるんだよ。

だからギャラリーは、今は黙って見ている。勝負が着くまでな」

そうやって、儀國は近くの岩に腰を下ろし、二人の戦いを見守った。

騎士型ネウロイの猛攻は尚続く。

表切上、逆袈裟…次々と鋭い斬撃が中空を切り、襲い掛かってくる。それを坂本は見切り、紙一重で避けていた。

「ハア……………ッ…」

坂本は距離を取りつつ、騎士型ネウロイと対峙する。

やはり…強い、と坂本は心の中で呟く。

怪異の振るう剣はどれを取っても自分よりも上、それは最初の鏢迫り合いの時に理解している。

それに、あれだけの連続して攻撃を繰り出してきながら、相手は全く平然としている。

剣のキレは変化なく、相変わらず凄まじい。

それに対して此方のスタミナは限界気味。

そもそも、ネウロイに人間の様にスタミナと言う概念があるかどうかすら分らないが…。

兎に角、このままでは負ける。

相手と自分との距離は大よそ4 m弱、間合いに入った時点で勝敗が決まる距離。

間合いに入れば先に斬られるのは…言うまでもない、私自身だ。

…だが、勝機はある。一か八かの賭けではあるが。

騎士型ネウロイの長剣が振り翳される。

“ 今だ！！ ”

坂本は動いた。
外野から逃げる、避けると声が拳がり出す。
だが、それを。

外野から拳がる声とは正反対に、あえて真つ直ぐと。

砂を蹴り、坂本 美緒は敵に向かって直進した。

一瞬、怪異の動きに変化が現れる。

それもそうだろう、今まで避けることしか出来なかった魔女が。

突如、攻めに転じて来たのだから。

だが、それでもすることは変わらない。怪異は己の持つ長剣を一気に振り下ろす。

終わった、とこの場にいる全員の思考が一致した気がした。

そんな中で、たった一人だけ違う者がいた。

座りやすそうな岩に腰を下ろし、この戦いを静かに傍観している者。

魔女という存在とは違う、異質な存在。

その存在が、不敵な笑みを浮かべた。

魔女を斬らんと、唐竹の振り下ろした長剣。

それを魔女は右に避け、そして前進してくる。

無駄なこと……と怪異は刀身を横に寝かせる。

そして追い討ちの逆胴を繰り出した。

何はともあれこれで終わりだ、と騎士型ネウロイは思う。

受け止めることは得策ではないと、あの女も既に理解している。

もし、この一撃を受け止めたとしても、だ。

受け止め身動きが取れない所に一太刀を浴びせればいい。

そして、赤き輝きを放つ刃が坂本の左脇腹を捉え、

鈍い金属音が鳴る。

魔女は受け止めた。受け止めたのは…あの刀を納める鞘であった。

「鞘で受け止めた!?!」

外野の一人、赤い長髪の女が叫ぶ。

騎士型ネウロイは驚いていた。

普通ならば、手にしている武器で相手の攻撃を防ごうとするだろう。だが、その武器を収める鞘で魔女は受け止めたのだ。

「なるほど…鉄拵えの鞘か」

儀國は口笛を吹いて、坂本の行動に感心した。

本来、日本刀の鞘とは木製作りが基本とされている。

しかし、坂本の烈風丸を収める鞘はその基本ではない。

金属音が鳴ったことで材質が何かは、既に分かっている。

あの鞘は鉄拵え。

普通の鉄ならば。騎士型ネウロイの一撃によって、そのまま身体ごと叩き切られていただろう。

その一撃を受け切れるだけの耐久度、あれは普通の鉄拵えの鞘ではない。

烈風丸という妖刀を納めるぐらいだ。

通常の鞘ではあの妖刀の暴れっぷりは抑えられない。

恐らく、あの鞘にも何か特殊な術式が込められているのだろう。だからこそ、あの斬撃を受け止めることが出来た。

鞘で受け止め、そして坂本は自分の間合いへと入る。

「烈風斬！！」

坂本の最大の必殺技、烈風斬が繰り出される。タイミングも完璧、坂本の魔法力を糧にする妖刀の刃は、騎士型ネウロイを捉えた。

が、相手も普通のネウロイじゃない。

烈風丸の刃が届く前に、大きく後方に飛び退いた。

結果として、ネウロイの身体は切り裂かれた。

しかし、ネウロイは破壊されていない。生きている。

心臓部にぱっかりと開いた刀傷。そこから見えるのはネウロイの心

臓：赤いコア。

烈風斬は、コアまで行き届いていない。

「くっ……」

坂本が片膝を着く。

疲労の色が浮かび、激しく息を乱していた。

そろそろ限界だろう、体力的にも…魔力的にも。

そして騎士型ネウロイの傷は自己再生能力によって修復される。

疲労を見せている様子はなし。

勝敗は…今この時点で着いた。

「……………」

儀國は思考を働かせる。

そろそろ潮時。

このままでは坂本は確実に殺される。

が、どうやって動く？

姿ない監視者は、常に此方の行動を見張っている。かなりの距離から感じる殺気。恐らく敵は遠距離からでも攻撃できる能力。

本来のネウロイの様にビームを放つのか、それとも何か特殊な魔法を所持しているかも分からない状態。

そんな中、己の手の内を見せるのはあまりにも愚策。

…いずれにせよ、この監視がある限り下手に行動は出来ない。

騎士型ネウロイが、片膝を着き息を切らしている坂本を見下ろす。

人間の様に表情こそないものの、敗者を見下す勝者の様な感じがした。

と、騎士型ネウロイは坂本より視線を外す。

今度は…こつちに視線を向けた。

そして、剣の切先を向ける。

その後、空へと飛び立つそのまま姿を消した。

それに伴い、監視していた者の殺気も消える。

どうやら二機とも撤退したらしい…。

「終わったな…」

やれやれ、と儀國は溜息を吐いた。

あれだけ綺麗だった夜空が、いつの間にか曇天に覆われていた。

そして、雨が地上へと降り始める。

ポツポツと、次第に本格的に降り頻る。

誰もこの場から動こうとしない。

雨に濡れているにも関わらず、誰も…。

片膝を着き、息を切らしている坂本も…その場から動こうとしない。

「美緒……！」

ミーナは坂本の下へと駆け寄ろうとした。

「必要ない」

不意に、儀國が口を開いた。

その言葉に、ミーナは足を止める。

「アイツも理解している筈だ、負けた…ってな。

負けたヤツに掛ける言葉なんて要らない…」

「そんな！ 坂本少佐は負けてなんか」

「…この勝負、誰がどう見ても坂本の負けだ。

ヤツは殺せるにも関わらず、坂本を殺そうとしなかった。

それに加え、固有魔法が使えるにも関わらず、それを一度も使おうとしなかった。

つまり、アイツは本気じゃなかったんだよ。

本気を出されていない上に、見逃され…生かされる。これを敗北と呼ばずして、何て言うんだ？」

「け、けどストライカーユニットさえあれば！」

「それも言い訳だな。いつ何時、如何なる状況で敵が来るか分からない。

ストライカーユニットを装備するまで待つてくれと言って、敵が待

つてくれるか？

敵は待ちはしない。

仮に、ネウロイが戦闘態勢に入っていない状態の所を発見したら…お前らだって即座に攻撃を仕掛けるだろう？ それと同じことだ」

そう言う儀國の言葉に、ペリーヌさんは口を閉じた。

「…言い訳や慰めの言葉なんか必要ない。

誰がどう言おうと、負けた現実は変わりはない…。

悔しければ、強くなるしかない。それだけだ」

そう言つて、一人ビーチから立ち去ろうとする。

ふと、歩みを止めて宮藤さんに振り返る。

「宮藤…坂本の腕の治療だけは、しておいてやれ」

「えっ？」

「分からないか？ あれだけの強力な一撃を受け止めたんだ、しかも片腕でな。

折れていなかったとしても、骨に罫が入っているのは確かだろう。

それから、屋内にだけはさっさと連れて行ってやれ。

こんな中で後悔なんぞして、風邪なんか引いたら話にならないからな」

それを最後に、儀國はビーチより立ち去った。

宮藤さんは急いで美緒の下へと駆け寄り治癒魔法を開始した。

そして私達も、美緒の元へと駆け寄った。

「……………」

左目を動かさず、坂本は己の左腕を見る。

痛い…。少し動かすだけで激痛が走る。

あの一撃を受けた際、骨が逝ったか…。

こうなることは覚悟していた。それを覚悟しての一撃、烈風斬を繰り出した。

が、後僅かに届かず。騎士型ネウロイを斃すことが…出来なかった。

…遠くでは儀國達のやり取りが聞こえていた。

素っ気無く、冷酷さを感じさせる発言をしていた儀國だが、それは全て私を信頼しての言葉だった。

信用していないと口癖のように言っている儀國が、この私を信じていてくれた。

必ず、あの騎士型ネウロイを斃す…と。

その思いに、私は応えることが出来なかった。

儀國の言う通り…そして私自身、理解している。

自分は負けたのだ…と。

「くっ…！」

坂本は左拳で砂浜を殴る。

当然左殴った衝撃が伝わり腕は痛むが、そんなものどうでもよかった。

この痛みよりも、自分が敗北したということの方が許せなかった。殺されず、見逃され…敵に生かされた。

これが屈辱でなくて、何だと言う。

屈辱以外の、なにものでもない。

宮藤達がやってくる。

儀國は：既にビーチから立ち去っているようだ。

宮藤は直ぐに、左腕に治癒魔法をかけてくれた。

：悔しい。弱い自分が心底憎い。

今よりももっと強くなりたい、そう：心から思った。

第二章 第六節：『剣』（後書き）

第二章 第六節でした…。

今回は騎士型ネウロイVSもっさん、なシナリオです。

ストライカーユニット未装備時で戦闘になった場合、どんな風になるのだろう。

そんな考えから思いついた話です。

…もっさんはストライカーユニットなくとも、白兵戦では 夜叉の如く戦闘能力を発揮しそうな気がする…。

そんな感じの話でした。

「追伸」

儀國の技…もとい魔術ですが、マジで微妙に改名しました。

・改名前

Belphégor
「煉獄の青」

・改名後

Belphégor
「煉獄の青焰」

となります。

今後出てくる炎も、最後に「焰」の文字を付け加えていきます。

すわっ！！

第二章 第七節：再戦（前書き）

第二章 第七節です。

：最近、なんか人生初の花粉症になっちゃったみたいですよ。
マジで眼が、眼がああああ……、な状態です。

後、今回ちょっと短いです。

第二章 第七節：再戦

あの騎士型ネウロイの襲撃があつてから、翌朝。

「やっぱり…やっているか」

儀國は呆れた様子で呟いた。

今日もまた、起床ラツパが鳴り響くよりも先に眼が覚めてしまった。二度寝をする気も湧いてこず。散歩がてらに何となく、ビーチの方へと赴いた。

正確に言えば、坂本の様子が気になったからだ。

昨晚の一件で、坂本は病み上がりにも関わらず、きつと訓練をするだろう。

そしてあの坂本のことだ、きつと以前よりも無茶な修行をするに違いない。

その考えは案の定、見事的中していた。

「烈風斬!!」

海に向かって何度も烈風斬を繰り返す坂本の姿。

一発や二発じゃない、何度も何度も…連続して繰り返している。

「あの馬鹿…」

儀國は心底呆れた様子で、溜息を吐きながら坂本へと歩み寄った。

「ハア…ハア…」

肩で息をしながら、坂本は烈風丸を構える。
そして海に向かって、扶桑皇国に古より伝わる奥義…烈風斬を放つた。

放った烈風斬は海を突き進み、そして二つに割る。
それを何度も繰り返し、行っていた。

もう何度目となるだろう。

普段の倍以上はしていることは、間違いない。

だが、私にはこれしかない。内心焦っていることもある。

あの騎士型ネウロイの一騎打ちに、私は敗北した。

ヤツを斃す為には、やはり真・烈風斬を習得するしかない。

だが、何度として繰り返そうとも…その道のりは程遠い。

永遠にたどり着けないのでは…、そんな事を思ってしまうぐらいに。

「見てられないな…」

背後から儀國の声が聞こえた。

「儀國…」

呆れた様子で、儀國は此方にへとやってくる。

「…こんな事何回何千回と繰り返したところで、お前の言う真・烈風斬とやらは一生習得出来ない。

お前が今やっていることは、ガキがワガママ言って地団駄踏んでるのと同じだ。

力を得るところか、逆に身体を壊すようなこととしてどうするんだ、お前は…」

「…貴様に何が分かる…!!」

思わず叫んでしまっていた。

…儀國の言っている事は、誰が聞いても正論だ。

こんな事を何回と繰り返し返した所で、強くなれない。

真・烈風斬を習得することも出来ない、自分でも理解している。

だが、どうしようもない。

どうすれば強くなれるかも、秘奥義を習得できるかも、私には分からない…。

「おいおい逆ギレかよ…ったく、本当にお前は馬鹿だな。

…坂本、お前は…強くなりたいか？」

「えっ？」

「今のお前を見てたら、イライラして仕方がないんだよ。

だからお前に選ばせてやる。死を覚悟しての強さを得るか…。それとも、何も得られぬまま…このままのんびりとして過ごすか…二つの選択肢をだ」

坂本は戸惑っていた。

あの儀國が、強くなれる為の修行を私にしてくれると言っではないか。

契約ではネタ晴らしただけと言っていたが、今の台詞はどう聞いても手解きをしてくれるという事。

「本当か!？」

「勘違いするな。俺はまだお前を含め、他のやつ等を信用していな

い。

けどな、今お前が死なれるのを見るのも御免だ。

俺が前線に出なくてもいいように、お前にはしっかりと働いてもらう
…それだけだ」

「儀國…」

「時間をやる。それまでよく考えてから結論を出せ」

「…悩む時間など、私には不要だ。私の答えは…既に決まっている。
今すぐにでも頼む、儀國！」

悩み考える時間など、私には不要。

強くなれる方法があるのならば、例えどんな方法であろうと私はする。

それが、己の命に関わろうとも…だ。

「駄目だ。特に今日なんかは、な」

空を見上げ、儀國は何か思いつめた様な顔を浮かべる。

何かを思いつめた眼で、アドリア海を、遠くを見つめている。

今日は何か特別な事でもあった日だろうか、と私は首を傾げた。

「…まあ兎に角、だ。時間をやるから、よく考えて答えを出せ。

期限は…そうだな、刀を持ってきた時にでも聞いてやる」

そう言つて、儀國は立ち去っていった。

立ち去る際、やれやれだの、全くだの、と愚痴を零し続けていた。

…何はともあれ、嬉しいことだ。

この基地の中で一番の力を持っているのは儀國。

そして扶桑皇国の古の秘奥義、真・烈風斬を会得しているのも。その儀國から手解きを受けられる、後は自分自身次第だが…これで私は強くなれる。

…必ず強くなつて見せる。

そして必ず…秘奥義を、真・烈風斬をこの手にしてみせる。

そう堅く決意し、遅れて坂本も基地へと戻った。

|| || || || || || || || || ||

昼休み、特に今日もすることはなく。

のんびりとして時間を過ごす。

今日は木に背中を預けて昼寝としゃれ込んだ。

天気、気温共に良し。昼寝するには絶好の氣候。

「あふ……」

小さな欠伸を一つ。

たまには、こんな風にして過ごすのも悪くはない。

それに…今日は夜に大仕事をしなければならぬ日だ。

自分で言うのもアレだが、勘は鋭い方だ。その勘が訴えている。

その為にも、今は余計なことをせず。体力を温存しておくに限る。

「ん………」

目蓋が徐々に落ちてくる。

そして意識が眠りへと誘われようとし、

「あつ……」

一人の少女の声で、ふと覚めた。

見ると、ルツキーニが立っていた。不安げな顔で、何でお前がそこにいると言いたげな眼差しを向けて。

…あの一件以来、ルツキーニにはかなり嫌われてしまっている。

それもそうだろう、殺すと言った拳句軽めとは言え殺気すらも放つたのだ。

もし逆の立場だとしたら、俺でもそんな危険なヤツの所には近付くうとは思わない。

「…俺に何か用か？」

その場から動かず、ジツとその場に佇み見てくるルツキーニに、儀國は眉を寄せながら尋ねた。

するとルツキーニは恐る恐る木の上を指す。

人差し指の先は一本の木、丁度背中を預けているこの木だった。

儀國は顔を上に向けると、太くて頑丈そうな枝に毛布が掛けられているのを見つける。

「ああ、なるほど…そういうことか」

どうやら、今背中を凭れさせている木はルツキーニの昼寝ポイントらしい。

となれば、自分が嫌っている相手がいたら驚くし焦るのも当然。

儀國は小さく口元を緩め、腰を上げるとルツキーニに視線を向けて静かに口を開く。

「悪かったな、お前の昼寝場所を占拠して」

手をヒラヒラと振りながら、その場から立ち去る。
なかなか心地が良かったが、既に所有者が居たのなら仕方がない。
何処か別の場所を探そう。

「ね、ねえ！」

不意に、ルツキーニが大きな声で呼び止めてきた。

「……………何だ？」

「あ、あの……………本当に、冗談なの？」

「は？ お前何言ってる……………」

そこで、ふと口を止める。

ああ。そういうことか、と儀國は理解し止めた口を再度動かす。

「冗談だつて言った筈だがな。殺す気なんかサラサラないし。第一
仮にお前を殺したとしてもメリットがない」

「……………本当に？」

「お前…俺を快樂殺人者か何かと勘違いしていないか？
誰が自分の快樂の為に殺すかよ。そんな行為、利もないし理もない。
命懸けの喧嘩を売られたりしたら、そりゃ話は変わってくるけどな。
兎に角、お前を殺る気は全くない。それだけはハッキリと言ってお
く」

随分と酷い思われようだ。

誰が好き好んで人を殺すものか。

……確かに、この両手は無数に流してきた血によって赤く染まっている。

今でこそ正当防衛…なんて便利な言葉で片付けられるが、それでも人を殺したということは事実。

人生において…たった一度の汚点。自分が生きたいが為に選んだ、誤った選択肢。

あんな吐き気を催し、永遠に罪と言う名の十字架を背負う思いなど…二度としたくない。

…それでも、時の場合によっては…やらざるを得ないが。儀國は溜息を小さく零す。

「だから安心しろ。誰も…殺したりしない」

なるべく優しげに言う。敵意を感じさせず、安心させる為に笑みを浮かべるよう努力する。

上手くその笑みが浮かべられたかは、分からない。

が、ルツキー二の表情を見る限り少なくとも安心している様子だ。なら、問題ないだろう。

「じゃあな、俺はもう行く。後少して休憩時間も終わりだ。

それまで、のんびりと散歩でもして過ごすとするか」

手をヒラヒラと振りながら、その場を後にする。

今日の勤務も無事に終わり、楽しみにしていた夕食も済ませる。

日が完全に沈み、夜空へと変わるまで一時間程度。それから、大仕事の時間まで残り後三時間程度。勘が外れていなかったら、恐らく“ヤツ”はまた…あの時と同じ時間帯、同じ場所に現れる筈。整備兵の制服のまま、腰にナイフを差して自室を後にする。

ビーチへと向かう途中、エイラと出会った。

が、特に出会った所で何も起きはしない。お互いに干渉しないように務めている、だからただ出会った…それだけの話である。

が、そう思っていたのは…どうやら俺だけらしい。

「お前さ…」

不意に、エイラが口を開いた。

「…俺に何か用か？ エイラ・イルマタル・ユートイライネン少尉」

「…そんな顔をするなよ。サーニヤがお前を見ると、いつも怖がるんだ」

「出会っていきなりだな。生まれてこの方、この顔つきでな。俺自身もどうしようもない。」

怖いと思うのなら、俺に近付かなければいいだけの話だろう。

仮に俺と偶然出会ってしまったら、顔を見なければ済む。違うか？」

「そうじゃなくて！ どうしてお前はいつもそんな能面なんだよ！」

エイラは怒りを露にし、儀國に食って掛かった。

サーニヤは何故か、コイツの事を気に掛けている。何でだ、と聞いたらとても悲しそうな眼をしているから、とサーニヤは答える。

私には正直言つて分からない。

いつも能面を浮かべていて、敵意ある眼を私達に向けてくる。

性格も素っ気無くて、冷たくて…。

そんな人間なのに、サーニヤはいつも気に掛けている。

けど、コイツがこんな顔をするから…サーニヤはいつも話すことも出来ず、怖がつて遠くから見ているだけ。

そんなサーニヤの為だから、私はこうしてコイツに話し掛けた。

「…さあな。少なくとも、お前には関係ない話だ」

そう言い残して、儀國は私の前から立ち去ろうとする。

「待てよ！ まだ話は」

「これ以上話すことはない」

言い切る前に話を切られ、そしてそのまま何処かへと行かれてしまった。

「何なんだよアイツは！」

残されたエイラはその場で怒っていた。

|||||

…イメージは鉄と火。

一寸の光も射さない漆黒の闇の中、轟々と燃え盛る一つの赤き炎。その赤い炎を封じるかの様に、四方より伸びた鎖が雁字搦める。

…全てにおいての一。

儀國 雅史という人間（存在）を構成している根源。力の象徴…。

「……………」

瞳を閉じ、腕を組み、儀國は静かに佇む。

静寂が支配する、夜のビーチ。

波打つ音だけを耳にしながら、その場でただ来訪者が来るのを静かに待つ。

時間まで、残り後僅か。

「……………何しに来た」

眼を閉じたまま、儀國は口を開く。

背中から感じる、11つの気配の主に尋ねた。

その気配の主が誰なのかは、最早語るまでもない。

「またお前は、一人で戦うつもりなのだろうか？」

坂本は儀國に尋ねた。

虫の知らせ、と言うものだろうか。

何となくではあるが、嫌な予感がしていた。

そして偶然か必然か、他の皆も私と同じだったらしい。

ふと、あることを思い出した。
昨晚、騎士型ネウロイが立ち去る際に儀國に劍の切先を向けたこと。
そして、今日の朝の儀國の言葉と様子。
これらから推測して、再び騎士型ネウロイが現れるのでは…と至った。

もしそうなら、儀國が危ない。
そう思った時には既に、この身体はハンガーへと赴きストライカーユニットを装着していた。

バルクホルンからの情報では、あの大鎌を武器とする騎士型ネウロイによって受けた傷が原因で本来の力を全く引き出せないと言う。
昨日でも、そんな状態で単身騎士型ネウロイの殲滅に当たった。

不完全でも、その戦闘能力は極めて高く。
だが、その身体には幾つもの傷跡が残されていた。
本来の力が出せている状態ならば、騎士型ネウロイの刃が身体へと届く前に焼き尽くしていただろうが…。

…いずれにせよ、儀國一人で戦わせるわけにはいかない。
馴れ合うつもりはない、と口癖の様に言う儀國だが…同じ部隊に所属している以上、私達は大切な“仲間”だ。
誰一人として、独りで戦わせるような事などさせない。

「……邪魔になるだけだ。帰れ」

「そうはいかないな」

バルクホルンが口を開いた。

「お前が何と言おうと、私達はここに残ってネウロイと戦う。
お前一人で戦わせはしない」

バルクホルンの言葉に数名が頷く。

未だに儀國の事を軽蔑し、畏怖を抱いている者もいるが……。それでも、仲間として意識しているのは私と同じ。

「…勝手にしる。だが、人の忠告を無視しその場に残った以上は何が起きようと自己責任。」

後で俺に文句を言わないよう心掛けておけ」

そう言い切り、儀國は夜空を見上げる。

すると、まるでタイミングを打ち合わせていたかのように。

昨晚刃を交え私が敗北した騎士型ネウロイが地上へと、儀國と対峙する様に降り立つ。

そして昨晚同様、赤き光を放つ長剣の切先を儀國へと静かに向けた。昨晚の宣言通り、今回の標的は…儀國である。

「お前らは手を出すな。コイツは…俺一人で殺る」

そう言うと、腰に右手を伸ばし何かを出した。

儀國の右手に握られているのは一振りの短刀。

それを逆手に構え、不適な笑みを浮かべる。

「ああ、心配しなくていい。こいつ等はタダの観客だ。邪魔はさせない」

騎士型ネウロイに言葉を掛ける。

儀國の言葉を、人語を理解したのか、騎士型ネウロイは静かに剣を構える。

「いいね。それじゃあ、チャンバラごっこを始めようか。」

お前なら、遠慮なく殺れる。この世界でどんなヤツよりも…殺り甲斐がありそうだよ、お前。
……来い」

その言葉を合図に、騎士型ネウロイは儀國へと飛び掛った。

第二章 第七節：再戦（後書き）

第二章 第七節でした。

いよいよ、次は儀國の奥義！無双乱舞が炸裂します！
乞うご期待！

うおおおおおっ！！！！（ブーメラン片手に）

第二章 第八節：修羅、甦る白焰（前書き）

第二章 第八節です。

儀國の奥義！無双乱舞が発動（？）します！

で、出た…。失礼、思わず興奮してしま（ry

どろどろ！

第二章 第八節：修羅、甦る白焰

目の前で、信じがたい光景が起きている。

短刀の刃と、ビームブレードの刃が中空で交差する。

刃と刃が交わる度に金属音を夜のビーチに響かせ、激しく火花を散らす。

「す、凄い……」

坂本は思わず、声を漏らしていた。

目の前で繰り広げられている戦い。

それはあまりにも凄まじく、とても自分達が介入できる世界ではなかった。

騎士型ネウロイはビームブレードを振るう。

そのスピード、パワーはとんでもなく強力。

一太刀振るうだけで砂浜が大きく切り裂かれ、その剣風に吹き飛ばされそうになる。

それは、まるで嵐。

そんな嵐の中を、一陣の風が奔る。

猛々しさに臆することも勢いを止めることもなく、風は優雅に舞う。

相手の斬撃を全て完璧に避け、防ぎ、受け流し

「
」

己の攻撃を全て、確実に当てている。
男が振るう短刀は怪異の身体を容赦なく切り裂く。
その剣速はあまりにも早く、振るった瞬間が視認出来ない。
見えたと思つた時には、既に“結果”となっている。

時に格闘技を取り入れているが、それもまた異常。

儀國が殴ればネウロイの身体は浮き、儀國が蹴ればネウロイは数mをも身体を飛ばされる。

どうすればあれだけの速さが、どうすればあれだけの力が出せるのか。

バルクホルンの固有魔法である『怪力』、シャーリーの固有魔法である『高速』。

その双方を兼備え、尚且つその二つを上回っている力を儀國は発揮している。

何か特別な魔法を使っているとしたか、坂本は考えられなかった。

そんな中

「お前は何も理解していないな。そんなんじゃ、一生強くなれない」

戦いの中で、儀國は口を開いた。

その言葉が、誰に向けられて言われた物なのか。

それは考えなくとも分かる。

此方の思考を読み通したかのような台詞。

そして、そんな台詞が吐けるほどの余裕を以って。

……認識を改めなければいけない。

儀國は魔術が、「煉獄の青焰」^{Beilphoeur}が不完全でも充分に強い。

「……………」

儀國は今、ネウロイと闘っている。
その様子を、ただ私は黙って観ているしかなかった。

「」

儀國 雅史は一振りのナイフを手に、獲物を着実に追い詰めていく。

今、男が露にしている眼は最早人の眼では無い。

優しさと言う輝きを失い、殺戮の文字に色濃く染められた眼。

『死』に対する恐れや微かな興味さえも失われた、冷たく鋭い死神の眼。

脳が神経を通し身体へと伝えている命令はただ一つだけ。

目の前の敵を駆逐しろ、これだけである。

その命に従い、五体は実行する為に動く。

本来の何倍もの働きを見せて、脳からの命令を着実に実行しようとする。

「ッ！！」

怪異は尋ねた。

今までに出会った事の無い敵に。

人間とは思えない、人間の皮を被った…自分よりも怪物と思わせる男に。

尤も、発するのは人語ではない。

相手からしてみれば、ただの奇声か叫び声としか受け取らないだろう。

う。

しかし、男は不適な笑みを浮かべると

「さあ？　けどハッキリと言えることがある。
今の俺は…お前だけの死神だ」

ナイフを手にした男は、まるで思考を呼んだかの様に、そう言った。
刹那、鋭い横一文字が薙ぎ払われる。

ネウロイは後方に大きく飛び退く。
そうする事で儀國の横一文字を回避し、そして反撃に出ようと地を
踏む足に力を込めた。
同じタイミングで、儀國も一步足を踏み出す。

その一步は、人間が出す一步と呼べる物では無い。
一体この世界の何処に、一步で“5mもあつた距離”を零へと縮め
られる人間が存在すると言うのだろうか。

…神速、かつて何処かで聞いた言葉をネウロイは思い出していた。
「　　ッ！！」

斬、という音と共に左腕が切り飛ばされる。
何ら特殊な力がある訳でも、魔法力が付与された訳でもない斬撃。
再生能力を以ってすれば、左腕など直ぐに修復できる。

しかしそれを許すまいと、死神は手を休めず猛攻を仕掛けてくる。
死神のシンボルである大鎌…の代わりであるナイフを携え、この魂
を狩らんと大地を駆る。

……この男は遊んでいる、この戦いの最中で怪異はそう理解した。先程から抱えていた疑問。

この男が何者なのか、それは分からない。だが、しかし。確実に言えることがある。

この男は、この世界に住まう生命体の何者よりも、最大の障害ということ。

人間という生命体の皮を被った、異形の者なのだ。

そんな異形の者が扱うは、この世に現存しない力。

青い炎という、今までに見たことのない色の炎を、魔女でもないこの男は使役する。

その威力は既に把握済み。

この眼で見ているのだから、誰よりもその恐ろしさを理解している。怪異だけが持つ再生能力をも無効化し、瞬時に跡形も燃やし尽くすその炎。

その青い炎で、自分が生み出した『軍』は全て屠り去られた。

だからこそ言える。

この男は、この闘いを闘いと思っていない、と。

あの青い炎を以ってすれば、例えばこの身体とて無事ではいられない。己とて例外では無い、あの青き悪魔の炎に抱かれれば最後。

結果は言うまでもなく、跡形もなくこの世から消滅する。

にも関わらず。

ナイフと言う武器一つで、比較的原始的な戦いを挑むこの男は…。

それだけの力量があるということ。

それだけの余裕があるということ…。

ナイフと剣とではどちらが優れているか。
白兵戦ならば剣、暗殺や狭い場所等ではナイフが有利となる。
その場の環境や状況に応じて、武器の有利不利は変わってくる。
今回の場合は白兵戦、一対一の戦い。
従って有利となるのは断然剣だ。

だが、その有利な状況をこの男はことごとく覆す。
人間離れた圧倒的なスピード、そして超人的なパワー。
此方の急所を狙って繰り出される、鋭く正確な攻撃。
もし、これが人間同士の戦いならば。

この死神と邂逅を果たした瞬間に、この命は狩り取られていたに違いない。

「さてと、チャンバラもいいが、遊びはそろそろ終わりだ……死ね」
終わりを告げる男の言葉が聞こえる。

と、鋭く風を切る音が二度鳴り、それに伴い両腕が身体より切り離される。

そして青き炎が左腕より燃え上がり、その拳が核である心臓^{コア}を貫いた。

轟々と燃え上がる儀國の左拳が、人間で言う心臓部を穿つ。
ネウロイの身体を貫通し、背中からは青く燃え盛る炎に包まれた拳が顔を見せた。

「
」

暫し静寂の時間が流れる。

誰も言葉を発しない。

怪異も、男も、魔女たちも、誰も皆…。

だが、死が訪れるという事を…怪異は理解していた。

足元から身体が崩壊し、やがては全てが欠片（肉塊）と化す。そして、青い炎を操る男のこの一撃が原因か。

それとも、気が狂う程の永き時に渡り、ようやく訪れた『死』が原因か。

それは分からない。分からないが

「 ナニ…モ…ノ…ダ？」

永く、漆黒の闇の中に封印されていたモノが。

雁字搦めの鎖を引き千切り、ようやく光を得て、言霊となり解き放たれた。

永らく押し込められていた記憶が、抑止力を打ち破り甦った。

僅かな時間と言うことが非常に惜しい。

けれども、確かに。

“かつての自分”を取り戻す事が出来た。怪異は心の中で口元を緩める。

外野が騒がしく叫ぶ中、この世界に合わせて言うなれば魔術師だ…、と男は静かに、平然とした態度で答えた。

その眼は、もう死神の眼をしていない。

とても暖かく、優しい眼をしている。

魔術師…そんなものがこの世に実在するとは…、と怪異はふと思う。

下半身が燃やし尽くされる。

残りの身体が燃やし尽くされるまで、もうそんなに時間は無い。

恐らく、後3秒程度で、完全に自分と言う存在は消えてなくなる。

……後悔はしていない、寧ろ感謝をしているぐらいだった。
本来ならば、感謝する、の一言ぐらい相手に言うのが筋というものが、残念ながら……そんな時間はもうない。

ならばせめて……と怪異は魔術師にある物を渡した。

感謝の気持ちと、ここに自分が居たと言うことを忘れないでもらいたい為に……。

「ん？」

怪異は燃え盛る青い炎の中、今にも焼き崩れてしまいそうな腕を伸ばす。

其の手にはここに居たと言う、己が生きていたと言う証。

その証を、魔術師は拒むことなく……静かに受け取る。

それを見届けた後、青い炎に上半身も燃やし尽くされ、騎士型ネウロイは完全にこの世から消滅した。

闘いが終わり、ビーチに静寂の時が訪れる。

手にしたナイフを軽く振るい、腰の鞘へと納刀した。

そして、儀國は坂本の方へと振り返る。

皆、啞然とした表情を浮かべていた。

散々人に向かって見下した台詞を吐いていたペリーヌでさえも、啞然とした表情を浮かべたまま固まっている。

そんな彼女達に呆れながら

「これは」

己の中の異変に気付いた。

以前あの死神の騎士型ネウロイに傷を負わされ、不治という呪いを掛けられた。

あのネウロイさえ斃せば、直ぐに解決すると思っていた。しかし、だ。その考えはどうやら違うらしい。

たった今、己が斃した怪異。

その怪異を斃したことで、その呪いが若干解けた。修復されなかった魔術回路の少しではあるが修復された。

……つまり、あの騎士型ネウロイだけを斃しても完全に解決されない、と儀國は悟った。

そして

「」

手渡された品を、儀國は静かに見つめる。

右手の中に乗っている、錆び付いた一枚のコイン。

絵柄が何か彫ってあるが、錆によって何が彫られているかまでは分からない。

だが、このコインからは暖かなものを感じる。

優しさ、慈愛……そんな、暖かなもの。

何故、ネウロイがこんな物を持っているかは分からない。

しかし、手渡した事には何かきつと意味がある筈。

その意味が何を示しているのか…、俺はポケットの中にコインを入れた。

「で、いつまで硬直しているつもりだ？」

思考を一時中断させ、未だに啞然としたまま佇んでいる彼女達に声を掛ける。

その声でようやく我へと返った魔女達は、各々が抱く疑問を機関銃の如く浴びせてきた。

「ね、ネウロイが喋りましたよ！？」

「お前は一体どうやってあれだけの力を引き出せた！？ 教えてくれ儀國！！」

「なあ、お前つてさ…本当に人間力？ ネウロイみたいに怪異じゃないだろうナ…？」

「お前速過ぎるだろ！ どんな魔法を使ったんだ！？ あたしにも教えてくれよ！」

ワイワイと騒ぐウィッチ達。

「……ウゼェ」

質問攻めをしてくるウィッチ達を無視し、儀國はビーチを立ち去るうと歩く。

これ以上付き合っても仕方が無い。

徐々に感じていた眠気も、そろそろ本気を出して襲い掛かろうとし

ている。

そしてそのまま、ビーチから宿舎へと戻ろうとして…

「 ツー!? シールドを張れ!!! 」

振り返り叫んだ。

間髪要れず、一つの風切り音が鋭く鳴る。

風を切った何かは

「 えっ? 」

綺麗な銀髪のセミロングヘアが揺れる。

年齢14歳と、戦士としてはまだ比較的若い…若過ぎる魔女の身体を射抜いた。

右胸部に突き刺さった、一本の、赤く発光する棒状の物。

少女の血に染められた、鋭い鎌。

赤の矢は、サーニヤの身体を穿った。

ゆっくりと…サーニヤはその場に倒れる。

ビーチの砂浜が、彼女より流れ出る血で赤く染まっていく。静寂、それだけがこの場を支配していた。

そんな静寂を、いち早く切り裂いたのは…、

「 サ、サーニヤアアアアツ!!! 」

サーニヤの友人兼恋人(?)のエイラ・イルマタル・ユージェイライ
ネンであった。

悲痛な叫び声が夜の砂浜に響き渡る。

その叫びに皆は我へと帰り、現状とその重大さを理解した。

建物に入り、直ぐにサーニヤの治療が開始される。医務室まで向かっては間に合わない。ここは敵の狙撃から身を護れる建物内に入り、そこで治療する

坂本の軍服が敷かれた床の上に、そつとサーニヤを横たわらせる。横たわらせた彼女は、苦しそつに呼吸していた。

「宮藤！ 早くサーニヤを治してくれ！」

「はい！」

焦りと悲しみが入り混じった声で、エイラは宮藤に頼み込む。

その頼みに応えて、宮藤の頭から獣の耳と、尾骨部より尻尾が現れる。

そして直ぐに、固有魔法である『治癒』が開始された。

断崖絶壁の淵に立たされた少女の命を救わんと、宮藤の魔法力光が仄かに光る。

「……そ、そんな」

宮藤は驚愕した。

サーニヤの右胸部を貫いた赤い矢。

急所は外れてある、それにこの程度の小さな傷ならば直ぐに完治出来る。

そう思っていた。

しかし、幾ら治癒を施しても傷口が完治する様子が見られない。

今まで、どんな傷をも治してきた。

みっちゃんも、バルクホルンさんも、坂本さんも、皆私の治癒魔法で治療し続けてきた。

だけど、何故かこの傷だけが治すことが出来ない。魔法力を幾ら込めても、傷口は一向に塞がらない。

宮藤は信じられない、と…それでも治癒魔法を続ける。

が、サーニヤが負った傷はそれに応じようとしなかった。

小さな身体からは絶えず血が流れ出している。

このままでは出血多量により…彼女は死ぬ。

最悪のケースが脳裏に過ぎった。

「おい何やってんだヨ宮藤!! 早くしないとサーニヤが…サーニヤが!!」

「落ち着けエイラ!」

「けど!! このままだとサーニヤが…死んじゃうだろ!!」

宮藤を急かすエイラを、坂本は制する。

「……………」

壁に持たれかかりながら、儀國がその様子を見ていた。

「……………そうだ、おいお前! 何とかならないのか!？」

エイラは儀國に問い詰めた。

この男ならば、何とか出来るのではないか…そう思ったからだ。

コイツは私達を信用していない。

私だって、こんな得体の知れない奴を信用していない。

男で、魔法が使えて、それだけじゃなくて人間離れた身体能力を持っている。

それに…人間とは思えない。冷酷で、悪魔のような戦いつぶり。

こんな、今までに見たことがない…常識破りな人間。誰が信用できるか。

…けど、今は藁にも縋る気持ちで頭は一杯だ。

コイツは私達魔女とは違って魔術師…と言うヤツらしい。

未だに信じ難い。けれども、私達にはない力をコイツは持っているのは事実。

宮藤の治癒魔法がダメでも、コイツなら…サーニヤを助けられるかもしれない。

「……何故、俺に聞くんのだ？」

「お前なら、サーニヤを助けられるかもしれないからだろ！？」

「……その術を持っていなかったら、お前どうするつもりだ？」

それに俺は、全て自己責任と言った筈だ。邪魔になるから帰れと忠告したにも関わらず、お前達は無視してあの場に残った。

それで怪我されようが死なれようが、俺の知ったことじゃないがな……」

「そんなの知るかよ！ 頼む…サーニヤを助けてくれよッ！！」

お前、何かそういう魔法持つてるんだろ！」

誰でもいい、誰かサーニヤを助けて欲しい、とエイラは悲願した。

儀國は暫く考え込む様な仕草を見せる。

そして

「…運が良いというか、タイミングが悪いのやら良いのやら…。まあ、確かにこのまま眼の前で死なれたら…夢見が悪いな。流石の俺も、ガキが死んでいくところを見る気はサラサラない。人に物を頼む態度は最悪だが…まあお前に免じて、今回だけ特別だ」

呆れた様子で、サーニヤが横たわっているベッドへと向かう。

「どけ、交代だ」

「え！？ で、でも…」

「お前じゃ無理だ。お前の治癒魔法じゃ、コイツの傷は癒せない。コイツが受けた傷は、普通の傷じゃないからな」

そう言った直後、儀國の右手から炎が発生した。

あのベルフェゴールとか言う青い炎じゃない。

その色は白。純白…一点の穢れも無い、神秘的な輝きを放つ白き炎。

…不思議と恐怖とかは感じなかった。

ベルフェゴール…青い炎は見る者全ての心に恐怖を植えつける。

その青い炎を使って闘う儀國自身も…。

けど、今燃え上がっている白い炎はその恐怖を一切感じない。

例えるのなら、そう。

母親に優しく抱き締められている様な、暖かい優しさを感じる。

「燃える」

燃え盛る白い炎を、サーニヤへと放った。

瞬く間に、サーニヤの身体は白い炎に包まれ激しく燃え上がる。

「あ、傷が…!!」

白い炎が燃え盛る中、サーニヤの傷が癒されていく。

そしてものの数秒で傷は完治。

それと同時に、息苦しそうにしていた呼吸も安定し、そつと眼を開けた。

「サーニヤ~~~~ツ!!!」

「あれ…私……」

「お前はネウロイの攻撃を受けて倒れたんだ。それを、儀國がお前の傷を治してくれたんだ」

現状が未だに理解できていないサーニヤに、少佐が事を説明する。するとサーニヤは驚いた表情を浮かべて、儀國の方に顔を向けた。

「儀國さん……」

「人の忠告を無視して負傷…情けない話だな。

今回は急所を外れていたものの、下手をすれば心臓を穿たれていた可能性だつてあった」

「…ごめんなさい」

落ちこんだ様子で、サーニヤは顔を俯かせた。

「おいお前！ サーニヤに酷いこと

」

「でもまあ…生きててよかったな、お前」

「ッ!!」

鼓動が高鳴った。

…初めて眼にした、儀國の優しい笑み。

一瞬、たったの一瞬だったけれども。儀國は今、確かに優しい笑みを浮かべた。

不意打ちにその笑みを浮かべられて、私の顔が一気に熱くなるのを感じた。

直視するのが気恥ずかしくて、儀國から顔を背けた。

…あんな笑みをいきなりするなんて反則だ。

エイラは視線だけを動かさず、儀國を見つめた。

「……傷の心配はもうないが、失われた血まではどうしようもない。しっかりと飯を食って、血を作っておけ。

それから、今回はそいつに…エイラに感謝しろ。今回はそいつに免じて、だからな」

治療が終わると、儀國はこの場から立ち去ろうとする。

「ま、待ってくれ！ あ、あの…!!」

「もう俺は寝かせてもらう。後は好き勝手にしろ。それと、ああ言った場所での警戒心は常に怠るな。常に狙ってくれと言っているのと同じだからな」

そう言っつて、儀國は何処かへと行ってしまった。

…相変わらず最後はやっぱり素っ気無い態度。

けど、サーニヤを助けてくれたことには変わらない。
今はサーニヤが助かった事を心から喜んで、明日にでもアイツにお
礼を言いに行けばいい。

エイラは泣きながらサーニヤに抱きつき、無事を喜んでいた。

第二章 第八節：修羅、甦る白焰（後書き）

第二章 第八節でした。

ちゃんと奥義！無双乱舞！出来ていたでしょうか？
うーん、不安です…。

そしてちよつとだけ力を取り戻した儀國。

不治の呪いを掛けた本人を倒すだけじゃ、ムリダナ（・×・）。

以上、第二章 第八節でした！！

すわっ！！

第三章 第一節：休止（前書き）

第三章 第一節です。

…今回、特に書く事が思いつきません。

第三章 第一節：休止

本日も快晴。

雲ひとつ無く、無限大に続く広大な青空。

その青空を、優雅に泳ぐ鳥達。

実に清しく、実に目覚めのいい朝。

そして、いい具合に空腹を訴える腹。

「頂きます」

手を合わせお決まりの言葉を口にした後、早速朝食に箸を伸ばした。本日の朝食は和食。

ご飯、卵焼き、味噌汁、漬物、焼き魚。

日本の伝統的和食とも言える料理だ。

味は言うまでもなく、今日も美味。

「
」

儀國は箸を止め、ふと思考を働かせる。

あの騎士型ネウロイを斃してから、若干ながらも魔術回路が修復された。

今、自分が使える魔術は三つ。

一つ、怠惰を司る青色の炎：「煉獄の青焰」^{Belphégor}。

二つ、嫉妬を司る灰色の炎。

三つ、高慢を司る白色の炎。

封印されていた六つの炎の内、二つが使用出来る前に回復した。ただ、どの炎も本来の力はやはり発揮出来ない。

本来の力の4割程度しか、今の状態では使用する事が出来ない。

…だが、いい。

Belphégor

「煉獄の青焰」だけでは行く先不安だったが、何とかはなりそうだが、特に嫉妬を司る灰色の炎は、ハイリスクではあるがかなりの戦力にはなっってくる。

これから先の戦い、必ず使う時がくる。

不完全ではあるものの、現時点では最強の位置に部類する。

…魔法を使用してくる、何とも厄介な敵。

騎士型ネウロイ。

現在確認されているのは“三体”。

アフリカに現れ、そして不治の呪いと言う…厄介な置き土産をしてくれた騎士型ネウロイ。

昨晩斃した、召喚魔法を役する騎士型ネウロイ。

そして、サーニヤを狙撃したであろう、騎士型ネウロイ。

狙撃したネウロイについては、もうその能力が何か考えるまでもない。

武装は弓。

騎士型ネウロイがビームを剣状や大鎌状にしたりするのと同じこと。ビームを矢に変換させて放ち、サーニヤを狙撃した。

問題は…どんな魔法を所持しているのか。

サーニヤが負った傷はただの傷じゃない。

あの傷には不治の呪いが掛けられていた。

その証拠として、宮藤の固有魔法『治癒』が全く効果を示さなかった。

高慢を司る白色の炎…「Lucifer魔天の白焰」が使用出来る状態の後に起きたから、事無く済んだが…。

しかし、だ。不治の魔法はあの大鎌の騎士型ネウロイの固有魔法の筈。

…可能性として考えられるのは、複合魔法として放った…てことだろう。

第一期で、ミーナの三次元空間把握能力と坂本の魔眼を組み合わせた時のように。

果たして、サーニヤを狙撃した弓の騎士型ネウロイはどんな固有魔法を…。

「それにしても…剣、鎌、弓……か」

儀國は、あるモノの存在を思い出していた。

同時に、今後更なる厄介事が増えそうだとも考えていた。

隊長格の騎士型ネウロイの武装。

現在確認出来ているのは剣、鎌、弓の三つ。

もし、後一つが“アレ”だとしたら…。

もし、あの騎士型ネウロイ達が、自分の考えている物だとしたら…。

「…………ふっ、考えすぎか」

呟き、思考を中断させる。

今は考えなくてもいい、食事時に考える様な事でも無い。

止めていた箸を再び動かして、ご飯を口の中へと掻き込む。

「さてと…今日も一日、頑張るか」

5杯目のご飯を食べ終え、食器を返しに行く。

そして気合を入れた後、食堂を後にした。

|||||

朝、ストライカーユニットの整備作業に入ろうとし

「儀國、ミーナ中佐がお呼びだぞ」

安藤の伝言を受けて、面倒臭さを感じながら執務室へと足を向ける。

「で、何の用だ？ 俺は今から仕事だぞ。
て言うか、今正に仕事中なんだけど」

苛立ちを見せた様子で、儀國はミーナに尋ねる。
ミーナはごめんなさい、と一言謝ると用件を口にした。

「昨晩は有難う。貴方のおかげでサーニヤさんは助かったわ」

「礼を言われるようなことはしてない。
目の前で死なれたら、後味が悪い…ただそれだけのことだ」

素っ気無く、ミーナの言葉に返した。

「で、本当の用件は？ ただ礼の一言が言いたくて…俺を呼んだわけじゃないだろ？」

「……やはり、私達と一緒に闘ってくれないかしら」

「お断りだな。俺は俺、お前達はお前達だ。」

喧嘩を売られたら買う、それ以外は一切ノータッチ。
ネウロイと闘うことは、整備兵の役割じゃない」

「……………」

「…まあ、あの騎士型ネウロイが現れた時だけは別だ。あいつ等は…俺が斃さないといけないらしい」

あの騎士型ネウロイだけは別。

それに、あのネウロイ相手ではこの世界の魔女達には大きすぎる荷物だ。

個人的理由もある、だからアレだけは別。

他のネウロイは知らない。

「……………」

「そういうことだ。言っただろ？俺は…お前達を信用していない。仲良くするつもりもない、とな」

それを言うと、ミーナは黙った。

これ以上はここに居ても意味が無い、そう判断し踵を返す。

ミーナは何も言わない。

今の彼女はどんな表情を浮かべているのか、それを見る気もない。

儀國はそのまま執務室を退室した。

「やはり…彼はまだ、私達の事を信用してない、か…」

儀國が去り、一人残された執務室でミーナは呟く。

昨夜で彼の實力を改めて見せ付けられた。
本来の力が出せない状態と言っていた彼だが、何の問題もない。
たった一振りのナイフで騎士型ネウロイを圧倒し、そして圧勝と言
う名の元に勝利を手にした。

美緒が烈風丸を使って闘っている姿は何度も見ている。
戦闘時だけでなく、訓練中にも、勿論。

けれども、儀國が振るう剣は美緒とは全く違う剣だった。
慈悲の欠片もない、獲物の命を駆らんとするのが痛いほど伝わっ
てきた。

そして、それを振るう彼の顔。

…無表情だった。

何の表情を露にせず、一点を…騎士型ネウロイをただ、ジツと見つ
めて。

例えるのなら、あの時の彼は人形。

ただ目的を果たす為に動く、無情で残酷な殺戮機械とも思える。

そして、あの青い炎以外に新たに見せた、白色の炎。

宮藤さんですら治せなかったサーニヤさんの傷を、白色の炎は癒し、
彼女の命を救った。

あの白い炎は、青い炎の様な残酷さや冷酷さは感じられなかった。
聖母の様な慈悲深い温もりを、あの白色の炎からは感じ取れた。

…彼はまだ、ベルフェゴール以外の力をまだ隠し持っている。
それがどんな力なのかは知らない。

けど、確実にそれは戦力として、ネウロイに対抗する術として大き
な力なのは確実。

一緒に闘ってくれば、どんなに心強いことだろう…。

だが、彼は私達に心を開こうとしない。
会話も必要最低限の会話のみ。此方から話し掛けなければ、彼は一切話そうとしない。

それ以外は喋らないどころか、視線すらも合わせようとする。彼が言う通り、私達はまだ信用されていない。

一体何故、彼は私達を頑なに突き放そうとするのか…。

「どうすれば、彼は心を開いてくれるのかしらね……」

小さく溜息を吐いた後、目の前の書類に向かってミーナは呟く様に尋ねた。

|||||

昼食も終えて昼休み。

この時間は何もすることがない。

他の整備兵は相変わらず。トランプをしたり昼寝をしたり。

今に思ったことではないが、軍と言うのは案外のんびりとしている。

それはこの基地だけの話、なのかもしれないが。

「…………お」

何となく、特に理由もなく、ミーティングルームへと足を運ぶ。誰も居ない。

ふと、ピアノに視線が向く。

「ピアノ…か」

儀國はゆっくりと、ピアノへと歩み寄る。

長年触れていなかった鍵盤。

幼少期より教えられ、気付かぬ内に特技に変わっていた、ピアノ。白鍵を押せば、その白鍵が担う音が鳴る。

「
」

椅子に腰を下ろし、静かに鍵盤に両手の指を添える。そして、一曲奏でた。

「
」

儀國は鍵盤を叩き、思い出の曲を奏でる。

何度も、何度も。

終わりはない、何度も繰り返し、その曲をひたすらに奏でる。

楽譜がなくとも、この曲は記憶に深く刻み込まれている。

母親が好きだった、幼い自分自身も好きだった。

この曲を母親に聞かせる為に、褒めてもらいたい為に何時間も練習した。

父親からは本業そつちのけで何をしている、と怒られた。

今となっては、懐かしき思い出の欠片ピースの一つでしかない。

「
」

もう、何度目の繰り返しになるだろう。

5回？ 10回？ 20回？ 或いは…もっと？

それすら分からないくらい、思い出の曲を奏でている。

不思議と、奏でる指を止めようと言つ気にはなれなかった。

このままずっと、時が経つのも忘れて、俺は奏でるのか…。
…それも悪くない。

が、終わりは不意に訪れる。

「おい！」

「ッ！！」

誰かの叫び声に、指が止まる。

我に帰り、辺りを見渡せば

「お前さ、大丈夫か？」

声の主が、呆れているのか心配しているのか分からない表情で此方を見ていた。

「……………お前は」

声の主…エイラ、その傍らにはサーニヤが居る。

大方、サーニヤがピアノを弾きにきたんだろう。

エイラはその付き合ひ。

エイラ曰く、午後の一時らしい。

「幾ら呼びかけても何も言わないし、なんか取り憑かれたような顔してたし…」

「…そうか」

邪魔をしたようだ。

椅子から腰を上げてピアノより離れる。

と、おずおずとした様子でサーニヤが口を開いた。

「あ、あの…！」

「ん？」

「昨日は助けてくれて…その…」

「……………別に、礼の言葉なんて要らない。

して欲しいとも思っちゃいない。礼を言っぐらいなら、もっとお前自身が強くなれ。

俺が戦わなくてもいいくらいにな」

そのままミーティングルームを後にした。

素っ気無い態度で、儀國はミーティングルームより立ち去っていった。

その後ろ姿を、友と共に少女は見送る。

「アイツ…本当に素っ気ないな」

「……………」

隣でエイラが不服そうに言う。
対して、サーニヤはとある疑問を抱いていた。

「儀國さん…なんで悲しそうにしてたのかな」

「えっ？」

「ピアノを弾いていた儀國さん…今にも泣きそうな顔をしてたよ…」
とても綺麗な曲だった。

初めて聴く曲に、思わず聴き惚れていた。
けど、それを奏でている儀國さんの顔は…とても悲しげだった。
例えるのなら…まるで誰かへと捧げる鎮魂歌のような…。
そんな印象を与える雰囲気を感じた。

「気のせいじゃないのか？」

「……………」

エイラが言う通り、気のせい……とは思えない。

儀國 雅史さんは…怖い人。

ネウロイと闘っているあの時の姿は、まるで悪魔みたいに怖かった。
けど、昨晚医務室で見た儀國さんは…とっても優しい暖かさがあった。

儀國さんは私を助けてくれた命の恩人。

そのお礼を…私はしたい。

まだ私達のことを信用していないみたいだけど…いつか、必ず。

サーニヤは暫く出入り口の方を見つめ、そして本来の目的であるピ

アノを弾き始めた。

|||||

「儀國、入るぞ」

夕食後直ぐ、坂本が部屋まで訪ねた。

理由は至ってシンプル、儀國との模擬戦をする為だ。

昨晩は散々な物だったが、今日こそは一太刀を浴びせてみせる。

それに、一度負けたからといって諦める私ではない。

例え相手がどんなに強大であろうとも、諦めずに挑み続ける。

それが私、扶桑皇国海軍の坂本 美緒だ。

…今思えば、異性の部屋に行くということは初めてなのかもしれない。

そう考えた時、少しばかり緊張した。

そして今日初めて訪れた、儀國 雅史の自室。

それは、とても殺風景だった。

最初から各部屋に設置してあるベッドと机、クローゼット。それ以外何もない。

給料は既に支払われている。にも関わらずこの有様。

何も無い、寂しい空間が広がっているだけ。

人の部屋にとやかく言うつもりはない。

自分の部屋をどう飾るかは、その部屋の持ち主の自由。

しかしこれは、あまりにも寂しすぎる。

「…随分と物寂しい部屋だな」

「来て早々何だよ、お前は……。で、何の用だ？」

「っと、そうだった！ 儀國、私と模擬戦を頼む！！」

本来の用事を思い出し、早速伝える。

反応は案の定、心底嫌そうな顔を浮かべて

「寝言は寝て言え。約束はお前が扶桑刀を持ってきた時。刀は用意できたのか？」

そもそも…今のお前じゃ俺の相手は務まらない、弱い者苛めはゴミだ。

だから、模擬戦はしない」

「ぐっ……た、確かにそうだが！」

「分かっているのなら話は早い。まずは刀を調達してこい、全てはそれからだ。

さっさと帰りな。俺の機嫌が最高に悪くなる前に…出て行った方が利口だぞ？ 坂本」

儀國の右手より青い炎…ベルフェゴールが発現される。

「し、仕方がない…。だが必ず相手をしてもらうからな！」

「はいはい、分かった分かった。分かったから、さっさと出て行ってくれ」

坂本は諦め、儀國の部屋を後にした。

あのままあの場に残っていても、進展はない。
それどころか、怒りに触れてベルフェゴールの青き炎に焼き尽くさ
れていただろう。

とりあえず、今は要求通り扶桑刀の入手が先決。
全ては…それからだ。

第三章 第一節：休止（後書き）

第三章 第一節でした。

今回はまあちよつとした小話程度の内容です。

サブタイトルが…なかなか思いつきません。

以上、です！すわっ！！

第三章 第二節：お茶会（前書き）

第三章 第二節です。

今回はほのぼの、とした感じになってるかもしれないし、なっとな
いかもしれない…。

第三章 第二節：お茶会

いつもと変わらない日常。

ミーナより整備兵ではなく魔女同様戦場へと出ることを命令された以外、特に他は問題なし。

出撃以外は整備兵として整備作業を行う、いつもと変わらない。

それに、これは形だけの物。

ネウロイの出現があったとしても、空戦をするウィッチ達が活躍するからやることなし。

尤も、他のネウロイなんてどうでもいい。

俺が斃さなければならぬネウロイは、あの騎士型ネウロイのみ。

剣の騎士型ネウロイを除いた、残り“3体”の騎士型ネウロイだけだ。

そして今日も、いつもの様に整備作業をする。

整備兵仲間と馬鹿をやって、笑って、怒られて、そんな一日を過ごす。

そんな午後のある時だ。

「お茶会？」

「は、はい…今日はネウロイも来ないし、皆で息抜きにお茶会でもしようって…」

オズオズとした様子で宮藤とリーネが誘いに来た。

「いや、いい。俺は不参加だ」

儀國はキツパリと断った。

常に神経を研ぎ澄まし、警戒心を剥き出しにしているとは落ち着かないし、心身共に悪い。

それらを癒す為に休息や気分転換は必要なこと。

それ故にお茶会をする、大いに結構なことだ。

それならば、仲間内だけですればいい。

それに、野郎一人を女性ばかりの所に放り込むなんぞ、地獄に近い。

いや、絞首刑台に立たされると言ってもいい。

女性はそう簡単に信用していいものではない。

このお茶会も、裏に何が待ち構えているか分かりはしない…。

君子危うき近寄らず、である。

「えっ？ で、でも…」

「前にも言った筈だ。俺はお前達と馴れ合うつもりはない、と。

俺とお前達は仲の良い友達でも何でもなし、ただ同じ部隊に所属していると言っただけの関係だ。

それにお前達だって、一緒に楽しみたいくない相手とお茶会なんて出来ないだろう？

隊長に言われて無理して来たんだろうが…俺は遠慮しておくって伝えておいてくれ」

「そ、そんなことはありません！」

「そうですよ！ 私達無理して儀國さんを誘いに来たワケじゃないです！」

宮藤とリーネが声を挙げて言う。

が、儀國は静かに首を横に振った。

「…兎に角、俺は不参加で構わない。

お茶会なら、お前達だけでやればいい。俺に余計な気遣いは必要ない。

…ああ、それから。他の連中に余計なことは言うなよ。

誘ったけどキツパリと断られた、それだけでいい。変に話を誇張されても面倒なだけだからな」

「…まだ、私達のこと信用してくれないんですか？」

宮藤が悲しげな表情を浮かべて尋ねてきた。

「…宮藤の言う通り。信用云々も確かにあるが、何も仲良くまでする必要はないって話だ。

お前達は魔女で、俺はただの整備兵。本来なら、この会話も軍機違反行為に入っている。

形だけはお前達ウィッチ同様の扱いだが、それだけの話だ。

俺は俺で行動させてもらう。

…もう俺に関わらない方がいい、その方がお互いの為だ」

儀國は二人の誘いを断り、その場を後にした。

自室に戻り、一息吐く。

休憩時間はまだ充分にある。次の業務まで少し眠ろうか…。

そんな時、慌しい足音が一つ。その足音に混じって軽い足音が一つ

…。
二つの音は部屋の前で止まり、そして

「入るぞ儀國！！」

「おつ邪魔するよ」

カーウスラント軍人二人組が許可もなく、部屋へと入室してきた。

「うわっ。ガラッガラ、何にもないじゃん。つまんないの」

「何を言う。無駄がなく、清潔な空間ではないか。お前も少し儀國を見習うべきだ」

第一声は人の部屋の評価。

ハルトマンは坂本と同じ感想を述べ、バルクホルンは感心している。
…何しに来たのか、儀國は眉を寄せて二人に尋ねる。

「お前ら、わざわざ人の部屋を評価をする為だけに来たのか？」

「おっと、そうだった。儀國、何故宮藤達の誘いを断った!？」

用件を思い出した途端、怒りを露にしバルクホルンが問いてきた。妹分であり、自身の妹クリスと似ている宮藤を可愛がっている分、いつもより怒っている気がする。

「別に、参加する理由がない。

お茶会なら、お前達だけで楽しめばいいだろう」

「ねえ儀國、聞いてもいい？」

ハルトマンがバルクホルンに代わって尋ねてきた。

「儀國はさ、私達に構われるのが嫌？」

「…逆に聞いてやる。何故俺に関わろうとする？」

「だって、私達仲間だよ？」

「その考え方が間違っているな。俺はお前達と仲間じゃない。

…この際だからハツキリ言ってる。お前らは俺が魔法を使えるか
ら関わろうとしているだけ。

つまりそれは、俺を…儀國 雅史と言う人間を仲間としてではなく、
ただの一戦力としてしか見ていない…と言っわけだ」

「そ、そんなこと

」

「ない、とでも言っつもりか？」

もし俺が魔法を使えず、ただの一般人…整備兵であっても、お前達
は今のように関わろうとするか？

…絶対にしない。あの隊長が出してる異性交遊禁止令がある以上、
お前らも必要以上に関わろうとしない。

もしそんな事したら軍法会議もの。下手をすれば、銃殺刑になる
可能性だってある。

特にカールスラントの堅物軍人と言われているバルクホルン…お前
なら尚更、それを遵守するだろう」

もし、逆に自分が彼女達の立場にあつた場合。

今言っ言葉通り、関わろうとしない。

意味がないからだ、その行動には何の意味も。

関わった所で強くなれるワケでも、ソイツが新たな戦力になってくれるワケでもなく。寧ろ、純潔を穢され魔法力が低下すると言う、魔女にとっての恐れを齎されるだけ。

所詮整備兵も、全ての男性キャラは裏方に過ぎない。ウィッチ達を影から、表舞台に出ないように支える。

それだけの存在、定められ強いられる生き方をしていくのみ。

「…そういうことだ。さて、俺が言っていることに何か異論はあるか？」

儀國は二人に尋ねる。

二人は答えない。どう答えればいいか悩んでいる、そんな表情を浮かべている。

暫くして、儀國はやれやれ、と溜息を吐いた後

「ないのなら、早くあいつ等の所に戻れ。

折角のお茶会、お前達が欠けてはいつまで経っても始まらないだろう」

そう言い、二人に背中を向けるようにしてベッドに横になった。

…眼を閉じても、二人の気配はまだ後ろにある。

出て行く様子は、全く見られない。

このまま無視し続けるのも、流石に辛い。

精神的に落ち着かないし、逆にストレスが溜まる。

「…なあ、お前ら。いい加減人の部屋から出て行ってく

再び二人に振り返り

「イテツ!!」

足を掴まれベッドから引き摺り落とされる。

右足に加わる力。並大抵の握力じゃない、女性が出せるものでもない。

その疑問の答えは、彼女自身にある。

使い魔の耳と尻尾が現れている、それが答え。

バルクホルンは今、固有魔法の『怪力』を発動させていた。

「行くぞハルトマン!!」

「オツケ〜!!」

逆の足をハルトマンが掴む。

そしてそのまま背中を引き摺られながら部屋へと出された。

「お前ら何やって……ってイテツ!!」

凄いスピードで廊下を引き摺られて行く。

背中は何論痛い。地面は滑らかな造りでも絨毯が敷いてあるわけでもない。

遺跡を基地と使っているここは、殆どが当時のまま。

従って背中と擦れ合っている床も、寝心地最悪な石造り。

「おい放せ! 背中が痛い!!」

「断る! もし怪我をしても宮藤に治してもらえばいい!!」

「そうそう、このまま行くよ!!」

「ふざけ……痛ッ!!」

有無を言わず、バルクホルンとハルトマンは足を手に廊下を走る。その間、背中を引き摺られながら痛みを訴え続けた…。

|| || || || || || || ||

引き摺られること数分。

目的の場所に着いたのか、掴まれていた足はようやく解放される。

「お、お前ら…」

「着いたぞ、儀國」

「えっ？」

背中 of 痛み に耐えながら、儀國はゆっくりと身体を起こした。

場所はテラス、そして鼻に衝く甘くて良い香り。

幾つものテーブルと椅子が並べられ、その上には陶器のティーカップとポット。

そして甘い匂いを吹く微風と共に送る洋菓子。

「むっ、連れてきたか」

先に席に着いていた坂本がやってきた。

「…これはアンタの命令か？」

だとしたら、最悪最低だ。人を引き摺ってまで連れてくるなんてな……」

「私は引き摺ってまで連れてこいと言った覚えはないが……」

「こうでもしないと、儀國が来そうになかったからだ」

「そこで俺のせいか……」

何と言うか、横暴と言うか……。

悪びれる様子もなく、平然とした態度で正論だと言う風に、バルクホルンが言う。

「では、全員揃ったことだし……始めるとするか」

坂本の言葉と共に、待ってましたと言わんばかりの反応を見せるウィッチ達。

ルッキーニとシャーリーは早速洋菓子と紅茶を勢いよく食べ始めていた。

「さあ、お前も早く座れ」

「そうそう、コッチコッチ」

「ちよっ……」

ハルトマンに手を引っ張られ、バルクホルンに背中を押されながら、席へと無理やり座らせられる。

そしてすぐ隣の空席にハルトマンが座り、逆隣の空席にバルクホルンが座る。

「おい、俺は参加すると言ってな」

「ねえ儀國」

ハルトマンが呼び掛ける。

呼び掛けられたのに、顔を向けると、

「むっ」

口に何かを入れられる。

目の前にはしてやったりと、可愛らしい笑みを浮かべているハルトマン。

口に広がる、洋菓子の甘味。

「どう？ リーネの手作りスコーン。美味しいでしょ？」

私もリーネの作ってくれるお菓子、好きなんだ」

嬉しそうに、ハルトマンは言う。

…確かに、と思う。

不意打ちを受けて食べさせられた、リーネの手製であると言つこのスコーン。

スコーン自体食べたことはなかったが、美味しいの一言が脳裏で最初に浮かんだ。

今まで食べてきた洋菓子の中で、もしかすれば一番美味しいのかもしれない。

「あ、あの…どうぞー！」

少しオドオドとした態度で、リーネがカップに紅茶を淹れてくれる。

「…さっきの事なんだけどさ。儀國が魔法が使えなかったとしても、きつと話し掛けてると思う」

口に入れられたスコーンを咀嚼している時、ハルトマンがああ時の問いに対し答えた。

スコーンを飲み込み、軽く咳払いをしてから儀國はハルトマンに改めて尋ねる。

「…理由は？」

「ん〜…何で、か。放っておけないから…かな。

だって、今の儀國を見てると…とても悲しそうな顔してるから」

「…つまりは、哀れみからか？」

「そうじゃなくて。そんな顔しないで、笑って欲しいってのが理由。折角のいい男が台無しだよ？」

その言葉に、数名が頷く。

…多分、ハルトマンは本心からこの言葉を言っているんだろう。哀れみとかじゃなくて、本心から今の言葉を口にした。

コイツは、嘘を吐く様な人間じゃないと思う。

ちゃんとした理由はない、ただ…なんとなく、そう思っただけ。

「…無駄な事をする必要はないと思うがな」

「無駄じゃないよ。だって私と…私達と儀國は、仲間でしょ？」

「仲間……ね。」

まあ、そっちがどう思おうが…俺には関係ない話だがな」

「待て儀國！」

儀國が席を立とうとしている。

それを見たバルクホルンはすかさず止めに入ろうとしたが、儀國は席を立たず、椅子に座り直し、リーネが淹れた紅茶を啜った。

「…次の業務の時間までなら参加させてもらう。

甘い物も丁度食いたいと思っていたし、何より…このスコーンは美味い」

素直に、リーネの手作りスコーンの味を褒めた。

そして、ほんの少しだけ口元を緩め…笑みを浮かべた。

「そうそう、やっぱりさ…儀國はそうやって笑ってる方がカッコイイよ」

ハルトマンは嬉しそうに儀國に言った。

あの時、サーニヤを助けた時にほんの一瞬だけ見せた儀國の笑み。

正直言っただけでもカッコよかった。今まで見てきた、どんな男性よりも…ずっと。

だから思った。儀國は、能面よりも笑ってる方が似合っているって。儀國には笑っていて欲しい…そう思った。

「…笑ってなんかいないぞ、俺」

「何を言っている。今確かにお前は笑っていた。
ハルトマンの言うとおり…その、お前はそうやってる方がいい！」

「笑ってない、お前らの見間違いだ」

「いや！ お前は確かに笑っていた。素直に認める儀國」

儀國は笑ってないと否定して、トゥルーデは笑っていたと言い張る。
そんなやり取りを見て、他の皆も笑みを浮かべていた。

…儀國がいる中で皆が笑う、これも初めてのことだった。
今は信用されていないみたいだけど、いつか…。

「ほらほら、二人とも。折角の紅茶が冷めちゃうよ」

ハルトマンは言い合う二人を制して、お茶会を勧めた。

儀國を交えてのお茶会が始まる。

久し振りの息抜きに、皆楽しそうにお茶会を楽しんでいる。

儀國は…会話には参加せず。静かに紅茶を飲んで…お菓子を食べている。

けど、儀國もお茶会を楽しんでいる。

「儀國、一つ聞いてもいいか？」

紅茶を啜り、トゥルーデが儀國に尋ねた。

「…何だ？」

「あの白い炎…アレは元から使えたのか？」

ハルトマンは思い出す。

宮藤の治癒魔法でも治せなかった、サーニヤの傷を一瞬で癒した白い炎。

いつも使っている青い炎、ベルフェゴールは知っている。

けど、あの白い炎は初めて見た。

青い炎とは対照的に、とても優しい白い炎だった。

「…いや、あれはあの騎士型ネウロイを斃したからだ。どうやら、あの時のヤツを斃せば解決するわけじゃないらしい。ヤツを含めて残り三機、斃さなければ改善されないようだ」

「何故三機だと分かる？」

「ただの勘、恐らくって話だ。確証はない」

「…そうか。しかし、何故あの白い炎はサーニヤの傷を癒せた？
宮藤の治癒魔法でも治せなかったと言うのに…」

「あ！ 私も知りたいです！ 教えてください儀國さん！」

宮藤も二人の会話に入ってきた。

…さつきから見ていると、皆儀國とトゥルーデの会話に耳を傾けている。

仕方ないことだとは思う。儀國は一切自分の事について話さないし、何より…私達と必要最低限の時のみしか会話をしなかった。

けど、今は会話してくれている。私自身も、儀國の事についても知りたいし話したい。

ハルトマンは紅茶を啜りながら、静かに儀國の言葉を待つ。ただ、それと同時に。

今はお茶会をしているのに、こつも堅苦しい会話は如何なるものか。もつと楽しい話題をしたい…、と思っていた。

「…言わなくても分かっていると思うが、治癒魔法って言うのは生命が兼ね備えている再生能力を促進させること。つまり、通常のスピードで再生する速度を魔法によって向上させ早める、これが治癒魔法の本質。

が、あの時サーニヤが受けたのは不治の効果が付加された攻撃。不治は文字通り、治癒出来なくすること。つまりそれは、再生能力を封じるということだ。

だから幾ら宮藤が治癒魔法を行使しても、傷が塞がらなかったというワケだ」

「では、儀國のあの白い炎で癒せたのは？」

「…悪いが、こればかりは答えられない。

まあ、俺のあの炎…「Lucifer魔天の白焰」は全てを癒す効果があるとでも思ってくれればいい」

「全く…本当デタラメですわね。固有魔法を二つも持っているなんて…本来ならあり得ませんわ」

何処か呆れた様子で、ペリーヌが口を開く。

固有魔法とは、通常一人につき一つ。

自分ならば雷撃^{トネール}、坂本少佐なら魔眼と言った様に、何かしら魔法を一つ保有している。

が、魔術師を名乗るこの男は一つではなく、二つも保有している。

ベルフェゴールと言う、全てを焼き尽くす煉獄の青い炎。

サーニヤさんに掛けられた不治の呪いを解き、傷を癒したルシファ
ーと言う慈愛の白い炎。

破壊と再生、二つの炎を兼ね備えている異質な存在…。

昨晚に見せたあの異常なまでの身体能力もまた、魔法による類なの
かもしれない。

「そう言えばさ」

ペリーヌがシャーリーに視線を向けた。

何かを思い出したかの様に、シャーリーは儀國に尋ねる。

「さっきの、ルシファアってヤツがあるなら…自分自身にすれば呪
いが解けるんじゃないのか？」

誰もがその言葉におお、と声を挙げた。

彼女の言う通りだ、とペリーヌは感心した。

全てを癒せると言う効果がある白い炎…ルシファアなら自身に掛け
られた呪いも解ける。そうすれば本来の力を取り戻せる。

そうなれば、あんな騎士型ネウロイが攻めて来ようともハエに過ぎ
ない。

けれども、儀國さんは静かに首を横に振った。

「何でもかんでも作用出来たら、そりゃいいだろうな…」

「…自分自身には使えない、か」

「…何でも万能じゃないってことだ。解決策は、やつ等を叩き潰すこと。」

それだけだ、イエーガー」

そう言つて、彼は紅茶を啜つた。

「さてと…」

カップの中の紅茶を飲み干したのか、儀國は席を立った。

「そろそろ仕事があるから、俺はもう戻る」

「そっか。アリガトね、儀國。色んなこと話してくれて」

ハルトマンは礼を言葉を儀國に述べた。

今日は儀國と沢山話をする事が出来た。

まだ本質的な部分は話してくれていないけど。けれども、これはこれで大きな一歩。

少しは…信用してくれた、と考えていいと思う。

「…礼を言われるようなことじゃない。それに、今回はお茶会の礼代わりだ。」

貸し借りは作っておきたくない…」

素っ気無く答えて、儀國はテラスから立ち去ろうとした。その時、少佐が儀國を呼び止めた。

「待て儀國」

「…まだ俺に何か用か？」

「ああ、大事な事を言い忘れていた」

「……………」

「…………背中、破けているぞ」

「…ああ、分かってる。おかげでお茶会中はずっと背中がスースーしていた…」

「どっかの誰かさんのお陰でな…」

「摩擦によって破れている儀國の制服。」

「白い肌が曝け出されていた。」

「心底恨めしそうな眼で此方を見てくる…」

「……………」

「ハルトマンとバルクホルンは儀國から視線を外し、我関せずと言った態度で紅茶を啜った。」

第三章 第二節：お茶会（後書き）

第三章 第二節でした。

今回のお茶会が少しギスギス系、な感じになっちゃいました。

次回、お茶会の話を書く時は、ゆるゆる系に出来たらしたいですね。

すわっ！！

第三章 第三節：来襲（前書き）

第三章 第三節です。

なんとか投稿出来ました…。

低クオリティーなのは…まあ前からですね。

第三章 第三節：来襲

この世界に来て、整備兵として生活すること早三週間が経過する。

「……………」

自室のベッドに寝転がり、右手を握り精神を集中させる。
魔力を結晶化させる、という技術はなかなか疲れ。
精神を極限までに集中させるのは勿論、魔力の消費も半端ない。

「…出来た、か」

そつと、右手を開く。

右手の上に乗っているのは小さなクリスタル。
透き通ったクリスタルに、白い小さな炎：「Lucifer魔天の白焰」が燃え盛
っている。

今日はどういう訳か、胸騒ぎが止まない。

こう言った時は必ず、何か嫌な事が起きる。

自分に対し、ではない。魔女達に対し：である。

誰か一人、欠けてしまいそうな：そんな気がしてならない。

「……………」

…別に、誰が欠けようと自分には関係のない話。

ここは戦場、常に生と死が隣り合わせになっている世界。

だからいつ何時死が訪れたとしても、それは不思議なことではない。

それは俺が言うまでもなく。彼女達もきつと理解している。

だが。誰一人欠けるのを見たくはない。

深い理由は…特にはない。

ただ、もし誰かが死んでしまったら後々が厄介…鬱陶しいだけ。

この基地の魔女達は、“絆”をとても大切にしている。

絆という物は、大きな力を秘めている。

科学的根拠では表せない、未知数の力。

が、逆に脆くもある。

少しでもその絆に罅が入れば、本来の力さえも満足に発揮できなくなってしまう。

彼女達は、その絆を大切にしている。故に脆さも大きくなる。

従って、誰か一人でも死んでしまった時。それを一生引き摺ったままで戦われては、この基地は恐らく壊滅する。

坂本やバルクホルン、ミーナは大丈夫だとしても宮藤やリーネと言った年下組はきつとそう…。

「さてと…」

手にしたクリスタルを握り締め、自室を出る。

このクリスタルは彼女達の保険、いざと言う時の“武器”。

これさえあれば、死亡する確率は軽減される筈。

後は…アイツ等次第。

儀國は部屋を出て、仕事場へと向かった。

|| || || || || || || || || ||

「っ……………」

世界が回る。

軽い眩暈に襲われながらも、儀國はストライカーユニットの整備を続けた。

が、疲労している今の身体ではいつもの様に指先が働いてくれない。ストライカーユニットには細かい部品も沢山ある。

そう言った部品の交換及びメンテナンスを行う際、指先が器用でなければならぬ。

もし、メンテナンスが不十分であれば…それは魔女達の死のリスクを高めてしまう。

「やはり…キツいな」

ここまで疲れたのは、初めてなのかもしれない。

その原因は恐らく、不治に犯されたこの状態だからだろう。

エラーの状態でなければ、後三つ四つは作っても平気だった。

が、今では一つ作るのが限界。これ以上は…流石に体がもたない。

そして、仕事前にするんじゃないかと激しく後悔している…。

「おい、顔色が悪いぞ。大丈夫か？」

仲間の一人が心配そうに声を掛けてきた。

その声に辺りを見回すと、他の仲間たちも心配そうな表情を浮かべていた。

「今日はどうしたんだ？ いつもなら歌を唄いながら整備するのに

…」

「だ、大丈夫だ。少し眩暈がするだけだ、気にするな」

「気にするな、と言う症状じゃなさそうだな」

安藤が不意に口を開いた。

「儀國、今日は休んでいい。俺が許可しておく」

「なっ！ 俺は大丈夫だと」

「上司命令だ。お前は整備作業だけじゃなく、ネウロイとの戦闘も担っている。

俺達の疲労よりも大きい筈だ。だから今日はゆっくりと休め」

「そうそう。今日一日ぐらい休んでも平気だって」

他の仲間たちも休むように勧めてくれた。

誰も嫉んだりしていない、本当に心気遣って言ってくれている。

…やはり、俺はいい友達を持った。

「…悪い、今度何かで借りは返させてもらっ」

「おう！ それじゃあ俺は…リネット曹長の着替えしている写真とかがいいかな」

「じゃあ俺は」

下心を全開にし、各々要求を述べてくる。

その要求を述べた整備兵等を安藤は拳骨で制裁し、作業へと入らせた。

安藤は、特に要らないと答えた。

何故、そう聞くと安藤には既に妻子を持っているらしい。

…新たな真実を知った。

|||||

ハンガーを出て、一先ず自室へと向かう。

「およ、儀國じゃん。どうしたの？ 今日には元気ないね」

その途中でハルトマンを出くわす。

いつもの調子で喋りかけてくるが、今はそれに対応するのも億劫。今はベッドでゆっくりと身体を休めたい。

儀國は何も喋らず、ハルトマンを横切った。

「ちょっと、このセクシーギャルが話し掛けてるのに無視するなんて酷いじゃん！」

「…俺に構うな」

「…本当にどうしたの？ 顔色も悪いし…何処か具合でも悪いの？ いつもならもう二言三言多いのに…宮藤呼んでこよっか？」

「…いない……施しを受けるつもりはないと、言ったはずだ」

「むう……本当に疲れているみたいだね。」

「……そうだ！ ねえ儀國、ちょっと来て」

そう言うや否や、ハルトマンは手を掴むと走り出す。

「お、おい何処に…！」

「いいからいいから」

言われるがまま、引っ張られるがまま、そのまま何処かへと向かった。

基地を出て、原っぱへと出る。

暫くして、ようやくハルトマンは足を止めて掴んでいた手を離れた。

「さあ儀國、ちょっと寝転がって」

「は？ いきなりこんな場所に連れてきて何を」

「いいから！ 早く寝転がる！」

勢いよく押され、後ろから倒れる形で原っぱの上に全身を預けた。幸い、コンクリートの床でない為痛みはそれ程ないと、その直ぐ横にハルトマンも寝転がった。

「じつやってさ、のんびりすると気持ちいいでしょ？」

「……何の為に？ 普通にベッドの上で寝転がる方が余程いいと思うんだが」

「でも、ここなら綺麗な空も見上げられるし、風も気持ちいいでしょ？」

…確かに。

いつもあの無機質な部屋で寝ると、色鮮やかな景色と心地よい風が流れているこの場所で寝るのは大きく違っている気がした。

野宿は何度もしたことがある。が、あの時はとてもじゃないが満足に睡眠を取れた覚えがない。

いつ死が襲い掛かってくるか分からない、そんな不安と恐怖に脅え警戒しながらいつも夜を過ごしていた。

だから、こんなにも穏やかな世界で横になる…と言うのは生まれて初めてなのかもしれない。

「お、ちよつとは元気出た？」

「…余計な気遣いだ」

ハルトマンに背中を向けるよう、左側臥位となる。

「ねえ、ちよつとだけ…話さない？」

ハルトマンは背中を向けている儀國に声を掛ける。

儀國は何も喋らない。

返答を待たずして、ハルトマンは儀國に話し掛けた。

「儀國はさ、私…私達のこと、どう思ってるの？」

儀國は自分達の事をどんな風に見ているのか、それが以前より気になっただけ。

仲間じゃない、馴れ合うつもりはないと口癖の様に言う儀國。

けど、まだ数えられるくらいだけど笑みを見せてくれたり、皮肉を

言いつつも大切な仲間を、命を張って護ってくれている。
儀國は、どう私達の事を思っているんだろう。
そんな疑問を、ハルトマンは儀國に尋ねた。

「同じ部隊の一員、鬱陶しい」

簡潔に、質問に対し返答をしてくれた。

「…なんで、そこまでして独りで居ようとするの？」

私達は儀國の言う通り、この部隊の一員。だけど…仲間なんだよ？」

「仲間なんて不必要だ。戦うのなら独りでいい、その方が気楽だ」

「…周りを拒んで、独りでいるなんて…とっても寂しいことだよ」

「寂しい？ 寂しいなんて思ったことなんか一度もない。

いつ裏切られるか分からない者と一緒にいることの方が、俺にとつて最悪だがな」

「何それ…ちょっと今のは傷付くよ」

寝転がっていたハルトマンは上半身だけを起こし、儀國の方を少し睨むようにして見た。

儀國は此方に振り返ることなく、背中を向けたまま続けて声を出す。

「事実だろ？ 仲間なんて口にしていても、いざ何かあった時はその言葉はただの言葉でしかなくなる。

だから独りの方が気が楽だ。誰からも裏切られないし、誰にも迷惑を掛けない」

「そんな事ない！」

「口ではそう言えるけどな…。まあどうでもいいことだ」

そう言っつて儀國は立ち上がった。
遅れてハルトマンも立ち上がる。

「…何処に行くの？」

「自分の部屋に帰るだけだ」

儀國はスタスタと基地へと向かって歩き出す。

「ちよつと待つてよ儀」

「っ！ ハルトマン！！！」

儀國が自分の名前を呼んだ…と認識した時、身体は宙を浮いていた。
正確に言えば儀國に抱えられ、上空を跳んでいた。
地上から数mも跳び上がり、そして先ほどまでいた場所に赤い閃光
が走る。

直撃し、小さな砂煙を上げた。

地面に降り立ち、抱えられていた私はそつと離される。

「ぎ、儀國！？」

「敵だ…！」

上を睨みつける儀國。その視線に自分も向けると、太陽を背にし空

を浮かんでいる異形の者の姿が視界に入った。
それが何なのか、改めて口にするまでもない。
私達ウィッチとは違う存在…ネウロイ、騎士型ネウロイだ。
今回は狩猟、と言った感じがする。

騎士型ネウロイがゆっくりと、地上へと降りてくる。

大きな特徴として挙げられるのは右手。

人の様に指や手があるわけじゃなく。弓を思わせる変な形をして
いた。

…多分、この騎士型ネウロイは前にサーニヤを狙撃したネウロイ…。

「ど、どうしてここに!？」

「そんな事、分かりきっているだろう。コイツ等がここに来た以上、
答えは一つ。

潰しに来たんだよ、ここをな…!」

騎士型ネウロイがゆっくりと右手…弓を構える。

矢や弦はない。が、騎士型ネウロイが弓を構える動作をした瞬間、
ビームが弦の代わりとなり、そして獲物を仕留める矢の代わりとな
る。

そして、一本の矢が私に向かって放たれた。

速い、けれどもこれぐらいならシールドを張らなくても簡単に避け
られる。

速さはいつも見ている物とだいたい同じぐらい、普通のネウロイみ
たいに範囲も大きくない攻撃。

ハルトマンは右に避けようと動く。

「ウソツ!？」

ハルトマンは驚愕の表情を浮かべ、目を見開いた。

矢との距離が凡そ3m前後に到達して、一本だった矢が突如分裂した。

一本から20本近くに散弾した赤い矢。

それだけじゃなく、大きさは一本だった時と同じまま。

予想外の攻撃に、僅かに判断が鈍る。

シールドを張る時間は……ない。被弾する……！

「ちいつ！」「煉獄の青焰」^{Belphégor}「ツ！！」

儀國の右手から青い炎……ベルフェゴールが燃え上がる。

そして私の前に現れて、迫り来る矢の雨に向けて青い炎が燃え盛る。右腕を薙ぎ払った。

青色の、ベルフェゴールの炎によって矢の雨は“幾つか”消滅したが、消滅し切れていない矢は容赦なく儀國の身体へと突き刺さる。

右太腿、左肩、右脇腹……ネウロイの矢が突き刺さり、そこから血を流していた。

「くっ……」

「ぎ、儀國！？」

盾となり、身を挺して護ってくれた儀國。

本来自分が被弾する筈だった騎士型ネウロイの矢を。儀國が代わって受けた。

そのせいで、儀國は負傷してしまった。

「…お前は逃げる」

「えっ？」

第二波の矢が放たれる。

今度は最初から何本も放たれた。

儀國は再びソレに向けてベルフェゴールで迎え撃つが、完全に消滅し切れずまたもその身に矢を受ける。

「行け…早く!!」

「そ、そんなこと出来るワケが」

と、不意に基地の方角から大きな音が鳴り響くのが聞こえた。

この音は、ネウロイが来襲した事を伝える警報音だ。ミーナ達も気付いたらしい。

「…ハルトマン、お前はさっさと基地に戻れ」

「な、何言ってるんだよ!? 儀國を置いて行ける訳」

「今のお前が出てきた所で、何が出来る。足手纏いになるだけだ…
…行け。」

コイツは、俺一人で充分だ」

「で、でも…」

「…俺を信じる!」

「えっ？」

「俺は簡単に死なない。だからここは俺に任せて、お前は早く基地へと行け。」

コイツを、決して基地へと近付けさせない…！」

「儀國……」

…初めてだった。

儀國が私に、私達に向かって信じろと言ってくれたのは、言われなくても、私は最初から儀國を信用している。だから、

「私は信じるよ。だから儀國も私を信じて。直ぐに帰ってくるって」

「…これを持って行け」

儀國から何かを投げ渡される。

慌てて受け取り、見てみると小さなクリスタルだった。

透明なクリスタルの中には、小さな白い炎が宿っている。

この白き慈愛の炎は不治の呪いを解き、サーニヤの傷を癒した白い炎…「Lucifer魔天の白焰」だ、とハルトマンは気付いた。

「それを持って行け、必ずお前等の保険となる。役に立つ筈だ」

「儀國……」

「…期待しないで待っていてやる。だからさっさと行け。お前はお前の、するべきことをしてこい。」

まあ、お前が来た頃には既に終わっているだろうけどな……」

傷付きながらも、儀國は弱みを全く見せない。
不適な笑みを浮かべたまま、そう言った。

「絶対に死んじゃダメだからね、儀國！」

儀國より投げ渡された、白き炎の宿る小さなクリスタルを握り締め、ハルトマンは走り出す。

…ふと振り返れば、遠ざかっていく儀國の背中。

そしてそれが見えなくなつた頃、大きな轟音が耳に響いてきた。
今頃は儀國と騎士型ネウロイが、激しく戦っているに違いない。

…儀國は私を信じてくれた。

だから私もそれに応えなくちゃいけない。

信用を裏切るようなことは…絶対にしない。

「儀國…直ぐに戻るからね！」

第三章 第三節：来襲（後書き）

第三章 第三節でした。

今回は、ちよっぴり短めなお話でした。

すわっ！！

第三章 第四節：『死』、再戦（前書き）

第三章 第四節です。

第三章 第四節：『死』、再戦

11人の魔女は空を駆る。

目的はただ一つ、この世界に混沌と破壊を齎す脅威と戦う為。世界を、故郷を、人を、護る為に魔女達は撃墜に向かう。

「儀國……！」

ハルトマンはクリスタルを握り締めながら、儀國の姿を脳裏に描いた。

基地へと戻り、司令室に入った時。既に自分を除くメンバーが集まっていた。

余程重大なことなのか、何処に行っていたとは問われなかった。そしてミーナより、ネウロイの襲来について説明がされる。

基地上空に現れたネウロイは合計二機。

一機は大型級のネウロイ、そしてもう一機は、儀國に不治の呪いを与えたあの騎士型ネウロイ。

これ等を撃墜する為今回は“全員”で出撃すると、隊長の口より命令が下された。

…皆が承諾する中、ただ一人私だけは反対した。

基地の後方で儀國が別の騎士型ネウロイとたった一人で闘っている。私は儀國と約束した、必ず直ぐに戻ってくる…と。

だから一緒には行けない、私は儀國の所に行く。そう反論した。

が、隊長はそれを認めない。

もう一機の騎士型ネウロイが現れたことには誰もが驚いていた。

けど、それでもミーナは許可を出さない。

大型ネウロイ一機だけならば許可を出している、けれども今回はあの騎士型ネウロイも一緒にいる。

騎士型ネウロイの実力が未知数である以上、中途半端な戦力で戦うのは危険行為。

よって認められない、と…そうミーナは言った。階級付きで私の名前を口にして…。

ミーナが階級を付けて名前を呼ぶ時は、隊長としての絶対命令であるという証拠。

如何なる理由があっても認めない、そういう意味だ。

それでもハルトマンは納得しなかった。

それでは儀國との約束を破ることとなるからだ。

儀國は私達のことを全く信用していない。けどあの時初めて、私の事を信用してくれた。

必ず戻ってくる信じて、身体を張ってまで私を護って基地まで行かせてくれた。

その思いを無碍には出来ない、したくない。

と、不意に儀國が言った言葉を思い出した。

『期待しないで待っていてやる。だからさっさと行け。』

“お前はお前の、するべきことをしてこい”。

まあ、お前が来た頃には既に終わっているだろうけどな…』

…そこで初めて気付いた。

儀國は、最初からこうなると気付いていたんだ…と。

だからこのクリスタルを投げ渡して、基地へと送り出してくれた。

私が、ネウロイを斃して直ぐに来てくれる…そう信じてくれていた

から。

クリスタルを握り締め、ハルトマンはミーナの命令に従った。そして今は空へ、大型ネウロイと騎士型ネウロイを撃墜しに出撃する。

「見えた、大型ネウロイだ！」

少佐が叫ぶ。

肉眼でも捉えられる距離に近付いたと同時。ネウロイからビームが放たれた。

散開して、各々それを避ける。

今視界に移っているのは大型ネウロイのみ。辺りを見回すと、騎士型ネウロイの姿も見られた。

トゥルーデを殺そうとし、儀國を傷付けた張本人。

その張本人である騎士型ネウロイは……何もしてこない。

私達が大型ネウロイと闘っているにも関わらず、攻撃を仕掛けてこない。

ただ離れた場所で浮いているだけ。

その様子はまるで…、

「高みの見物のつもりか…ナメたヤツだ!!」

バルクホルンが横目に騎士型ネウロイを睨みながら、大型ネウロイに両手に携えたMG42で射撃する。

着弾し、黒い外殻が剥がれ落ちていく。

ネウロイも自分の身体を傷付けられるのを黙って見ている訳ではない。

強力なビームを幾つも撃ち、魔女を撃墜しようとする。

魔女達はそれを洗練された動きで避け、シールドを張って防ぎ、コアのある部分まで外壁を削っていく。

そして、幼き扶桑の魔女の放つ銃弾が外壁を破り、赤き輝きを放つ宝石を曝け出した。

ネウロイの核：コアだ。

「コアだ！ 全員一斉攻撃！！」

「了解ッ！！」

坂本の指示の元、皆が一斉に攻撃を大型ネウロイに仕掛ける。

怪異は魔女に向けて猛攻を仕掛けた。

人間で言う心臓、自身のコアが曝け出されたのだ。

幾ら自己再生能力を兼ね備えているとしても、それでも死に晒されている事には変わりはない。

自己再生が終わるまで、凡そ8〜9秒。それまでに何とかしてウィッチ達を撃墜。否、修復が終わるまでの時間を稼がなければ。

怪異は一斉に向かってくる魔女に先程よりも倍のビームを放った。

だが、相手は歴戦のウィッチ。

100、200を超える同胞を葬り去ってきた歴戦の魔女も居れば。今だ未知数、秘められた潜在能力を宿す魔女もいる。

幾らビームを放とうと、彼女達はその動きを止めない。

前へ、前へと。ただひたすらに向かってくる。

そして…、

「烈風斬！！」

坂本の烈風斬が繰り出される。

振り下ろされた一撃は大型ネウロイの身体を、コアごと一刀の元両断した。

四散し、大量の白い破片が海へと舞い降りていく。

その光景は何時見ても、何処か神秘的な者である、と坂本は思った。

「さてと…」

坂本は視線の先を変える。

視線を向けたその先にいるのは、今回の本命。

一番の強敵でもある、騎士型ネウロイ…。

儀國を傷付け、不治の呪い等という非常に厄介な能力を兼ね備えている。

そして、相手の主武装はビームを近接武器へと変質させた大鎌^{デス・サイズ}。

姿、武器、能力…この三つを見れば死神と思えるのも仕方ない。

いずれにせよ、敵であることには変わらない。

この騎士型ネウロイさえ斃せば、儀國の不治の呪いも解消される。

「後はヤツだけだ！」

|||||

美しい野原に青い炎と赤き閃光が舞う。

「ちいっ!！」

舌打ちを零し、儀國は「煉獄の青焰」^{Beiphogor}を発現させた右腕を振るう。

未だに本調子ではない状態、向かってくる赤いビームの矢を燃え尽きさせるのが精一杯。

近付こうにも、それを怪異は許そうとしない。

相手のクラスは弓兵、^{アーチャー}遠距離からの攻撃を得意とする。

逆に、近距離の戦闘へと持ち込まれることを不得意とする。

それが弓兵だ。従って、近付けさせまいと矢を放ってくる。

ただ、その一度に放つ量が一本どころではない。

ハルトマンが居た時は20本弱。

が、今戦っている際に見せる量は100以上。

一度に放つ量も相手の自由自在。

そして矢を放ち、次の矢を弓に番えるという動作がヤツにはない。

また弾切れという概念もない。

よって絶えず連続して、広範囲攻撃を繰り返すことが出来る。

「調子に……乗るなよ!!」

儀國は矢を消滅させながら前進した。

多少の負傷は覚悟の上。

急所さえ護れば後はどうでもいい。被弾しても身体は動くし、痛みは耐えられる。

矢の雨の中を突き進み、間合いを一気に詰める。

その間、足や肩に矢が突き刺さる。それでもその足を止めない。

「おおおおおおおつ!!!!」

傷付きながらも、魔術師はこの命を狩らんと向かってくる。

頭部と心臓、人間の急所を青い炎が燃え盛る腕で防御しながら地を駆ける。

他は護りを一切捨てての特攻。

ならば、と怪異は弓を構え直し、魔術師に向けて矢を放った。

真っ直ぐと空を切りながら進む数十本の矢。

無論、これである魔術師が動きを止めるとは怪異も毛頭思っていない。

だからこそ、“能力”を行使した。

「無駄だ！ 何本放とうとこの程度の力で俺が」

突然、それは起きた。

目の前に向かってきていた矢が、突如消えた。

「煉獄の青焰」で燃やし尽くしていない、自らの意思を以って…と思ってしまうぐらい、唐突にそれらは消えた。

と、本能が激しく警鐘を鳴らし始めた。

咄嗟に、背後に向かって右腕を薙ぎ払う。

背面より襲い掛かるうとした赤き矢を、ベルフェゴールの青き炎は焼き尽くす。

焼き尽くせなかった矢は、幸いにも被弾することなく。頬や足を掠る程度で済んだ。

「コイツ…」

再び矢が放たれる。

が、それを迎撃する前にまたも消えた。

今度は左右同時に、矢が現れる。

儀國は後ろにバックステップし、それらを回避。

左右より向かってきた矢は互いに衝突し自滅した。

「そうか…これがお前の魔法か」

儀國は瞬時に敵の能力を理解した。

この弓兵は魔法を使える、それは当に分かっている。

そして今、その魔法が何かをこの眼で見た。

相手の魔法は、恐らくは『転移』。

自身が放った攻撃を、別の位置より出現させる事が出来る魔法。

だとしたら、物凄く厄介だ。魔術師は小さく溜息を吐く。

見切れることは容易い。が、今の状態ではそれも若干辛い。

目眩が酷くなってきた、魔力もそろそろ底を尽こうとしている。

延長戦は…不可能。

「…仕方ない。一か八かの大勝負と出るか…」

不敵な笑みを、魔術師は浮かべた。

何故…、と怪異は疑問を抱く。

どうしてこの男はこんなにも余裕の態度を崩さない？

自身を援護してくれる、共に戦ってくれる仲間もいないこの男は独り。

絶体絶命でもあるこの状況、何故笑っていられる。

ただの強がり…などではない。その笑みを浮かべるだけの理由（力）を、この男は持っている。

あの再生能力を凌駕する青い悪魔の炎以外に、どんな力を保有しているのか。

騎士型ネウロイは、弓を構えたまま儀國を見据える。

「お前に見せてやる…『嫉妬』を司る灰色の炎をな！！」

刹那、魔術師の身体が灰色の炎に包まれた。

|||||

上空、11人の魔女は死神と対峙する。

しかし、戦闘は行われていない。相手も魔女も、ただジツと見据えあっているだけ。

「何だ…このネウロイは」

坂本は烈風丸を構えながら、己が疑問を口にし呟いた。

此方は臨戦態勢に入っていると云うのに、相手は全く構えようとしていない。

儀國を傷付けたあの大鎌を出さなければ、何か魔法を使ってくる様子もない。

ただジツと…その場で浮いているだけ。

余裕の表れなのか…それとも別の何かだろうか。

…どちらにせよ、敵を見つけた以上するべき事はただ一つ。

この場で撃墜し、少しでも儀國の力を取り戻す…それだけだ。

と、今まで何の動きも見せなかった騎士型ネウロイがようやく動きを見せた。

まるで何かを探すように、此方を一人ずつ視ている。

『イ…ナ……イ』

「ネウロイが！」

「このネウロイも人語を喋れるようだな…」

以前、あのビーチで儀國が斃した騎士型ネウロイも喋った。自らを斃した敵、儀國に対し何者だ…と。そして今このネウロイも、人語を喋った。居ない…と。

皆が警戒し、武器を構える中騎士型ネウロイはゆっくりと人語を発する。

『イ…ナ……。イ…セカイ……。ノマ…シ。ワレラ……。キボ……。ウ』

滑らかさはない、所々途切れた喋り方。

何を言っているのか分からない。唯一聞き取れ、理解出来たのは…異世界、希望の二つの単語のみ。

「…どういう意味だ？ 異世界、希望…？」

バルクホルンが疑問を口にした。

刹那、騎士型ネウロイの様子が一変する。

獣の咆哮の様な叫び声を挙げたかと思うと、糸の切れた人形の様になる。動かなくなる。

誰もが何が起きたのか分からず、動揺している。そんな中、坂本は一筋の冷や汗を流していた。

「全員、気を抜くな…来るぞ！」

坂本は静かに烈風丸を構える。

空気が変わった。凍てつくような寒さがこの場に流れる。

他の皆もそれを感じ取ったのか、各々武器を構えた。

…ゆつくりと、騎士型ネウロイが顔を上げる。

刹那、顔の一部が小さく開かれ、そこから小さな赤い輝きが曝け出された。

コア…ではない。相手のコアは人間の心臓と同じ位置にある。

では、あの小さな赤き輝きは何か？

ネウロイにも生物と同じように“眼”と言う器官があるのか…。

騎士型ネウロイの手に、あの大鎌を発現される。

もう人語は喋らないだろう。この後に待っているのは…人類の生存を賭けた戦いだ。

「ッ！中尉右に避ける！」

「ッ！！」

エイラがハルトマンに向かって叫んだ。

その時には既に騎士型ネウロイの姿はない。

ハルトマンの直ぐ前方に姿を現し、大鎌を振り翳していた。

が、エイラの叫びによって回避に成功。

負傷することなく、ハルトマンは騎士型ネウロイの攻撃を避けた。

固有魔法『未来予知』が見せた、数秒先の未来。

これがあったからこそ、中尉は騎士型ネウロイの攻撃を当たらずに済んだ。

けど、何故あんなヴィジョンが見えたのか…エイラは疑問を抱いた。

未来予知が見せた、数秒後の未来…に至るまでの経過。

誰一人として動いていない、その中を騎士型ネウロイは中尉の所まで移動し、そして攻撃をしようとする…これが私が見た未来の光景。

別に音速でも、何でもなかった。ネウロイは普通に動いている。それ所か、今まで遭遇してきたどのネウロイよりも遅いとすら思える。

にも関わらず、私達は微動だにせず、その場で固まっていた。一体、何故…？

「ツンツン眼鏡！ 下だ！」

「ペリー又です！ ちゃんと名前呼びなさい！」

仇名で呼んだ事に怒りながらも、ペリー又は攻撃を避ける。

…とても厄介な相手。

どんな魔法なのかは知らないけど、不治以外の魔法なのは間違いない。

儀国みたいに魔法を二つも所持しているなんて反則だ。でも、先の未来が視えるから回避は出来る。

「宮藤、上だ！！」

「はい！」

エイラは未来の展開を読みながら、仲間に指示を出していく。

その指示に従いながら、皆騎士型ネウロイの攻撃を何とか避けていた。

避けることは出来る。そろそろ反撃に移る時。

相手は不治の呪いという、厄介な力を持っている。

一度でも負傷すれば最後、宮藤の治癒魔法じゃ治らない。

相手に近付けさせないことが前提。

それに相手の戦法はヒット&アウェイ（一撃離脱）。

攻撃を避けたその瞬間が、相手を叩く最大のチャンス。

「ひょいっと」

未来予知にて攻撃を読み、エイラは避ける。

目の前を横切っていく大鎌の赤き刃。そしてすぐ真横には騎士型ネウロイが。

最大のチャンスが自身にやってきた。

エイラは素早く身体を向けると同時に、MG42を構え、そしてトリガーを引いた。

銃口から放たれる弾丸、海へと落ちていく排出された空薬莖。

空を切り突き進む弾丸は、騎士型ネウロイ…の張ったシールドによって防がれていた。

「シールドかよ!!!」

見たこともない赤い魔方陣が展開され、それを見てエイラは驚く。

怪異は自身の張ったシールドで弾丸を防いだ後、間合いを大きく取った。

…ネウロイがシールドも張れるとは、思ってもいなかった。

が、よくよく考えてみれば不思議なことじゃない。

相手は自分達同様魔法が使える。

魔法が使えるということは、魔法力を所持しているということ。

それならシールドを張れても、何の違和感もない。

ふと、儀國が脳裏に浮かび上がる。

もし、この場に儀國が居たとしたならば、きっと。

あらゆる可能性を考えておけ、なんて言うに違いない。

「……………」

騎士型ネウロイとの睨み合いが続く。
互いに隙がない均衡状態…下手に先の先を取っては後の先を取られる。

下手に動いた方が負ける、怪異も魔女もそれを理解していた。
その時、その均衡状態を怪異が崩した。

「あつ！ ネウロイが！」

ハルトマンが声を挙げる。

騎士型ネウロイの姿があ那时的様に突然姿が消えた。
辺りを警戒するも、襲ってくる様子はなく。
サーニヤの魔導針にも反応がない。
完全にこの場より撤退していった。

「逃げられた…か。逃がした事は惜しいが、皆無事で何よりだ」

「じゃあ急いで戻ろう！！ 儀國が待ってる！」

「ああ。全員、基地へと帰還しこれより儀國の援護に向かう！」

「了解ッ！！」「」

11人の魔女は空を駆る。

思うは、独りで基地を護り怪異と戦っている魔術師の姿。
その仲間の下へと急ぐ。

「今すぐ行くからね、儀國！」

第三章 第四節：『死』、再戦（後書き）

第三章 第四節でした。

次回では、いよいよ『嫉妬』を司る灰色の炎の登場です！
果たして、その効果は…！？

すわっ！！

第三章 第五節：『弓』、『嫉妬』の灰焔（前書き）

第三章 第五節です。

今回は、灰色の炎が登場します。

一番悩みに悩んだ炎です。どうぞ！！

第三章 第五節：『弓』、『嫉妬』の灰焔

基地へと急いで戻る。

帰還途中、ハルトマンは不安を抱いていた。

独りあの場所で騎士型ネウロイと戦っている儀國。

儀國は大丈夫だと、戻ってくる頃には終わっていると言っていたけど、やはり不安で仕方がない。

もし、もう戻っている時に悪い意味で終わっていたとしたら……。そんな事ばかり、悪い方向へとばかり考えてしまう。

「…心配するな、ハルトマン」

隣を飛んでいるバルクホルンが、静かに口を開いた。

「アイツは強い。そう簡単にやられるようなヤツじゃない」

「トウルーデ…」

「儀國はきつと勝つ。ネウロイ如きに負けはしない…！」

「…うん！ そうだね！」

…トウルーデの言う通りだ。

儀國は信じて私に言った。それを私は信じた。

だったら、最後まで信じぬかなきゃいけない。

儀國は死んでなんかない、あの時言ったように既に騎士型ネウロイを斃している。

そう考えて、基地へと戻る。

「居た！」

ハルトマンが叫ぶ。

基地の南部にある野原。視界に入る二つの存在。

一つは騎士型ネウロイ、もう一つは…灰色の焰に身体を包まれている儀國。

まだ闘いは終わっていないかった。けど、儀國はちゃんと生きている。それに、また新しい焰が儀國から燃え上がっていた。

青い炎のベルフェゴール。白い炎のルシファー。

そして今、初めて眼にする灰色の炎…。

灰色…何て見たことがない、この世界の何処にも存在しない色。

あの炎もまた、きつと強力な力を秘めている炎だ。

灰色の炎はまるでロングゴートの様に儀國の身体を包み、激しく燃え上がっている。

「燃え尽きる！」

灰色の炎を身体に纏わせて。儀國は右手より「煉獄の青焰^{Belphégor}」を燃え上がらす。

ベルフェゴールの力を纏わせた、青い炎が燃え盛る右腕を以って儀國は地を駆ける。

対し、向かってくる儀國に騎士型ネウロイは矢を放った。

雨の様に放たれた矢、儀國も「煉獄の青焰^{Belphégor}」で正面から迎え撃つ。

と、予想外の事が起きた。

怪異の放った赤い矢の雨と、魔術師の放った青色の炎が直撃する…その直前。

騎士型ネウロイの矢が先に消滅、直撃もしていないのに…だ。

そして標的を失った青色の炎の纏った拳は、虚しく中空を切る。

矢は一体何処にいったのか…誰もがそんな疑問を抱いていると、それは突然姿を現す。

「危ない！」

少佐が叫ぶ。

儀國の四方八方、上空を含めて赤い矢が突然現れた。

そしてそのまま儀國へと襲い掛かる。

「儀國ッ！！！」

全方位から襲い掛かる矢を儀國はその身に受ける。

突き刺さる数多の矢。

幸い、身体を包む灰色の炎が幾つかは矢を消滅させたが、それでも十数本の矢が儀國の身体を容赦なく穿つ。

吹き出る赤い血、苦痛の表情を浮かべて片膝を着く魔術師。そこに追い討ちを怪異は掛ける。

「この…！」

ハルトマンは騎士型ネウロイに向かおうとした。

が、それを坂本は引き止める。

「待て、ハルトマン！」

「どうして！？早くしないと儀國が…！」

「…可笑的いと思わないのか？」

坂本はある疑問を抱いていた。

ハルトマンの言う通り、儀國は劣勢状態。今すぐにも助けに入らなければ負ける。

ハルトマンだけではない、自分自身も直ぐに儀國の援護へと向かうつもりでいた。

だが、少し考えてそれを止める。

と言うのも、先程の攻撃について…だ。

あの矢を放った騎士型ネウロイの魔法は恐らく、攻撃した矢を好きな場所へと「転移」させる事が出来る。

だから儀國の放った「煉獄の青焰」^{Belphégor}と直撃する前に消滅させた…かのように見せて、別の場所へと転移させて攻撃を仕掛けた。

確かに、厄介な魔法である。だからこそ疑問を抱いた。

あの程度の攻撃を、何故儀國は“受けた”のか。

「お前たちも知っている通り、儀國の強さは超人的な物だ。魔法云々関係なしに、な。

私と儀國が手合わせをした時のこと、憶えているだろうか？

あの時儀國は：“眼を閉じた状態”で私の斬撃を全て避けていたんだ」

昔、聞いたことがある。

武を極めた達人は相手の気配や殺気、僅かな空気の流れで相手の攻撃を視る事が出来る。

それは即ち、心眼と称される。

その心眼を儀國は会得している。その高等技術を持っている儀國が、あの程度の攻撃を避けられないとは到底考えられない。

ならば何故、その身にネウロイの攻撃を受けたのか？

…ここで、一つの答えが導き出される。

「アイツは…恐らく」

…自分自身この答えを導き出しておきながら、正直言って信じられない。

だが、儀國 雅史という人間は我々の常識を覆す存在だ。可能性としては…完全に否定できない。

「まさか…“ワザと”ネウロイの攻撃を受けた!？」

ミーナが驚いたように声を出していた。

それに対し、坂本は小さく頷いた。

宮藤達もその言葉を聞き、驚いていた。

無理もない反応、攻撃をあえて受けるなど到底考えられないからだ。

その行為は誰が言うまでもなく、自殺行為そのもの。

だが…儀國は何かの考えがあつてワザと攻撃を受けた。

その理由は…あの灰色の炎にあるのかもしれない。

「儀國…お前は一体、何をするつもりだ？」

「ぐ……」

魔術師は苦痛に表情を歪め、怪異を見据える。

…身体中が痛みを訴える。

久し振りに、今絶体絶命だと感じている。

このままいけば確実に殺される、そうでなくとも血を失い過ぎた原因による失血死。

だが、これぐらいしなければ勝ち目はない。

そしてようやく、反撃の時に移れる。

苦痛と不敵の入り混じった笑みを浮かべて、儀國は静かに口を開く。

「…一つ、簡単な勉強をしようか。

お前の攻撃、一本の矢が値する攻撃力が50とする。そして俺のこの炎…」。

この炎はダメージを半減する効果を持っている。つまりお前の一本の矢に対し受けるダメージは25となる…」

魔術師は簡単な計算式を口にする。

この期に及んで何を口にするのか、怪異は魔術師の不可解な行動に疑問を抱く。

時間稼ぎをしている…ワケではなさそうだ。

上空にいる魔女達も助けに来る様子は一切見られない。

そんな疑問に思考を働かせる中、男は言葉を続ける。

「そしてもう一つの効果がコイツにはある…それは“受けたダメージを蓄積する”ということ。

この時蓄積するのは半減させたものではなく、受ける攻撃の本来の攻撃値。

俺がこの炎を発現させてからお前に今まで受けた矢の本数は、俺の数え間違いないやなけりゃ合計15本。

つまり矢の本数(15) × 矢一本のダメージ(50) = 蓄積したダメージ(750) と言うことになる。

そして俺の炎自身の攻撃値がそこに加算される。ここで再び計算だ。今のこの炎の攻撃値(500) + 蓄積したダメージ(750) = 今

の俺の力(1250)、ということ。

…まあ、コイツはお前にも分かりやすくする為に適当に俺が数字化したものだ。

実際はこの計算よりも上かもしれないし、それ以下かもしれない。だが、ハッキリと言えることが一つだけある」

ゆっくりと魔術師は立ち上がる。

その表情は既に苦痛の色を浮かべていない。

不敵：人を見下し、薄ら笑いを浮かべる…悪魔の顔だった。

「コイツは“嫉妬”深いヤツでな。自分よりも優れたヤツが出てくると必ず嫉む。

その強さが妬ましい、自分よりも強いヤツが存在することが妬ましい…ってな。

その妬ましがバネとなつて、コイツは強くなる。

そうそう、ハッキリと言えることが一つだけあるという話だったな。

冥土の土産にお前に教えてやる、今のこの炎の力は…本来の力が出せない今の「煉獄の青焰」^{Belphégor}よりも、遥かに強力になっているってな
！！！」

大気が震える、大地が揺れる。

魔術師の身体を包んでいた灰色の炎が、激しく燃え上がり始める。

本能が逃げる、と告げている。避けるではなく、この場から逃げろと。

怪異は改めて認識した。この男は…凄まじく危険だということ。

「さっさと起きろ、そしてテメエの敵を喰らい殺せ！！」

噴火する火山の如く、灰色の炎が燃え盛る。

そして怪異は見た。『嫉妬』を司ると言う、灰色の炎の真の恐ろし

さを。

怪異は理解した。何故本能が逃げると告げていたのかを。

天空へと向かって伸びる灰色の炎。その炎の中に見えるは異形の者の姿。

七大罪では『嫉妬』を司り、その姿は巨大な海蛇だと言う。

正にその姿がそこにある。

魔術師が発現させた灰色の炎と言う肉体を得た、巨大な海蛇…否“邪竜”がこの現世に召喚された。

七大罪が一つ、『嫉妬』の悪魔：レヴィアタン。

巨大な蛇…もしくは竜を思わせる頭蓋骨。

その頭蓋骨に開いた、本来眼があるべき空間に怪しく輝く二つの光が此方を見据えている。

その光より感じるのは…強大な嫉みと悪魔の持つ圧倒的力。

「消し飛ばせ…」Liwyathann「報復の灰焰」

「ドラゴンバイト荒狂ウ竜ノ牙」！！」

魔術師の命に従い、巨大な灰焰の邪竜は咆哮を挙げ襲い掛かってくる。

怪異はその邪竜を撃ち落とさんと矢を射る。

その行為は無駄である事は分かりきっていた。だが、迫ってくる敵を眼にして退くことなど“戦士”としての恥。

敵に背を向けて逃げ延び、この命生き長らえるぐらいならば。

最後の最後まで戦い抜きそして死す。

それが“戦士”としての誇り、生き様であり…あの魔術師に対する敬意。

『…レ…イ……ライ…ウ…』

騎士型ネウロイは静かに弓を構えている腕を下ろした。

後悔などという概念は、既に怪異にはなかった。

あるのは逃れられぬと思っていた呪縛より解き放ってくれた、魔術師を名乗る男への感謝。そして、最後の最後で…今までにない強敵と合間見えた事に対する喜び。

怪異は避けも、逃げもせず…その身に巨大な灰色の炎を受けた。

一瞬にして身体は竜の牙に咬み砕かれ、意識は闇へと飲み込まれる。その一瞬の最中、最後に怪異が眼にした物は魔術師の眼。

とても悲しく、そして天使の様に慈悲深さを感じる、そんな眼だった…。

周辺一帯に巨大な轟音が鳴り響く。

大地を震撼させ、凄まじい突風を生じさせる。

…騎士型ネウロイは、この世より完全に消滅した。

「……………」

開いた口が塞がらない。

誰もが目の前の出来事に信じられなかった。

儀國の身体を包んでいた灰色の炎が突然燃え上がったと認識した時、そこには灰色の炎という身体の怪物が姿を現していた。

巨大な蛇、竜にも似た巨大な頭蓋骨が騎士型ネウロイを見据え、猛獣の如き咆哮を挙げながら牙を向く。

そして、轟音が鳴り響き灰焔の竜が消えた時、騎士型ネウロイの姿も美しい原っぱも何一つなかった。

残されたのは、中型ネウロイ程の大きさのクレーター。

まるで鋭い牙で獲物の肉を“食い千切った”かのような跡だけが…残

されている。

Belphégor
…「煉獄の青焰」よりも遥かに強力な、レヴィアタンと呼ばれた灰色の炎。

その一瞬にして全てを消滅させてしまう怪物を従えている魔術師。魔女達は改めて、その実力と恐ろしさを身を以って認識した。

「す、凄い…」

ハルトマンは呟く様にして儀國を見る。

劣勢と思わせておいての、逆転勝利。

その勝利の仕方半端じゃなく、怪物を呼び出し、騎士型ネウロイを一瞬で跡形もなく消し飛ばした…あの灰色の炎。

Belphégor
Lucifer
「煉獄の青焰」と「魔天の白焰」以外にも、別の炎があったなんて思ってもいなかった。

儀國は一体、幾つ魔法を…強力な炎を持っているんだろう。

と、儀國が大の字に寝転がった。

それを見たハルトマンは慌てて儀國の地上へと降りた。

「ふう…」

その場で大の字に寝転がり、儀國は小さく息を吐いた。

久し振りにやった“本気”。

今の状態で成功するとは…、どうやら今日は運が良い日らしい。

不完全状態で成功するかどうか、半分運試しだった。

発現出来ない所か、下手をすれば制御し切れず、逆に自分も巻き添えを喰らい跡形もなく吹き飛んでいたかもしれない。

それでも、結果論ではあるが賭けは無事成功。『弓』を司る騎士型ネウロイは斃した。

そして、不治の呪いもまたも解消される。

ようやく5割弱程度まで力が出せるようになった。

そして『強欲』と『暴食』、二つの炎が使用可能となった。

『強欲』は強力ではあるがその分扱い方が非常に難しい炎だ。使用する機会は…そこない筈。

だが、『暴食』が使えることは更に戦力となる。この世界…もといあの騎士型ネウロイに対しても『暴食』の炎が使える事は非常に有難い。

残る騎士型ネウロイは後二体。そして封印されている炎も残り二つ

…『色欲』と『憤怒』のみ。

…だが、いいことばかりではない。

「Liyathan報復の灰焰」の解放をしたことで、魔力がもう殆ど残されていない。

それに加えて、反動で魔術回路自体にも多少とは言え損傷している。自己修復作業が終わり、魔力を全開にするまでの間は戦闘不可能。次に満足に戦える状態にまで回復するには…三日間ぐらいの休養が必要か。

「…ふう。まつ、いいか…」

「儀國　　ッ!」

空から自分の名前を呼ばれた気がした。

視線を向けると、一人の魔女が地上へと降りてくる。

明るく可愛らしい声、そして約束を交わした…ハルトマンだった。

「儀國！」

ハルトマンは地上へと降り立つと、直ぐに儀國の元へと向かう。

儀國は約束通り、ちゃんと生きている。

けど、幾ら無事でもネウロイからの攻撃を何度も受けている。

近くに行けば、その傷の酷さがよく分かる。

幾多に受けた騎士型ネウロイの矢。

至る場所から血が流れ、そして苦しそくに息をしている。

「儀國！　しっかりしてよ！」

「…帰ってきたようだな。

でもまあ、言ったとおりになったな…」

不敵な笑みを儀國は浮かべる。

傷が痛む筈なのに、苦しそくに呼吸しているのに、儀國の表情は不敵だった。

「待ってて！　今すぐ宮藤に」

「要らない…余計な事をするな。少し休めばどうということはない。余計な貸し借りは…作りたくない。

それにお前等には関係ないことだし、助けられる理由もな」

「いい加減にしてよ！」

ハルトマンは叫んだ。

「どうして、そんな事ばかり言うの？」

貸し借りなんて、関係ないだろ！？ 仲間を助けるのに、どうしてそんなものがあるんだよ！」

周りを拒み続け、孤独で居続ける…そんなの、ただ虚しくて、悲しいだけ。

けれども、瀕死の状態でありながらも儀國は…独りであり続けようとする。

「…お前等が俺をどう思おうが、俺は俺で勝手にやらせてもらう。お前等の力も助けも、借りるつもりはない…」

傷付いた身体を起こし、儀國は基地へと向かって歩いていく。

歩くのですら辛そうなのに、それでも儀國は手を貸してくれとも言わない。

言葉通り、独りの力で何でもするつもりだ…。

宮藤達も降りてくる。

儀國の傷を見て、治癒魔法を掛けようとするも、儀國はそれを素っ気無く突き返した。

トウルデーか、少佐が儀國に怒るかと予想していた。

その予想を裏切るように、シャーリーが儀國の胸倉を掴んでいた。

「お前、いい加減にしるよ…！」

儀國の胸倉を掴みながら、シャーリーは睨み付けた。

「…この手を離せ、イエーガー」

「お前、またそうやって宮藤の気持ちを無駄にするつもりかよ!？」

…コイツの事は前から気に食わなかった。

ルッキーニを怖がらせたこともそう、そして…私達に対する態度も素っ気無いし、人の気持ち을 全て無碍にする。

今でも宮藤が心配し治癒魔法をしようとしているのに、儀國はそれを冷たく返した。

流石のあたしも、そろそろ我慢の限界だった。

「…要らん気遣いをするなど、何度口にするればお前達は理解する？

俺に構うな、鬱陶しい。俺達は仲間でも何でも無い。

仲良くする必要なんざ何処にもないだろう」

「ッお前…!」

瀕死の重傷を負っているにも関わらず、儀國はいつもの素っ気無い態度を見せる。

そんな態度を取っている儀國を、思わず殴ってしまった。

右手に頬を殴った感触が残る。

バルクホルンや中佐からは止めると言われる。

けど、あたしの怒りは収まらなかった。

再び儀國に問い質そうとして、

「テメエこそいい加減にしろ!」

初めて見せた感情、“怒り”を露にし儀國は声を挙げた。

皆、驚いた表情を浮かべている。

「ッ…うぜえんだよ! テメエ等はただ戦力を失いたくないが為に言ってくるだけだろうが! 心配してます、みたいなお前等の見え

透いた：嘘を塗り固めた態度がイラつくんだよ！

それにな、整備兵なんて言うくだらねえ配役を押し付けられてなかつたら、今頃　　ッ！」

何かを思い出したかの様な表情を浮かべて、儀國は言葉を止め、舌打ちを零し掴んでいた手を無理矢理離される。

「…いつ何時裏切られるか、足手纏いになるか分からないモノと戦場で行動を共にするぐらいなら：俺は、独りの力で戦い続ける。

誰の手も借りない、借りるつもりもない。今までそうしてきた様に、これからもだ。

お前等にとやかく指図される憶えはない。お前等の捨て駒になるつもりも、俺はない…！」

「儀國…！」

「…この際、ハッキリと言ったらどうだ？」

お前はネウロイを駆逐するのに大事な、必要な“戦力”だから死ぬな、つてな…！」

そう言われている方が、まだマシだ…！」

鋭い眼で皆を睨んだ後、もう一度舌打ちを零して、儀國は基地へと戻っていった。

…誰も何も言おうとはしない、追い掛けようともしない。

ただ黙って、去っていく儀國の背中を見つめていた。

皆、どんな思いを込めて背中を見つめているのか。

あたしは…何でだ、と言う気持ちで一杯だった…。

「…今の言葉が、儀國が我々に対し抱いている思い…本音、か」

少佐がそんな事を、静かに言った…。

|||||

医務室。

正面にはアレツシアが座り、溜息混じりに呆れた表情を浮かべている。

「とりあえず終わりました。以前に増して酷い怪我ですね…普通に考えたら重症なんですよ?」

「…すいません」

儀國はアレツシアに頭を下げた。

鏡を見れば、頭部、両腕、上半身に巻かれた包帯、頬に張られたガ―ゼで飾られた自分がいる。

アレツシアの言う通り。以前よりも重症だ、と儀國は自嘲気味に鼻で笑った。

「…どうして宮藤軍曹の治癒魔法を受けないんですか?

彼女の治癒魔法はとても」

「アンタに言われなくても、あいつの治癒魔法が凄いのは知ってますよ」

「なら、どうして…」

「あいつ等の手を借りるワケにはいかない…ただ、それだけのこと

です。

それじゃあ、忙しいのに治療…どうも」

「ハア…先程も言いましたが、暫くは絶対安静ですよ？

絶対に無理な運動はしないで下さい」

言われなくとも、激しく動けやしない。

傷口はアレツシアの薬草等を用いた治療によりある程度はマシになった。

が、魔術を発現する為に必要な魔術回路の方が万全ではない。

彼女に言われた通りに、暫くは一般…整備兵として過ごすに他ない。

儀國は小さく頭を下げた後、医務室を後にする。

第三章 第五節：『弓』、『嫉妬』の灰焔（後書き）

第三章 第五節でした。

如何でしたでしょう、灰色の炎。本当に悩んだんですよ、この能力について。

どんな能力にしようかなって、最後の最後まで悩んでコレです。

すわっ！！

第三章 第六節：『怠惰』の青、和解の策（前書き）

第三章 第六節です。

タイトルは…まあ適当ですが、あまり気になさらずにいいです。

第三章 第六節：『怠惰』の青、和解の策

翌日、自室にてぼんやりと過ごす。

執務室に急遽呼び出されミーナより伝えられた命令。

一週間の休養及び戦闘参加の中止を言い渡された。

アレツシアがわざわざミーナに伝えたらしい。

余計な事を…、と儀國は呆れながら小さく溜息を吐く。

しかし、一週間の休養とはある意味有難く、ある意味地獄だ。

一週間何もなくていいし、楽に出来る。

だが、その分超が付く程の退屈と過ごさなければならぬ。

一週間の休みを貰ったわけではない。身体の傷が癒えるようにと休養する時間を与えられただけ。

従って街に遊びに行くことはまず不可能。

流石に仕事や戦闘は出来ないのに遊びには行けるのか、とは思われたくない。

一週間と言う退屈な時間、それをどうやって過ごすか…。

自室待機しろとは命じられていない。

部屋から出ることは可能と言えば可能…。

「…仕方ない、少しばかり散歩でもするか」

寝転がっていたベッドから身体を起こし着替える。

白い半袖のワイシャツに街で買った黒の長ズボン。

昨日の鬪いで整備兵の服はボロボロ。

そして運の悪いことに、予備の制服は洗濯し乾かしている時に風に吹かれ何処かへと飛んで行方知れず。

更に運の悪いことに、丁度自分に合うサイズが在庫切れしていたので安藤に頼んで発注中。

現在一着も制服なし。それまでの間は、当分この格好だ。しかし、案外この格好…気に入ってたりする。

動きやすいし、整備兵の服装よりもまだカッコイイと思える。ずっとこの格好で過ごしたいが…、整備作業をすると油等が付着するから、そう言った意味では早く服が届いて欲しいと思う。

「さてと…行くか」

着替え終えた後、儀國は部屋を出て基地内を歩いた。

何処に向かう訳でもなく、その辺を適当に歩く。

…不思議なことに、今日は誰とも出会わない。

この時間帯、今頃安藤達は整備兵としての業務に入っている時間帯。ハンガーに籠りつきりだから会わないのは分かる。

魔女達は…基本自由。否、自由すぎる。

宮藤、リーネ、ペリー又は坂本が訓練をしている。その姿を何度も目撃しているが、今日は何故かその姿が見られない。

ミーナは執務室に籠って書類の山と格闘中、バルクホルンは今頃は未だに起きないハルトマンをたたき起こしているに違いない。

シャーリーは自室に籠って機械弄り、エイラとサーニヤは睡眠中の筈。

ルッキーニは…知らない、また何処かの上で眠っているだろう。

ミーナ達と会わないのは分かるが、いつも姿を目撃している宮藤達

が見られない、と言うのは不思議なものだ。

…別に会いたいと思っではない。ただ何となく、不思議に思っただけ。

会わないのなら会わないで、それでいい。

面倒な事を言われなし、その方が気楽で過ごすことが出来る。

このままずっと、こうであってほしい。

「あ、儀國だ」

…余計な事を思ってしまったのが原因か、それとも本当に偶然か。どの道、不運であるしかない。

今まだ寝ていると思っていたハルトマンと出会ってしまった。

昨日、あんな事があったと言うのにいつもと同じ様な態度で接してくる。

それはハルトマンの性格故か、それとも…。

「こんな所で何してるの？ ミーナに休養するようになって言われただろ？」

「…自室待機しろ、とは言われていないぞ」

「態度はいつもと変わらず…か。まあ元気そうでよかった。

で、何してるの？」

「…お前には関係のないことだ。

イチイチ俺に話し掛け」

「一人で何でも背負うのは、よくないよ…儀國」

…昨日の出来事をずっと考えていた。
儀國が自分達に対し、初めて口にした“本音”。
儀國が非協力的でいたのは、信用していないという理由から。
ただ、どうしてその理由に繋がるかと言う説明まではされなかった。
それを、ようやく昨日で知る事が出来た。

儀國の口から放たれた本音。

儀國にとって仲間とは、“裏切られるかもしれない脅威”、として
定着している。

過去にどんな出来事があったか、それはまだ儀國の口から話されて
いない。

けど、よほど何か心にトラウマとして残ることだったんだ、とだけ
は理解出来た。

何故なら、あの時の儀國の言葉には感情が籠っていたから。

いつもは素っ気無いし、何の感情も籠っていない言葉ばかりを並べ
る。

そんな儀國が初めて、自分の心情を露にしたと私は感じた。

…どんな過去があったのか、それは私には分からない。でも、

「私はさ、儀國にどんな過去があったのかは分からないけど。
でも…そうやって何でも一人で背負い込むのはよくないよ」

「……………」

「話したくなかったら、今は何も言わなくていいよ。
でも話してくれる気になったら、絶対に話して欲しい。
だって…私達は仲間だから。仲間は、助け合うもんだよ?」

「…どうでもいいがな」

そう言つて、儀國は踵を返して立ち去つていった。

「私はいつでも待つてるから、儀國……」

去つていく儀國の背中を見つめ、ハルトマンは呟いた。

|| || || || || || || ||

基地より大分離れた野原で、儀國は大の字に寝転がっていた。

相変わらずやることがない。

無駄で退屈な時間を、ただただ過ごしていく。

…何となく、基地には居たくなかった。

口うるさいウィッチ達に遭ったら遭つたで、また小言を言われるのが眼に見えている。

特にバルクホルンや坂本が、他の誰よりも口うるさく言ってくるに違いない…。

だからこうして基地内ではなく、基地の外で過ごすことにした。ここならば誰にも邪魔されない、ゆっくりと時間を過ごさせる。

「……でも、退屈だな」

儀國は大きな溜息を吐き、ぼんやりと空を眺める。

漫画、ゲーム、インターネット…。

暇な時家で過ごす為の必需品がこの世界にはない。

アニメや面白い番組もない…そもそも、テレビという物がこの基地

にはあつただろうか？

多分…なかつた気がする。どちらにせよ、カラーじゃないし画質も悪い、アニメをやつてない時点で見る気はないが。

街には行けない、基地に居れば魔女達が口うるさく突っ掛かってくる。

となれば、静かに過ごせる場所は…もうココ（外）しかない。

「…………いや、ここも静かに過ごせそうにないな」

不敵な笑みを浮かべ、儀國は静かに立ち上がる。

その視線の先、今最も現れて欲しくない相手の姿が視界に映った。

…正直、今は遭いたくはなかつた。

万全な状態でない今、闘つても勝ち目がほぼないからだ。

しかし、人の都合などお構い無しに相手はやつてくる。

人類を殲滅しに、この世界の脅威が姿を現した。

「…たく、本当にお前等は空気を読むことが出来ないやつ等ばかりだな。

知ってるか？ 俺の世界じゃそういうヤツの事をKYって言うんだぜ？」

上空より黒い球体が降りてくる。

数は10、大きさはどれも直径30cm前後。球体の中心は赤い。

そして次の瞬間、黒い球体…小型ネウロイが一斉にビームを放ってきた。

「ちいつー!!」

「煉獄の青焰」^{Belphegor}を発現させて、敵を迎え撃つ。

だが、右手より燃え上がるは小さな青い炎。

残り少ない魔力を計算して、微弱な力しか出せず。
腕全体を包み込む程の火力は、今の儀國では出せなかった。

「まったく…ここまでネウロイの侵入を許すとは、ウチの部隊の魔女達は一体何をやってるんだか！」

向かってくるビームを、燃え上がる右手で受け止めやり過ごす。

「煉獄の青焰」^{Belphégor}の特性は“全てにおいて作用する”こと。

だからウィッチの様にシールドがなくとも、坂本の烈風斬の様にネウロイのビームを防ぐ事が出来る。

が、ベルフェゴールの加護を受けていない部分は生身である事に変わりない。

ビームを受ければ最後、跡形もなく消し飛ぶ。

絶えずビームを撃ってくる小型ネウロイ。

儀國は避けながら、向かってくるビームを燃やし尽くしながらやり過ごす。

だが、どうすればいい？ 魔術師は内心焦りを見せていた。

敵は小型、本来ウィッチが相手をする筈のネウロイ。

だが、そのネウロイはウィッチではなく自分にへと矛先を向けてきた。

…自分で言うのもアレだが、この部隊の中で最も戦力を持っているのは自分だろう。

だから騎士型という異質な存在以外も、先に戦力を持つ者から潰そうと考えたようだ。

…その判断は正しい。そして今弱っている所を狙うというのも、正しい判断だ。

敵ながら見事、としか言いようがない。

「ちいっ！ うぜえ！」

ベルフェゴールを従えし右手を振るうも、その青き煉獄の炎は虚しく空を切るばかり。

…魔術師は強大な力を持っている。だが、目の前の敵…怪異に有り魔術師には無いモノがある。

簡単至極。“空を飛べない”と言うことだ。

魔女や怪異の様に、魔術師は空を飛ぶ術を持っていない。

地上に立ち戦いを挑む場合、彼に並ぶ存在はまずないと言えよう。しかし、この世界では空中戦がメインとされる。

従って空を飛ぶ術を持たない儀國にとって、この相手はかなりの強敵と言える。

ましてや、魔力も底を尽き掛けている状態。これが満足に闘える状態であったのならば、話は大きく変わってこよう。

「うつ……」

儀國は急激な眩暈に片膝を地面に着く。

…昨日の今日、立て続けての戦闘。

ハルトマンに保険と渡した「Lucifer魔天の白焰」の結晶化による精神疲労と大量の魔力消費。

そして「Liyathaan報復の灰焰」を発動するが為にワザと受けたネウロイの攻撃による負傷。

それらが合わさり、よりによって…このタイミングに、影響が出てきた。

魔術師は眩暈を気力で抑え付け、途切れる事無く続く怪異の猛攻を防ぐ。

と、今こそが好機とばかりに。魔術師に止めを刺さんと、怪異達は仕掛ける。

四方八方、そして上空から魔術師に向けての一斉射撃。

360度全方から小型ネウロイはビームを儀國に向けて放出した。

「雑魚が…調子に乗るんじゃないよ」

「させるか！」

何処からか、女性の声が聞こえた。

そう認識した時には既に足は地より離れ、空を飛んでいた。

背中に伝わる柔らかく、心安らぐ心地の良い二つの感触。

首だけを動かせば、そこにはウサギ耳を生やしたシャーリーの顔があった。

…どうやらシャーリーの固有魔法『高速』によって助けられたらしい。

「ふう、間に合ったな」

安堵の息をシャーリーが漏らす。

「お前…なんで」

「あたしだけじゃないよ」

その言葉より僅かに遅れて、幾つもの銃声が聞こえてきた。

…シャーリーだけではなかった。

顔を向ければ、この隊の魔女達の姿が視界に入る。

宮藤も、リーネも、坂本も、ミーナも、皆…そこにいた。

各々手にした銃で次々と小型ネウロイを撃ち落していく。

地上に降ろされて、儀國はシャーリーに顔を向ける。

「…何故、俺を助けたようとした？ お前達が俺を助ける理由なんてない筈…」

「お前さあ、なんでそんなに理由を必要とするんだよ。理由なんか関係ないだろ？ 仲間がピンチなら助ける…それが仲間だろ？」

「シャーリーの言う通りだ、儀國」

「坂本…」

「儀國…貴方は昨日、いつ何時裏切られるか分からないから独りで戦う。」

「…そう言ったわね」

坂本に続き、ミーナが優しい口調で話し掛けてくる。

「私達は誓うわ。貴方を決して裏切らない…そして、捨て駒の様になんて絶対にしない。」

私達と貴方は、この部隊で共に闘う大切な仲間。だから、独りじゃなくて…私達と一緒に闘いましょう、儀國」

「……………ッ」

「敵機、上空より新たに來ます！ 数は30、小型ネウロイです！」

サーニヤの魔導針が新たなネウロイの気配を察知した。

「儀國、貴方は下がってて。貴方は昨日の怪我がまだ癒えてない、

だから後は私達が引き受けるわ」

儀國は昨日怪我をしたばかり。

激しい運動はしないようにと念を押したにも関わらず、ネウロイと戦闘をしその傷は開いてしまっている。

身体に巻かれてある白い包帯が赤く滲んでいるのがその証拠。

これ以上の戦闘の継続は危険。命を落としかねない。

現れたのは小型のネウロイ、数が多くても充分に私達だけで対処出来る。

ミーナは全員に迎撃命令を下そうと口を開く。

「……他のやつ等を引っ込めろ」

それを遮る様に儀國が前に出た。

「アイツ等の相手は…俺だ。お前達は引っ込んでいろ」

「な、何を言っているの！？ 貴方は昨日の怪我がまだ治っていないのよ!？」

とてもじゃないが、今闘いに出せる状態じゃない。

傷口は開き新たに出血している、息も乱れて今にも倒れそう。

いつもの能面を浮かべているものの、その表情からも満身創痍であることが読み取れる。

そんな状態の彼を、ネウロイとの戦闘に…ましてや一人で戦わせられない。

「そつだよ儀國！ 今ミーナと一緒に闘おうって言ったばかりじゃない！」

それに、そんな怪我だらけなのに満足に戦える訳が」

「来てくれた…」

エーリカの言葉を遮る様に、小声で呟く儀國。

「…来てくれた。それだけでいい、今はな…。」

だが…喧嘩を売られたのはこの俺だ。なら、その相手を最後までするのが道理というもの。こればかりは、譲れない…。」

「……………」

「…一気に終わらせてやる。だから全員俺の前に絶対に出るな。巻き添えを喰らっても責任は取れないからな…」

刹那、儀國の身体より青い炎が燃え上がる。

本調子の時に比べても、まだあの時の様な強大さはない。

それでも、最初の頃に比べて随分と強力なモノへとなっていることは理解出来た。

そして、今の言葉の意味。

ひよっとすると、あの灰焔の巨大な邪竜…レヴィアタンを生み出した時のように何かまた、凄まじい破壊力を秘めた魔法を使うかもしれない。

そうとなれば、彼の言葉に従わなくてはいけない。

あの青い炎…「煉獄の青焔」^{Belphégor}は全てを焼き尽くす魔炎。

私達も、あの青い炎を受ければネウロイ同様一瞬にして燃やし尽くされる。

ミーナは直ぐに皆に引くように命令を下す。

その命令に皆が反発したが、儀國の一睨みにより場は静まった。

「儀國…」

「俺一人で相手する。それだけだ、ハルトマン」

皆が見守る中、儀國は小型ネウロイがいる上空を静かに見上げる。

「…暫くは魔術が使えないのは覚悟してやる。だから…ここはド派手に行つてやるぜ。」

見せてやるよ…青い炎、ベルフェゴールの真の姿をな。来い！！」

全身より燃え上がっていた炎が更に燃え上がる。

激しく、まるで意思を持つているかの様に燃え盛る青い炎。

巻き添えを喰らわないようにと、遠く的位置にいてもその凄まじい熱気が伝わってくる。

青い炎はやがて、一つの形となる。

あの、騎士型ネウロイを葬り去った灰焰の邪竜を生み出した時のように…。

「…魔王」

トウルーデが啞然とした表情を浮かべて呟いた。

…魔王。正にその言葉通り、とミーナは思う。

青く燃え盛る巨大な炎。その炎に纏われて姿を見せたのは、燃え盛る青炎の身体を持った魔王。

山羊の角を持ち、イヌ科の頭蓋骨を持った青炎の悪魔。

手には一刀の大鉞。ベルフェゴール本体の身の丈程：全長5mはあろう大きさ。

鋭利さはあまり感じられず。どちらかと言うと“斬る”よりも“断つ”事に特化していそうな…まるで鈍器の様な武器だ。

そして…それを従えるのは『青色（怠惰）』、『白色（高慢）』、
『灰色（嫉妬）』の三つの炎（悪魔）を支配する魔術師…儀國。

「…あれが、Belfegor「煉獄の青焰」の真の力。ベルフェゴールの、本当の
…姿」

ミーナは生唾を飲み込み、その圧倒的力の前にただ恐怖を感じてい
た。

「行くぞ、ベルフェゴール…。あいつ等に遠慮は要らない。全て燃
やし、そしてぶち壊してやれ！！」

ベルフェゴールが魔術師の命に従い、咆哮を挙げる。

「Belfegor「煉獄の青焰」

「デモニックテイアーズ「蒼魔皇の焰涙」！！」

ベルフェゴールが、手にした大鉦を咆哮と共に縦に振り落とす。

一刀の元、小型ネウロイの半数が両断され瞬く間に青い炎に包み込
まれ燃やし尽くされる。

そして、大鉦を振るつたと同時に青い焰の雨が天より降り注ぎ、残
り半数のネウロイを跡形もなく燃やし尽くした。

…一瞬の出来事。小型とは言え30もあつた数を一瞬にして消滅さ
せた。

確かに、儀國の言葉通り下がっていなかったら自分達もあの様にな
っていた。

ベルフェゴールの真の力を見せ付けられた瞬間であつた…。

「くっ……」

ベルフェゴールが、巨大な青い炎が静かに消えていく。それに伴って、儀國も地に倒れた。

「儀國！」

皆一斉に儀國の元へと向かう。

息を激しく切らし、それでも何処か余裕を見せる表情を浮かべている儀國。

「大丈夫か！？　しつかりしろ儀國！」

「…いちいち騒ぐな、バルクホルン。」

少し…疲れただけだ」

「…今のが、お前の真の力…本当のベルフェゴールか？」

美緒が儀國に尋ねる。

一呼吸して、儀國は静かに口を開く。

「…全開…5割程度だが、あれが本当のベルフェゴール、究極七魔の一角にして俺が最初に服従…いや、認めさせた頼れる相棒だ。^{ヤツ}まあ、全開時のベルフェゴールはこの程度じゃないがな…」

「あ、あれで5割ですって!？」

「お前、本当にデタラメなヤツだな…強すぎるだろ」

ペリーヌさんが驚いた様に叫ぶ。

エイラさんの言葉に皆が頷く。

…私自身、今の彼の発言には驚きを隠せなかった。

もし、彼が真の力を取り戻して…さっきのベルフェゴールを使った時。

その破壊力は…街一つ…或いは国一つを一瞬にして滅ぼせる。

どちらにせよ、ネウロイ以上の物だと言うことは…まず間違いない。

「…そろそろ、俺は休むぜ…。少しばかり、張り切り過ぎた……」

そう言っただけはそつと瞳を閉じた。

|||||

ふと、眼を覚ます。

開いた視界に飛び込む、見慣れた医務室の天井。

すぐ近くから聞こえてくる、小さく…可愛らしい寝息。

上半身を起こし顔を向ければ、宮藤が椅子に座ったまま眠っていた。気持ち良さそうに眠っている宮藤。何故彼女がここにいいのか、それは分かりきっている。

「…余計なことを」

『弓』の騎士型ネウロイより受けた傷の殆どが癒えている。

その証拠に、身体に巻かれていた包帯が殆どない。

腕等に包帯がまだされているのは…恐らく宮藤の魔法力が切れたから。

自分の魔法力が、貯蔵庫タンクが空っぽになるまで…俺の傷の治療を行っていたのか。

…誰も頼んでいない、無理をしなくてもいいのに。何故コイツ…アイツ等は俺を助ける？

…大切な仲間だから、と。そう、ミーナはあの時言った。
あの時のミーナの眼は、心友の存在を記憶の奥底より引っ張り出し
てくれた。

忌まわしき過去、懐かしき記憶、大切な心友。

そして何の偶然か。あの時のミーナの言葉、心友も俺に向かって言
った台詞と同じだった。

「一緒に闘おう…か。全く、懐かしい事思い出させてくれる」

口元を小さく緩めて、儀國は呟く。

…どんなに優しく言われようとも、この誓いを破る訳にはいかない。
戦場では誰とも手を組んで戦わない。

独りで戦い、そして人知れず独りで死んでいく。
それが、俺の誓い…。

「……出来は上々って事にしておいてやる。

…礼を言っぜ、宮藤」

ベッドから降り、眠っている宮藤の頭をそっと撫でた。

宮藤は眠っているが、気持ち良さそうな表情を浮かべて応えた。

「……………行くか」

「もう動いても大丈夫なの？ 儀國」

ハルトマンの声が無処からか聞こえてきた。

と、何故か今まで横になっていたベッドの下から、ハルトマンが這
いずり出てきた。

「お前…なんでそんな所に!？」

「ん…なんとなく？」

可愛らしく小首を傾げながら言うが、何となくでベッドの下に潜り込み、潜んでいるというのは絶対に可笑しい。

「まあ、そんな事よりも。大丈夫なの？」

「そんな事で片付けるのか、お前は…。」

まあいい。別に心配は要らない、俺は部屋に帰らせてもらっぜ」

「…まだ、私達の事信じてくれないの？」

何処か、少し悲しげな眼でハルトマンが尋ねてくる。

そんなハルトマンに対し儀國はやれやれ、と溜息を吐いた。

「…愚問だな。俺が答えるまでもないし、問うまでもなくお前達も理解している筈。

戦場ではお前達の力は一切借りない。

戦いにおいて、最も信頼できる物は仲間じゃない。

自分自身…己が培ってきた力と経験だけだ」

儀國はそう言い残し、医務室を後にした。

「…何で儀國は、そんなんだろうなあ…。」

儀國が医務室より出て行った後、ハルトマンは小さく言う。

私達がどれだけ関わろうとしても、儀國はそれを徹底的に避けようとする。

何があつたのか、それは分からないし儀國は一切自分の事を喋ろうとしない。

でも、ここまで徹底的に避けようとする程の…心に深く傷を付けたトラウマがあるのは確実。

その傷を取り除いてあげない限り、永遠に儀國は私達と関わろうとしない。

「ん……」

椅子で眠っていた宮藤が眼を覚ました。

「…あれ？ ハルトマンさん……」

「起きた？ 宮藤、昨日随分と頑張ってたからね」

昨日、儀國が倒れてから大変だった。

休ませてもらうと言ってから全く目を覚まさなかったし、私を庇った分と騎士型ネウロイとの戦闘で受けた傷が全部開いて再出血していた。

とりあえず、宮藤が儀國に治癒魔法を掛けて傷の殆どを完治させた。

「あれ？ 儀國さんは……」

「今起きて出て行っちゃった。相変わらず…儀國は私達のこと信じてないみたいだね」

「そう、ですか……。あ、あの…ハルトマンさん？」

儀國さんは、その…やっぱり怒ってました？」

心配そうな表情で宮藤が尋ねてくる。

…儀國に治癒魔法を掛ける時。宮藤は最初、少し戸惑っていた。

今までから傷を治そうとする度に儀國に素っ気無く返されてきた。

それがあつて宮藤は自分が余計な事をして儀國に怒らるんじゃないか、そんな心配を凄くしていた。

でも、宮藤自身も目の前に重体患者が倒れているのに怒られるのが怖いからって理由で治癒魔法を掛けない、なんて事はしなかった。

「最初は余計なことを…って言ってたけど。

出来は上々ってことにしておいてやる、礼を言っぜ宮藤…だってさ」

「そうですね、儀國さんが…」

私の言葉を聞いて、宮藤はホッと胸を撫で下ろす。

とても嬉しそうな表情を浮かべていた。

…私だけじゃない、皆儀國の事を心から思っている。

ペリーヌやエイラはどうかは知らないけど…、それでも少なくとも儀國の事を大切な仲間だと思っている。

その事に少しでも早く気付いてほしい、そう私は思った。

「…あ！ ミーナからの伝言儀國に言うの忘れてた」

「あれ？」

「よお」

自室に戻る途中、仲間の整備兵と出会った。

「お前、どうしてここにいるんだ？」

「…俺が居ちゃいけないのか？ 新手のイジメか？」

「お前…ミーナ中佐から何も聞いてないのか？」

「？ どういうことだ？」

仲間の言っている事が理解できず、儀國は眉を寄せたと、他の仲間もやってくる。

「羨ましいねえ、美人美少女に囲まれての生活なんてよ〜」

「絶対に生着替え写真俺に寄越せよ！ それで目を瞑ってやるから
！」

「す、少し待て！ 一体どういう事なんだ!？」

訳が分からない、と儀國は仲間達に説明を求める。

すると、背後より人の気配を感じた。

気配はゆっくりと此方に近付いてくる、それに伴い絡んでいた仲間達はそそくさと何処かへと行ってしまった。

「もう傷は大丈夫なのね、儀國」

「アンタか…」

振り返ると、ミーナの姿が視界に映る。

儀國は早速、今の出来事について説明を求めた。

「どづいう事が、説明してもらおうか」

「…ハルトマン中尉に伝言を頼んでおいた筈なんだけど」

「そんなもの聞いてないぞ」

「あの子ったら…いいわ。」

儀國 雅史さん。本日より貴方は私達ウィッチの宿舎にて、一緒に過ごしてもらいます」

「……………は？」

第三章 第六節：『怠惰』の青、和解の策（後書き）

第三章 第六節でした。

これで第三章は終わり。次はいよいよ本格的にウィッチ達との共同生活（？）なお話…になるのかな？
まあ、そんな訳で以上第三章でした。

すわっ！！

外伝：天界人「上」（前書き）

どうも、今回は初挑戦であるコラボ…を書いてみました。

初コラボ企画に協力して下さった「悠久なる時間」さん、本当に有難う御座います。

初めてであり、不慣れということもありますので…もしかしたらご不満・気分を害されてしまうかもしれませんが、どうか読んでみて下さい。

尚、今回は外伝と言うこともあり、言ってしまうえばEフストーリーです。

従って本編には影響しません。

本編に関係してくるネタバレ的な所がチラホラと出るかも…。

因みに、このコラボでの儀國の設定は第三章以降の儀國です。

また、かなり長ったらしくウダウダと書いてしまったので三つに分けて投稿したいと思います。

長文付き合って頂き、有難う御座います。

それでは、初コラボ作品…どうぞ…!!

外伝：天界人「上」

気が付けば、見知らぬ街に佇んでいた。

歴史ある街並み、穏やかでのんびりとした時間が流れている中を過
ごす老若男女。

そんな中に、自分はいつの間にかいた…。

「…何処だ、ここ」

内の思いを、口に出して呟いた。

どうしてここに、この見知らぬ俺は街にいるのか。

少なくともここは日本じゃない、それだけは間違いない。

だが、それよりも大切なのは何故ここにいいのか、だ。

記憶を掘り起こしてみる。

昨日は何をしていた？

学校に通い、なのはとの稽古に付き合い、そして一日を終えた…筈。

何も可笑しな所は…ない。

だが、俺はこの不可解な事象へと巻き込まれてしまっている。

そして寝巻きを着ていた筈が、何故か私服を着ている。

と、ここである新たな違和感を見つけた。

「……………？」

いつもより見える景色が、違って見える。

こんなに世界が違って、“高く”見えていただろうか？

そんな疑問を抱きながら、ふと店のガラス張りの窓を見て…眼を見
開いた。

…一応、自分の意思で肉体年齢を変えることは出来る。

あの世界に居た時は10歳として過ごしてきた。

だが、今視界に入る…窓ガラスに映っている自分は、とてもじゃないが10歳ではない。

17歳の…高校生だった頃の姿がそこに映し出されている。

…あまり思い出したくないが、あの頃と同じ…学生服を何故か身に纏っている。

道理で…、と“少年”は納得した。

10歳と17歳の肉体では、景色が違って見えるのは当たり前という物。

自分の意思で肉体年齢を変えた覚えはないが、今この肉体は17歳の頃の物となっている。

試しに、10歳の肉体年齢にしてみようとしたが…何故か出来ない。こんなこと今までなかったのに、何故…？

「……………」

愛機は…ちゃんと手元にある。

この見知らぬ世界で、愛機があることだけは救いと思えた。

「ベネファア、ここが何処なのか…少し調べてくれないか？」

右手の腕輪、その深紅の宝玉がきらりと輝く。

《はいマスター、少々お待ち下さい》

愛機　　ベネファアが応える。

数秒して、ベネファアが答えた。

《ここは…ローマのようです》

「ローマだつて!?!」

ベネファアの答えに思わず驚いてしまった。

日本から結構離れた国に、どういう訳か今俺はいる。

言われて周りを見回すと、確かにローマだと決定付ける物があった。学校の歴史の授業、教科書でしか見た事がない古代円形闘技場…コロッセオが見えた。

そして少し歩くと、観たことはないが『ローマの休日』で有名なシーンと言われる真実の口もある。

…ベネファアの言う通り、ここは本当にローマみたいだ。でも、何故俺はローマなんかに？

《ただ…》

と、ベネファアが少し戸惑うかのような口調で静かに語った。

《検索してみたところ、このローマ…この世界そのものの時代が、1945年代みたいです》

「……へ?」

愛機の言葉に、少年は間の抜けた声を出した。

「今日は休み…か」

シフト表を見て、儀國は呟く。

魔術師として活動するように命令されてからも、シフト制なのは変わりなし。

そして今日は有難いことに休みの日だ。

仕事をしなくていいし、何より…ウィッチ達と関わらなくて済む。

給料も入った、ならまた街へと出掛けて買い物に行こう。

アルヴァヌの店で、また何か掘り出し物があるかもしれない。

「よっし！」

思わずガッツポーズを取る。

急いで自室へ。

クローゼットを開き、依然買った服に着替える。

黒のスボンに白の半袖のワイシャツで身を飾る。

ダサくもないし、なにより動きやすい。そして、気に入っている…。

かの有名な漫画に登場する邪眼の王も、こんな感じの服装だった気がする。

軽く身支度を整えた後、そのまま基地裏側通路へ足を向ける。

と、そこで二人のウィッチと出会った。

「むっ？ 何処かへ出掛けるのか？」

バルクホルンとハルトマンの二人と出会う。

バルクホルンの問いに、儀國は静かに答える。

「…街に少し行くだけだ」

「買い物に行くの！？ じゃあ私お菓子が欲しい！！！」

「お前に必要なのは目覚まし時計だ！ いい加減早起きするという習慣を身に付ける！」

「え〜お菓子欲しいよ〜。お菓子お菓子お菓子お菓子お菓子。儀國お菓子買ってよ〜買って来てよ〜ね〜」

ハルトマンの発言に、バルクホルンが怒鳴る。

バルクホルンの怒鳴り声に、駄々を捏ねるハルトマン。そして買って来い、奢れと言い出す始末…。

今の発言からして、ハルトマンのゴミ広場ならぬ部屋にはまだ目覚まし時計はないらしい。

となれば、まだこの世界は5話にも行っていないようだ。尤も、どうでもいいことではあるが…、と儀國は思う。

「ところで儀國、お前どうやって街に行くつもりだ？」

「…歩いてだ」

「歩いて！？ 車も何も使わずにか！？」

「車の扱い慣れてないんだよ」

MTだから、とは言わないでおいた。

以前も歩いて行ったが、特に問題は無い。疲れるような距離でもないし、一時間半もあれば充分なものも立証済み。

と、それを聞いたハルトマンがいい笑顔を浮かべて、

「じゃあ私が運転してあげるよ！」

「な、何を言っている！？ お前は今日休みじゃないだろう！」

街までの運転を申し出て、バルクホルンに怒られる。

有り難い申し出…ではあるが、要らない。

ハルトマン程、注意しなければならぬ女性はいない。

コイツは…本当に何を考えているのか分からない。

「いや、いい。歩いてでも充分に行ける。

前もそうやって行ったからな」

「ま、前にもだと？ 歩いて行ったことがあるのか、お前は」

儀國の発言に、バルクホルンは思わず聞き返していた。

無理もない話しである。

この第501統合戦闘航空団基地からローマまでかなりの距離がある。

車を使用しなければ、2時間程度の時間は費やす。

一体どうやって…、と思ったと同時に。

ああ、なるほど…、と納得することが出来た。

儀國 雅史の身体能力は我々の常識を逸脱している。

魔法の行使もなしに、あのリベリアンの『高速』と同等…或いはそれ以上のスピードを出せる。

儀國なら、車などを使わずとも己の身体能力だけで街に行ったとしても不思議ではない。

儀國の言う徒歩も、きっと通常の徒歩ではないんだろう。

しかし、だ。そうだとしても、徒歩と言う移動手段で街まで言った儀國には流石に呆れた。

凄いと感心する部分もあるが…。

それでも、普通は徒歩で行こう等とは思わない。

「そういうことだ。気持ちだけは有難く受け取っておく…が、余計な気遣いはいらぬ」

私達の間を通り抜け、儀國はそのまま基地を後にした。

「ちえ、折角街に行って遊べると思ったのに。後お菓子い…」

「いい加減にしるハルトマン！ 行くぞ！」

「へい…ハア」

やる気なく、心底面倒臭そうに答えるハルトマンを見て、バルクホルンは大きな溜息を吐いた。

|||||

ローマの街に着く。

今日も今日でネウロイと戦争中とは思えない程、穏やかな空気が流れている。

いつもと変わらぬ街の様子を見ながら、儀國は早速アルヴァヌの店へと足を運んだ。

「これは、いらっしやいます」

「よう。今日は何か掘り出し物……ん？」

儀國の視線が一つに定まる。

他の商品よりも一際目立つ商品があった。

それは以前購入したナイフの様な武器でも、怪しげな雰囲気を放つ壺でもない。

綺麗に光り輝く宝石。その宝石が入った布の小袋だった。

「宝石売ってるのか？」

「相変わらず、貴方はお目が高いようで…。

宝と言つ宝を求め、虐殺と略奪を繰り返してきた強欲な盗賊に盗まれたと伝えられる宝石です。

この宝石には盗賊によって命を奪われた者の怨念が込められており、持ち主に災いを齎すとも……と言つのは冗談です」

「冗談かよ！」

「ロマーニヤンジョークってヤツですよ」

アメリカンジョークみたいなノリで、アルヴァ又は言う。

こんなキャラクターだったとは予想外だった。

「で、真面目な話。これは普通の宝石です。

何でもかんでも、訳あり商品売っている訳ではありませんからね？」

「そうか…しかし、宝石か」

儀國は宝石を見つめて、暫く考える。

この宝石自体の値段にもよるが、今後の事を考えて購入はしておきたい。

騎士型ネウロイを斃した時、早かれ遅かれ『強欲』の力は蘇る。

だが、蘇るだけでは意味がない。力を得る為に支払う“対価”が必要だ。

出来ればここで購入しておきたい。

問題は…やはり値段。この宝石が幾らするかにもよる。

「コイツ…幾らだ？」

「そうですね、これ全部出だと…これぐらいです」

「高いな……これぐらいで」

「えっ！？ いやいやいや！ それはちょっと幾らなんでも…私にも妻や子もいますし」

「アンタ既婚だったのか…ってじゃなくてさ」

暫くの交渉の末、今月分の給料半分で買い落とすことが出来た。

随分と高い買い物ではあったが、今後を考えれば…まあ仕方ないと言えよう。

何はともあれ、これで『強欲』の悪魔は猛威を振るう為に天空へと羽ばたく翼は得た。

残りの騎士型ネウロイは…後3機、何と少しでも斃さなければ。

「じゃあ、俺はもう行くわ」

「ええ、またのお越しお待ちしております」

アルヴァ又に別れを告げ、儀國はその場を後にする。

「さてと、そろそろ飯でも食いに……いや、まだ早いか」

アルヴァ又の露店で買ひ物を終えて、当てもなく街を歩いて回ると、儀國の眼に一人の少年が映った。

本能が告げる。

「……………ッ」

怪異…ネウロイ、あれは違う。

あれ等には中身がない、空っぽの存在。

余計な感情や思考を一切取り払われ、人類の殲滅及び世界の侵略のみを純粹に行う機械。

騎士型ネウロイは…あれは別格だが。

だからこそ、この世界では初めてではないだろうか？

今まで対峙してきた者…“人外”という存在に出遭ったのは。

見た目は何処にでもいそうな高校生…年齢も、恐らくバルクホルンと同じぐらい。

黒の中に、銀色の髪が混じっている…何とも不思議な髪をしているが、アレは外観こそ人間の形をしているものの…中身は全くの別物だ。

魔的な物は一切感じられない、純粹で…神々しい輝きをアレからは

感じる。

…どちらにせよ、人外というカテゴリー内のモノであることには変わりない。

すると、向こうも俺に気付いたのか…。

そして、何処か驚いた様な表情を浮かべて眼を少し見開いた。

これからどうしようか、と少年は悩んでいた。

ベネファアによる説明では、ここは1945年代のローマの街。

何故過去の世界にいるのか、そんなこと知る筈がない。

ただ一つ理解しているということは、今この状況は自分にとって絶望的であるということ。

周りには自分を知っている人間はおるか、自分が知る物すらない。

それに、ここはローマだ。海鳴市…日本の様に日本円は当然使えない。

両替所さえあれば、と思いついたが1945年代で1000円札がある筈もなく…。

そんな状態で両替してくれと頼んだら、確実に怪しまれ下手をすれば即刻警察行きだ。

「こんな時、お金を生み出す神術があつたらなあ…」

その時、視界に一人の男が入った。

何気なく、その男に視線を向ける。

「ッー!!」

鼓動が跳ね上がる。

一瞬で理解してしまった、目の前の男の本質。

外観は今の俺よりも年上。多分、19か20歳ぐらい。

白い半袖のワイシャツに黒い長ズボンと、シンプルな服装をしている。

でも、常人とは思えない覇気。そして…桁外れの強さを感じる。

頭の中に浮かんだ、目の前の男の印象は…“悪魔”だ。

「…なるほど」

不意に、男が口を開く。

「この世界で、まさかお前みたいな“人外”と出会うなんてな…」

「ッー!？」

少年は驚いた。

この男は、俺の事を理解している。

俺が普通の人間じゃない、天界人であることを一瞬で見抜いた。

やはり、この人は只者じゃない。

「怪異の新しい兵器か、それとも俺の様な迷い人か。

いずれにせよ、お前はこの世界の人間じゃないようだな」

「怪異…兵器？ 迷い人？ 貴方は…何言って

」

るんだ、そう言葉を繋げようとした時。予想外の出来事が起きた。

穏やかな街に突如鳴り響くサイレン。
そのサイレンが鳴った途端、人々の表情に恐怖の色が浮かび上がり
逃げ惑う。

その突然の状況についていけない中、男だけはその場に留まり此方
を見据えている。

「な、何だ!? 一体何が起きたんだ!？」

「敵さんのお出ましたな…」

男は静かに言った。

「敵？」

少年は男に聞き返す。

男は質問に答えない。ただジッと、少年の背後を見据えている。
その視線を追って少年は振り返った。

「……なっ!？」

少年は驚きの声を出した。

穏やかなこの街に突如として現れた、黒き異形の者達。

姿形は、中世の騎士を思わせる外観。

それらは手より赤く発行する刃を具現させ、街を壊し始めた。
逃げ惑う人々、破壊活動を続ける黒い異形の騎士達。

のんびりとしていた平和なこの街は、一瞬にして地獄絵図へと変わ
った。

「アイツ等…俺が斃した筈なんだけどな。
同じような力を持ったヤツがいるのか…？」

「なっ…何だよアイツ等！？」

《マスター。検索してみたところ、あれはネウロイと呼ばれる怪物
です。

ですが、あの様な形態の物は資料に載っていないかった筈…》

「ネウロイ…ッ！」

ベネファアの言葉を聞いて、記憶が蘇る。

ベリオグラート統括管理センターの資料室で、ふと眼にした物がある。

その資料に記載されていた内容とは、魔女と呼ばれる存在がネウロイという怪異と戦うという世界の物。

魔女…と言っても、トレードマークのトンガリ帽子を被り箒に跨って空を飛ぶ…なんて物じゃない。

戦争…人間と人間、国と国とが争う為に用いた戦闘機をモチーフにした、『ストライカーユニット』と呼ばれる機械を両足に履いて空を飛ぶ。

それがこの世界の魔女…らしい。

そして…自分達で言う下着をズボンと呼んで履いている、なんとも不思議な習慣。

何だこれは、と思わず資料にツッコミを入れたのは…懐かしい記憶だ。

《マスター。どうやらここは“ストライクウィッチーズ”の世界の
ようです》

「ここが…ストライクウィッチーズの…ッ」

「おい」

男の声で、少年は思考を中断させ我へと返る。

男は相変わらず、此方を見据えたままだ。

「腕輪とお話は済んだか？」

どうでもいいが、さっさとお前も逃げたらどうだ。

戦えないヤツがここにいるても無価値だ」

「ッ！ 悪いけど…俺は戦える術を持っています。

人を…皆を護れる力を！」

少年は答える。

と、男は不敵な笑みを浮かべて親指で路地裏を指差した。

「なら、ついてこい。このままじゃ…お互い一般人に丸見えだろ？」

そう言つて先に、男は路地裏へと入っていく。

その後が続いて少年も路地裏へと入った。

人々の悲痛な叫び声が絶えず聞こえる中、少年は愛機に話しかける。

「行くぞ、ベネファーー！！」

《了解。セツトアップ開始、バリアジャケット装着》

ベネファーの言葉と共に、服装は一変。

バリアジャケットへと包まれる。

男はほう、と関心を示す声を出した。

「なるほどな。どうやらお前も、俺と同じ迷い人らしい。

それ…デバイスだな。ということは、お前はリリカルなのは世界の住人ってことか。

これはまた…随分と掛け離れた他作品から来たもんだ」

「なっ…どうして貴方はデバイスの存在を知ってるんですか!？」

「…そんな事、今はどうでもいい。まずは問題を解決するのが先決。ウチの魔女達も気付いただろうが、直ぐにはこられないだろう。

戦える術があるなら、今自分が何をすべきかは理解している筈だ。

そうだろ？ 人外。いや、今は魔導士って言う方が正しいか…」

…確かに、この人の言う通りだ。

今は問答し合うよりも、あの黒い怪物…ネウロイを斃さないで街に被害が出る一方だ。

「…分かりました。とりあえず、あのネウロイを斃してからにしましょう」

「それでいい。ああ、それから余計なことをベラベラと喋るな。

いらん混乱を招くことになる」

そう言っつて、何処から取り出したのか。

ボロボロと茶色のローブで全身を覆い、右手に幾重にも色鮮やかな細い布を巻きつける。

そして、悪魔…または死神を連想させるお面で顔を隠した。

「素性を知られるワケにはいかねえんだよ。

それじゃ…さつさと終わらせるぞ」

男は路地裏より飛び出す。

「よし、俺達も行くぞベネファー！ 刀！」^{ソード}

《了解。ソードモードへと移行します》

一振りの太刀が手に現れる。

その柄をしっかりと握り締め、少年も路地裏より飛び出した。

ローマの街は混乱と恐怖に満ちていた。
突然何の前触れもなく突如として、この街に姿を現した数多の人型の怪異。

どうして人の形をしているのか、など今思うのはあまりにも愚問。
どんな形をしようとして、やつ等が現れた理由はただ一つに過ぎない。

…破壊、この世界の侵略。人類の駆逐をせんが為に怪異達は猛威を振るう。

だから戦う術がない者は、逃げる。たった一つしかない弱い命を護る為に、ただひたすら…遠くへと逃げるしか方法がないのだ。

ウィッチ達は…まだ到着してはいない。

誰がどう見ても、絶望的としか言いようがない。
が、不意にそれは訪れる。

音もなく、突如それらは現れた。

一人は顔を不気味な仮面で隠し、小汚い茶色のローブで全身を包み込んだ者。

そのローブより露出されている右腕より、青い炎が燃え上がる。手が触れ、焰は怪異を飲み込み…一瞬にして跡形もなく燃やし尽くす。

一人は鼻より上を黒のバイザーで隠し、青と白を基準とした清楚なる姿をした者。

左手には一振りの剣。折れず、曲がらず、斬れる…その美しさより美術品としても有名な、扶桑皇国に古来よりある剣（刀）…。

珍しい色、形ではあるもの…そこはやはり扶桑刀。

一刀の元、ネウロイの身体を切り伏せる。

天より天使が、地獄より悪魔が。

悪魔は地獄の業火を以って悪の魂をも燃やし尽くし、天使は神の剣にて悪を切り裂き罪を裁く。

今この光景を言い表すのならば、こう言った方が正しいだろう。

そして、平和を乱す悪しき者共は全て葬られた。

この世界に君臨した、悪魔と天使の手によって…。

啞然と、人々は目の前で起きた光景にただ我が眼を疑っていた。

疑う反面、二人の存在に見入っていた。

と、二人が顔を見合わせる。

暫くして、天使が空より舞い上がる。そして瞬く間に青の中へと解けていった。

地に残るのは、煉獄の青い焰を操る悪魔。

悪魔はそっと、右手を地に触れる。刹那、青の焰が激しく燃え上がり、辺り一帯を凄まじい熱気に包み込む。

灼熱地獄を生み出そうというのか、と思ったもの束の間。

熱気は一瞬で収まる。その一瞬で、悪魔はこの地より去っていた…。

ざわざわ、と逃げ惑っていた人々はただただ驚いていた。
そんな様子を、路地裏よりこっそりと覗く。

「…心配するな。お互いに顔はバレてはいない筈だ…多分な。
お前はバリアジャケットの時にバイザーをしていたし、問題ないだ
ろっ…多分」

壁に凭れ掛かり、両腕を組んでいた男が静かに言った。

そしてそのまま、路地裏を通って人のいない反対側へと出る。
その後を追いながら、少年は男に尋ねた。

「…それよりも、聞かせて下さい。どうして貴方は、デバイスの事
を知ってるんですか？」

「…そうだな。まず俺の事を話しておこう。
その代わり、俺が喋ったらお前も自分の素性を出来るだけ話す…い
いな？」

男の言葉に鏡は静かに首を縦に振った。

「そ、そんな事が…」

鏡は驚愕していた。

男：儀國 雅史さんより聞かされた話。

この人はこの世界の人間じゃなくて、別の世界…平行世界から来た魔術師。

そして儀國さんの世界ではこの世界…ストライクウィッチーズの世界が二次元として知られているということ。

そして今は、何の因果か分からないけどこの世界に来て、第501統合戦闘航空団基地で整備兵としての役割を与えられ、渋々働いているらしい…。

「天界人ね…魔的な物は沢山見てきたが、まさか神様に逢えるなんてな。

生きてる内に拝めることが出来てよかったな」

「いや、俺は神様じゃなくて天界人です」

「どうでもいいだろ、似たようなモノだし。

…それにしても、お互いに何の因果だろうな。

もしお前がこの世界に来れた原因さえ分かれば、俺も帰れるかもしれないけどな…」

「確かに…そうですね」

儀國さんの言うことも尤もだ。

何故俺や儀國さんが、このストライクウィッチーズの世界に居るのか。

お互いに原因が分からない。前触れもなく突然に、だ。

一体何故…俺はこの世界へと居るんだろう。

と、不意に儀國さんが口を開く。

「…呼ばれた、って考えるのか妥当か？」

「えっ?」

「…いや、独り言だ。それに、確証はない。それよりも、お前これからどうするんだ? 自分の世界に帰るのか?」

「えっと…」

《マスター、ここから北部より多数の魔力反応を感じます。恐らく、この世界の魔女…そして501のウィッチの方々かと》

「ようやく到着…か。随分と遅い到着だな」

「…儀國さん。俺、暫くこの世界に残ってみようと思います。なんだか面白そうですし、ウィッチという方々にも是非会ってみたいです。」

それに…お金もないし行く当てもないですから」

「…それはつまり、501に来る…ということか?」

儀國さんの問いに俺は頷く。

すると、眉を寄せながら…何処か不機嫌そうな態度で言う。

「やめておけ。お前は来ない方がいい…いや、この世界の「軍」に関わるべきじゃない」

「…どうい事ですか?」

「分からないのか? 簡単な話、お前はいい様に利用されるとい

ことだ。

お前なら、奴等に関わらなくても生きていけるだろ？

忠告しておいてやる、やめておけ」

「……………」

今の発言は、事実なんだろうか？

そんなことを、ふと思う。

何故この人がこんな事を言うのか、それは分からない。

儀國さんが整備兵と所属している501のウィッチについて、情報はほぼ皆無。

資料は眼を通したけれど、どんな人物なのかまではよく憶えていない。

儀國さんの言う様に、残酷な心の持ち主なんだろうか…本当にそうかもしれない。

だけど…、

「…儀國さん。ウィッチの人は皆ネウロイと戦ってるんですよ？」

「皆かまでは知らないが…まあ、そうだな。この世界で唯一活躍できる…ネウロイを斃せるのは事実上、ウィッチだけだな」

「…ウィッチが、女性の方がネウロイと戦っている…この世界の理なんでしょう。」

「ただ、俺がこうしてこの世界にいる以上…俺はその人達の力になりたいし、護りたい。」

「ただのんびりと見ているだけは、俺はしたくありません」

「俺の力は俺の為にあるんじゃない。」

皆を護る為に、この力がある。
そう答えると、儀國さんは心底呆れた様な表情を浮かべて踵を返した。

「…忠告はした。後はお前次第。

今の言葉を取り消すつもりがないのなら…俺に付いて来い。
ただし、後は何があっても自己責任。

…後悔だけはするなよ?」

路地裏から儀國さんが出る。

その後が続いて路地裏から出ると、儀國さんは空を見上げていた。
何を見ているんだろう、と空を見上げようとして

「儀國！」

上空から数人の女の子が降りてきた。

…思わず見惚れてしまった。

資料で見た少女達が、目の前にいる。
予め見ていたとは言え、実際に眼にしてみると皆可愛い子ばかりだった。

「…随分と、遅い到着だな」

「ネウロイは…お前が斃したようだな。
ところで、後ろの少年は?」

右目に眼帯をした女性が左目で此方を見ながら、儀國さんに尋ねる。

「ああ…面白いヤツを拾った」

…まるで犬猫を拾ったかのような紹介を、儀國さんにされた…。

外伝：天界人「中」（前書き）

中篇です。

今回はほのぼの+バトルがメインの話です。

外伝：天界人「中」

第501統合戦闘航空団基地、ミーティングルーム。

第501統合戦闘航空団基地に案内され、早速俺への質問攻めが始まった。

なるべく彼女達を困惑させないよう、ある程度の事実だけを伝える。この世界の人間じゃないこと。

自分はこの世界にない力、神術：魔法が使えるということ。

この二つを彼女達、ウィッチに伝える。

反応は…予想通り、皆驚いていた。その驚いた表情が可愛かった、と思ったことは心の中に仕舞っておく。

俺の処遇をどうするか、この部隊…501の隊長だと言うミーナさんが眼帯をした女性、坂本さんに尋ねる。

と、ここで儀國さんが口を開いた。

ただ一言、俺の方を見てコイツは強い…と。

それだけを言つとミーティングルームから去っていった。

…少しとは言え、あの場で俺と共闘した儀國さんの証言だからだろ
う。

ミーナさんは帰れるまでの間この基地に置く代わりに、魔女…ウィッチと同じように働いてもらう、という条件を提示された。

無論、断る理由は何処にもない。寧ろ、此方からそうさせて欲しいと願い出るつもりでもいた。

「それじゃあ改めて、神代 鏡です。

帰れるまでの間ですが、暫くお世話になります。よろしくお願い致します」

「此方こそ、よろしくお願いね。鏡君」

ミーナさんと握手を交わす。

この世界の人間じゃない、ということもあり彼女達が受けて入れてくれるか不安だった。

けれども、その心配はどうやらなさそうだ。

こうして俺は、暫くの間第501統合戦闘航空団の魔術師^{ウィザード}として働く契約を彼女達に交わした。

…ただ、一つ疑問に思ったことがある。

それは俺と同じ違う世界…地球からこの世界に来たという魔術師…儀國さん。

あの人はずっと何も喋らず、我関せずと言った態度を取り続けていた。

それに、儀國さんが彼女達を見る眼…同じ部隊に、仲間だと言うのに敵意を感じさせる眼をしていた…。

それに、儀國さんも自分が異世界から来たという事を彼女達にはまだ伝えていないらしい。

その理由も教えてくれなかった。

俺がその事を彼女達にも教えようとすると…余計な事は絶対に口にするな、と言われてる以上俺の口からは言えない。

「では、暫くの間私達の宿舎にある空き部屋を利用して下さい。

宮藤さんとリーネさん、彼を案内してくれるかしら？」

「はい！ えっと…宮藤 芳佳です。よろしくお願いします、鏡さん」

「わ、私はリネット・ビショップです」

ああ、この子達が…と鏡は二人を見ながら思い出す。

かつて資料で見た、501に所属するウィッチ達の情報。そこで一番最初に見たのが、今名乗った二人の少女。

宮藤 芳佳とリネット・ビショップ。

二人は心友で固い絆で結ばれている。

彼女達の得意とする合体攻撃でネウロイを撃墜したとも、確か資料に書かれていた。

資料に書かれてあった通り、とても純粹でいい子だ。

今頃俺を心配しているだろう、なのはと似た雰囲気…二人からは感じる。

「よろしくね、宮藤さんにリネットさん」

二人と握手を交わし、早速部屋へと案内された。

第501統合戦闘航空団に魔術師として雇われてから早三日。

朝、起床ラッパとベネファアの声で目を覚ます。

いつもの様に目覚めて、いつもの様に皆と食堂で朝食を食べる。

そして…俺のこの基地での一日が始まる。

「鏡、今日もよろしく頼むぞ」

「はい、では此方もよろしくお願い致します」

朝食後、まずは坂本さんとの訓練から始まる。

坂本さんは日本…この世界で言う扶桑刀を主武装として戦う。

そんな坂本さんと木刀を用いて訓練をすることが朝の日課。刀を主武装とするだけあり、その腕前はかなりの物と言える。けど、実際では断然俺の方が上だ。身体能力も勿論、対人戦においても。

訓練後は坂本さんに思った事をアドバイスし、それが終わった後は宮藤さんとリーネさん、ペリーヌさんの訓練と一緒に受ける。俺自身、まだまだ未熟って言うこともある。

当然、彼女達との差は大きく出るのは当たり前だが…。

昼食は勿論皆と食堂で。

宮藤さんとリーネさんの作る食事はとても美味しい。ローマで本格的な日本…扶桑食が食べられるのは、とても嬉しい。皆も気に入っている。けど、ただ一つだけ皆がなかなか手を付けようとしない物がある。

それは…納豆、日本の食卓には決して欠かせない食べ物。扶桑出身である坂本さんと宮藤さんは勿論、俺も大丈夫だが他の面子は違う。

まあ、外国人が納豆が好きだ…って言う人はごく僅かだと思う。バルクホルンさんは食べているには食べているけど…かなり必死な様子だ。

「あの…俺が食べましようか？」

隣の席に座っているペリーヌさんに一声掛ける。

宮藤さんが美味しいから食べて欲しい、と言ってもペリーヌさんは頑なに断り続ける。

個人的には身体にもいいし食べてもらいたい所だ。

が、嫌いな物を人に無理矢理勧めて食べさせるのはよくない。

かと言って折角作ってくれた人への思いを無碍にもしたくない。

なら、ここは好きな自分が彼女の分まで食べればいい。

「へっ？ よ、よろしいんですの？」

鏡の申し出に、ペリーヌは嬉しそうな顔を一瞬浮かべて

「ッ！ し、仕方ありませんわね。そんなにこの腐った豆が食べたいのなら、遠慮なく差し上げますわ」

「相変わらずツンツンだなー、お前」

エイラさんがペリーヌさんに呆れた様子で言った…。

確かに、ペリーヌさんはいつも強気な態度でいる。

彼女は貴族、貴族の令嬢としてのプライドとかもあるからだろう。

エイラさんが言う様に、そして資料にも書いてあった様に彼女はとてもツンツンとしている。

その反面、本当はとても心優しい持ち主だ。

こう言うのを、俗に言うツンデレってやつだろう。

昼食後は休憩。

そして必ず、休憩になると俺の元にやってくる人物が一人居る。

「かつがみ〜！」

第501統合戦闘航空団の中で最年少のウィッチ、ルッキーニがやってくる。

彼女はよく俺に神術を見せて、とせがんで来る。

幼い彼女は好奇心旺盛。そして遊び相手として俺をよく誘ってくれる。

なのはがこの場にいたら、お姉さん…と言うよりも良い友達として

なつてくれそうだ。

「ねえねえ！ 今日ね、いっぱいピカピカってカッチョイイ虫見つけたんだ！

鏡にも見せたげる！」

「へえ、それは楽しみだなあ」

ルッキーニの無邪気さに自然と口元が緩む。

…ストライカーユニットを纏い、銃を手に空へと駆り、怪異と戦う…。

そんなウィッチであるルッキーニも、まだまだ幼い子供。

本当ならば、学校に通い友達と楽しく過ごしていても可笑しくない時代が時代…そして魔女としての力を持っているが故の、逃れられない運命。

「…ルッキーニは偉いね」

「うにゃ？ どして？」

「まだ子供なのにさ、ネウロイと戦って…世界を、皆を護っているからだよ」

「ん〜、そかな？」

不思議そうに、ルッキーニは小首を傾げた。

子供だからか、それとも戦場に長く出ていることで感覚が麻痺しているのか…。

どちらにせよ、俺は…この子を護ってあげたい。

俺がこの世界に居るまでの間はだけでも、せめて…。

鏡はルツキー二の頭をそつと、優しく撫でた。

ふと、ミーティングルームへと赴く。

理由は至ってシンプル、ピアノの音色が聞こえてきたから。

ミーティングルームにピアノが置いてあることは知っている。

誰が弾いているんだろう、と部屋を覗くと二人のウィッチの姿があった。

銀色のセミロングに天使の様な雰囲気を現す少女…名前は、サーニヤ・V・リトヴァク。

彼女はピアノの向かって座り、そして鍵盤を叩き綺麗な音色を奏でている。

その横では、いつも彼女の傍にいるエイラさんの姿も。

ハルトマンさん曰く、彼女達は出来ている…とか。百合、って言うヤツ…だと思う。

「あ、鏡だ」

「あ、鏡さん…こんにちは」

二人が俺の存在に気付き、サーニヤちゃんは演奏を止めた。

「ゴメン、邪魔した…かな？」

「いいえ、大丈夫です…。鏡さんは、どうしてここに？」

「とても綺麗な演奏が聞こえてきたからね、ちょっと」

「当然だろー。サーニヤのピアノは世界一だからな」

少し自慢げに、エイラさんが言う。

対しエイラさんの発言に、サーニヤは恥ずかしそうにそんな事ない、と言う。

…やっぱり、二人はそういう関係なのかもしれない。

人の性癖、誰と愛し合っているか…そこにツツコミを入れるつもりはないけど…。

でも個人的意見としては、ちゃんとした恋愛と付き合いをして欲しい。

「まったく、アイツもお前みたいな性格だったら…もう少し可愛げがあるんだけどなあ」

「アイツ…って？」

「儀國だよ、アイツは本当に素っ気無いし優しさの欠片なんて…まあ本当に少しだけあるけど、それでもペリー以上にツンツンだな」

「…えっとさ、儀國さんのこと…少し教えてくれないかな」

鏡は二人に、儀國について尋ねた。

「…で、何の用だ？」

ハンガー前の滑走路。

仕事でだった儀國さん呼び出したことでかなり不機嫌そうな表情

を浮かべているが、そこで俺は儀國さんに尋ねた。

「一つ、聞きたいことがあります。」

どうして、貴方は彼女達にそんな態度ばかり取るんですか？」

鏡は儀國に尋ねた。若干の怒りを孕ませて…。

あれから、エイラさんとサーニヤの発言に加えて他のウィッチのメンバーにも儀國さんについて尋ねた。

皆が証言する儀國さんは殆どが一致している。

素っ気無い、冷酷、悪魔…。これが彼女達が証言する儀國 雅史という人間。

「…何を言われたか知らないが、それとも何を考えての行動なのか…。

て言うか、それを聞きたいが為に俺を呼び出したのか？ お前…。

俺今仕事中だぞ」

「…貴方は、何故彼女達の優しさを無碍にするんですか！？」

彼女達は皆優しいし、いい人達だ。そんな人達の思いやりを貴方は

…！」

「ふっ…何かと思えばそんなくだらないことか。

優しさ、ね。お前は予想以上にお人好らしい…」

嘲笑うように、儀國さんが言う。

「じゃあ聞いてやる。お前は何を感じ、何を以って優しさとして認識する？」

ただ気遣ってくれるヤツが優しいヤツなのか？

心配して声を掛けてくれるヤツが優しいヤツなのか？」

「…どういう事ですか？」

「お前はある程度、この世界に対しての知識があるみたいだが…勉強不足だな。

いいか？ あいつ等は俺もお前も、ただの一戦力としか見ていない。あいつ等の優しさは本心じゃなくて仮初、演技。全部まやかした」

「そんな事ない！

彼女達は、そんな人達じゃない！」

鏡は儀國の発言に対し強く反論した。

「この基地に来て、僅か三日足らずのお前が何故そうだと決め付けられる？

いいか？ この世界の魔女達にはある弱点がある。それは…純潔を穢されれば魔法力が失われる、という設定だ。

つまり、異性と交遊するということはネウロイと戦う為の戦力を失う、と言う訳だ。

この部隊もそうだが、他の部隊でもそう言った事が起きないように異性交遊禁止令を出している所は少なくはない。

この世界での男性キャラは皆裏方役。

その裏方役はウィッチとの必要以上の会話は勿論禁止、破れば軍法会議で…ズドンッ、だ」

「…つまり、何が言いたいんですか？」

「分からないか？ 異性交遊禁止令という軍規があるにも関わらず、アイツ等は男である俺達と関わってこようとする。

もうここまで言えば分かるだろ？ 向こうは初めから俺達を仲間として見ていない。

…言っただろ？ 俺について来れば、利用されることだけは覚悟しておけ、と。

ここは戦時中の世界、人間同士じゃないがな。

が、やつ等はネウロイとの戦争にさっさと終止符を打ちたいが為に必死だ。

そこに俺やお前と言った飛びっきりの戦力が現れた。

お前がもしこの世界の住人で、軍人だとしたなら…この戦力が現れたら何としてでも、この世界に留めておきたいって思うだろ？」

違う、とは言えなかった…。

儀國さんが言っている事にも、一理がある。

儀國さんは続けて言葉を放つ。

「もし俺やお前が、何の力を持たない一般人だしたら…あいつ等は見向きもしない。

放逐されてこの世界で人知れず孤独死を迎えるか、或いはネウロイに攻撃で一瞬で殺されるか、この二つ以外に道はない…。

仮にもし、俺達が今力を失ったとしたら…今までの態度が嘘の様に変わるといふことだけは断言しておいてやるぜ。

俺でも足手纏いになるヤツが出てきたら即座に追い出すな…」

「……………」

「話はもう仕舞か？ ならさっさと帰れ。

俺は仕事なんだよ」

そう言って、儀國さんはハンガーの中へと消えていった。

残された鏡は暫くその後ろ姿を見つめた後、その場から静かに立ち去った…。

|| || || || || || || ||

あれから、暫く考える。

儀國さんが言った言葉の意味…。

ただ単に素っ気無く、しているわけじゃない。ちゃんとした理由があつてこそ、彼女達にそんな態度を取っているんだと知った。異性交遊禁止令…そんな物がある事自体、俺は知らなかった。多分、資料には書かれているんだろうけど、俺が見逃していたただけだと思う。

しかし、だ。本当に…そうなのだろうか？

彼女達は、本当に俺を…儀國さんをそんな風にしか見ていないのだろうか？

…俺には、とてもじゃないがそうは思えない。

そんな事を考えながら廊下を歩いていたら、曲がり角より話し声が聞こえてくる。

覗くと、二人のウィッチと一人の整備兵が話し合っている。

宮藤さんとリネットさん、そして儀國さん…。

「あ、あの…一緒に夕食を」

「要らない。俺は俺で整備兵の連中と食べる。

…俺に関わるなっつても言っただろうが」

「っっ」

「ッ!!」

鏡は曲がり角から飛び出し、そして

「彼女達に謝れ!」

儀國の胸倉を掴み、睨んでいた。

突然の出現に、二人は驚き: 儀國は平然とした態度を取っていた。

「…いきなり現れて謝れ、とはどういうつもりだ?」

「: 儀國さん、貴方が言っていることは事実かもしれない。

だけど、彼女達を泣かせるような事だけは絶対に許せない!」

リネットさんも宮藤さんも、今にも泣きそうな顔をしていた。

: どんな理由があったとしても人を傷付けて泣かせることは、許せない。

「謝れ!」

「……ガキが」

儀國さんの態度が一変する。

この三日間で初めて見た、怒りの表情。

いつもは素っ気無く、能面を浮かべている所しか見ていない。

だけど今、ハッキリと怒を現す顔へと変わった。

「御人好しのガキが: お前を見ていたらイライラして仕方ない。

俺に関わるな、そう何度も“警告”している筈だがな:」

「…謝れ、“儀國”！」

「…上等だ。表に出ろ、お前は一度…ボコボコにしないと気が済まない。

死んでも責任は取れないがなあ…」

「……………ッ！」

睨み合ったまま、二人は基地の外へと出て行く。

突然の出来事と、その展開についていけず。二人の魔女は暫しその場で呆然とし固まっていた。

そんな二人が我へと帰り、上官に慌てて報告しに行ったのは…固まっ
つてから五分後の事…。

基地裏側通路を通り、基地より数km離れた場所で二人は対峙する。

「ここなら、誰にも邪魔されないだろ…」

「…俺が勝てば彼女達に謝れ」

「…在り来たりな条件だな。

部外者のお前に指図される憶えはないが…まあいい。

勝てれば…な。但し…俺が勝った時は、お前の命を貰うぜ？」

鏡は身構える。

儀國から放出された凄まじい殺気。

…果たして人間が、ここまで凄まじい殺気を放てる物なのだろうか？
これほどまで凄まじく、ドス黒い殺気は感じたことがない。

常人だけではなく、ウィッチである彼女達もこの殺気に触れられ
ば…それだけで絶命しかねない。

一呼吸をして、鏡も己の愛機に声を掛ける。

「行くぞ、ベネファアー!!」

《了解しました、マスター。セットアップ開始。

あの腐った性根、叩き直してやりましょう!》

瞬く間にバリアジャケットに身を包まれる鏡。

互いに戦闘態勢は整った。最早交わす言葉は何もない。

後はどちらかが倒れるか、負けを認めるかのみ分かればいい。

魔術師と天界人、世界は違えど異世界からの来訪者である二人は…
地を蹴り動いた。

「手並み拝見と行くか…」

「……ッ」

鏡は一瞬だけ表情を歪め、すぐに元の表情へと戻す。

出だしていきなり驚かされるとは思いもしなかった。

スタートは同じタイミング。

が、相手の方が速い。踏み出した一歩で信じられないぐらい距離を
詰めてくる。

相手は魔術師、つまり力の根源は魔力にある。

しかし、相手は自分の様にバリアジャケットや何か特殊な兵装を一

切していない。

整備兵が身に纏う黒の制服。

それに自分ならば神纏術と言った、身体能力を強化する様な魔法を一切使っていない。

即ち、純粹な人間の身体能力のみ。

魔術師の鋭い拳が風を切り中空を走る。

何の変哲もない、右ストレート。

鏡は紙一重で避けると、反撃と拳を繰り出す。

勿論、こんな攻撃が当たるとは双方思っていない。

あくまで様子見、互いの実力を測っているだけにしか過ぎない。

「何の力も使っていないのに、このスピードとパワー。

流石だつて、そこは素直に認める。だけど、俺はアンタには負けない！」

様子見から一点。天界人が動く。

様子見はもう仕舞い。ここから先は本気、勝つ為に打って出る。

「……………」

魔術師の眉が僅かに寄る。

先程までなかった、ある感覚。

季節は春を少し過ぎたぐらい。しかし天候は相変わらず春のまま。吹く風も心地よく、また暖かい日差しが青空より地上へと降り注がれる。

そんな天候であるというにも関わらず、肌を感じる凍て付く“冷気”……。

何か仕掛けてきた、と認識したと同時。

「氷の檻…」

儀國は特に表情も変えず、自身の状況を冷静に見る。閉じ込めるように突如出現した氷の檻と、鏡が檻の前に現れて

「その氷の檻はブリジットプリズン。そして…爆ぜろ！」

指を鳴らす。

天界人の合図に従い、魔術師を閉じ込めた氷檻は大きな爆発音を上げた。

砕け散った氷の破片が周囲に四散し、魔術師を閉じ込めた場所からは赤き炎が轟々と燃え上がる。その様子を、鏡は静かに見守っていた。

《圧勝ですね、マスター》

「…いや、まだまだ」

刹那、燃え上がっていた爆焰が瞬く間に青い炎によって飲み込まれた。

「この程度の焰じゃ、俺は殺せないぜ…？」

右腕全体から青い炎を上らせて、魔術師は不敵な笑みを浮かべる。轟々と燃え上がるあの青い炎は、ネウロイを一瞬にして跡形もなく燃やし尽くした。

ただの炎じゃないことだけは、確か。ならば…、と天界人は対抗する術を行使する。

「神術・纏『炎』！」

神術・纏：七属性を司る防御系との術であり、攻防一体の性能を持つている。

言葉通り、応じた属性の力を身に纏うこと。

相手の力は言うまでもなく炎だ。ならば、その炎を無効化する力を纏えば対応出来る。

へえ、と魔術師は天界人の身体をまるで護る様に発現する火の粉を見て呟いた。

「儀國：悪いけど、俺の勝ちにさせてもらおう。

何としてでも、彼女達に謝ってもらおうからな！

神爪術『水爪』！」

青色へと変色した爪。

周囲に高圧縮された水の塊が幾つも発生する。

：火は水に弱い。単純な法則ではあるが、火に対し水は有効。

あの炎がどんな炎なのかは分からない。

だが、炎の本来の性質である燃える…と言うことには変わらない。

「穿て、流水よ！」

右手を、爪を振るう。

その天界人の動作に従い、中空を浮遊していた水塊は一斉に魔術師へと向かって牙を向く。

銃口から放たれる弾丸の如く、素早い速度で空を走る水塊。

「煉獄の青焰」
TOREBBER

魔術師はそつと地面に手を置く。

すると地面から青い炎が燃え上がり、それは術者の姿をも隠す程の巨大な壁となった。

壁となった青い炎は襲い掛かってくる水塊を一瞬にして蒸発させる。やはり、と鏡は儀國を睨む。

単純な法則があの手に通じるとは、最初から思っていない。

「やっぱりダメか。

なら…神爪術『雷爪』、奔れ雷よッ!!」

黄色に変色した鏡の爪。

青い稲妻が爪で激しく放電し、その青き稲妻が雷と成りて放たれる。放たれた青い神の雷は空を切り裂き、魔術師を穿たんと牙を向く。

対し、魔術師はその場から一步も動かない。

恐怖で身体が言うことを…、なんてことではない。

魔術師にはある物があつた。それは…絶対的な余裕。

「フンッ…」

一薙ぎ。轟々と音を立てて激しく燃え盛る右腕を薙ぎ払った。

その一動作だけで、青い神の雷は一瞬にして燃やし尽くされた。

「なっ…!!」

鏡は驚愕の表情を浮かべた。

この戦いは殺し合いじゃない、言ってしまうえば試合…模擬戦闘だ。

だから今の攻撃も確かに、手加減はした状態で放った。

けれども、その手加減しているとは言え一瞬で青い炎が消滅させてしまったという事には驚きを隠せずに居た。

魔術師が地を駆ける。天界人は迎撃しようとする次の攻撃へと入る。

「これならどうだ！」

「World of ワールドオブDarkness」：闇に染まれ！」

「ッ！」

魔術師は眉を寄せる。

暗闇が彼の眼から世界を、光を剥奪した。

今の彼の視界に映る景色は闇。一筋の光すらも差さない、漆黒の世界。

眼を開いてコレなのか、それとも無意識の内に閉じてまったのか…。
いずれにせよ、魔術師は光を失った。

けれど、ただそれだけの話だった。

「なっ！」

魔術師は怯まない。

視界を、光を剥奪しその世界を漆黒の闇に染めたのにも関わらず。

儀國は表情を変えず、ただ向かって地を駆け抜ける。

鋭く、肉を弾く音が鳴る。伴い、天界人は顔を苦痛に歪める。

石の様に硬く握り締められた儀國の拳が、鏡の右頬を殴り飛ばした。

「くっ…！」

右頬に走る痛みにも口元を歪めながら、鏡は間合いを取ろうとする。

だが、それを魔術師は許さない。

続けての連撃。息を吐く暇すらも与えない拳、蹴りが飛んでくる。

様子見をしていた頃とは大きくその性質は違っていた。

大砲を思わせる程の迫力と威力を見せる…鋭い拳打。鞭の様に撓り

死神の鎌の如く…鋭い蹴り。

手合わせをする前、魔術師は言った。勝てば…その命を貰い受ける
と。

つまり、命を狩る為に本気を出した…ということ。

「終わりだ」

魔術師が呟く。

何十と大砲を繰り出してきた拳に、悪魔の青い炎が纏う。
敵を打ち砕く、そこに炎熱させる青炎が付加された砲弾が飛んでき
た。

狙いは顎。距離にして目前。直撃は…避けられない。
と、後僅かで直撃するという所で青い炎が突如消え

《マスター!!》

「ッ!!」

鏡は咄嗟に身体を後ろへと逸らした。

直撃は間一髪の所で回避。拳が鼻先を掠り、バイザーが拳の犠牲と
なり空高くへと舞い上がっただけ…。

「……………ッ」

魔術師は動きを止める。

術を解いたのか、それとも自動的に解除されたのか。

深淵の闇に染められた世界に光が戻る。その戻った矢先眼にしたも
のは深紅に輝く双眼。

鏡の通常時は黒色をしていたが、今は血の如き赤。

バイザーに隠されて気付かなかった。

…魔眼か、或いは戦闘中…気持ちが高ぶっている時に変色する特殊
体質によるものか。

いずれにせよ、あの深紅の瞳が普通でないことは確かだ。

「…くっ」

「……お前、弱いな」

「何!？」

「もう止めにしようぜ？ 弱い者虐めをする気はない」

見下すような発現をする儀國。鏡は怒りに眉を寄せて睨んだ。

「お前と俺との実力の差はもう出ている。

お前じゃ、俺には勝てない」

「まだ勝負は着いていない!」

「…ならこの際言つてやろう。お前は実戦経験が少な過ぎる。
それに気付いたのは、さっきの…ワールドオブダークネスだったか？
相手の視界を奪う性質の術のようだが、簡単な話がただの目潰しだ。
戦闘…いや、喧嘩の基本と言つてもいいこの初歩的な技を、お前は
自信を持って発動させた。その時点でお前が実戦経験が豊富か否か
が証明された」

「……………」

「視界を奪われた、という結果だけでは相手は殺せないし怯まない。
やるのなら、五感全てを断つぐらいにまでしないと意味がない。

視界が見えなくなつたぐらいでギャーギャー喚くのなら、そいつはただの雑魚だ。

そしてその技が相手に通じるか否かも見抜けない…お前自身もな」

見下しながら、魔術師は言葉を放つ。

だが、まだこれで終わりではない。

「二つ目だ。お前は沢山技や魔法…神術、か？ を持つてるだけで
実戦で生かし切れてないし、また過信し過ぎている」

「…どういう事だ？」

「何故俺があの時「煉獄の青焰」^{Beelphégor}を途中で消して生身の拳だけで殴
ろうとしたか、分かるか？

今は消えているが、お前の身体に纏っていたあの赤い陽炎と火の粉
…。

恐らくあれは、炎に対し効果を発動する防御系統…或いは反射系統
の性質があると考えた。

もしそうだとしたら、あのまま攻撃していれば俺自身に攻撃が返っ
ていたのかもしれない。

それを確信させたのが…お前の表情だ。

あの時のお前は、直撃するにも関わらず防御行動を一切取ろうとし
なかつた。

そして焦りを見せないお前の表情…それは己の技に対し自信があっ
たから。

だから俺は寸前と炎を消し、直接殴つた。

…それに加えて、お前は技の名前を叫び過ぎだ。
名は体を現す、という言葉を知らないのか？」

コイツ

バケモノだ。

鏡は初めて、儀國 雅史が如何に強者であるかを身を以って体感した。

ずば抜けた洞察力と考察力。そして…戦闘技術。

儀國は普通の人間、19年しか生きていない魔術師だ。

対して、自分は何年生きている？

天界人に転生し、100以上の時を生きている。

その中で様々な出会いと別れを繰り返し、そして…戦ってきた。

キャリア的にも、断然自分が上。にも関わらず、相手はそれを軽々と上回っている。

19年しかまだ生きていない人間が、まるで此方の倍…数百年も生きて、戦ってきたかの様に…。

強い、ただこの事実だけが…鏡に突き付けられる。

《本当に…貴方が人間なのか、疑いたくなりますよ…》

全くその通りだ、と鏡はベネファアの言葉に対し心の中で呟いた。

「そして…三つ目。お前は心底甘い。

俺はお前を殺すつもりで戦っている…だがお前は、俺に対し手加減をしている。

余裕があるから手加減をしているのか…、それとも無意識の内に手加減をしているのか。

いずれにせよ、その甘さと御人好しさ…命取りになる。

以上を踏まえて宣言しておいてやる。お前じゃ…俺には勝てない」

「…だったなら！ これを見てもまだ言えるか！？」

儀國…お前のベルフェゴール、その技…模倣まぼったぞ…！」

天界人は魔術師を睨む。

正確には其の右腕、ベルフェゴールと言う名の青き炎。

鏡は「神の瞳」を発現させた。

模倣された青い炎、ベルフェゴールは鏡の右腕に現れる。

自分の物だと思っっている物を他人に使われているのを見て、驚かない者はまず居ない。

それに、本来の所有者の物よりも数段強くなって発現される。

オリジナルがコピーに打ち負かされる…この事も相手の精神面に多大なダメージを与える。

だが、魔術師は動じない。寧ろ、呆れているような表情を浮かべていた。

「お前…ソイツが何か分かってコピーしたのか？」

何だと、と言う前にそれは突然起こった。

制御出来ないという、予想外の不祥事^{アクシデント}。

右腕から燃え上がる青い炎は、己の意思とは無関係に激しく燃え上がる。

そして、皮膚が焼かれる激しい痛みが伝わってきた。

「ぐっ、があああああつ！！！」

《マスターツ！！》

「お前のその眼による能力か…」。

相手の技、魔法を模倣する…更にはオリジナルよりも強い状態^{コピー}で、か。

使い方によっては厄介な能力だが…誤ったな？

形は模倣出来ても、“意思”までも模倣することは出来ないようだな」

嘲笑うかの様に、魔術師は言う。

天界人は焼かれる激痛に何とか耐えながら、消えるよう強く念じた。だが、青い炎…ベルフェゴールはその強き叫びに応じない。儀國の言う通り、意思を無視した事による反逆が…今自分の右腕で起きている。

このままでは右腕だけではなく、全身に燃え移り瞬く間に燃やし尽くされてしまう。

と、大きな溜息を吐いた後魔術師は心底面倒臭そうに口を開いた。

「そこまでにしてやってくれ、ベルフェゴール。

一応、これは模擬戦だ。命を賭けた殺し合いじゃない。

イライラさせる野郎だな…」

青い炎に魔術師は命ずる。

と、自分の意思で消せなかった青い炎は魔術師の命に従い、一瞬で右腕より消えた。

肉を焼いた焦げ臭さと、激痛だけが右腕に残される。

「リ、リサ…ナレ」

痛みに歯を食いしばり耐えながら、焼かれ使い物にならなくなった右腕を治癒する。

白き光に包まれると、右腕は瞬く間に完治される。

指、手首、腕…ちゃんと動くことを確認し、そして改めて儀國を見据える鏡。

儀國は…相変わらず、呆れた表情を浮かべて此方を見据えている。

否…見下していた。

「…まだやるのか？」

これ以上やるとお前…マジで死ぬぞ」

「…くっ」

「…と、もう終わりだな。口煩い連中が来た…」

儀國は踵を返す。

そしてドス黒い殺気も消失し、何も言わずこの場から立ち去っていった。

残された鏡はバリアジャケットを解除し、その場に力なく座り込む。去っていく魔術師の後姿を眺めながら、その進行方向先より聞こえてくる複数のエンジン音に耳を傾けて…。

外伝・天界人「下」(前書き)

下篇です。

外伝：天界人「下」

その日の夜、ミーティングルームで何があったのかミーナさんを含めて全員に話した。

“儀國さん”と口論し、喧嘩から模擬戦闘へと発展した…と。正直に伝える。

「そんな事が…」

「…すいません」

「…後で儀國さんにも話します。ですが…よく無事で」

「あの青い炎…「煉獄の青焰」^{Belphoeor}を儀國は使ったんだろう？大丈夫だったか？」

坂本さんが心配した様子で尋ねてくる。

坂本さんだけじゃない、この場にいる皆が、俺を…。

儀國さんのあの青い炎、「煉獄の青焰」^{Belphoeor}は皆も知っている。その恐ろしさも、勿論。だから俺の事をすごく心配してくれていた。

「…ええ、問題ないですよ。ただ、右腕が持って逝かれそうになりましたけど…なんとか」

「アイツ…人間相手に、本当に使うなんて！」

シャーリーさんが怒った様子で言う。

その言葉に慌てて訂正を入れた。

「ち、違います！ 儀國さんは確かに使いましたけど、俺に直接当たる様な事は一切しませんでした！ ホラッ、傷ももう治しましたし！」

それに燃やし尽くされそうになったのは俺が模倣して、それで…」

「模倣？ お前は…相手の魔法を模倣する力を持っているのか！？」

「は、はい…。俺の能力の一つで、「神の瞳」って言うんですけど…簡単に説明しますと、相手の魔法とかを模倣して使役する事が出来るんです。

そして、その持ち主の物よりも数段強い状態で使うことが可能なんです。

まあ、色々と制約とかあるんですけど…」

「あ、相手の固有魔法を模倣するなんて…」。

貴方と言い儀國さんと言い、本当にデタラメですわね…」

ペリー又さんの言葉に、誰もが頷いていた。

そんな態度を見て、鏡は苦笑いを浮かべていた…。

「しかし、よかつたな〜鏡。

もし儀國が元の力を出せる状態の時に模倣したら、一瞬で焼き尽くされていたかもなあ」

「えっ？ どういう事ですか？」

シャーリーさんの言葉に、俺はすぐに尋ねた。

と、俺の質問に対しバルクホルンさんが何処か悔やんだ表情を浮かべながら、シャーリーさんの代わりに答える。

「…儀國は以前、私をネウロイから庇い負傷したことがあった。その負傷が原因で、アイツは本来の力を引き出せない状態になってしまったんだ」

「前に騎士型ネウロイを一体斃して、ようやく3割ぐらい力が戻ったって言ってたっけ」

「さ…3割？ あれで…？」

バルクホルンさん、ハルトマンさんの証言を聞いて、ただただ驚くしかなかった。

本来の力が使えない状態で、儀國さんは万全な状態の俺に戦いを挑み、そしてあれだけの力量を見せ付けた。

…シャーリーさんの言う通りだ。

3割しか力を使えない状態での模倣、ベルフェゴールだったからこそ…右腕だけで済んだ。

もし、彼が全力の力を引き出せる状態の時に模倣をしていたら…この身はとつくに跡形もなく燃やし尽くされていたに違いない。勝敗はまだ着いていない…だが、どう見ても俺の負けだ。

「…兎に角、今日はもう休んで下さい。

バルクホルン大尉とハルトマン中尉は、儀國を至急執務室に来るように伝えて。

…いえ、引き摺ってでも連れてきて」

「「了解」」

「では、解散」

ミーナさんの一言で皆がミーティングルームより出て行く。
バルクホルンさんとハルトマンさんは駆け足で出て行き、言い渡された命令を遂行しに。

他の皆は出て行く前に、此方を見てから静かに出て行った…。

《…マスター、行きましょう》

「…あゝ」

ベネファアに促されて、最後に鏡はミーティングルームを後にした。

夜更け過ぎ、ふと目を覚ます。

開けたままの窓から吹く、緩やかな風に目が覚めた。

ベッドから身体を起こし、窓へ。

窓の向こうから見えるのは、広大なアドリア海。

そのアドリア海を照らす…金色に煌く半月。

「……………」

鏡は静かに部屋を出た。

身支度を整えた状態で…。

何となく、滑走路へと向かう。

理由はない、本当に何となく。けれども、まるで導かれる様に、そんな気もしていた。

「……帰るのか？」

不意に、儀國さんの声が聞こえた。
振り返ると、整備兵の制服を纏った姿で…大きな欠伸をしながらハ
ンガーから出てくる。

「儀國さん……」

「…なんとなく、だがな。お前が今日元の世界に帰る…そんな気が
した」

「…俺も、そんな気がしていました」

そうか、と儀國さんは頷く。

暫しの静寂が流れる。

そして、最初の切り出したのは鏡であった。

「儀國さん…どうして、貴方は彼女達にあんな態度を…」

分からない、どうしても知りたい理由。

何故彼が彼女達にあんな冷たい態度を取るのか。

その理由を、帰る前に聞いてきたい。

「…仲良くなる理由がないからだ。

俺もお前も巻き込まれて、あいつ等と出会った。

本来、俺達が出会うことは一生なかった…」

「……………」

「…仲良くなつて、その後何が残る？
元の世界への帰還が分かれれば、俺はすぐに帰る。
俺とあいつ等とはそれまでの付き合い。仲良くする必要が、あると
思うか…？」

そう言った儀國さんは、何処か悲しげな眼をしている…気がした。
と、次の瞬間。背後で眩い光が放たれた。

慌てて振り返ると、何も無い空間に突如扉が現れていた。
月明かりに照らされた謎の扉、そして一人でドアノブが回りゆっく
りと開かれる。

扉の先は…何も無い。ただ白い世界が広がっている。

…あれを潜れば、元の世界に帰れる。
なんとなく、だけど…帰れると感じる。

「儀國さん…」

「羨ましいな、お前は元の世界に帰れて…。
俺もさつさと帰りたいぜ、たく…」

「…儀國さんも、もしかしたらあの扉を潜れば」

「いや、多分…俺はその扉を潜る事は出来ないだろう。
その扉はお前だけの扉…帰る為の道だ。
まあ、俺の場合は本来の力を取り戻せるまで帰るつもりはないけど
…な」

「…：…：儀國さん、貴方に渡しておきたい物があります」

鏡は意識を集中させる。

背後の空間がぐにやりと歪む。その歪んだ空間から一振りの太刀が

姿を現した。

その太刀の柄を掴み、鏡は儀國へとそれを手渡す。

「それは赤煉つて言う刀です。

そしてそれは、貴方と再戦する約束の証でもあります。

…いつか必ず、貴方と再び合間見えて…次は俺が勝たせてもらいます」

「…なるほど、また俺と戦う為の約束、か。

なら、俺もお前に何か渡さないとな…」

そう言うとそのと右手を前に差し出す。

掌から燃え上がる、青い炎…。

それをゆつくりと、炎を包み込むように握り締めていく。

「ぐっ……くうっ……」

表情を歪め、苦しそうにしながらも儀國さんは更に拳の形へと作っていく。

そして完全に拳の形へと作ると、今度はゆつくりと手を開いた。

疲労した表情を浮かべたまま、儀國さんは不敵な笑みを浮かべる。

青い炎が燃え上がっていた掌の上には、小さなクリスタルが乗せられていた。

その透き通った水晶体の中に、小さく燃えている青い炎。

それを投げ渡され、俺は慌てて受け取る。

「俺からの選別だ。

いざって言う時必ず役に立つ…。まあ、この刀と違って一回切りの消耗品だな。

今の俺じゃ、一度に生成出来るのは一つだけ…。

まあ、そこは笑って許してくれ」

「……儀國さん」

「次に逢う時は、誰にも邪魔されない環境でやりたいわな。ドローゲームばかりは、流石の俺も嫌だし……」

その時にこの刀、遠慮なく使わせてもらう。

それから、次に逢う時はその敬語とさん付けやめる。一応年齢的にはお前の方が上だ。

かと言つて、俺もお前に対し敬語や丁寧語で喋る気はないが……な」

「……ああ！　じゃあな、儀國！」

鏡は扉に向かつて、前へと進む。

振り返る必要は、もうない。約束を、言葉をもう交わした。

後はただ、この扉を潜りあるべき場所へと帰るのみ……。

そして、いつの日か。

いつの日か強敵と再び合間見える時を、ただ楽しみにして……。

|| || || || || || || || || ||

ふと、目を覚ます。

開いた視界の先、見慣れた天井が最初に飛び込んできた。

続いて、懐かしい……慣れ親しんだ空気を感じ取る。

ああ。帰ってきたのか、と鏡はゆっくりとベッドより上半身を起こした。

ふと眼を向けた、鏡に映る己の姿。

いつもと変わらない、10歳の肉体年齢での自分がそこに映ってい

る。

カレンダーの日付は、一日だけ進んでいる。

あの世界へと旅立つ前の日付から一日。

時の流れが違うのか：向こうで過ごした三日間は、この世界では僅か一日の時の流れ、らしい。

右手で、何かを握っている感触がした。

自然と握り締めていた右手。その手をそっと、開く。

と、小さな自分の中には青い炎を宿すクリスタルの姿があった。

…：どうやら、あの出来事は夢ではなかったようだ。

水晶の中で小さいながらも、激しく燃え盛っているベルフェゴールを見つめて、鏡はそれを机の上へと置く。

「…：儀國 雅史、次逢う時は、絶対に俺が勝つからな！」

青い炎を操る魔術師の姿を思い浮かべ、その幻影に向かって拳を打ち出した。

外伝：天界人「下」（後書き）

以上、初コラボ作品でした…。

いやあ、気付いたら20000文字越えしてしまったので、三つに分け差して頂きました…。

まず「悠久なる時間」さん、今回はご協力して頂き本当に有難う御座います。

そして…ごめんなさい。

何故この様な作品となってしまったのか…詳細がもし、必要であれば直ぐにメッセージ送信にて詳細を送らせて頂きたいと思えます。感想、お待ちしております…。

…今回の、このコラボ作品でかなりのエネルギーを消費してしまいました。

今の私は、燃え尽きかかっている…。
来週投稿できるか…不安、不安、不安…。

…すわっ!!

突然ですが…。

どうも、夢幻遊戯です。

突然ですが、ここで皆様に一つ…アンケートをしたいと思います。出来るだけ、お声を聞かせて頂きたいと…思っている次第であります。

Q1：次のウィッチの中で、使い魔になりたいと思うのなら誰？

1：ミーナさんじゅっきゆうさい。

2：もっさん

3：エイラ・イル…マタンゴ。

Q2：貴方がもし年下の女の子とデートしたいと思うのなら、次の内誰？

1：豆狸。

2：破壊神サーニヤ。

3：黒リーネ。

Q3：貴方はドロドロの修羅場は好きですか？

以上の三つです。

本編に大きく…いや、多少なりに影響してきます。

ある程度の考えはあるのですが…やはりここは皆様の声も是非お聞きしたい、と思った次第です。

尚、このアンケートは一週間ぐらいしたら削除します。

それでは、皆様。ごきげんよう。

すわっ！！

アンケート感謝記念小説（前書き）

この度は、アンケートにご協力して下さい、真に有難う御座います。
今回は、超短いですけどそれに題する小説を書きました。

…時間が経過したら消すかも、です。

アンケート感謝記念小説

「……………」

儀國はミーナの写真を見ながら、真剣な表情を浮かべていた。

写真に写っているカールスラント出身の女軍人、ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ。

階級は中佐、ここ第501統合戦闘航空団の隊長を務めている…。19歳という比較的若い年齢で一部隊の隊長を務める。それが凄なことなのか否なのか、俺はよく分からない。

だが、本来ならば男が隊長となり戦場に出て闘うところを、女性であるミーナがしているということについては…やはり凄い事だとは思う。

「しかし、やっぱり…なんて言うか」

「…あら？」

廊下を歩いていたミーナは、ふと足を止める。

執務室に籠り、山の様な書類も一段落し休憩がてらに紅茶を飲み、食堂へと足を運んでいた時。廊下で儀國の姿を見つけた。

儀國は一枚の写真を手に、何か真剣な表情を浮かべて唸っている。いったい、何の写真を見ているのか…。そんな時、エーリカが儀國の元にやってきた。

「あれ？ どうしたの、その写真」

「ん？ ああ、コレか？ さあな、気が付いたら枕元に置いてあった。

「まったく、誰がこんな悪戯をしたのやら……」

「ふうん。でも、何でミーナの写真なんだろう」

その言葉を聞いて、ミーナは驚いた。

儀國が真剣な表情を浮かべながら見つめていたのは、何と自分の写真。

どうして、私の写真が儀國の所にあつたのか……。それは本人にも分からない。

そして、どうして儀國は……私の写真を真剣な表情で見つめていたのだろうか。

関心が強まった今、紅茶を飲みに行くことよりもコッチの方が気になつて仕方がない。

続けて、二人の会話に耳を向ける。

「で、儀國はミーナの写真なんか見て何考えてたの？

……あっ！ もしかして……ミーナに気がある？」

「いや、それはない」

……随分とキツパリと言つてくれる。

そこまで潔く、ハッキリと言われると少しだけ傷付く。

「ふうん、どうして？ ミーナも美人だし、人気なんだよ？」

「人気だろうが何だろうが、俺には興味ない。」

知らないのか？ アイツの噂を…」

「噂？ 噂って何？」

エーリカが興味津々に尋ねる。

勿論、それは私自身も。いったいどんな噂をされているんだろう。神経を集中させて、耳を澄ませ

「アイツ、本当は10代じゃなくて30代…39歳って噂だ。巷じゃ、ミーナさんじゅっきゅさといって言う異名があるぐらいだぞ」

「えっ！？ そんな噂があるの！？」

驚くエーリカ。

対し、私の怒りは頂点に達した。同時に、過去の記憶が蘇る。

ここ最近ネウロイの襲撃とかで忘れていたが、今の言葉で思い出させてくれた。

あの日、夜のビーチにて別れる際にも…あの男は大変失礼な言葉を口にした。

…今まで好き勝手な言動に我慢し眼を瞑っていたが…今回はかりは許せない。

一度、隊長として彼を教育する必要がある。

「あっ、でも分かるかもな」。

ミーナってさ、年齢以上に見えるって言うか」

エーリカも同伴決定。

二人にゆっくりと近付く。

「あ、ミーナだ」

「げっ！！」

二人が私に気付く。

儀國は平然とした態度のまま、エーリカは何処か脅えた様子。

…今、私はどんな表情を浮かべているだろう。個人的には笑みを浮かべているつもりだけど、エーリカの顔を見れば…多分私の笑みは、笑みであって笑みじゃない。そんな顔なんだろう。

…それでいい。

「儀國 雅史さん、それと…エーリカ・ハルトマン中尉？

貴方達に少し、お話があるんだけども…」

「だが断る。

じゃあな、ミーナさんじゅっきゅうさい」

儀國が逃げ出す。

「えっ！？ ちょ…じゃ、じゃあねミーナさんじゅっきゅうさい」

エーリカも逃げ出す。

その時ですら、またも失礼な事を口にした。そして、エーリカまでも。

話し合いだけでは、私の気が済みそうにない。ここは一つ、美緒も言っていた肉体言語を以ってして、彼等の教育に掛かることにする。

「待ちなさい！！ 儀國ーッ！！ エーリカーッ！！！！」

ミーナは二人の名を叫びながら、その後を追いかけた。

アンケート感謝記念小説（後書き）

本編には全く関係ございません。

今思いつきで書いた作品です。

おふさげ100%、低クオリティー率200%の作品です。

まあ、鼻で笑う程度の作品…と捉えて下されば。

しかし、アンケートを見ると比較的エイラーニヤが多かったです
ねえ。

まあ、私もエイラーニヤは好きですけどね。

今回は、アンケートで

すわっ！！！！

第四章 第一節：新生活（前書き）

第四章 第一節です。

今日から儀國はウィツチ宿舎にて過ごすこととなりました。

第四章 第一節：新生活

翌朝、いつもの様に目が覚める。

起床ラッパは：まだ鳴っていない。それよりも早く今日も目が覚めた。

「……………」

見慣れているが別の天井、がらんとした殺風景ではあるが別の部屋。ここは今まで過ごしてきた、男性：整備兵達が住まう兵舎の一室ではない。

ウィッチ専用の宿舎、その空き部屋の一室。

その部屋に、何故か男である俺は寝ている。

と言うのも、全ては昨日ミーナの口より言い渡された命令が原因。

立場上は整備兵のまま、上層部にも存在を公にはしていない。

が、今日から本格的に魔術師^{ウィザード}として一緒に戦ってもらう。

その為、信頼関係を築く為に一緒にの宿舎にて過ごすこと…これが、ミーナの口より言い渡された命令だった。

何故、と勿論反論はした。

魔術師として戦うことは、前にも言われている。

騎士型ネウロイだけでなく、普通のネウロイからも目を付けられてしまった以上、残された選択肢は全てと戦うしかない。

それはいい。だが、何故一緒にの宿舎で過ごさなければならぬのか。それが理解出来なかった。

が、ミーナは予めそう俺が質問してくるだろうと予測していたらしく、即答でその質問に対する返答を言ってきた。

一緒に過ごさなければ、信頼関係は築かれない。

今までは戦う時、それとも偶然出会うかと言った時ぐらいしか顔を合わせないし会話を交わさない。

それでは信頼関係も築けない、だから共に過ごすことで築き上げていく…だそうだ。

どんな理由だ、と勿論言っただけだ。

…それから結局ミーナの命令に従うこととなり、現在ウィッチ宿舍の空き部屋の一室にて過ごしている。

部屋の荷物は…元より何もないに等しかったが、既にこの部屋へと運び込まれていた。

医務室で眠っていた間、バルクホルンが全て運び込んだらしい…。

「ハア……うぜえ」

自然と溜息が漏れる。

どちらにせよ、こうなってしまった以上は我慢するしかない。

戻った所で、あの兵舎にもう自分の居場所…もとい部屋はないのだから。

この新たに与えられた部屋で、ウィッチ達と共に生活していくしかない…。

起床ラツパが鳴り響く。

それに伴い儀國はベッドから降り身支度を整える。

今日からは整備兵としてではなく、魔術師として働くこととなった。いつも纏っている整備兵の制服…ではなく、半袖の白ワイシャツと黒の長ズボンで身を飾り、部屋を後にした。

「……………」

「どうした儀國、食事が進んでないぞ。軍人たるもの、食べる時に食っておけ」

ウィッチ達がいつも食事をしている食堂。

隣の席のバルクホルンが絡んできた。その絡みに対し、心底疲れた顔で儀國は答える。

「…無理を言うな。女11人に対して男1人…ゆっくり飯が食えると思うか？」

本来なら、整備兵同士の会話を交えながら楽しく食事をしていたが、今日からはもうそれは出来ない。

ここにはウィッチ…女しかいない。ガールズトークに華が咲いたとしても、野郎が入り込める空間は何処にもない。

加えて、全員の視線が突き刺さってくる。食事をしつつ、チラチラと。そんな中でゆっくり楽しんで食事など出来る筈がなかった。

「食べないの？　じゃあ私がもらいっと」

反対の席に座っていたハルトマンが箸を伸ばし、器用に里芋を盗っていった。

それを見ていたバルクホルンは行儀が悪いと怒り、ハルトマンは気にせず美味そうに里芋を食べている。

「…何で飯食う時までお前等と一緒になんだ？　それぐらい別に、別れていても構わないと思うが…」

「まあまあ、そう言わずに食べるよ。宮藤の作るご飯は美味いからさ」

「あんな、イエーガー。別に不味いから食わないとは一言も

」

「あ、あの…美味しくないですか？」

「いや宮藤、誰もそんな事を言ってる訳じゃ」

「貴様！ 宮藤の作った扶桑料理が不味いと言うのか！？」

ハルトマンの行儀悪さに矛先を向けていたバルクホルンが、今度は此方に矛先を変える。

…流石は姉馬鹿、シスコンで名高いバルクホルンだ。

将来がある意味不安だ。コイツは勿論、コイツを姉に持つ妹…クリスも。

もし、クリスがお嫁に行く…なんてバルクホルンに言ったら、どんな反応をするだろう。

昏倒し意識不明になるか、それとも婿の男の所に殴り込みに行くかもしれない…。

クリスだけじゃなく、宮藤が結婚すると言っても早まるなどか何とか言いそうな気がしてならない…。

…本当に、コイツは大丈夫だろうか？

「まだ何も手を付けてないだろう…そういうお前こそ、納豆食ってないだろう。」

宮藤が作った納豆を、お前は食わずして残すのか？」

「だ、誰が残すか！ こ、コレはだな…さ、最後に食べようとして
いるだけだ！」

ええい！ いいからお前も早く宮藤の作った朝食を食べる！」

「…はいはい、言われなくても食べさせてもらいますよ」

やれやれ、と小さく溜息を零し皆より遅れて箸を手に取る。

バルクホルンとのやり取りを見て、皆微笑ましく見つめている。

「あ、あの…お味の方はどうですか？」

「……美味しいよ、普通に」

改めて感想を求めてきた宮藤に、儀國は食べながら感想を述べた。

「それじゃあ改めて、今日から私達と一緒に戦ってくれる儀國 雅
史さんです」

「別に、改めて紹介する必要ないだろう…一応全員俺のこと知って
るだろ」

ミーナにツツコミを入れる儀國。

ミーナより改めて皆に紹介したい、と言うことで朝食後直ぐにミー
ディングルームに半強制的に連れてこられた。
そして、肝心の皆の反応はと言うと…微妙だ。

少なくとも、歓迎されていないことはまず間違いない。仕方ない、と言えば仕方ない。今まであんな態度を取っておいて、今日からよろしくお願いしますと言っても、はいこちらこそ……とは言えない。

「……………」

「何処に行くんだ？ 儀國」

「別に…ただの自主訓練」

勿論、これは嘘だ。

自主訓練などするつもりは最初からない、ここから出る為の口実。

「ほう、自主訓練か。ならば私も一緒に」

「ダメだ。他人に見られたくないんだよ」

自主訓練をすれば、坂本がこう言ってくるのも予測済み。それを回避する為の言い訳。中途半端な理由では坂本は絶対に引かない。

コイツは…良いようにも悪いように言っても、物凄く諦めの悪いヤツ。

あの一件以来、自主訓練する姿を頻繁に見かけるようになった。ネウロイに情けを掛けられて敗北、と言うことが余程悔しかったのだろう。

「むう…ダメか」

「ダメだな、それに…お前が一緒に来ても何が出来るんだ？」

今のお前じゃ、俺の練習相手にもならない」

「うっ……」

「そついう事だ。それじゃ

」

急に、足の力が抜ける。

崩れるようにその場に片膝を付き、転倒だけは免れた。

…世界が軽く回って見える。要するに眩暈だ。

不完全な魔術回路を用いてのベルフェゴールを解放したことによる、多大な精神疲労。

朝起きた時は何事もなかった、だから大丈夫だ。

その考えは…どうやら甘かったらしい。

「お、おい大丈夫か!？」

ミーティングルームに変な空気が流れる。

一番に駆け寄ってきたのは、意外なことにシャーリーだった。

「…まだ万全じゃない、か」

「…どういうことだ？」

「……別に、少し疲れが抜け切っていないだけだ。問題ない」

立ち上がり、ウィッチからの視線を受けながら儀國は足を出入り口へと向ける。

「待ちなさい、儀國」

ミーティングルームを出て行くこととして、ミーナに呼び止められる。何だ、そう言おうと振り返った時。そこには黒い笑みを浮かべるミーナがいた。

「…何だ？」

「また、何か私達に隠しているでしょう？ 正直に話しなさい」

「別に、何も隠していな

」

「儀國…？」

…何故か、ミーナの背後にゴゴゴ、と擬音が見える…気がする。

ブラックスマイルがより強くなる。

ふと、ハルトマンの方を見してみる。

ハルトマンは何も語らない、だが…目が確かに語っている。

正直に話さなければ後で何をされるか分からない…と。

ハルトマンも、ミーナが本気で怒ると怖いと公言していることから、余程なのだろう。

このブラックスマイルは、その本気の怒りへと到達するまでの階段を上っている最中。

…後で職権乱用をされて変な事を言われても面倒だ。

「前にハルトマンに渡したヤツの製作…そして昨日ベルフェゴールを呼び出した事…それが原因だ」

「…どういう事なの？」

ハルトマンが尋ねてきた。

若干、ミーナのブラックスマイルが緩和された気がした。

「…アレは俺の魔力を結晶化させたも物。もう察している通り、あのクリスタルの中には「Lucifer魔天の白焰」の力が込められている。俺の勘はよく当たる方だな、その為の保険としてお前に渡した。…幸い、使わずに済んで何よりだがな。

そしてベルフェゴールの召喚。この二つはかなりの魔力消費と精神疲労を担う。

魔術回路が不完全だったからって理由もあるがな。

おかげで魔力はスツカラカン、魔術回路も無理をしたせいで損傷して今は自己修復作業中、精神疲労で身体も不調。

満足に動けるまで、戦えるまで恐らく一週間つてところだろう…」

「……………」

正直に話し終える。

するとブラックスマイルは消えたものの、怒りを露にした表情を浮かべた。

…正直に話しても話さなくても、怒られるという結果は逃れられならしい。

「…どうして話さなかった、って面だな。

お前等に話すつもりは毛頭なかったんだが…。

まあ、仕方ないだろう。今その影響が出てきたんだからな。

体力には自信のある方だが、それを超える疲労だった…というだけの事だ。

それに、軽い眩暈がするだけで別に日常生活に支障が出ているわけじゃない。

明日にでもなれば、身体だけは…まあ満足に動かせるだろう」

「…今回は目を瞑ります。ですが、もし体調を崩した時は必ず言う

こと。

これは命令です、いいですね？」

「…はいはい、了解しましたっ」と

形だけ従うことになっておいた。

|||||

「…それで、どうしてこうなる？」

休めとミーナより言われたが為に、新しい自室へと向かう。
と、何故か宮藤とリーネまで着いてきた。

二人曰く、もしもがあった時に直ぐに対応できる様に…とのこと。

宮藤の治療魔法は…まあ分からないこともない。

だが、リーネまでも一緒に来る理由は…どこにあるのだろうか。

尤も、宮藤とリーネは心友。一緒に行動していても不思議ではないが…。

「…部屋に帰るだけだ。お前達はもう戻ってもいい。

て言うか、帰れ」

「ダメです！ そう言ってまた倒れたりしたら危ないです！」

「…お前に心配される程、俺はヤワじゃない」

「それでもですー！」

何があっても、宮藤は戻らないらしい。

リーネに視線を向けると、一瞬脅えた顔をしたがすぐにいつもの表情へと戻る。

そしてリーネもまた：宮藤同様戻らない、という眼をしていた。

部屋の前に着く。

部屋の中に入り、そのままベッドに倒れ込む形で寝転がる。

「もういいぞ、お前達は戻って」

「あ、あの…本当に大丈夫なんですか？」

「要らん心配だ。一日何も飲まず食わず、この基地の周囲を一日ラ
ンニングする程度の疲れだ」

「それ全然大丈夫じゃないですよ！ 私何か食べる物作ってきます
！」

「わ、私すぐにお水を」

「いやいやいや…宮藤にリネット、例え話だ。別に腹も減ってない
し喉も渴いていない。」

それに、そこまで酷くないし…。さっきも言ったが、軽く目眩がす
るだけだ」

分かりやすく説明しただけだと言うのに、この二人のボケっぷり。

そんな二人を見て、自然と口元が緩んだ。

と、何故か二人が固まる。

見る見ると内に顔が赤くなっていく宮藤とリーネ。

「？ どうしたんだ？」

「えっ！？ べ、別に何でもありません！！」

「じ、じめんなさい！」

「いや、何故そこでリネットは謝るんだ…？」

と、そこにドアをノックする音が耳に入った。

「あ、あの…サーニヤです。儀國さん、入ってもいいですか？」

ドアの向こうから聞こえるのはサーニヤの声。

そして声はせずとも感じるもう一つの気配。

「サーニヤとエイラか…別に、入りたかったら勝手に入れればいいぞ」

儀國は二人の入室を許可した。

ドアが開き、サーニヤとエイラが部屋へと入ってくる。

「…どうして私もいるって、分かったんだ？」

「気配で分かる。尤も、お前の場合常にソイツと一緒に行動をしているからな。」

「…俺でなくても、お前たちがセットで来ることぐらい分かる」

「…お前、本当に何者なんだよ」

「…ただの魔術師だよ。で、用件は？」

身体を起こし、ベッドに端座位になりながら二人に用件を尋ねる。

「あの…前にお礼、ちゃんと言えなかったから。」

その…有難う御座いました」

「わ、私も…サーニヤを助けてくれて、アリガトな」

二人が感謝の言葉を述べた。

随分と前の話を引つ張り出してくる、と儀國は思う。

「…別に、あの時も言った通り、礼の言葉が欲しくて助けた訳じゃない」

「でも、儀國さんは私を助けてくれました…」

「…まあ、お前がそう言うなら、そういう事にしておこう。」

…気にするな」

そう言うと、サーニヤは嬉しそうに口元を緩め笑みを浮かべた。

「で、わざわざそれを言いに来るが為に来たのか？」

儀國は二人に尋ねる。

もし、それだけで本当に来たと言うのなら。

サーニヤとエイラは随分と律儀なヤツだ。礼なんて出会った時にでもすればいい。

そもそも、こっちは別に気にしていないと言うのに。

と、サーニヤが小さく首を横に振った。

…どっちら違っらしい。他に何か用事でもあるのか…。

「あ、あの…よかったら、儀國さんと色々お話してみたいなって…
思ってた」

「話…か。別に、俺の場合何も面白いことなんざないがな」

「それでも、色々と聞きたいです。その…やっぱりご迷惑ですか？」

「……………」

儀國は静かに、サーニヤを見つめた。

…最初から仲良くするつもりはない。

だが…、

「……………」

ベッドから腰を上げる。

「ど、何処に行くんですか？」

「…椅子。俺の部屋に予備の椅子はないからな。立ち話も辛いだろ
う」

後でミーナ達から説教を喰らったり、陰口をグチグチと叩かれるのも面倒だ。

何より…コイツ、サーニヤはネガティブ思考。

もし、ここで無理矢理追い出して、それが原因で落ち込まれて、後の戦闘で悪影響が出られても鬱陶しいし…そのせいにされるのも鬱

陶しい。

適当に話して、適当にやり過ぎしておけばいい。それでサーニヤ達も納得するだろう。

だから仕方なく、サーニヤの言うお話に付き合っただけ。

宮藤達が顔を見合わせる。

と、急に嬉しそうな表情を浮かべた。エイラは…微妙な顔を浮かべている。

「椅子なら私達が取ってきます！」

「儀國さんは休んで下さい！」

宮藤とリーネが部屋から出て行く。

その後姿を見つめて、儀國は二人が嬉しそうな顔を浮かべているのか理解出来ず、眉を寄せた。

椅子を持ってきた宮藤達が揃い、早速サーニヤの言うお話を始める。と言っても、此方は相手に何かを質問するつもりはない。向こうからの質問を、答えられる範囲のみ答えるだけだ。別に相手のことなんて知りたいたとも思わないし、知った所で何も起きない。

「で、何を聞きたいんだ？」

「あ、あの…儀國さんについて色々知りたいです」

最初の質問がサーニヤの口より飛び出す。
これは…別に答えられる範囲だ。
だが、その前に。

「…盗み聞きはよくないと思うがな、フランチェスカとイエーガー」
閉まっているドアに向かって、儀國は言葉を投げ掛けた。
暫くして、ゆっくりとドアが開き二人の魔女が入ってくる。

「なんで分かったんだ？」

「気配、それだけだ」

「お前本当に凄いな…」

そう言って出て行くのか、と思えばシャーリーは椅子に座った。
予め持ってきていたらしい。
そしてその隣にルツキーニが座る。ルツキーニも予め椅子を持って
きていたようだ…。

「もう体調はいいのか？」

「…軽い眩暈だけだって言ったたる？
別に問題ない。ところで、お前達は何をしに来た」

「何って、面白そうだからあたし達も交ざろうってな。
なっ？ ルツキーニ」

「うん！」

シャーリーの問いに、ルツキー二は元気な声で答える。

…あの一件から、もう俺を怖い人間とは思わなくなったのだろうか。以前の様に脅えている様子も見られない、いつもの調子でシャーリーと喋っている。

「…ハア、まあいい。で、さっきの質問だが…」

「やつほー！ 心配だから遊びに…って、ありゃ？ 皆してどうしたの？」

ノックもなしにドアが開かれたと思うと、ハルトマンがやってきた。そして宮藤がハルトマンに説明。と、私も交ざると椅子を取りに出て行った…。

「で、何でこうなるんだ？」

不機嫌そうに、儀國さんが呟く。

あれからハルトマンさん、バルクホルンさんと…501の皆が儀國さんの部屋に集まった。

理由は、儀國さんから話を聞かせてもらってるから…。

そして、儀國さんは私達を見て小さく溜息を零していた。

「あの…ごめんなさい」

「いや、いい…。もう、どうでもいい」

半分諦めた顔で、儀國さんは項垂れていた。

「それよりも、早く聞かせてくれないか？」

坂本少佐が話をするように急かす。

「…後から来た分際で何で仕切ってたんだよ、お前は。」

「つか、お前等仕事はどうした？ サボってんじゃねーよ」

「なに、仲間とのコミュニケーションを仕事の一つだ。」

お前の事は、私を含め皆何も知らないからな」

「…知った所で、何も起きないし変わらないと思うがな。」

「…まあいい、難しい話はナシの方向で。面倒だからな」

そう言いながらも、儀國さんは色々と話してくれた。

第四章 第一節：新生活（後書き）

第四章 第一節でした。

長ったらしくなってしまったので、二つに分けることにしました。

すわっ！

第四章 第二節：談話（前書き）

第四章 第二節です。

第一節の続き的な話です。

第四章 第二節：談話

……魔術師、及び魔法という力を扱う者が必ず有している機関。

魔術回路……これがあるからこそ、儀國さんも私達も魔法が使える。魔術回路は魔法力を生成して、そして魔法を発現するまでの工程を行う機械の様なもの、と儀國さんは教えてくれた。

坂本少佐を含む通常のウィッチの魔法力減衰の原因は、この魔術回路に掛かる負担が限界を超えて壊れてしまうから……と、儀國さんは言う。

「宮藤の場合、魔術回路の機能が全て正常に作動しているから問題ない。

だがあの時、坂本の魔術回路は殆どが機能していなかった。

本来担う仕事だけでいいのが、正常に作動していないが為に機能している部分だけで処理作業をするから過度の負担が掛かり、やがては使い物にならなくなる。

そうなったら行き先は一つ、ジャンクヤード（廃棄場）行きだ」

「それが……魔法力減衰の原因」

「お前だけじゃなく、他のウィッチのやつ等もそうだろうな。

まあ、サーニヤはあの時に治したから、もう問題はないがな」

「……そうなんだ」

サーニヤは、自分の右胸にそつと手を触れる。

「ucciferで、では！ 私もあの時のサーニヤを治療した時のように、「魔し天の白焰」で治してくれないか!？」

坂本少佐が儀國さんに頼み込んだ。
それを、儀國さんは心底嫌そうな顔を浮かべる。

「無理言つな。今の俺は魔術が使えない状態だと言っただろうが」

「では、使える様になってからで構わん！ 頼む！」

「…その話は、少し置いておきましょう。」

とまあ、これが魔術を使える理由だ」

「ま、待て！ まだ話は」

「刀を持ってきた時にワケを話してやる。」

もう話はこれで終わりか？」

坂本少佐の話が強引に終わらせて、次の話へと進もうとする。

と、今度はリーネさんが儀國さんに質問した。

…坂本少佐、物凄く悔しそうにしてる。

「あ、あの…儀國さんはどうして三つも固有魔法を持ってるんですか？」

「あ、それあたしも聞きたいな」

リーネさんの質問に、シャーリーさんも口を開く。

普通…私達ウィッチが持っている魔法は一つだけ。

でも儀國さんの場合、三つも魔法を…炎を持っている。

青色、灰色、白色…。皆綺麗な色で、何処か神々しさを感じさせる。

けど、本当はとても恐ろしい力を秘めた…怖い炎。

「少し、勘違いしているな。俺の場合三つ魔法を持っているんじゃない。
セットで一つだ」

「セットで…一つ？　なんだそりゃ」

「俺の魔術…固有魔法名は「Heili Fire地獄の七焰」。
ベルフェゴール、ルシファー、レヴィアタンはその一角に過ぎない
という話だ。

まあ、沢山持っている…と言うことに変わりはないがな」

「何だよそれ、凄すぎだろ！」

シャリーさんが興奮した様子で儀國さんに言った。
青色、白色、灰色の炎以外にも、儀國さんはまだ炎を持っている。
セットで一つ、なんて固有魔法は…初めて聞いた。

「因みに、後幾つ持っているの？」

ミーナ中佐が儀國さんに尋ねた。

「もう気付いていると思うが…後四つだ。

俺の炎は全て中世の時代、猛威を振るっていた七大罪を司りし悪魔
達の力を炎として生まれ変わらせた物…。

『怠惰』、『高慢』、『嫉妬』、『暴食』、『強欲』、『色欲』、
『憤怒』…。

今現在使役出来るのは五つ、『色欲』と『憤怒』以外の大罪だ。
アイツを斃した事で使える様になった『強欲』と『暴食』を含む残
りの炎はもつと…遥かに強く、そしてかなりの暴れん坊だ。

まあ、俺にとつちや頼れるやつ等である事には変わりないがな」

少しだけ自慢げに、儀國さんは話してくれた。

七つの大罪を司る悪魔：その力を炎として使える魔術師、儀國さん。ベルフェゴール、ルシファー、レヴィアタンよりも強い炎…。

残りの四つは一体どんな色の炎で、どんな姿の悪魔なんだろう…。

悪魔はとても恐ろしく、人間に災いを齎す悪の存在。

その悪魔の力を儀國さんは支配し、使役出来る。その事が、素直に凄いと思える。

「悪魔の力を使役するなど… 本当にお前と言う人間は非常識なヤツだな」

「それでもないぜ、バルクホルン。」

お前たち魔女や魔法、そしてネウロイがいるぐらいだ。悪魔や魔術師が居たって、別に何も不思議なことじゃないだろう？

さてと… 今度は少し、聞きたいことがあるんだが…」

そう言った儀國さんは、私の隣に座っているエイラに視線を向けた。

「…エイラ、お前に聞きたいことがある」

不意に、儀國が私に尋ねてきた。

「な、何だよ… 私は別に何も話すことはないぞ」

「いや、お前だからこそ俺は話をする必要がある」

真剣な眼差しで、儀國は言う。

ここまで儀國の真剣な眼を見たのは…多分初めて。いつもは素っ気無い興味のない眼、つい最近怒りを見せた眼しか見たことがない。

だから、ここまで真剣な眼を浮かべるぐらいだから…余程のことなんでしょう。

エイラは照れ臭そうに視線を逸らし、頬を掻く。

…私は男には興味はない。

別に女性を恋愛対象として見ている同性愛者って訳でもない。

でも、私の心はサーニャ一人で満たされている。

だから野郎が入り込める隙間なんてないし、最初からこっちも用意していない。

けど、コイツは。儀國はその隙間を、無理矢理作ってこようとする…。

当の本人は無意識なんだろう。けど、その無意識が無理矢理私の心の中に入り込もうとする。

「で…で？ 聞きたいことって何だよ」

「前に騎士型ネウロイとの戦闘をした時のことだ」

「……へ？」

予想外の質問に、エイラは呆気に取られた表情を浮かべた。

サーニャを助けてくれた恩もある、だから少しぐらいなら話してやってもいいと考えていた。

けど実際は…どんな質問が来るのかと思えば、ネウロイについての質問。

もつと個人的な、プライベートな内容とばかり思っていたのに。

「どうした？ 別に驚くような内容じゃない筈だが？」

「…ああ、そうだな。うん、少しでも期待してしまった私がバカだったってことだな」

「何だお前、大丈夫か？」

「うるさいバカ。それで、何を聞きたいんだよ」

少し不機嫌になりながら、エイラは儀國に尋ねた。

「詳しく聞いていないが……」。

以前、お前達がああ騎士型ネウロイと戦闘したと言う話をハルトマンに聞いた。

結果は、相手の撤退に終わった…ともな

「だから、それで何を私に」

「負傷者は一人もなし。未だに未知数の力を秘めている相手との戦闘でこの結果…普通じゃ考えられない」。

だが、それを可能にする輩がたった一人だけこの部隊には存在する。エイラ・イルマタル・ユートイライネン少尉…お前だ。

お前の持つ固有魔法『未来予知』ならば、如何なる攻撃をも回避出来る。

この結果を生み出したのは、お前がああ場において未来を見通し仲間指示したから。

だからこそお前に尋ねたい。お前の固有魔法『未来予知』はどの程度のものだ？

数秒先の結果だけを見るのか、それともその結果に至るまでの経過をも視えるのか。

もし後者であれば、聞かせてもらいたい。

少しでも情報があれば、この先ヤツと戦うのに有利になるからな。

…お前は一体、何を視た？」

「…そう言うことかよ」

儀國の質問に、エイラは答える。

内心、儀國と言う男を素直に褒めていた。

桁外れの洞察力。

あの場にいなかったにも関わらず、まるでその場で見ていたかのような言動。

そしてあらゆる可能性を考えての質問。

私ならば、ここまで思いつかないだろう…。

…騎士型ネウロイとの戦闘について、出来る限り詳しく儀國に伝える。

未来予知で見たヴィジョンの内容、シールドを張れること…戦法、全てを。

「こんな所だな…」

「…他に、何か変わった事はなかったか？ 例えば、空気が急に冷たくなったとか。

相手に何かしら変化が現れたとか…」

「…あつ！ そう言えば」

宮藤が不意に、何かを思い出したかのように声を挙げた。

「あのネウロイ…眼がありました！」

「眼？」

「ああ、宮藤の言う通りあのネウロイにはコアとは別に、赤く輝く物があった。

あれを、我々人間と同じ眼と言う器官なのかは分からんが…」

宮藤と少佐の証言。

確かに、あの騎士型ネウロイには眼みたいな物があった。

その眼みたいなのは、見ているだけで寒気を感じさせる…何か不気味な雰囲気を漂わせていた。

と、二人の証言を聞いた儀國が納得したような表情を浮かべる。

「…なるほど、そういうことか」

「何か分かったのか？」

「ああ、相手の能力の謎が解けた。

エイラの未来予知で見た経過、そして二人の証言からして…だいたいい、だがな」

「本当かよ！」

シャーリーが驚いた声を挙げる。

…コイツ、一体どんな頭してるんだ？

エイラは儀國に心底感服した。

……もう凄いとしか言いようがない。

今の私と宮藤、そして少佐の証言だけで敵の魔法を看破するなんて有り得ない。

何故なら、敵について情報があまりにも少な過ぎるからだ。

その少な過ぎる情報の中から、儀國はあの騎士型ネウロイの固有魔法の性質を見抜いてしまった。

どうやってそれだけの洞察力、考察力が身に付けられるのか分からない…。

「…どういう能力なの？」

ミーナ中佐が儀國に尋ねる。

能力さえ分かっただけじゃ、怖い物はない。

「悪いが、それは言えない。謎が解けたといっても、まだ仮説段階だ。

確実な証拠がない限り教えられないし、鵜呑みにして痛い目に遭う可能性もある。

まあ、アイツは俺独りで相手にするから…問題は無いがな」

「またそう言うことを言うな…お前」

エイラは呆れた表情を浮かべる。

…一応、儀國は仲間だ。

だから中佐からの命令があったら、一緒に戦う。

でも、肝心なコイツは私達と一緒に戦うことを拒んでいる。

こうやって私達と話をする様になった分、前より少しはマシになったか…と思ったけど、まだまだ素っ気無い所は改善されてない。

「なに、アイツは一对多人数の戦闘よりも…一対一の戦闘の方が

効率がいい。

それに、もしかしたらあの騎士型ネウロイ……俺が今まで戦ってきた中で最も“弱い”かもしれない」

とんでもない発言を、コイツは口にした。

私達11人掛かりでも撃墜できず逃がしてしまったネウロイを、儀國は……弱いと言った。

今まで儀國の前に現れそして斃されていったネウロイ、『剣』と『弓』の方が儀國は強かったと口にはしている。

どうして、そこまで自信たっぷりと言えるのか……私には理解出来ない。

「アイツは俺独りで充分だ。お前等の手は要らない」

「……勝てる自信が、随分とおありですわね。

以前はやられた上にネウロイを取り逃がした貴方が、今度は絶対に勝つ……と？」

ツンツン眼鏡が皮肉を込めて儀國に言う。

「」

……とても不敵な笑みだった。

儀國は何も言わず、ただ不敵な笑みを浮かべただけ。

でもその不敵な笑みが、ペリーヌの皮肉に対しての返答だった。

優しくも激しい、死をも畏れないギラギラと輝く瞳。まるで儀國の瞳には炎が宿っているかの様に見えた。

そして、やられる人間の眼をしていない。

逆に、相手を狩るといふ猛獣の様な鋭い眼をしている。

儀國はその笑みでツンツン眼鏡……ペリーヌに答える。

背後から聞こえてきたのはシャーリーの声。
振り返れば、やはりシャーリーがそこにいる。

「……………」

「聞いたぞ。夜になると一人ここで過ごしてるって」

「…だからどうした。少なくとも、お前には関係のない筈だ。イエーガー」

「そうそう、それ。それ止めてくれないか？」

少し不機嫌そうな声で、シャーリーは言う。
何がだ、と儀國は眉を寄せた。

「お前さ、あたしの事イエーガーって言うだろ？
呼ぶならシャーリーでいいよ、皆もそう言ってるし。
それに、ルツキー二もちゃんとルツキー二って呼んでやれよ。
フランチェスカって呼ぶヤツ、誰もいないぞ？」

「……………どう呼ぼうが、俺の勝手だろう」

「全く、何でお前はそんなに素っ気無いんだか。
……………何でお前はさ、一人で居続けようとするんだ？」

シャーリーは内に抱いていた疑問を儀國に尋ねる。

儀國と言うヤツは、いつでも独りでいようとする。

戦闘でも独り、普段の生活でも独り。決して皆と一緒にいようとはしない。
皆と一緒に居た方が楽しいし、何より退屈しない…とあたしは思っている。

「……別に。ここは戦場……共に戦うことはあったとしても、それ以上に戯れる必要はないと思うがな……」

「何だそりゃ……」

「……今後の為にも互いに関わらない方がいい。
本来なら、俺達は永遠に出会うことすらなかったんだよ……」

そう言った儀國の眼は…とても悲しい眼をしていた。
いつもの能面であることには変わりないけど、その能面からも後悔や悲しみといった負の感情が感じ取れる。

「お前はさ……一体、何を抱えてるんだ？」

儀國は静かに腰を上げ、そして何も言わずビーチから立ち去っていく。
く。

その後ろ姿を、あたしはただ見つめているしかなかった。

第四章 第二節：談話（後書き）

第四章 第二節でした。

次話もまた、よろしくお願い致します。

すわっ！！

第四章 第三節：悪夢（前書き）

第三節です。サブタイは……今日も適当です。

第四章 第三節：悪夢

…赤い光景だった。

何処か、鬱蒼とした森の中に一人佇んでいた。

周囲は燃え盛る紅蓮の炎で囲まれている。

ぱちぱち、と音を立てながら燃えていく木々。その中に、断末魔を挙げながら炎に包まれた激しく踊っている物が視界に入った。

…激しい吐き気に襲われた。炎に包まれているのは…紛れもない、人間。

全身を炎で焼かれ、その苦しみから断末魔を挙げて…やがては跡形もなく燃え尽きる。

そんな光景が、周りでは起きていた。

…これは悪い夢だ。そう何度も言い聞かせる。

耳に響いてくる、死を恐れ助けを求め断末魔も。

触れれば一瞬で自分自身も燃やし尽くされてしまいかねない、この炎の熱さも。

みんな、全て…悪夢なんだ。

だから早く眼が覚めて欲しい…。そう願った、と同時。

一人の男の子が視界に移る。

男の子は血に赤く染まっていた。

右手には、私よりも小さな体格に似つかない…扶桑刀が振り。

扶桑刀は芸術品としても有名な代物なのは知っている。

折れず、曲がらず、斬れる…坂本少佐も愛用している物。

その綺麗な白銀に煌く刀身は、芸術品として扱われても可笑しくない美しさを放つ。

だけど、少年が持つその刀の刀身には…赤い液体が大量に付着していた。

男の子は、私よりも年下。恐らく、10にも満たない…。そんな男の子は、とても子供が浮かべられるとは思えない…能面を浮かべていた。

ただ、其の瞳からは一筋の涙を頬に伝わらせて…。ゆっくりと、少年は手にした刀の柄を両手で持ち、ゆっくりと振り翳す。

その視線の先、一人の男の人が座っていた。背後にある一本の木に背中を預けるように力なく、そして口元から一筋の赤い液体を垂らして。

目の前の男の子を…何処か満足げに見つめていた。

ダメ。。。

私は男の子に向かって叫んでいた。

その叫びも虚しく、振り翳された扶桑刀は無情にも振り下ろされる。斬、と言う肉を断つ嫌な音と共に。

男の身体から赤い鮮血が噴出した…。

「イヤアアアアアツ!!!」

慌てて飛び起きる。

乱れた呼吸、額や汗から流れ落ちる冷や汗。

そして…意思とは無関係に零れ落ちていた涙。

涙でぼやけた視界に入るのは、悪夢の光景ではなく。見知らぬ、けれど見慣れた構造が映し出されていた。

この石造りの建物は、今の私達の家…基地。

やっぱり。あれは夢だったんだ、と分かるとホッと安堵の息を漏らした。

「……………」

冷静になったことで、ここで初めて不快感に気付く。

汗によって濡れたシャツが肌に張り付いていた。こんなにも汗を掻いたのは…久し振り。

早く着替えよう、とベッドから降りようとし。

慌しく通路を走る足音が幾つも聞こえてきたかと思うと、目の前の扉が蹴破られんぐらいの勢いで開かれた。

「サーニヤ！ どうしたんだ!？」

「サーニヤちゃん!？」

寝巻き姿のエイラや芳佳ちゃん達が部屋の中に駆け込んできて、そして私を見て皆驚いていた。

エイラはこの世の終わりが来た、みたいな…絶望の色の表情を浮かべていた。

芳佳ちゃんやリーネさん達は、顔を赤くして私を見ている。

どうして…そんな顔をしているの、と尋ねようとした時…その理由がすぐに理解出来た。

思えばそうだ、エイラと一緒に部屋の部屋で寝ているのに…どうしてエイラが寝巻き姿で外から部屋に来るのか。

その理由は…私が違う部屋で寝ているから。

その部屋の主は……、

「…スー」

可愛らしい寝息を立てて眠っている、儀國さんの部屋だった…。

「どうした！ 何があった!？」

「うわっ！ 儀國がサーニヤを部屋に連れ込んでる!！」

「なっ……なっ……儀國……!！」

少佐、ハルトマン中尉と。次々と、皆が集まってくる。

エイラは、ワナワナと身体を震わせたかと思うと儀國さんに殴り掛かるうとした。

「…あの、本当にごめんなさい」

朝の食堂、その雰囲気はいつにも増して最悪。ギスギスとした空気が流れていた。

理由は簡単、儀國さんが凄く怒っているから。

眉を寄せて、苛立ちを見せながら、黙々と朝ごはんを食べている。

いつもなら話し掛けるハルトマンさんやシャーリーさんも…この時ばかりは話し掛けようとはしなかった。

「……………」

「おい、サーニヤがこんなに謝ってるんだから、もう許してやれよ」

エイラが私を庇ってくれる。

と、黙々と食べていた儀國さんがお箸を止めて、エイラを睨み付けた。

「な、なんだよ…」

「…勘違いするな。俺は何もサーニヤに対して怒っているわけじゃない。

夜間哨戒任務明けで、寝惚けて部屋を間違えた…まあそこは百歩譲って許してやる。

だが、俺が今一番苛立っているのは…人の話を聞かないお前達に対してだ」

今日の朝食はいつもより遅め。

と言うのも、ミーナ隊長を含む全員からの尋問を儀國さんが受けていたから。

訳も分からず、私を部屋に連れ込んで破廉恥な事をしたと言われて慌てて否定する儀國さん。

そんな儀國さんの言葉には全く耳を貸さないで、犯人と決め付ける皆。

私も仲裁に入って、一時間後にようやく事は収まった。

…いつも能面ばかりを浮かべている儀國さんだけど、あんなに慌てた様子を見たのは…初めて。

新しい一面を見れてよかった、と思う反面。

怒らせてしまって…申し訳ない気持ちでいる。

「おい、隊長さん。こういう事も起きるから…俺をさっさと元の場所に戻せ。

ついでに職種もな…」。

だから、俺はお前達と一緒にの場所で寝るのが嫌なんだよ…」

「…ま、まあ、もう済んだ事ですし。この話はもうお仕舞いに…」

「…「煉獄の青焰」がいいか…それとも残り四つのどれがいいか。力が使えるようになったら、好きな方を選ばせてやる。」

「煉獄の青焰」に限らず、どの炎もお前等を簡単に殺せる力を持っている。」

それを、身を以って理解させてやる。

俺はどっちでもいいぞ？ 燃やし尽くされるか…それともブチ殺されるか、どっちでもな。

ああ、刀でバツサリ…なんてのもいいなあ」

「…「本当に申し訳ありませんでした…!!!」」

全員が儀國さんに頭を下げて謝罪した。

勿論、私も…。元はと言えば、私が原因だから。

私が寝惚けて儀國さんの部屋に入って、寝ていたのが原因…。だから、全部私が悪い…。

「…たく。お前等も冷静になって考えてみる。

俺がガキに手を出すと思うか？」

その言葉に、エイラが最初に反応した。

「…どついう事だよ」

「サーニヤは14、俺は19。コイツとは5歳も歳が離れてるんだぞ？

もし俺がサーニヤに手を出していたら…俺は完全に犯罪者だ。

児ポ法で捕まる程、俺は女に飢えてもないし…ガキに手を出すつもりもない」

「ねえねえ、児ポ法ってなにになに？」

「あゝ…そうだな。お前みたいなガキに手を出したら即刻お縄行き
って法だ、ルッキーニ。
憶えておいて損はないぞ」

児ボ法…聞いたことのない言葉、法律。

扶桑じゃ、私の知らない法律があるのかもしれない。

でも、芳佳ちゃんや坂本少佐を見てみると…そんな法あったか、と
お互いに首を傾げていた。

「…じゃあ、サーニヤに手を出さないんだな？」

「…エイラ、お前は俺を犯罪者に仕立て上げたいのか？」

さつきも言ってるだろうが、サーニヤは一人の異性として見る気は
ない。

どっちかと言えば、妹分が近いだろう。

因みに、それで言う宮藤、リーネ、ルッキーニも妹分に入るな」

「えつと…じゃ、じゃあ私からすればお兄ちゃんって、ことになる
んですよね」

「まあ、そうなる…んだらうな」

「お兄ちゃん…か」

その言葉に、芳佳ちゃんやリーネさんは何処か嬉しそうにしていた。

「じゃあさ、儀國から見て誰を一番異性として見てるの？」

あ、もしかして…私だったりする？」

ハルトマンさんの言葉に、皆が一斉に儀國さんに視線を向けた。さっきまでの態度が嘘のよう。興味、関心を示した表情で皆儀國さんを見ている。

ハルトマンさんの問いに、儀國さんは暫く考える仕草を取った後

「…心配するな、ハルトマン。お前は異性の内の入っていない。

言い忘れていたが、お前は手の掛かる自由奔放なダメ妹。これが俺の中でのお前だ」

「…何それ、こんなにセクシーギャルなのに、そんな酷い事言うの？」

「それは只の自意識過剰。セクシーギャルだって言うのなら、せめてシャーリー…とまではいかないが、兎に角それぐらいになってから物を言え」

「ほっほー。じゃあ儀國は私みたいな女がタイプって訳か…。だってさ、バルクホルン？」

「ぎ、儀國！ 貴様は胸の大きさだけで異性の物事を決めているのか！？」

挑発的な表情を浮かべるシャーリーさんに、バルクホルンさんは儀國さんに問い詰める。

そんな様子に、大きな溜息を吐いた。

「…どうでもいいだろ、こんな話。

それに、俺は胸の大きさを云々で全てを決め付けない。

つか、何でそんなに興味津津なんだ？ お前等は…」

「では、私達はどう見ているんだ？」

坂本少佐が儀國さんに尋ねた。
もう一度、大きな溜息を吐いた。

「…宮藤、リーネ、サーニヤ、ルツキーニ、ハルトマンは妹分。
ペリー又は高飛車でクソ生意気なツンツン眼鏡のガキ。
エイラは人の話もろくに聞かないガキ。
シャーリーは、仲良くなれば気の合う女友達みたいな感じ。
バルクホルンは……。」

坂本は「

「少し待て。どうして私の時だけ何もないんだ！？
説明しろ！」

「そうですね！ 貴方にクソ生意気なガキと言われる筋合いはあり
ませんわよ！」

「どうでもいいだろうが。思いつかなかったんだよ。
ああ、今思いついた。ちょっととした事ですぐ怒る女。カルシウムを
多く摂れ。」

ペリー又、そう言う態度を俺は言ってるんだよ…。
後、お前はツンツンし過ぎだ」

「それを言うなら…儀國もだろ」

エイラが儀國さんに対して呟く。

「で、坂本は…訓練と刀好きの女。」

隊長さんは……特になし。強いて言えば苦勞人、三十路級の貫禄の女って所だろう」

「少し待ちなさい、儀國。

今の発言は……どういう意味かしら？」

笑顔を浮かべているけど、その裏で怒りを沸々と煮えさせているのが痛いほど分かる……ミーナ中佐。

……前にエイラから聞いたことがある。

ブリタニアに居た頃、エイラが小耳に挟んだ整備兵さん達の噂。

ミーナ中佐は本来の年齢よりも年上に見られていて、整備兵の間では三十路じゃないかって……。

……やっぱり、エイラが言っていた事は、本当なのかもしれない。

「いや、儀國の発言には説得力がある」

「確かに……ミーナは子沢山、と言うイメージがあるな」

坂本少佐とバルクホルンさんが同感、と口を開いた。

言われてみれば、確かにそんな気がする。

他の皆も相槌を打ったりしていた。

「い、いい加減にしなさいッ!!」

皆から言われていたミーナ中佐が、怒りの声を挙げた。

騒がしくなる食堂、怒れるミーナ中佐を落ち着けと宥めている坂本少佐とバルクホルンさん。

ふと、儀國さんの姿がない事に気付いた。

儀國さんの席は既に空席。出入り口の方に視線を向けると、食堂から立ち去っていく儀國さんの後姿が見えた。

「……………」

口論する声で騒がしい食堂の中、サーニヤは去って行った儀國の背中を見つめて、ふと思い出す。

あの時見た、夢…。

思い出したくはない。だけど、あの光景が眼に焼きついて離れない。燃え盛る森の中、灼熱の業火に包まれ断末魔を挙げながら焼き尽くされる人。

刀を手にした男の子、そして…その手によって殺された、男の人…。どうして、私はあんな夢を見たんだろう。

…それに、あの男の子の事。雰囲気的に、とても似ている気がする。能面な表情。鋭くも熱くキラキラとし、同時に…とても悲しげな眼。とても、儀國さんと似ている気がする…。

|| || || || || || || ||

「……………」

人気のない砂浜に一人、佇む。

…今日は本当に災難としか言いようのない日だった。

サーニヤが寝惚けて、まさか俺の部屋に入ってくるとは思わなかった。

それが原因で、サーニヤを部屋に連れ込み破廉恥な事をしたと言われる始末。

その理由が、サーニヤが涙を流していたから…。

女が男の部屋で、ベッドの上で泣いていれば…まあ勘違いしても可

笑しくはない、だろう。

だが、それが原因で面倒事に巻き込まれたのは本当に災難としか言いようがない。

何故、あの時サーニヤが泣いていたのかは…分からないが。

…次からドアに鍵を付けても、いいかもしれない。

「…………ハア」

「あ、あの…………！」

後ろから砂を踏みしめる音と、少女の声が聞こえてくる。

「サーニヤか」

「あの…本当に今日は、ごめんなさい…！」

頭を下げて謝罪するサーニヤ。

そんなサーニヤに、儀國は呆れた様な…疲れた様な表情を浮かべた。

「…もういい、何度も謝る必要はない。

次気を付けてくれればいいし…何より、アイツ等が人の話に耳を傾けるって事を憶えれば問題はない」

わざわざ、俺を探しに追いかけてきたのか。

食堂で散々謝り、落ち込んでいたのにまだ謝り足りないと思っっているのか…。

逆に、そんなに謝られる方が鬱陶しい。

これでは、まるで此方が悪者みたいに感じる。

「…で、用件はそれだけか？」

「…一つ、聞いてもいいですか？」

「聞きたいこと？」

「その…儀國さんのご両親って、今はどうしてますか？」

突然の質問だった。

何故、サーニヤは俺の家族について尋ねてきたのか。単なる好奇心…にしては、随分と変なタイミングだ。わざわざ追い掛けてきて尋ねて来たのも気になる。

「…元気にしてるぞ、一応な」

サーニヤの手前、嘘を吐いた。

サーニヤは幼少期に、ネウロイの侵攻により両親と生き別れている設定。

今もオラーシャの何処かに、サーニヤの両親は生きている…筈。そんな両親との再会を、一刻でも早く。そして、平和な時間の元過ごす為に。

サーニヤは、小さき身体を以ってネウロイと戦っている。

そんなサーニヤに、変な悪影響を与える様なことはしたくない。何より、エイラがまた煩く言ってくるのが面倒だ。

「まあ、今頃家でグータラしてるだろうな…」

「……夢を見たんです」

「夢？」

「燃え盛る森の中で…一人の男の子が扶桑刀を手にして、男の人を…斬った夢です」

思わず、我が耳を疑った。

何故、とサーニヤに心の中で尋ねている中。サーニヤは続けて言葉を放つ。

「男の人は、殺されたのに…男の子に微笑を浮かべてたんです。そして、男の人を斬ったその子も…涙を流してました」

「……で、その夢がどうかしたのか？」

悪夢を見たっただけなら、他所でしてくれ。幾ら俺でも悪夢まで取り除ける訳が」

「儀國さん…もしかして、あの男の人は、お父」

「夢の内容を話されても、俺にはどうしようも出来ない。

お前が夢で見た男の子やら斬られた男やら、所詮夢の内容でしかない。

話はそれだけだな？」

俺はそろそろ、部屋で一眠りしてくる」

話を強制的に切り上げて、サーニヤの言葉を待たずそのまま立ち去る。

…何故、サーニヤがアレの事を知っている？

夢で他人の過去を見る、という俺の知らない固有魔法を…サーニヤは所持しているとしてもい言うのか？

…別に、知られたからと言って…どうもなりはしない。

勿論、話す気は最初からない。知られたからと言って、どう思われようとも関係ない。

自分は、ただ自分のままで。

俺が今すべきことだけを、ただそれだけに集中すればいい…。

儀國さんがビーチから去っていく、その後姿を私はただジッと見つめているしかなかった。

…やっぱり、儀國さんは何かを知っている。

いつもの態度を装っていたけど、何処か焦っている様にも見えた。

儀國さんは所詮夢の出来事だ、って言っていただけ。

だけどあの夢には、何か大きな意味がある。私は、それを知りたい。そうすることで、きっと儀國さんの力になれると…そう思えるから。

儀國が立ち去ってから、サーニヤもそれを追う様にビーチを後にした。

第四章 第三節：悪夢（後書き）

第三節でした。

……児ポ法って、確か1998年頃……でしたっけかな。

第四章 第四節：買い物（前書き）

第四節です。サブタイトル、ここ最近全く浮かばず適当です。

第四章 第四節：買い物

儀國が正式に魔術師^{ウィザード}として、私達ウィッチと行動をするようになってから、早数日が経過する。

あれから、儀國はほんの少しだけマシな性格になった…と私の中では思っている。

話し掛ければちゃんと返してくれる様になった。

たまに：本当にたまにだけど、小さく笑うようになった。

本人は笑ってないと言って認めないけど…。

でも、それでも儀國はまだ：私達と言う存在を避けているし、関わらないようにしている。

常に一人で：儀國は独りで日常を過ごしている。

向こうから私達に何かを話し掛けてきた事は、一度としてない。

前に、エイラにあの騎士型ネウロイについて尋ねたぐらいで…後は何も。

私は儀國の事をもっと知りたいし、仲良くなりたい。だから色々と尋ねる。

でも儀國の場合、私：私達に対して無関心だ。

前にも言っていた様に、儀國は私達と仲良くするつもりはない…らしい。

今日もそうだ。

朝食を食べている時、儀國だけは黙々と、能面を浮かべたまま食べていた。

美味しいも不味いも言わないで、ただ黙々と箸を進めるだけ。

宮藤が美味しいかどうか聞くと、普通に美味い…とだけ答える。

その言葉に感情が籠っている、とは言い難い。

そして食べたら直ぐに何処かへと行ってしまふ。

食事以外でしか儀國とは一緒に過ごせない。

「…どうすれば、いいんだろうなあ」

食堂にて椅子に凭れ掛かりながらハルトマンは呟く。

「こんな所で、どうしたんだ？ ハルトマン」

「トゥルーデ」

食堂にトゥルーデがやってきた。

トゥルーデは私の顔を見て、すぐに悟ったようだ…。

「…また、アイツの事で悩んでいるのか？」

「うん、まあね…」

「全く…アイツは何故、ああも心を開こうとしないのか…」

呆れた様子で、トゥルーデは言う。

どうしたら、儀國は心を開いて私達に接してくれるんだろう。
儀國はまだ、私達との間に壁を作っている。

私は…その壁を壊して仲良くなりたいと思ってる。
でも、その方法が思いつかない。

「うん……」

と、そこにあるアイディアが浮かび上がった。

「そっだ！」

「ん？ どうかしたのか、ハルトマン」

「ちよつとね」

上機嫌で食堂を出て行くハルトマン。

そんな様子を見て、バルクホルンは眉を寄せながら小首を傾げた。

|| || || || || || || || || ||

「買い物？」

「そつ、買い物だよ」

それは突然だった。

部屋にいきなり来たかと思えば、買い物に付き合えと言ってきた。

臨時補給の任務、と言う訳ではないらしく。ただ単にハルトマン個人の買い物。

そして、他のメンバーからも色々と買ってきて欲しいものがあると頼まれた。

そして現在暇なのはハルトマンを含めて俺だけ。

つまりは…荷物持ちに來い、ということだ。

「面倒だな、断る」

「え、儀國暇でしょ。こんな可愛い女の子に重たい荷物持たせるつもり？」

「知るか。自分一人で無理だと思つのなら、引き受けなかつたらいいだろう」

「そ、そりゃそーだけどさ……」

「あ、ハルトマンさん……」

サーニヤとエイラの二人が見える。

「中尉、これから出掛けるのか？」

「ハルトマンさん、その…出来ればいいんで、お願いしますね？」

「も、勿論！ 私に任せてよ」

何処かきこちなく、ハルトマンは二人に言う。

その返答にサーニヤは嬉しそうに笑みを浮かべた後、エイラと共に立ち去った。

二人が去り、姿が見えなくなったのを確認して…ハルトマンは小さく溜息を吐く。

「…実はさ、今日非番だから買い物に行くって言ったら…ミーナとか少佐に色々頼まれちゃってさ。それに、見たでしょ？ サーニヤのあの嬉しそうにしてた顔。

夜間哨戒とか色々あって、街に出掛ける機会がなかなかないからさ

…」

「…ハア、分かった分かった。もういい、一緒に行つてやる」

呆れた様子で、儀國は口を開く。

「えっ！？ 本当に!？」

「そんな事聞かされたら、断るに断れないだろ…。
それに、あんな顔されて…後で泣き顔を見るのも嫌だからな。
荷物持ちって言うのが気に入らないけど…付き合っつてやる」

確かに、サーニヤが普段街に出掛けている姿を一度も見たことがない。

主に夜間哨戒任務を主にするサーニヤ、帰ってくるのは明け方…朝一。

一睡もしてない状態。ましてやその状態で、いつネウロイが襲撃してくるかも分からない緊張感。

となれば、娯楽よりも睡眠を優先させ体力回復をしなければならぬ。

こんな生活習慣では、街に遊びに行こうにも行けない。

…だから、今回は仕方なく。サーニヤを悲しませない為に、仕方なく付き合っつてやる。

「それじゃ、早速出発しよう!」

「ああ、さっさと行くぞ。

だからいちいち手を引っ張るな」

ハルトマンに手を引かれながら、駐車場まで駆け足で向かった。

計画通り

!!

黒い悪魔…ハルトマンは儀國の手を引きながら邪悪な笑みを浮かべていた。

絶対に儀國が断る、ということは既に予測済み。

私一人では、無理だと言う事も計算してある。

だから、と。増援を予め頼んでおいた。

エイラは勝手にサーニャに付いて来たオマケで、本命の増援はサーニャだ。

練習通りの台詞も完璧、サーニャ自身もなかなかいい演技をしてくれた。

そして後は私が一押しすれば…。その後は、私の計画通りに事は進んでくれた。

儀國は素っ気無いけど、心優しい奴なのは私じゃなくても皆理解している。

だから絶対に断らない、という自信もあった。

…本音を言えば、“私個人”の願いを断らずに聞いて欲しい所ではある…。

一緒に出掛けられるだけ、今はよしと言うことにしておいた。

|||||

ハルトマンの運転で、ローマの街へと赴く儀國。

16歳で車が運転できる…以前に、運転の免許証などはどうなっているのだろうか。

この世界…否、戦時中は運転技術さえあれば誰でも運転出来るシステムになっていたのだろうか？

そんな事を思いながら、基地を出て一時間弱。車は無事ローマへと辿り着いた。

「着いたよ、儀國」

「ああ、着いたな」

車から降り、儀國は大きく身体を伸ばす。

「で、何を買ったんだ？」

「えっとね、お菓子！」

…近くの店に立ち寄る。

ハルトマン曰く、ロマーニヤの土地勘のあるルツキーニより店を聞いてあるとのこと。

そして今立ち寄ったこの店が、何でも揃っていると言う、ルツキーニオススメの店らしい。

ドアを潜れば洋服から雑貨、食料品等。数多くの品物が出迎えてくれる。

ルツキーニは買い物籠を手にすると、鼻歌交じりに買い物始める。先程も言っていた通り。お菓子コーナーへと直行し、お菓子を大量に籠の中へと入れていた。

「儀國、これ持ってて」

「はいはい…」

早速、荷物持ちをさせられる。

お菓子が大量に詰め込まれた籠。大方、お菓子を頼んでるのは…ルツキーニぐらいだろう。

…このお菓子がハルトマンとルツキーニの二人分。どう見ても、二人で食べきれぬ量じゃない。

三人…五人前ぐらいはあるのではないだろうか…。

「あ、因みにそれ私のだから。これがルツキーニの分」

「はあ！？ お前、これだけのお菓子を一人で食べるのか！？」

「お菓子なら幾らだって入るよ。」

丁度お菓子無くなっちゃったから、買っておきたかったんだよね」

…コイツの胃袋はどうかしている。

それに、お菓子をこれだけ食べてもそのスタイルを維持している。女性陣が聞いたら誰もが羨み、そして嫉むのはまず間違いないと言える。

そうこうしている内に、ルツキーニの分が出来上がり、その籠を持たされた。

「随分と、また大量に入れたもんだな……」

「私とルツキーニの買い物はこれで終わり。」

次は…っと」

ようやくお菓子コーナーから離れて、他のコーナーに足を運ぶハルトマン。

俺自身も、お菓子の籠を両手に店内を見て回る。

…本当に色んな物が置いてある。店の雰囲気もいいし、商品も豊富。今度一人で来た時は、この店に再び寄ってゆっくりと見ることにしよう。

と、ある物が眼に入った。

赤く綺麗な布が敷かれた小さな机。その上に展示されている装飾品の数々。

その中で、気になるアクセサリーがあった。首にぶら提げる、ネックレス。四葉のクローバーの型の中に猫のシルエットがあるというデザイン。値段的にも悪くない。それに、これならば…

店の中で買い物を終えて、後にする。

買った荷物は後部座席へ。そして、アレはポケットの中へと仕舞っておく。

「儀國は買い物しなくてよかったの？」

「ああ、俺の場合…少し違う店に行く。

荷物持ちで来てやったんだ、少しばかり付き合ってもらっぞ」

|||||

儀國の案内の元、ハルトマンは車を走らせる。

適当な場所に駐車し、ここで待っている、と儀國は言い残し車から降りる。

向かった先は店ではなく、人気の無さそうな路地裏へと入っていく。一体何処に行くんだろう、とハルトマンは車を降りてその後を追った。

待っている、と言われたけれど気になって仕方がない。

もしかすれば、基地では見られない儀國をこの眼で見られるチャンスかもしれない。

約束は破る為にあるもの…、とそんな事を誰かが言っていたのを、

ふと思い出した。

儀國の後を追って路地裏へと入る。

すると、露店商を開いている一人の男と儀國が話しているのを見た。……何やら話し合っている。どっちかと言うと……揉めている様にも見える。

暫くして、嬉しそうに……そして何処か勝ち誇った顔の儀國と。

しくしくと、涙を流し何処か諦めている様な表情を露店商の男は浮かべていた。

儀國が満足気に、こっちにやって来る。

「待っているって、言ってた筈だけど？」

「気になって仕方なかったんだよお。」

「って、その小つちやい布の袋何が入ってるの？」

儀國が手にしていた布の袋を、ハルトマンは指を指しながら尋ねる。儀國は満足気な表情を浮かべながら、紐を解いて中身をハルトマンに見せた。

「これって……宝石？」

「そう、宝石」

儀國が購入したのは、綺麗な宝石が沢山詰められた袋だった。

ルビー、サファイア、エメラルド……見るからにどれも相当な値が付けられる物ばかり。

誰かに送る為に買ったのか……それとも、あくまで自分自身の為に買ったのか。

どっちにしても、儀國が宝石なんて物を買うなんて……少し予想外。

「これ、どっしたの?」

「ああ、使っただよ。」

「使う? 使っつて……何に?」

「そりゃ教えられないな。」

兎に角、コイツは今後絶対に必要になってくる物、とだけ言っておく」

ポケットに仕舞いながら、儀國は路地裏を出て行く。
その後を追って、私も路地裏から出た。

「でもさ、その宝石…結構したんじゃない?」

「まあな。でも、かなり値引きしてもらった……いや、させてやったと言う方が正確だな」

「……何をしたの?」

「……聞きたいか?」

何処か邪悪を感じる、儀國の不敵な笑みにハルトマンは激しく首を横に振った。

何故か、聞いてはいけない様な気がする……。そんな気がしたから、ハルトマンは儀國に尋ねるのを止めた。

|| || || || || || || || || ||

「たっただいま。帰ったよ」

車を車庫に駐車し、大量の荷物を持ちながら皆がいるミーティングルームへと向かう。

…ハルトマンは何も手にしていない。荷物を全て持っているのは、俺。

遠足は家に帰るまでが遠足、と言う名言がある様に。

荷物持ちもまた、基地に帰って皆の所に行くまでが荷物持ち…と言う事である。

賑わうミーティングルーム、その中心に街で買ってきた…各々注文した品を置く。

子供組みが一斉に群がり、頼んだ品を手に取り喜んでいる。

…幾ら空を駆りネウロイと闘っている、と言っても。この光景を見ていると、やはり外観相応の少女達…と思わされる。

ハルトマンがサーニヤに何かを手渡す。

恐らく、サーニヤ本人がハルトマンに頼んだ物。手渡したのは、猫のヌイグルミだった。

使い魔も黒猫、部屋にも猫ペンギンと言うヌイグルミを持っていた…等。

ハルトマンからヌイグルミを受け取ると、サーニヤはとても嬉しそうな表情を浮かべていた。それを見ていたエイラは…鼻血を出している、とても気持ち悪い。

…何はともあれ、ハルトマンの言っていた様に、サーニヤは普段街へと出掛けられる機会がとても少ない。

だから、他のメンバーよりも比べて…その嬉しさは大きいのだろう。

「……………」

ポケットから“アレ”を取り出す。

「…おい、サーニャ」

「はい？」

サーニャが振り向いた所で、儀國は手にしていたソレをサーニャに向かつて投げ渡す。

慌てて、サーニャはそれを受け取った。

「……………」

受け取ったのを確認し、その場から立ち去る。

渡す物は渡した。なら、もうこの場に自分がいる必要はない。

…先程のも、別に深い意味合いはない。ただ、なんとなく…でだ。

儀國がミーティングルームから立ち去った後、サーニャは投げ渡された袋を見る。

何が入っているのか、と袋を開ける。

と、中に入っていたのは

「これって…ネックレス」

中に入っていたのは、とても綺麗なネックレス。

柔らかな四葉のクローバーモチーフ、その中に猫が空を見上げる姿のシルエット。

とっても可愛いネックレスが、袋の中に入っていた。

「サーニヤ、儀國にも何か頼んでたのか？」

「…ううん、私…何も頼んでないよ」

エイラの言う様に、私は儀國さんに何も頼んでいない。

ハルトマンさんに、猫の可愛い物があれば…とだけは頼んでおいたけど。

それ以外で他に何も頼んでない。

だったら、どうして。儀國さんは私にこのネックレスを渡したんだろ。

すると、ハルトマンさんが何処か悪戯っぽい笑みを浮かべながら口を開いた。

「多分、それは儀國からサーニヤへのプレゼントだよ」

「えっ？」

「儀國つてばさ、店で買い物してたら…ジーツとそれを見てたんだ。これなら…とか、アイツも…とか小声で呟きながら、ね。」

私が、サーニヤは普段任務の都合とかで買い物に行ける機会がないって言ったから…かな。

どっちにしても、最初からサーニヤにあげる為に、儀國はそれを買ったんだと思う。

渡し方は…まあ、よろしくないけどね。

でもでも、よかったね〜サーニヤん。儀國に愛されてて。羨ましいな〜」

ハルトマンさんに茶化されて、少しだけ恥ずかしかった。

…だけど、私はとても嬉しかった。

「うわぁ、可愛い首飾り。どうしたの、それ？」

「儀國さんが、私にプレゼントしてくれたの……」

「え、いいなあ」

……儀國さんからのプレゼント。

このプレゼントを、一生大切な宝物として……大事にしていこう。
私はネックレスを優しく包み込むようにして、そう誓った。

第四章 第四節：買い物（後書き）

第四節でした。次話、第五節ではアンビリバボーな展開になります。ここから……って元からですけど、原作蝶崩壊＋カオスな物語となっていくます。注意されたし……。

すわっ!!!

第四章 第五節：異変（前書き）

第五章 第五節です。今回はかなりカオスってます（多分）。

第四章 第五節：異変

漆黒の世界が広がっている。

音もなく、光もなく、全てが無に支配された……静寂の世界。目を開けているのかも、閉じているのかも分からなくなってくる。ここは一体何処なのか、周囲を見回しても景色は同じ　　黒一色。

そんな黒一色の世界に、突如色が現れた。

正確には、一人の少年と一匹の悪魔。一人の少年は、私が護ると誓った大切な者と同じぐらいの年齢。ただ、何故か顔の部分だけが黒く塗り潰されていて分からない。

対し、一匹の巨大な悪魔。少年を遥か頭上から見下ろす程の長身と巨体。七対の骨腕に、七対の翼、七つの顔……正に異形。燦燦と輝く、橙色の七つの目が少年を捉える。

そんな悪魔に対し、少年は手にしていた一振りの扶桑刀を静かに動かし、その切先を悪魔へと向ける。

口を動かす。それが言葉となり、声となって私の耳には聞こえてこない。

お前がラストだ。さあ……こんなくだらねえ茶番は、終わりにしようぜ

そんな風にあの少年が言った、気がした。

巨大な悪魔と扶桑刀を手にした少年が動く。悪魔は全身から光り輝く『黒』の炎を燃え上がらせ、少年は『赤』の炎を烈火の如く燃え上がらせる。

『黒』と『赤』、二つの炎が中空で衝突した。凄まじい爆音と、炎が衝突した事により生じた衝撃波　　エネルギーの奔流が辺り一帯に吹き荒れる。

その奔流に巻き込まれて、吹き飛ばされないように足に力を入れて

その場に何とか踏み止まる。

こんな衝撃は今までに受けたことがない。そしてその衝撃を生み出した元凶である、あの少年と悪魔は、一体何なのか？

赤の炎と黒の炎が協奏曲を奏でる。それは見る者の目を引き付ける魅力的なものでもあり、全てを破壊し燃やし尽くす恐ろしさを含んだ、正に悪魔が作詞した楽曲。

そして、それを奏でているあの七対の腕と翼と顔を悪魔も……扶桑刀を手に悪魔へと立ち向かい、闘う少年も。どちらも、普通じゃない。

そんな感想を抱いた……直後。二つの炎が私に目掛け飛んできた。視界一杯に広がる、赤と黒が混ざり合った巨大な炎。それを避けることも防ぐことも叶わず、叫び声を挙げる間もなく炎に全身を包み込まれ

目を覚まし、慌てて飛び起きる。

視界に飛び込でくるのは赤黒の双炎ではなくて、いつも眼にしている見慣れた部屋の風景。

夢……、と少女は呟きながら、呼吸を乱れさせながら体内に酸素を取り込む。

不意に、真横から男の声が聞こえた。其方に顔を向けると、見知った顔の男が一人。

ただ、今はそれよりもあの夢の内容の気持ち悪さが、私から冷静さを奪っていた。

扶桑刀を手にし、赤い炎を燃え上がらせていた少年。そして、その少年と対峙する異形の物……悪魔。

腕も、顔も、口も、目も、何もかも七対であったあの異様な姿。夢だとしても、あの姿を思い出すだけで軽く嘔気が襲ってくる。

けれども、あれは夢の出来事だったんだ。あの少年も、悪魔も、赤

と黒の炎も、全て夢の中での出来事。私は悪夢を見ていただけなんだ。

どうしてあんな夢を見てしまったのか分からないけど、とりあえず現実の話ではない。

その事にホツと胸を撫で下ろすと、ようやく思考も冷静さを取り戻し始め、息も徐々に落ち着いてきた。

そして、目の前の現実に対しようやく意識が向けられると……私は大声を出していた。

人生とは、本当に何が起きるか分からない。

自分の場合、訳も分からぬままこの世界……ストライクウィッチーズの世界に飛ばされた。

そしてどういう訳か。

この第501統合戦闘航空団で整備兵としての役割を担い、それでいて楽しく過ごしていたと思えば、謎のネウロイに巻き込まれ……結果ウィッチ達と共に戦うこととなってしまった……。

だから、もうちょっととした事では絶対に驚かない。

そう思っていた。だが、それすらも遥かに凌駕する事が……今自分の身に降りかかっていた。

「……………」

一室。窓を覆っているカーテンを通す日の光と、ピンク色に灯る仄かな明かりが、薄暗く照らされている。

部屋の中央には大きな魔方陣が描かれている。更には香炉や燭台、水晶玉が机の上に置かれている。

魔術的な、神秘的な雰囲気放つこの部屋。そして隣では、この部屋の主が小さな寝息を立てて……可愛らしい寝顔で眠りに着いていた。

もう一人、この部屋の主は帰ってきていない。夜間哨戒任務に出るから、恐らく…後数分で帰ってくる筈。

…こうしていれば、本当に可愛らしい子供だとは思う。

普段は口も悪く、人の話も全く聞かないが…この時だけは本当に、素直に可愛い奴と思えた。

そんな風に見ていると、突然少女が目を覚まし飛び起きた。

激しく息を切らし、その顔は…まるで悪夢でも見たかのような酷い表情だ。

「よお、お目覚めか？」

少女に声を掛ける。

それに気付いた少女は呼吸を乱れさせながら、ただただ此方を見つめている。

余程酷い内容の悪夢を見ていたせいなのか、普通ならば叫び声や悲鳴を挙げてても可笑しくはない。にも関わらず、少女はただ此方を見つめているだけだった。

そんな状況が暫く続いて…、

「……………ツ!!!????」

乱れていた呼吸が整い、思考も冷静に働き出したのか。

少女は啞然としたまま、我が眼を疑うように目を擦っている。

そしてまじまじと、もう一度此方に視線を向けて…ようやく口を開いた。

「な、何でお前が私の部屋にいるんだよおおおおおおつ!!!?????」

エイラの叫び声が部屋中に響き渡る。

そして掛け布団で身体を覆うようにしつつ、俺から距離を取った。大方、やられるとかでも思ったんだろう。生憎と、子供を襲うつもりは更々ない。

それに手を出した場合、あの隊長からどんな制裁が待っているのか…あまり考えたくない。

「お、おまつ！ お前…何で私とサーニヤの部屋にいるんだよ!？」

「知るかよ。気が付けば、お前の隣にいたんだよ。

何の因果か、コイツが原因でな」

儀國は頭を指差す。

そこには、黒い獣の耳が生えていた…。

|||||

「で、一体どういう理由でそうなっているんだ？」

「俺が知るか…」

朝のミーティングルーム。皆の視線はエイラと儀國に向けられていた。

坂本の問いに儀國は若干の苛立ちを見せながら素っ気無く返答し、エイラが完全に苛立った様子で黙っていた。

「儀國さん…エイラさんの使い魔になっちゃったんですか…」

宮藤が儀國を見ながら口を開いた。

朝起きて、目が覚めて最初に見たのが儀國だったのは…本当に驚いた。

同時に。私の純潔がこの男に奪われてしまうと、本気で思った。

けど、改めてよく見ると…儀國の頭からは見慣れた黒い獣の耳と、尾てい骨の辺りからも同じく見慣れた黒い毛並みの尻尾が生えていた。

それは間違いなく、私が使い魔としていた黒狐。それがどういう訳か、儀國が私の使い魔と“同化”し、私の使い魔としてなっていた。…こんな馬鹿な事が起きるものなのか。勿論、過去にそういった前例は聞いてない。

寧ろ、ある筈がない。

「つーか、何で俺に獣耳と尻尾が生えてるんだ？

まったく、誰得だって言うんだよ…」

文句を零しながら、私の頭上を浮遊している儀國。

使い魔になった事が原因…だと思われる。

しかし厄介なのは、コイツは私から“5m以上離れられない”という事にある。

それ以上離れると、強制的に私の行く方向に身体が引っ張られる…らしい。

まるで儀國と言う犬にリードを付けて歩いている…そんな気分だ。

…兎に角5m。それが、コイツの許されている行動範囲。

「うー…最悪だ…」

エイラは頂垂れる。

5m以上離れられない、という事は食事や就寝は勿論。

トイレや風呂も、コイツと一緒に過ごさないと行けない…という」と。

それが私にとって今、一番最悪なことだった。

使い魔なら姿を消せるのでは、とも思っただけど見えなくなるだけで実際には傍にいる。

だから、私が見えていようが見えてまいが、儀國からは見られる…と言っことには変わりない。

「そう頂垂れるな。俺だって最悪なんだからな…」

「しかし、一体何故この様な事が…」

大尉が腕組をしながら言う。

人間が他人の使い魔と同化し、その魔女の使い魔となる。

問題は、どうしてこんな事が起きたのか。

原因さえ分かれば、それが事の解決にも繋がる筈。

記憶を探り、糸口を探す。と、リーネがおずおずと口を開いた。

「あの……もしかして、昨日エイラさんが儀國さんに、“お前をいつかギャフンと言わせて、一生私とサーニヤの為に扱き使ってやる！”…って言ったのが、原因……かも」

リーネの言葉に、エイラは昨日の事を思い出す。

サーニヤと共に、ミーティングルームへと向かう。

今日も午後の一時である、サーニヤの演奏を聴いて過ごそうとして

いた。

が、今日は珍しく先客がいた。

「この曲…」

「アイツか……」

サーニヤ以外に、この基地で演奏が出来る男。魔術師の儀國。ミーティングルームを覗く、そこには言うまでもなく…ピアノを奏でている儀國の姿があった。

…また、あの時と同じ曲を演奏していた。何度も何度も、繰り返し。終わりが来ては、また一から演奏する。あの時…サーニヤはこの曲を弾いている儀國はとても悲しい、今にも泣きそうな顔をしていたと。そう言っていた。

その時、私は全然分からなかった。ただいつもと同じ、素っ気無い能面を浮かべていたとしか思わなかった。

だけど、今の儀國を見ると…サーニヤが言っていた言葉が、少しだけ理解出来る気がした。確かに、この曲を奏でている儀國の顔は…いつもより暗い感じがする。

全然楽しそうにピアノを弾いていない。何か後悔をしているような、そんな顔付き。

…実に不愉快な気分になる。

サーニヤがピアノを弾いている時、その顔を見ていると私は癒される。

サーニヤ自身も、楽しんでピアノを弾いているからだ。

だから同じピアノを弾く者として、あんな暗く悲しい顔をして弾いていることが、私を不愉快にさせた。

演奏が終わる。

そしてまた繰り返される…と思えば、急に曲調が大きく変わった。先程までであった暗い雰囲気は何処にいったのやら。神秘的で、それでいて戦いの如く激しいイメージを与える、そんなメロディがミーンディングルームに流れた。

そして、それを演奏している儀國の表情。先程まで浮かべていた悲しさは消え去り、サーニヤが弾いている時の様な、楽しそうな顔を浮かべていた。

聴いたことのないメロディに、サーニヤも関心を示す表情を浮かべながら、儀國の演奏に耳を傾けていた。

…何故だろうか。脳裏に鞭を持った男が、吸血鬼が住まう大きな城に戦いに赴く…そんなイメージが突然浮かび上がった。

薄暗い森の中から、大聖堂の様な綺麗な場所まで…次々とイメージが浮かび上がってくる。

「あれ？ サーニヤちゃん」

「あ、芳佳ちゃん…」

宮藤とリーネがやってくる。

大方、この演奏を聴いて興味本位にやってきたんだろう。

ピアノを弾けるのはサーニヤ、と思っていた分。儀國がピアノを弾いているのを見て、少し驚いた表情を二人は浮かべる。

「儀國さんもピアノ弾けたんだ〜」

「聴いたことのないメロディだけど…なんだろう、何か凄く怖い感じがする…」

不意に、演奏が止まる。

私達の存在に気付いた儀國はピアノを弾くのを止めて、椅子から腰を上げた。

そして何も言わず、そのまま立ち去ろうとする。

「あ、あの…！」

立ち去ろうとする儀國に、サーニヤが話し掛けた。

「あの…とても綺麗な曲でした。

聞いたことのない曲ですけど…何て言う曲なんですか？」

「Vampire KillerにBlood Tears、失われた彩画だ」

「吸血鬼殺しに…血の涙。嫌なタイトルな曲だな」

「……………」

サーニヤの質問に答えた後、儀國は再び歩き出す。と、サーニヤはそれを慌てて止めた。

「ま、待ってください…！」

「…今度は何だ？」

「あの…前にも弾いていたあの曲ですけど。あれは…？」

「…………別に、何でもいいだろ」

若干、苛立ちを見せながら儀國はサーニヤに答える。

その態度に、サーニヤの表情が曇ったのを…当然私は見逃さない。

「おい儀國、サーニヤに酷いこと言うなよな」

「…別に、何も言っていないだろ？」

そのまま儀國はミーティングルームから立ち去っていった。

「ふん。いつかお前にギャフンと言わせて、一生私とサーニヤの為に扱き使ってやるからな!!」

立ち去る前、エイラは儀國に向かって言い放った。

…ああ。確かにそんな事を言った記憶がある、とエイラは思い出す。

確かに、私はリーネの言う通り儀國に向かって言った。

けれど、この一言が原因だとはとてもじゃないが考えられないし、あり得ない。

結局は、謎だということだ…。

「兎に角、暫く儀國とエイラさんは…共同生活する、としか言いようがないわね…」

「そうだな。儀國がエイラから5m以上離れられないとなると…そうするしかあるまい」

ミーナ中佐は心底困り果てた顔で言った。
少佐も言う様に、解決策が見つからない以上はそうするしかない。
よりによって、儀國との同じ部屋での生活…。私は兎も角、コイツ
までサーニヤと一緒に部屋に住まわせる事自体が、私にとっては鬱
だ。

「憂鬱なのは、お互い様だ…」

「ハア…」

ただただ、溜息が漏れるばかりだ…。

解散後、とりあえず部屋へと戻ることにした。
勿論、私の隣にはサーニヤ。そして…人の使い魔に勝手に同化した
儀國も一緒。

「おい儀國、あんまり私とサーニヤに近付くなよ。
それから着替えの時は絶対に眼を瞑れよ。お風呂もそうだし、トイ
レの時は耳も塞いでろよ。わかったな？」

「心配するな。ガキに手を出すつもりはサラサラない」

…今に始まったことじゃない。だが、本当にコイツは上官に対して
も失礼な態度ばかり取る奴だ。

本来なら、その階級は宮藤よりも下の位置にいるくせに。
どうしてこんな奴が整備兵に…以前に軍に入ったのか。それが不思議
でならない。

「……………」

儀國は己の手を見ながら、ぼんやりとした表情を浮かべる。

他人の使い魔と同化するという、不可思議な現象。

魔女達の使い魔は形こそあれど、実際は^{アストラル}霊体。

だから、何らかの原因で肉体から霊体が抜ける…俗に言う幽体離脱をした状態で、何の因果かエイラの使い魔である黒狐と同化した、
と想っていた。

だが実際は違う。俺の部屋に、俺と言う霊体を宿す器…肉体は何処にもなかった。

つまり、霊体が肉体に入っている状態で使い魔と同化…擬似霊体としてなった、と言う事になる。

…こんな馬鹿げた現象、あっちの世界でも起きない事だ。しかし、
なっていることは事実。

解決策を早急に見つけて、早く元に戻りたい。

それにしても、使い魔の身体と言うのは随分と不思議なものだ。
重力を感じないのも一つ、まるで身体が羽の様に軽い。何より己の
意思で宙に浮く事すら可能だ。初めて飛んだ感想は…まあ、悪くは
ない。

空腹感等と言った感覚も、一切ない。霊体が食事をする…と言うの
も聞いた事はないが。

しかし、これはこれで不憫だ。

やはり、人間として生まれ出でたのだ。空腹感を満たす為に食事を
したい、眠気に身を任せて十分な睡眠も取りたい。

そして、この狐耳と尻尾と言うのが…やはり許せない。

|| || || || || || || ||

夜が訪れる。

長かった一日がようやく終わろうとしていた。

…本当に今日は色々と大変だった。

トイレにて…。

「いいか。絶対に、ぜつつたいに覗くなよ!？」

「はいはい…」

「…ホラ、これしてる」

「…何コレ?」

「耳栓と目隠しだ。耳栓したらその上から手で耳塞いでる。わかったな?」

風呂場にて…。

「いいか!？ 私もそうだけど、サーニヤに変な目を向けるなよ！
て言うか覗くなよ!？」

ちゃんと目隠ししたか!？」

「…心配するな。ガキ体型の身体なんざ見ても欲情しない。
シャーリーぐらいあれば、まあ話は変わっていたらるうけど」

「この変態！ いっぺん死んで来い!！」

「そ、そうなんですか？」

「ああ…。サーニヤよりももっとガキの頃から、修行の一環としてサバイバル訓練ばかりやってきた。だから木の上で寝ようが、地面に寝転がるうが…眠れれば問題ない」

「ふん。結構ハードなことしてたんだな、お前」

「まあな。ホラッ、さっさと寝ろ。」

「明日も早いんだろうが」

もう遅い。明日も明日でまた早い。

それに、二人は俺と違って人間の身体だ。本来ならこの時間には必ず訪れる眠気も、今はそれが訪れない。使い魔になった影響、と言うことだろう。

だがエイラとサーニヤは違う、眠気は訪れるし寝なければ疲労となつて明日に響く。

寝ないで丸一日、何もしないで過ごす…これはこれで、ある種拷問だ。夜間帯の勤務なら、まだ身体を動かしたり、同じ夜勤の仲間と喋ったりして時間を潰せるが…。

…尤も、寝なくても別に問題はない。満足な睡眠が取れる今よりもずっと昔。

何日間も寝ずに活動していたこともある。

「あの…儀國さん」

二段ベッドの上の段からサーニヤが顔を覗かせる。

「なんだ？」

「儀國さんの事、色々お話して欲しいです…。
魔術とかじゃなくて、儀國さんの子供の頃の話とか…。
私、儀國さんのこと…何も知らないから」

「……………」

エイラの方に視線を向ける。

エイラは何も言わず、ただ睨んでいる。その表情からは、サーニヤを悲しませるなど物語っていた。

「…聞いた所で、退屈なだけだと思っぞ？」

「それでも、いいんです」

「…ハア、分かった分かった。

全部、とまでは行かないが…ある程度なら話してやる。

それと、時間的に少しだけだ。それでもいいな？」

「はい…！」

そう答えると、サーニヤは嬉しそうに笑みを浮かべた。

…こんな事で、どうしてそんなにも嬉しそうに笑みを浮かべられるのか。

理解しがたいところだ。そしてその笑みを見てニヤけているエイラは…気持ち悪い。

「さて、何処から何を話せばいいのやら…」

こうして、ほんの少しだけ退屈な時間は紛らわせれた。

第四章 第五節：異変（後書き）

第四章 第五節でした。

今回は、以前アンケートでお取りしたQ1の結果により、エイラの使い魔となつてしまいましたw

何故この様な力オスな展開になつてしまったのか、その理由は……
まだ教えませんw

てな訳で、失礼します。

すわっ！！

第四章 第六節：『天秤』、『高慢』の白（前書き）

第六節です。

第四章 第六節：『天秤』、『高慢』の白

ギャグやコメディを取り扱った漫画では、一度壊れてしまった家でも次の話の時には何事もなかったかの如く。元通りになっている…と言った現象がある。

一話で…一日で元通りになるわけがない、と思うのがまず普通だろう。だが、そんなツツコミは誰もしない。寧ろ、当然のことだと受け入れている。

ギャグを取り扱う漫画なのだから、細かい経緯や設定は要らない…と言った理由があるからかもしれない。

…だからこそ、一日経てば…次の日の朝になれば元通りになっている。

そんな淡い期待を抱いていた。

しかし、それは淡い期待で終わる…。

「元に戻ってない…か」

使い魔と化してしまっている肉体。

そしてエイラとを繋ぐ鎖の呪縛からは、まだ解き放たれていなかった。

相変わらず、5mという範囲内ではしか行動出来ない。今日も今日でエイラにくつついて行動しなければならぬらしい。

そう思うと、物凄く不便であり憂鬱だ。好きな場所に行けないのは勿論の事。

なるべく関わりを持ちたくない、顔を合わせたくないウィッチ達と強制的に合わせられる。

…今日もまた、面倒で憂鬱な一日が始まるうとしている。

「ん…んん…」

主人であるエイラが目を覚ます。

続けて、ベッドの上段で眠っているサーニヤも目を覚ましたようだ。

「よう、よく寝れたか？」

「……………ああ、おはよう」

「あふ……………おはようございます」

寝惚け顔でエイラとサーニヤが挨拶をする。

大きな欠伸をし、ベッドから身体を起こすと二人は着替えを始めた。まだ意識が完全に覚醒していないからだろう、エイラは特に何も言わずサーニヤと共に着替え始める。

雪国出身である二人。間近で見たその肌は、とても綺麗な白い肌。……ガキ体型と散々口にしていたが、エイラもそれなりにはある……ことはある。

サーニヤも14歳という年齢にしては、まあ……ある方ではないだろうか。一応、宮藤よりも大きいという設定になっていることもある。そんな事を思っていると、二人が着替え終わる。

「終わったか……」

「……おいお前。今日隠しせずに、私達の着替え普通に見てたろ」

ようやく意識が覚醒したのか、ツッコむべき所をツッコんできたエイラ。

その隣で、サーニヤは着替え終わっても、まだ眠そうに大きな欠伸を零している。

「前言撤回だけしておいてやる。
まあガキ体型ではなかったな」

「やっぱり今ここで死ぬー！ー！ー！ツ！ー！！」

顔を真っ赤にしながら、エイラが殴り掛かってきた。

|| || || || || || || ||

「おはよう…って、その頭のタンコブは一体どうした」

「ああ。ご主人様に過激な目覚ましを喰らっただけだ」

ミーティングルームにて。坂本の指摘に対し、儀國はエイラを横目に答える。

エイラは顔を赤くしながら、犬の様に儀國を威嚇し。対しサーニヤは未だに眠そうにウトウトとしていた。

「ところで、ようやく手に入れたぞ」

「何がだ？」

「何がって…忘れたのか？
約束の品だ」

そう言って手にしていた、布に包んだ長い何かを見せる。

その布を取り外す坂本。そして布が完全に取り払われた時、そこに一振りの刀が姿を現した。

…すっかり忘れていた、というのが本音。

騎士型ネウロイの襲撃や使い魔化した事も含めて、忙しさにすっかりその存在を忘れていた。坂本との約束、扶桑刀を寄越すことを条件に強さの秘密を教える…という契約。

先程から何を手にしているんだ、と思えば…そう言うことだったよ
うだ。

坂本から扶桑刀を受け取る。

手に伝わる、刀の感触。柄を掴み、ゆっくりと刀を払う。

鯉口を切り、鞘より姿を見せる…白銀に煌く美しい輝きの刃。

見事な五の目乱れの刃文と、美しい鏡肌の地肌。

通常の刀よりも、若干この刀は長く作られている。

打刀よりも長く、野太刀よりも短い。丁度二つの中間を取ったかの
様な長さ。

かなりの上物。名は…この刀には付けられていないようだ。

名を付ける前にこの刀を打った鍛冶師が息絶えた。それがこの刀の
持つ歴史…。

最後の命の一滴を、この刀に注ぎそして息絶えた刀鍛冶師。何を想
い、この刀を打ったのか…それはその本人でしか分からない。

だが、この刀…名も無き名刀からは、今までに感じたことのない熱
き魂を感じる。

「お前も納得のするものだろうか？」

探すのに苦労したが…どうだ？」

「…ああ、最高だ」

文句なしの一品。

これから先、戦いに関して頼れる相棒となってくれそうだ。

名も無き名刀だが、この刀には名前が無くていい。

名を付けるのも、刀鍛冶師の仕事。第三者が勝手に付けていいものではない。

だから、俺はこの刀に名を付けるのを止めた。

早速、新たな相棒を手にその場で軽く振るう。

扶桑刀を手に、儀國はその場でゆっくりとした動作で振るい始める。振るう度に白銀の輝きを放つ刀身が中空を奔り、切る。

けれど、そんな動きであっても儀國の剣には人を魅入らせるものがあつた。

ゆっくりでありながら尚、敵を打ち倒さんとする強い覇気。

一つひとつの動作は、まるで舞を踊っているかの様に。

そして、刀を手にし振るっている儀國の顔…。とても嬉しそうに、まるで幼子が玩具を買い与えて貰い喜ぶかのように。

扶桑刀を振るう儀國は、口元を緩めて嬉しそうな顔をしていた。そんな表情に、私は見惚れていた。

「悪くない」

振るい、満足げな表情で刀を鞘へと納めると腰に差す。

「さてと、今度は俺が約束を果たす番だが…今は出来そうにないな」

「むっ、何故だ？」

「言わなくても分かるだろうが…」。

俺はエイラから5m以上離れて行動する事が出来ない。

俺の修行は…結構ハードだからな。この範囲じゃ満足な修行が出来ない。

約束は守るが…この現象が収まってからになるな」

なるほど、と坂本は納得した。

自身が強くなる為の修行、それが扶桑刀との交換条件。

5mの範囲内で行う修行でないのならば、それは仕方がないこと。

「いつになったら、戻るんでしょうね…」

「全くだぞー…。おい宮藤、お前の治癒魔法で何とかならないのか？」

「えっ！？ い、幾ら何でもそれはちょっと…」

その時、基地全体に敵襲を知らせる警報が鳴り響いた。

|||||

基地内では、慌しくウィッチ達が走る。

ミーナは出撃命令を下し、すぐに司令室に向かい指揮を取る。

待機するメンバーは指揮を取るミーナ、エイラ、サーニヤ、宮藤、リーネの五名。

残りの六名はネウロイの撃墜に出撃する。

「おいエイラ、少しハルトマンの所まで行ってくれ。

少し、アイツと話がある」

「ハア？ 何だよ話って」

「いいから、さっさとしろ。
重要なことだ」

不満げな表情を浮かべながら、エイラはハルトマンの元まで向かう。
：5 m以内の行動範囲と言うのは、本当に面倒なことだ。
ある程度近付き、範囲内にハルトマンが充分入った所でようやく動く。

「ハルトマン」

ハンガーへと向かおうとするハルトマンを呼び止める。

「どうしたの？ 儀國」

「…何かあった時は、アレを思いっきり握り潰せ。
そうすれば、お前達は絶対に助かる」

「アレって…前に儀國が私にくれた、「Lucifer魔天の白焰」の結晶？」

そう言ってポケットから「Lucifer魔天の白焰」の結晶を取り出し見せるハルトマン。

儀國は小さく頷いた後、口をゆっくりと開く。

「…俺の勳はよく当たるからな。
せいぜい死なず、使わずに済む様に…行って来い。
信用するか否かは、お前の判断に任せる…」

「儀國……うん！ 使わないようにするよ！」

元気よく、笑みを浮かべて答えたハルトマン。

バルクホルンに行くぞ、と急かされハンガーへと向かって走っていく。

その後姿を見えなくなるまで見送り、エイラへと向き直る。

…何故だろうか。何もしていないのに、先程よりも機嫌悪そうにしている。

「…エイラ、もうハルトマンと話は済んだ。

俺達も司令室に向かって待機だ。おい、さっさと先に行け。お前が先に行かなきゃ、俺は司令室まで行けないからな」

「…お前私の使い魔の癖に、随分と生意気だな。

一応、私はお前のご主人なんだぞ…って聞いているのか!？」

そんな愚痴を聞きながら、エイラに付いて司令室へと向かった。

出撃命令を受けた六名のウィッチは空を駆る。

青い空。風を切り、空を突き進む鋼鉄の筈。

基地より離れて、数km。

そこに標的がいた。人類に災いを齎す忌まわしき存在…怪異の姿が。

「大型か…」

バルクホルンが呟く。

今回現れたのは大型（300m級）ネウロイ。

大型ともなれば、外殻を破ってコアまで銃弾を行き届かせるのが少

々困難になる。

今回、貫通力のある攻撃力を持つリーネは基地で待機中。しかし、此方には坂本少佐と言う戦力がある。

烈風丸さえあれば、どんなネウロイも一刀の元。コアごと両断されてお仕舞いだ。

「ネウロイ確認！ 全機散か

」

少佐が命令を下そうとした時、それは不意に訪れた。

独りでに、大型ネウロイは自然消滅したのだ。

大型ネウロイの身体は白い破片となって青い海へと舞い落ちていく。

「ね、ネウロイが…」

「何もしてないのに、消滅した…？」

リベリアンとハルトマンが呟く様に言う。

皆何が起こったのか、啞然とした表情を浮かべてその光景を見つめると、白い破片が舞い落ちていく中。そこに見慣れない形が一つ、存在していた。

「あつ！ あれ…！」

ルッキーニが指を指し、その存在を皆に伝える。

白い破片による花吹雪が終わる。そしてそれが終わった先に待ち受けていたのは、人の形をした怪異の姿。騎士型ネウロイであった。あの大鎌を武器とする騎士型ネウロイではない。また新たに見る騎士型ネウロイ。

その騎士型ネウロイは、今までに出会ってきたネウロイよりも更に奇怪な形をしていた。

右手が天秤を思わせる形となっているのが、何とも特徴的だ。

「ま、また新しいネウロイ…。いったい何体いるんだよ…」

四体目の騎士型ネウロイの出現に、ハルトマンはうんざりとした表情で呟いた。

儀國はお茶会の時に言っていた。残る騎士型ネウロイは、後三体だと。

二体は儀國の手によって葬り去られ、そして力を取り戻した。

残るは、「鎌」の騎士型ネウロイと…今目の前で対峙している「天秤」の騎士型ネウロイのみ。

この騎士型ネウロイを斃せれば、儀國はまた力を取り戻せる。

…今まで、さんざん儀國に助けられて。そして、その分儀國は傷付いてきた。

前回は「鎌」の騎士型ネウロイを取り逃がしてしまったが…今回は何としてでも、この場で斃し、儀國の力を蘇らせる。

バルクホルンはすぐに両手にしたMG42を構え、その銃口を騎士型ネウロイへと向ける。

《待テ。今八才前達ト争ウツモリハナイ》

「ね、ネウロイが喋った!？」

ペリーヌが驚愕の表情を浮かべて叫ぶ。

騎士型ネウロイは、今までのネウロイとは一味も二味も違う…特殊なネウロイ。

初めてネウロイが喋ったのを目撃したのは、「剣」の騎士型ネウロイを儀國が斃した時。

そして、「鎌」の騎士型ネウロイと対峙した時だ。

あの時、あのネウロイ達は確かに。私達人間と同じ言葉…人語を口にした。

そして、この「天秤」の騎士型ネウロイもまた…人語を話す。ただ、この騎士型ネウロイの人語は我々人類と同じぐらい、スムーズに話す能力があるらしい。

《異世界ノ魔術師ハ何処ダ？

奴ヲ出セ。我ハ…奴トノ取引ヲシニ現レタ》

「異世界の…魔術師だと？

何を言っているんだ…？」

《フム……ドウヤラ、コノ場ニ奴ヲ呼ブ氣ハイナイヨウダナ。

ナラバ、我ガココニイル理由モナシ…。

直接、奴ノ元ヘト行ケバイイダケノコト》

「天秤」の騎士型ネウロイが背を向ける。

刹那、バルクホルンは二つのトリガーを引いた。

ここで逃す訳にはいかない、儀國の為にも…ここで斃してみせる。

そんな焦りからバルクホルンは騎士型ネウロイへと向けて射撃したが、それは全て騎士型ネウロイの張ったシールドによって防がれる。

《実力ノ差モ分カラナイ程…才前達人類ハ愚カラシイ。

我ハ才前達ニ逃ゲル機会ヲ与エテヤツタ。ガ、才前達ハソレヲ振ツタ。

ナラバ、今ココデ沈ムガイイ。愚カナル魔女達ヨ…！》

騎士型ネウロイの背後に、巨大な魔方陣が描かれる。

それは、あの「剣」の騎士型ネウロイが所持していたモノと似ている。

否、全く同じものだった。

そしてその魔方陣から、数多のネウロイがこの場に召喚される。一体や二体所の話じゃない。何十と言うネウロイが姿を現す。更に最悪なことに、現れたネウロイは中型と大型ネウロイばかり。

《…奴等ヲ殺シテモ構ワン。ソシテ、異世界ノ魔術師ヲ連レテコイ》
騎士型ネウロイが命令を下し、そして消える。

命令を受けた中型と大型ネウロイはすぐにビームを放出してきた。内、一機の大型ネウロイは魔女達を通過する。向かう先は…第501統合戦闘航空団基地。

「ネウロイが…!!」

「くっ、させるか!!」

バルクホルンは基地へと向かった大型ネウロイの後を追おうとする。が、それをさせまいとその場にいるネウロイ達が一斉にビームを放出した。

今までに体験したことすらない、ネウロイの数とビームの雨嵐。安全地帯、避ける場所すらもない程埋め尽くされた赤い雨が容赦なく魔女達に向かって降り注がれる。

「ぐうっ…!!」

「坂本少佐！ 此方に早く!!」

咄嗟にシールドを張り、ビームの直撃だけは何とか避けられた。だが、その場に全員が固められる。

シールドを展開しているのは、坂本を除く五名。五名は重なる様に

シールドを張り、シールドが張れない坂本はその後ろへと退避すること、ネウロイからの攻撃を防いでいた。絶えず続く、ネウロイ達によるビーム放出。反撃すらも与えない攻撃に、魔女達はその場でシールドを張り防ぐしかなかった。

「……あつ！ そうだ！！」

ハルトマンは思い出したかのように声を挙げて、ポケットに手を入れる。

手を出し、その中であつたのは白い炎を宿した小さなクリスタル。

「Lucifer魔天の白焰」の力を宿した、儀國が保険と口にしてくれた物。

困ったことがあれば、これを使えと……出撃前に言っていたことを思い出した。

これさえあれば、この窮地を逃れられるかもしれない。希望の光が差し込む。

だが、同時に。ハルトマンには不安もあつた。

「Lucifer魔天の白焰」の効果は治癒。宮藤の固有魔法『治癒』よりも遙かな治癒能力を持つこの白い炎。本当に今この場で役に立つのだろうか、そんな不安が出てくる。

けれど、この炎を操る魔術師は確かに言った。この炎さえあれば、絶対に助かると。

……信用するか否かは、自分次第。ならば、答えはもうとっくに出ているのではないか。

魔女は心に現れた不安を払い、魔術師の……大切な仲間の言葉を信じた。

ハルトマンは、「Lucifer魔天の白焰」の結晶を握り潰した。

手の中でクリスタルが割れる。

刹那、小さかった白い炎は瞬く間に巨大な炎となって手の内より激しく燃え上がった。

小さな手から燃え上がる白き炎は、やがては全身に移り更に燃え上がる。

そして、その白き炎より異形の者がこの現世へと召喚される。

「こ、これが…^{Lucifer}本当の「^{Lucifer}魔天の白焰」の姿…」

ハルトマンが、啞然としながら見上げる。

数mにも及ぶ巨大な白い炎。その中より姿を現したのは異形の女神。白い炎と同じ。一点の穢れもない純白の、黄金に装飾された衣装に身を包み。

背中からは八対の翼が生えている。綺麗な栗色の長髪を靡かせ、聖母の様に穏やかで美しい顔立ちは…正に女神そのもの。

だが、そんな女神の両目は瞑られている。

…違う。よく見ると自ら瞑っているのではない。両目は開かないように縫われてあった。

強制的に閉じられた瞳。どうしてその眼が閉じられているのか、その理由は勿論私には分からない。

けれど、なんとなく。その眼が閉じられている原因は想像することが出来た。

あの眼は、開かれちゃいけない。そんなことを、ハルトマンは思った。

女神が此方に顔を向ける。

それはまるで、早く命令しろと言っているかの様に。ハルトマンは捉えた。

「…お願い！ あのネウロイ達をやっつけて！」

簡潔に命令を下す。

その命令に従い、白焰の女神はネウロイ達に顔を向けた。と、布か紐を引き千切るような音が魔女達の耳に入った。

ハルトマンは理解した。この引き千切る様な音の正体を。女神の両目を縫っていた糸が引き千切られているのだ、と…。

「皆！ 私に後ろに下がって！

女神に姿が入らないようにして！！」

ハルトマンは咄嗟に他のウィッチ達に警告した。

何を言っているのか分からない、と思ったのも束の間。ハルトマンの言葉を聞き、本能的に従わなければいけない、と感じ取ったバルクホルン達はすぐに背後へと回った。

そして、引き千切る音が止む。強制的に閉じられていた目は、ゆっくりとその瞳を開き光の世界を女神の目に映し出す。

光を得た白焰の女神。その視界には黒い怪異の存在。

怪異達は魔女ではなく、突然姿を現した白焰の女神に向けて赤き閃光を放つ。

だが、ネウロイ達が放つビームは一つも直撃せず。ルシファーに触れる手前で独りで消えていく。

ルシファーが、叫び声を挙げる。

美しい容姿に似つかない、非常に不快感を与える声。

硝子を引っかいた時に出るあの嫌な音に近い、そんな声で白焰の女神は咆哮を上げる。

そして次の瞬間、数十を越えるネウロイ達に白い焰が燃え上がったと認識したと同時。

音も無く、一瞬にしてこの場から姿を消した。

消滅した時に生じる白い破片も、何も残されていない。本当に、一

瞬で目の前から消えてしまった。

「い、いつたい…何が」

驚きを隠せない様子で、坂本が呟く。

ハルトマンも同じく、我が眼を疑い言葉を発せずにいた。

自身の身体から燃え上がっている、白い焰…「Lucifer魔天の白焰」。

そしてその真の姿である女神は、優しい笑みをハルトマンに向ける
と静かに姿を消した。

伴い、燃え上がっていた「Lucifer魔天の白焰」も静かに消える。

「ネウロイ達は…いつたいどうなったんだ？」

「…分からない。だが、一つ…確かに言えることは。

私達は、儀國によって助けられた…ということだ」

バルクホルンの問いに坂本が答える。

暫く沈黙が続き、ペリーヌがそれを破る。

「さ、坂本少佐！ それよりも早く、基地に戻らないと…!!」

「ッ!! そうだったな…全機直ぐに基地へと帰還する…!!」

「了解ッ!!」

皆第501統合戦闘航空団基地へと急いで戻る。

この場の窮地は去ったが、基地が危機へと瀕している。

「…ゴメン、儀國。使わないって約束したのに…使っちゃった」

基地へと戻る途中、ハルトマンは「Lucifer魔天の白焰」の結晶を握り潰した手を見つめながら、儀國に謝罪の言葉を呟いた。

第501統合戦闘航空団基地。

司令室にて、ミーナは坂本からの通信交信をしていた。

《其方に大型ネウロイが向かっている。
我々も直ぐに其方に向かう、それまで何とか持ち堪えてくれ!》

「了解。皆、これより出撃します!」

「了解ッ!」

第四章 第六節：『天秤』、『高慢』の白（後書き）

第六節でした。

ここで、皆様に一言。

私夢幻遊戯が執筆する『ストライクウィッチーズ 夢幻協奏曲』
、500人以上ものお気に入り登録をして下さっている読者の方々
には本当に感謝しております！

この場でお礼の言葉を送らせて頂きたいと思えます、本当に有難う
御座います！これからも是非応援よろしくお願い致します！
すわっ！！

500人突破記念小説、書こうかな……コラボとか短編的な。

……すわっ！！

第四章 第七節：犠牲（前書き）

第七節です。

第四章 第七節：犠牲

基地にて待機していた魔女達は、鋼鉄の箒を足に纏い空へと飛び立つ。

「うるさい。お前は引っ込んでろよ」

不意に、エイラが独り言を始める。

…独り言をしている訳ではない。使い魔である儀國と会話をしている。

エイラの頭と尾てい骨部辺りからは、いつもの様に黒狐の耳と尻尾が生えている。

ただ、普段の使い魔と違い儀國が頭の中に直接語りかけてくる、とエイラは皆に説明した。

よって、独り言をしている様に見えるが実際には姿が見えない儀國と会話をしている。

エイラ本人は実に不愉快だ、と口にしていた。

「儀國さん、何て言ってるんですか？」

「油断するなよ、だってさ。ったく、お前に言われなくても分かっているよ。」

私を誰だと思つて……あーっ！ もう喋るなよな儀國！

頭の中に直接話し掛けられるの、何か気持ち悪いんだよ……！」

エイラは頭を掻き回す様にしながら叫んだ。

その光景に、宮藤は微笑ましく見守っている。

「…あっ！ いました！」

リーネの声に、皆意識を前へと集中させる。
基地を背に、真っ直ぐと進むこと五分。怪異の姿が各々の視界へと映る。

「ネウロイを確認。

タイプは報告通り大型、数は一機ね」

此方の数は五人。対し向こうは一機。

コアがどの位置にあるのかは分からないけれど、それでも私達だけで対処出来る

美緒達が戻ってくるまでの間に、斃せないことはない。

「来るわ！ 皆気を付けて！」

「了解！」

ネウロイのビームが放出される。

その間を縫うようにして、魔女達は間合いを詰め各々手にした銃を以って射撃する。

外殻を削る銃弾、剥がれ落ちた外殻は海へと落ちていく。

「……………ッ！！」

不意に、それは訪れた。

どうして、とエイラは呟く。

「エイラさん！！」

宮藤の声に我へと帰り、咄嗟に右へと避けた。

僅かに遅れて、そこに赤い閃光が通過する。

「……………ッ」

エイラは避けてからも、疑問にただただ思考を支配されていた。
固有魔法…『未来予知』が使用できない。

いつもならば自動的に数秒先の未来が見えて、身体がそれに合わせて回避してくれた。

全自動回避、それが自分が持つ最大の武器だ。

しかし、今はその最大の武器が全く使えない。固有魔法を発動している筈なのに、未来が全く見えない。

どうしてこうなったのか…、その原因は直ぐに分かった。

今、自分の使い魔は黒狐…と同化してしまっている儀國。

魔女は使い魔と契約をし、使い魔の補助があつて魔法が使える。

そしてその使い魔によつても、固有魔法にも影響が現れる。

つまりは、相性の問題。今の使い魔（儀國）との相性は合わないということ。

従つて、本来使える筈の固有魔法が使えない。

当たり前だったものが、突然前触れもなく失われる。これが、こんなにも怖いことだとは思ひもしなかつた、とエイラは初めて知つた。

「くっ…！！」

エイラは何とかビームを見切り、回避しながらMG42を撃つ。

…固有魔法が使えなくとも、闘えることは闘える。

ビームを見切れない訳じゃない。それでもスオムスではエースと呼ばれていた。

だから、固有魔法がなくても私は充分に闘える。

そして、この闘いが終わつたら儀國の奴を思いつき殴り飛ばして

やることにしよう。

「…………ツ」

サーニヤのフリーガーハマーによる射撃が行われる。

連続して放たれた四発のロケット弾は、ネウロイの外殻を大きく破壊する。

巨大な爆炎が上がり、轟音が響く。

「コアを発見！ 一斉攻撃！！」

「了解！！」

ミーナの合図と共に、魔女達は一斉に攻撃を仕掛ける。

四つの銃口から放たれる無数の銃弾。内、一発の銃弾がネウロイのコアを打ち砕いた。

コアが砕け散った事により、ネウロイの身体は先端部より破片となつて海へと散っていく。

「コアの破壊を確認。」

宮藤さん、よくやりました」

コアを打ち砕いた銃弾。その主は宮藤の九九式二号二型改13mm機関銃であった。

「やったよ芳佳ちゃん！」

喜び合うリーネと宮藤。

そんな中、ミーナとサーニヤはエイラに近寄った。

「いったいどうしたの？ エイラ…」

「…固有魔法が、未来予知が発動しなかった」

「ええっ!？」

「多分、儀國が使い魔となってるからだと思う。
…本当にまいったな、こりゃ…」

この先、未来予知が使えないままでは戦闘に支障が出てくる。
何とかして、この現状を打破しなければならない。

「あ、あれ…!!」

不意に、サーニヤが崩壊していく大型ネウロイを指差しながら叫ぶ。
四散していくネウロイの身体。半分程破片となって四散した其の時。
崩れ落ちるネウロイの身体から何かが飛び出した。

人の形：騎士の姿を象った漆黒の怪異。

『不治』と言う、相手に死を与える死神が姿を現した。

「騎士型ネウロイ!」

「最悪だな…」

エイラは呟きながら騎士型ネウロイを見据えた。

この騎士型ネウロイは、今まで出会ってきたどのネウロイよりも厄
介な奴。

あの時、この騎士型ネウロイと戦闘をした時は未来予知があったか
らこそ全滅を免れた。

けれど、それが使えない状態である今。相手の攻撃を回避する術がない。

儀國は、仮説段階であれ相手の攻撃の正体を見破っている。けれど、私達はそれを一切聞かされていない。

これでは、大型ネウロイを撃墜しに向かったメンバーが戻ってくるまでに全滅だ。

エイラ、と不意に頭の中で儀國の叫び声が聞こえた。

目の前に影。見上げると、大鎌を振り翳し今にも振り下ろさんとする騎士型ネウロイの姿があった。

「エイラ!!」

サーニヤが叫ぶ。それと同時に、振り翳されていた大鎌は一気に振り下ろされた。

赤き死神の刃が直撃する…寸前、目の前で火花が激しく散り大きな金属音が耳に響き渡る。

後退する騎士型ネウロイ。そして目の前に庇うようにして、長めの扶桑刀を手にした…現在自分の使い魔と化してしまっている儀國の背中が視界に入った。

「儀國!!」

「見てられねえな…たくよ」

騎士型ネウロイと向かい合ったまま、儀國は私に声を掛ける。

「儀…國…お、お前…」

目の前で起きている事が信じられなかった。

扶桑刀を手にしている右手、そして左腕からは大量の血が腕を伝い、指先から滴となって海へと落ちていく。

完璧には、防ぎきれなかった。私を護る為に左腕を犠牲にして、儀國は私を護ってくれた。

「拘束力が意外と強くてな…表に出るのに、結構苦労したぞ」

肩で息を切らしながら、刀を構える儀國。

左腕の傷はかなり酷いのか、全く動く様子を見せない。

見据え合う騎士型ネウロイと儀國。

そして、両者が動いた。

中空で交差する赤と白銀の刃。

火花を散らし、両者鏢迫り合いに持ち込みながら見据えあつ。

片腕一本であるにも関わらず、鏢迫り合いに押し負けていない儀國。

それ所か、逆に徐々に押し返しつつあつた。魔法を使用していない状態で、大尉の固有魔法『怪力』並みの力。

「おおおおおつ！！！」

そのまま押し返し、鏢迫り合いの状態を解く。間髪入れず、手にした扶桑刀を振るい連撃を繰り出した。

騎士型ネウロイは大鎌を儀國の振るった数だけ振るい、その連撃を全て防いだ。

中空で何度も交差する二つの刃。赤と白銀の閃光が走り交わる度に金属音を鳴り響かせ、火花を激しく散らす。

……二人の振るう刃が全く見えない。私から見れば、二人はただ武器を構えているだけにしか見えない。時折、それがブレて見える時もある。つまり、これはどういう事か。

答えは簡単だ、二人が信じられない速度で武器を振るっているというだけのこと。

「おおおおお……ッ！」

扶桑刀を上段に構えて、後退する騎士型ネウロイに飛び掛った儀國の動きが突然止まる。

そうだ、儀國は今私の使い魔になっている影響で行動範囲が5m以内でしか動けない状態。騎士型ネウロイとの距離が5m以上離れていたから、儀國が急に動きが止まった。

そしてその隙を相手も見逃さず。間髪いれずに大鎌を振り落とす。

「チイツー!!」

儀國の扶桑刀が横に薙ぎ払われる。それを回避し、騎士型ネウロイは間合いを空けた。両者、相手の動きを見る為に先手を取らず、見据え合う。

と、不意に騎士型ネウロイが上空を見上げた。空には何もない、ただ青い空が広がっているだけ。にも関わらず、騎士型ネウロイはジツと空の方を見上げていた。まるで、私達には見えないものが、見えているかのように。

そして儀國に顔を向けると、背後に突如現れた赤く大きな魔方陣の中へと吸い込まれるように消えていく。代わりに、大型のネウロイが姿を現しすぐに攻撃態勢へと入ってきた。

「儀國さん!!」

「リーネさん！」

「はい!!」

リーネと中佐の二人がシールドを張る。その後ろで宮藤が儀國の左腕の治療を開始する。心配そうにサーニヤが見つめ、リーネと中佐がネウロイの攻撃を防ぐ中宮藤は治癒魔法を発動させる。

……その行為が無駄であることは、私は理解していた。私だけじゃない、この場にいる誰もが……呪いを掛けられた儀國本人も、無駄だと分かっている。

「……やめろ、宮藤。魔法力を無駄に消耗するだけだ。意味のないことをするな」

「イヤです!!」

宮藤は涙を浮かべながら治癒魔法を続ける。それに応える気配はない。そうだろう、不治の呪いを掛けられているのだから。

幾ら宮藤が治癒魔法をしようと、儀國の傷は治らない。その間にも傷つけられ重症を追っている左腕からは絶えず生命の源である血が流れ続けている。

不治の呪いが解ける方法は……儀國の持つ白い炎、「Lucifer魔天の白焰」しかない。けれども、それは術者本人には使えないから意味がない。

「……不治の呪いは受けた箇所のみが発動する。それ以外は普通の傷と変わらない、ということだ。」

このままいけば、俺は確実に出血多量による失血死を迎えるだろう。傷口も深い上に腱をやられたのか、全く言う事を聞かないときた……

「……」

「何を言ってるんだよ……こんな時に」

「……こうするしか、方法がないってことだ。エイラ、俺の左手を

持って真っ直ぐ伸ばしてくれ」

突然の頼み。

訳が分からないと思いながらも、言われたとおりにする。

手を掴み、真っ直ぐと伸ばす。一体これから何をするのか、宮藤と私はそれを静かに見守る。

もしかしたら、何か不治の呪いを解く術をこれからするんじゃないかと考えた。

持っていない、と言うのは私達に対しても手の内を明かす様な事をしない為の嘘で、実は最初から持っていたんだ、と。

だとしたら、何故早く使わなかったんだと思いながら心の奥で少しだけ安心していた。

「ったく、かなり痛いだろうな……」

左腕を見つめながら呟く。そして扶桑刀を振り翳し、真っ直ぐと伸ばしている左腕へと向かって振り下ろした。

……何をしたのか、全く理解出来なかった。ざん、と言う音が聞こえ目の前では赤い滴が宙に待っている。

苦痛に表情を歪める儀國。そして私の手には、切り離された儀國の左腕が握られていた。

「ッ！！」

ようやく現状を理解した。

儀國は……自ら左腕を扶桑刀で切り落とす。不治の呪いが掛かっている部分はその呪いを掛けた張本人を斃さない限り解消されることはない、儀國でも不可能なこと。

だから、儀國は。呪いの掛かっている部分を切り落としたのだ。

不治の呪いを受けていない場所は普通の傷と変わりないと。左腕は、

肘より下から無くなっていた。

そしてその切り離された部分は今、私が手にしている……。
力なく垂れ下がった儀國の左腕。扶桑刀の斬撃によって切断された面からは赤い血がポタポタと、青い海に向かって流れ落ちていく。

「あ……あ……」

力が抜ける。手にしていた儀國の左腕が私の手からすり抜け、海へと落ちていく。

「やっぱり……かなり痛えな」

不敵な笑みを浮かべたまま、儀國が口を開く。

滝のような大量の冷や汗を流し、皮膚をそのまま裂くのではと思うぐらい左肩を強く掴んでいる。それが激痛に耐えているという証拠だと直ぐに理解出来た。

左腕があつた場所からも赤い液体が噴出し、ポタポタと落下していく。

「……じゃあな、俺の左腕。宮藤、治療を頼めるか？」

刀を腰の鞘へと納めながら、儀國は宮藤に言った。

「あ……あ……」

宮藤は何も答えない。ただただ、儀國の左腕があつた場所を見つめている。

…シヨックなのは仕方ない事だと思う。間近であんな物を見せられれば、誰だって冷静な判断は出来ない。私自身、まだ冷静な思考を働かせられていない。

「……うるたえるな宮藤！！
今何を成すべきかだけを考えて動け！！」

「ッ！！」

その言葉に、宮藤は儀國の身体の治療を開始する。

治癒魔法が施され、見る見る内に傷が塞がっていく。そんな宮藤の手は震えていたし、今にも泣きそうな顔をしていた。けど、傷口から絶対に眼を逸らそうとはしなかった。

よく見ると、シールドを張ってネウロイの攻撃を防いでいるリーネと中佐の肩も小刻みに震えている。リーネは多分…いや、確実に泣いている。

「ぎ、儀國……さん」

サーニヤは涙を流しながら儀國の身体を抱きしめた。

儀國の治療が終わる。儀國は傷口を擦りながら、私の方へと顔を向けた。

「……さて、エイラは固有魔法が使えない状態だし、俺はこんな状態だ。お前達の魔法力も、シールドに殆ど使ってしまった。結果、坂本達が増援としてくるまで時間を稼げる確率は…かなり少ない。けど、それを覆せる方法が…たった一つだけある」

「こ、こんな時にお前何言って」

「……時間がないから単刀直入に言う。エイラ、お前の本来の固有魔法は『未来予知』。」

それが使えないのは、俺がお前の使い魔と化してしまっているから

だろう。

使い魔によって、魔女の持つ固有魔法は大きく左右されるって言うからな。

けれど、未来予知が使えなくても、俺を使い魔としHelic Fire魔術回路を繋いでいる今の状態のお前は俺と同じ固有魔法が……「地獄の七焰」^{Helic Fire}が使える筈だ。

俺単体だと、お前との拘束力もあって……満足に使えないからな」

そうやって、儀國は指先から青い炎を燃え上がらせる。

その炎に、いつもの勢いはない。蠟燭に灯る焰程度の、小さな青い火が指先でユラユラと揺れている。

「わ、私が……」

その言葉を聞いて、私は信じられなかった。

あの絶対的であり、圧倒的な力……儀國の固有魔法が。七罪を司る悪魔の力が、私にも使える。

確かに、あの強力な魔法が使えるのならこの窮地を脱することが出来る。例え相手が大型ネウロイだろうと、異種のネウロイだろうと、あの悪魔の炎があればどんなネウロイをも一瞬で斃せる。

だが……、と儀國は私に警告する様に言葉を投げ掛けた。

使い魔の役目は、魔女が魔法を発動させる際に補助をする役目。言ってしまうえば、車にキーを差し込んでエンジンを掛けるみたいなもの……。

今回することは、違うキーを差し込んで無理矢理車を動かすということ。型の合わないキーを入れて無理矢理動かす、これが何を意味するのか。それは即ち、エンジン（魔術回路）への多大な負担を掛け、下手をすれば崩壊だと……儀國は説明する。

「何度もやるわけじゃないが……お前にかかなりの負担が掛かることはまず間違いない。魔術回路が壊れなくても、身体がついていけず内部崩壊する可能性だってある。それを防ぐには……強い精神力と覚悟が必要だ。さて、エイラ……どうする？」

儀國が尋ねてくる。鋭く、ギラギラと輝く目が私の目を捉えていた。……私に与えられている選択肢は、三つある。だけど、その内の一つの選択肢しか私には残されていない。なら、もうヤケクソだ。サーニヤを、儀國を守るのなら……後でどうなるかと知ったことじゃない。

「儀國……お前の力、私に貸してくれ！」

私は儀國の力を使うことを選択した。

第四章 第七節：犠牲（後書き）

七節でした。

いよいよ、次回は『

』の悪魔ほのおが登場し、それをエイラが使役し

ます！

お楽しみに……？

すわっ！

第四章 第八節：『暴食』の緑（偽）（前書き）

第四章 第八節です。

今回はエイラが活躍します。

第四章 第八節：『暴食』の緑（偽）

最初から与えられた選択肢なんて、私にはなかった。

少佐達が戻ってくるまでの間、何とか時間を稼ぐ。不可能。不可能。

私達だけであの大型ネウロイを撃墜する。不可能。

シールドを張ってネウロイの攻撃を防いでいるリーネと中佐、儀國の腕の治療を行った宮藤。もう魔法力もそう残されていない筈だ。サーニヤのフリーガーハマーも残り弾数は少ない。威力が凄まじい分、弾が無くなれば完全に無防備状態となる。

そして私自身も固有魔法『未来予知』が使用できない状態。

このまま戦闘を継続すれば、私達は少佐達が駆けつける前に間違はなく全滅だ。

それを防ぐ、最後の切り札であり、唯一私に許された選択肢。

使い魔と化している儀國の力を、固有魔法「地獄の七焰」Hell Fire

を私が使う事。これ以外に方法はない、と儀國自身も言っている。

……確かに、儀國のあの強大な力があれば例えどんな敵が現れようと怖くない。

絶対無敵、悪魔の力を生まれ変わらせたと言う……七色の炎。それが今、私の中にある。

「覚悟はいいか……エイラ」

儀國が尋ねてくる。

……正直言えば、少しだけ怖いと思っていた。

ネウロイと闘っている時はそう恐怖と言う物を感じなかった。それは多分、固有魔法も大きく関わっているかだろう。

だけど、今は違う。儀國が統べ従えている悪魔の力、それを私が使う。その行為は、私に大きな負担を与えるだけでなく、下手をすれ

ば命をも失う可能性があると言う。
極めて、ハイリスクな賭け。失敗すれば、私は悪魔の力に飲み込まれて死ぬ。

「いつでもいいぞ、儀國……」

エイラは儀國の問いに静かに答えた。

怖い、そう　ほんの少しだけ怖い。

でも、やるしかない。サーニヤの為にも、儀國の為にも、ここに
いる皆の為にも。私がやらなければいけない。強き精神力と覚悟

それが十分に足りているかは分からない、けど……やるしか
ない。

不意に、儀國が私の頭に手を優しく置いてきた。

「心配するな。何もお前一人にやらせるつもりはない。今の俺は……
お前の使い魔だからな。使い魔がご主人のサポートをするのは、
当然だろ？」

不敵な笑みを浮かべる。

不思議と、先程まで私の中にあつたほんの少しだけの恐怖心は完全
に消えた。

儀國の手の優しい温もりと、不安を感じさせないあの不敵な笑み。
それがあるだけで、不思議と落ち着けることが出来た。そして、信
じられる気持ちにもなった。

儀國がいるから、きっと大丈夫だ　そう、心の底から思えた。

「……じゃあしっかり私をサポートしろよ！儀國ッ！！」

「じゃあお前は……しっかり気合を入れる。後……“喰われるな”

よエイラッ！！」

刹那、私の鼓動が跳ね上がった。

目の前が真っ暗になり、景色は闇一色に染められる。

一体、何が起きたのか。それを理解したのは、程なくしてだった。

空の色も、海の色も、全てが漆黒に染められた静寂の世界に一人浮いている私自身。

その目の前に、突然五つの巨大な炎柱が燃え上がった。

右から青色、白色、灰色、黄色、緑色と……。

神秘的で、神々しくて、綺麗な……。魔的で、恐ろしくて、冷酷な

……。五つの炎。

儀國の固有魔法……「Heili Fire地獄の七焰」。七つの大罪を司る悪魔が焰の形として使役する、最強の魔法。

七つあるべき筈の焰が、今は五つしかない。恐らく、不治の呪いを受けている状態が私自身にも干渉しているのだろう。

『怠惰』のベルフェゴール、『高慢』のルシファー、『嫉妬』のレヴィアタン、そしてまだ姿も力を目にしていない、『強欲』と『暴食』を司る二体の悪魔。

目の前で激しく燃え上がっている色鮮やかな炎。一体私はどの焰を使えばいいのか、そんな事を考えながら五つの焰を見つめる。

招カザル者ガ来タ

不意に声が聞こえる。聞こえた方には青い焰……ベルフェゴール。

この場には誰もいない。居るのは私と、五つの焰のみ。なら、今聞こえた声はベルフェゴールが発した物なのか。

……悪魔と言う者を実際に見た事がないから私にはよく分からないイメージとして、悪魔の声がしわがれた男の様なイメージだと思っていたが。今の声はどう聞いても“女性”の声だ。それもとても綺麗な声色をしている。

資格ナキ者ガ何故ココニイル？

コイツ女、氣ニ入ラナイ

コノ女、喰ライタイナ……

黄色の焰、灰色の焰のレヴィアタン、緑色の焰、と順番に喋って行く。まだ見ていない二つの焰に加えてレヴィアタンも。ベルフェゴールと同じ女性の声をしていた。ベルフェゴールとレヴィアタン、どちらも相手に恐怖を植え付ける禍々しい外見をしているのにこの声……少し気持ち悪い。

我等主二仇ナシ資格ナキ者、招カザル者二八死ヲ与エンツ
！

白い焰のルシファアが叫んだと同時に。漆黒の闇に染まった空間から手が現れ四肢を掴まれた。

赤い炎に包まれた人間。燃え盛る灼熱の炎によって焼かれたその身体は、まるで悪魔のように醜い姿。

生前悪行を犯し地獄へと墮ち、地獄の焰によって裁かれている亡者なのか。

それが何人も闇より姿を現し私の身体を拘束する。

熱い……。燃え盛る灼熱の炎の熱気が此方にまで伝わってくる。一瞬でも動けば瞬く間に私もこの炎に包まれ跡形もなく燃やし尽くされる。

「ぐ……」の……ッ……！」

更に現れる炎に包まれた亡者。顔を除き全身を亡者によって拘束さ

れてしまっている。

哀レナ魔女ヨ、地獄ノ業火ニソノ身ヲ焼キ尽クサレ

「ッ……ふざけんなっ！！ 私はこんな所で死ぬつもりなんか
ないんだ……。早く戻らないとサーニヤが、皆が死んじゃうんだよ。さ
っさと戻って私が何とかしないとダメなんだよ！
だからどいつでもいいから私に力を貸せ！」

力の限り叫んだ。

こんな所で殺されるつもりはない。いや、殺されなくたとしても悪
魔の力と引き換えに命を差し出せ、と提示される可能性だって考え
られる。

それならそれでいい。サーニヤを護れば私はどうなったって構わ
ない覚悟でいる。

それに、私は儀國を護らなければならない。

「アイツは……本当に性格の悪い奴だ。上官に対してもタメ口だし
こっちの心配なんかも直ぐに突き放すし……。でも、それでもアイ
ツは、儀國は私の……。私達の大切な仲間なんだよ！ 今までアイツ
は私達を護り続けて、その分傷付いてきた。だから……。今度は私が
儀國を護る番だ、護らなくちゃいけないんだ！
だから……。お前達の力を私に貸してくれ！」

……。どの焰あへんも語ろうとしない。静寂だけが流れる。

……。面白イ

不意に悪魔の声が静寂を破った。

口を開いたのは……。緑色の焰。

コイツノ眼、トテモキラギリシテイル。初メテ邂逅ヲシタ時ノ“アイツ”ヲ思イ出サセル眼ダ

……コノ小娘ニカヲ貸ス。正気力？

ベルフェゴールが緑色の焰に尋ねる。

イズレニセヨ、コノママダト“アイツ”モ死ヌ。アイツガ
コンナ事デ死ヌ姿ヲ、私ハ見タクナイ。ソレニ、アノ怪異^{ネウロイ}トヤラヲ
喰ラツテミルヨイ機会ダ。

小娘、今回ダケ特別。無償デカ少シダケ貸シテヤルツ！！

突如、緑色の炎がどの炎よりも激しく燃え上がり出した。伴い、私を拘束していた亡者共もいつの間にか消えている。やがて、その炎の中から巨大な何かが姿を現した。

……『暴食』を司りしその悪魔。

七つの大罪では『暴食』の大罪を司る、と言われていた悪魔……名前前はベルゼブブ。その悪魔が私の前に、姿を見せた。新約聖書にも描かれている通りの姿。正しく『蠅の王』……巨大な蠅だ。緑色の焰が巨大な蠅の形を形成し、私の目の前で燃え上がっている。

ルシファーに次ぐ高位の魔王……ベルゼブブ。それが私に向かって眼で嗤い、六枚の巨大な羽を飛ばたかせ飛んできた。

漆黒の世界が一点。黒一色だった空間に色が戻り始める。

海と空の青、大切な仲間の姿、自分達人類が斃さなければならぬ存在。そして、不敵な笑みを浮かべている儀國の姿が視界に映った。

「コイツに選ばれたか。まあこの現状だとアイツの力が妥当だろう。」

いくぞ、エイラ……もう後戻りは出来ないからなッ！！「悪食の緑焰」解放ッ！！」

エイラの表情が苦痛に歪む。

緑色の炎が、私の身体から燃え上がった。

今までにない重圧が全身に重く押し掛かってくる。儀國の言う通り、一瞬でも気を抜けば身体を押し潰されてしまいそうな、心臓を握り潰されてしまいそうな……そんな感覚に襲われる。

呼吸をすることすらも困難になってくる。儀國は……こんな力をも使っていたのか。

七つの大罪を司る悪魔の力を焰へと生まれ変わらせた力、それが儀國の固有魔法「地獄の七焰」。悪魔の力を使って、初めてこの力の強大さと危険さを身を以って理解出来た気がする……。

「しっかりしろ、本番はここからだぞ……！！」

燃え上がっている緑色の炎から、小さな火の玉が次々と飛び出ていく。

直径15cm程の緑色の火の玉。これが、儀國が持つ「地獄の七焰」の一つである……「悪食の緑焰」の力なのか。

ふと、エイラはあることに気付いた。

緑色の火の玉、と想像していたが……よく見ると、炎の中に何かがある。

目を凝らし、見てみると　それは銀色に輝く甲殻を持った、見た事もない蟲だった。

カブトムシ、クワガタムシを合わせたような……そんなデザイン。プレートメイルの様に頑丈そうな甲殻に包まれ銀色の輝きを放つ身

体。一見すると、綺麗な蟲でしかない。

けど、やっぱりこの悪魔の緑焰が生み出した物だけあり……不気味さと凶暴さ、恐ろしさを兼ね備えていた。細かく鋭い歯が並んだ口から涎を垂らしながら、今にも、獲物ネウロイに飛び掛らんとしている。

「こ、これがベルゼブブ……。『暴食』を司る悪魔の力」

ミーナ中佐がシールドを展開しながら、ベルゼブブの力を見て、何処か脅えた表情を浮かべている。

私だって怖い。悪魔の力が、こんなにも恐ろしいものだ……今実感しているのだから。

でも、これならば。本来の固有魔法『未来予知』が使えなくても充分に闘える。サーニヤを、皆を、儀國を、護ることが出来る。それだけは、確かなことだ。

「さっさとアイツをぶっ斃してこい!!」

召喚した緑色の焰を燃え上がらせる魔蟲に命令を下す。

その命に従い、魔蟲は聞いた事も無い鳴き声を挙げて、一斉に大型ネウロイへと向かって襲い掛かった。

……「地獄の七焰」Heili Fireは勿論、「悪食の緑焰」Beelzebubの使い方は分からなかつた。ただ、何となくで分かる。儀國から説明を受けなくても、感

覚でコレの使い方が分かった。頭の中で召喚した魔蟲が動く姿をイメージすれば、そのイメージに従ってコレは動いてくれる。

大型ネウロイは向かってくる魔蟲に向かってビームを放ち、撃墜しようとしてくる。それを　あえて避けるようにイメージせず、

そのままビームに向かって直進させた。

これも、何となくの行動だ。儀國の持つ『暴食』を司る悪魔の力、Beelzebub「悪食の緑焰」の能力がどんな能力なのかは知らない。

青い炎の「煉獄の青焰」^{Beelphegor}の様に何もかも燃やし尽くしてしまう能力なのか、それとも灰色の炎の「報復の灰焰」^{Liyathan}の様にカウンターシステムの能力なのか。

赤い光線と魔蟲が正面から衝突する。

すると、どうか。魔蟲に直撃したビームが一瞬にして消えた。つまり、勝ったのは「悪食の緑焰」^{Beelzebub}の力より召喚された魔蟲。更に不思議なことが起きる。

「ふ、増えた!？」

宮藤が叫ぶ。

「悪食の緑焰」^{Beelzebub}の力を使って、召喚した魔蟲の数は十匹程度。だが、あのビームと衝突してからその数が倍近くに増加した。

増殖した魔蟲が大型ネウロイへと向かって、更に加速する。相手は尚魔蟲を撃墜しようとしてビームを連続して放つが、それは全て無駄打ちとなって終わる。逆に、魔蟲達はどんどん増殖を繰り返していく。気が付けば、その数は軽く百体は超えていると思う。

「悪食の緑焰」^{Beelzebub}の能力の一つ。それは、エネルギーに対し吸収の効果をもち、喰らった量に比例して増殖する効果を持つ。そして

魔蟲が大型ネウロイの身体に喰らい付く。

黒い外殻を角と歯で食い破り体内へ、そして瞬く間に反対側へと突き抜ける。一体、また一体と、大型ネウロイの身体に辿り着いては外殻を喰らい、体内を突き進んでいく。それが百体の魔蟲によって行われる。

……私は何もしていない。ネウロイへと向かわせるまでは、全て自分のイメージによって行ったこと。そこから先は、何も命令していない。イメージ
ない。ネウロイに直撃させた後は、勝手に魔蟲達がネウロイの身体

に喰らい付き始めている。

その姿はまるで、幾日も食料も水も食べていない人間が、食料なんかを目の前にして理性を失い、ただ訴え続けてきた空腹を満たす^が為にひたすらに貪り喰らう。そんな姿に見えた。

これが……「^{Beelezebub}悪食の緑焰」、『暴食』を司る悪魔の力なのだろう。

ネウロイの身体は、ものの数秒でチーズの様に穴だらけになってしまっていた。

その穴の部分からコアが赤い輝きを放ちながら回転している姿を捉えられた。そのコアから、数匹の魔蟲が飛び出してくる。既にコアも魔蟲達の餌食となっていたようだ。

コアを食い破られ、そしてネウロイの身体は白い破片と化して海へと落ちていく。

斃した事を確認　　今までに経験したことがないぐらいの疲労が身体に襲い掛かってくる。

急激に消耗した魔法力の消費。『未来予知』にも魔法力は消費するものの、その量は微弱。が、儀國の「^{Hell Fire}地獄の七焰」 「^{Beelezebub}悪食の緑焰」を一度、十数秒程度使っただけで殆どの魔法力が消耗された。

疲労により激しい眩暈、全身の力が急激に抜けていく。

一時的とは言え、悪魔の力がこうまでハイリスクなものだとは知らなかった。それを今、実感出来た。所詮人間はヒト、行き過ぎた力は完璧に手に入れられない……ということなんだろう。

そして、その力を有している儀國。コイツは、やっぱり普通の人間じゃないと思う。

「……今回はこんだが、本当のベルゼブブはもっと凄いで……」

隣では、同じく息を切らし疲労の色を浮かべている儀國。

冷や汗を額から大量に流してはいるが、その表情はやはり不敵。

それにしても、十分の一でこれだけ疲れるなら、本来の力を使った場合……私は一体どうなってしまうていたのだろう。

それこそ、儀國の言う様に。本当に、跡形も無く内部から崩壊を起こしていたかもしれない。

遠くから声が聞こえてくる。意識が朦朧とし始めている今、それが誰の声なのかは分からない。ただ、こっちに戻ってきた少佐達であることだけは理解出来た。

「ちつ……俺も、そろそろ限界か……」

儀國の身体が揺れる。

それに伴い、私の意識も完全にブラックアウトした……。

木製の壁には多数の木刀が飾られ、奥には龍の絵が描かれた掛け軸が飾られている。

道場　　小さめの空間内、一人の男と一人の少年が向かい合う様に立っていた。

二人とも各々の体格に合った稽古着を身に纏い、左手には一振りの大刀を携えている。その大刀を、二人とも静かに鞘より払う。

鯉口を切る音を静かに立てながら、ゆっくりと。鞘より刃を露にする。少年は常の構えを取り、男は上段の構えを取る。一步、また一步と　　間合いを詰めていく二人。構えたまま、お互いに相手の出方を伺いながら、間合いを詰める。

均衡状態が破られる。幼声を精一杯に大きく拳げながら、床を蹴り男へと向かって飛び掛る。それを迎え撃つ男、二つの刃が中空で交えた。

そんな様子を、どういう訳だが……俺は静かに見守っていた。

普通なら男を止めに入るだろう。相手は子供、五歳ぐらいの子供だ。

そんな子供に対して刀を振り回し、鋭く重い斬撃を繰り返しているのだ。

だが、不思議と止める気にはなれなかった。何故なら見ていてとても穏やかな気分でいられるからだ。それに、男の鋭い斬撃を大刀で受け止め、時に力に負けて吹き飛び床を転がるも子供の表情は、不敵な笑みを浮かべている。

まるで父との遊びに精一杯楽しんでいるかのような……そんな風に見えた。だから俺は止めず、二人のやり取りを静かに見守ることにした。

不意に、誰かの視線を感じる。顔を向け、その先にあるのは小さな窓。その窓の向こう、十一人の少女の姿があった。

誰だろう、と目を凝らし見つめる。と、一人の少女が此方に向かつて手を降り始めた。その少女は銀色の綺麗なロングストレートの髪をしていて、軍服を思わせる青の服装に、白いタイツを履いている。スカートは……何故か履いていない。その少女だけでなく、他の少女達も似たような感じだ。新手的痴女集団か何かだろうか……。

でも、俺はその少女達を見てホッと安堵の息を漏らしていた。何故だか自分でも分からない。だが、少女達の元気な姿を見るとそんな気分になった。

そして俺もそろそろ向こうへ、彼女達の所に行かないといけないうちかと思った。

試合をしている二人に視線を移す。子供も男も既に剣を振るう手を止めて、此方を見ていた。二人とも、とても穏やかな顔をしている。俺はそろそろ行く、と二人に伝え静かに道場から後にする。後ろから洪い声で大きくなったな、なんて男の声が聞こえた気がした。

道場の戸を開く。道場から外の世界は一面白い世界だった。大地も、空も、街も、何も無い。ただ白一色の無の世界。その世界に、先程の十一人の少女達が横に並んで立っている。

儀國、と少女が俺の名前を呼んだ。他の少女達も俺の名前を呼び始める。

何度も何度も、ただ儀國……と。そんな少女達の声を聞いて、俺はここが現実世界でないと言う事を理解してしまった。理解したと伴い、あるべき世界へと戻るべく意識が薄れ始めていった……。

ああ、懐かしくて……思い出したくもない夢を見てしまった

第四章 第八節：『暴食』の緑（偽）（後書き）

第四章 第八節でした。

いやぁ、ようやくここまで完成させたなあって感じがします。

自分の中ではようやく第一部が終わった……DISK1からDISK2に入れ替えて下さいって感じがしますねえ。

さてさて、ここで皆様に一つご連絡をば。

DISK1が終わり、続けてDISK2に交換する訳ですが……ちょっとばっかし更新が遅れます！

理由としては、DISK2のストックがあまりにも少ないからです。急ピッチで仕上げるつもりでいますが、一週間後に更新……はちよつとムリかも。

てな訳で、ここでほんの少しだけお休みを頂きます。なるべく早く完成させ投稿させます！

それでは皆様、しばしの別れ。すわっ！……！

………一つだけ、お願いがありますっ！

更新されなくても、時々でいいから……読みに来て下さい。

第五章 第一節：溝（前書き）

新章突入の第一節です。

今回から文章の書き方を少しだけ改変します。

第一章から第四章までと書き方が違い、見辛いと思われるかもしれませんがご了承ください。

暇を見つけ次第、前章も修正していこうと思います。

第五章 第一節：溝

翌朝、ふと目を覚ます。

起床ラツパよりも早く目を覚ました私は、直ぐに着替え始めた。

……昨日の一件の後気を失い、数時間して目を覚ました時にはアイツの姿はもうなかった。

何の因果か同化していた私の使い魔である黒狐は無事元に戻り、いつもの様に私の中に居る。何処か負傷している箇所もなく、いつもと同じ姿で、様子でいる。

ただ、身体がいつも以上に気だるい。錘を背負っているような、そんな感覚。

その原因は言うまでも無く、昨日の出来事による疲労。他人の固有魔法を擬似的に使用した事により負荷が掛かった身体と魔術回路の気のせいか、いつもより魔法力の流れが悪い気がする。魔術回路の負担と言うものは、ここまで身体に影響するものとは思ひもしなかった。

それだけではなく、ハッキリ言って寝不足だ。

快眠出来る筈が無い。昨日あんな事があったのだ、あれでグツスリと眠れる方が可笑しい。結果色んな事を考えてしまい、何時間も目を開けたままベッドで臥床しているだけの時間を過ごしていた。そしてあんまり眠ることが出来ず、起床ラツパよりも早くに目が覚めてしまう始末。

朝からこんなに疲れていることは流石に憂鬱だった。けど、それだけの話であり、私はこうして生きている。

私だけじゃない。サーニヤも、中佐も、少佐も……501の皆、怪我一つなく生きている。

ただ、私達が五体満足で生きている事とは反対に 大きな犠牲を支払うこととなった……。

「ん……エイラ、起きてたの？」

同室者であるサーニヤが、ベッドから身体を起こしてくる。

「ん？ ああ……今だけだな」

「……儀國さんの所に行くの？」

その言葉に、頷く。

私も行く、とサーニヤも直ぐに着替え始めた。

いつものサーニヤなら寝惚けている為に、大きな欠伸をしながらゆっくりと着替える、時に間違つて私の服を着たりなんかもある。

それはそれで、いつもと違う服装を着たサーニヤを見られるから私にとっては嬉しいハプニング。

ただ、今回は儀國の事が絡んでいる。だから寝惚け顔は今日はしていない、素早く身支度を整えた。

サーニヤも、私と同じであまり眠っていない。儀國があんな風になつてしまった後、サーニヤは酷く取り乱していた。

泣きながら何度もアイツの名前を呼び、そこから離れようとしな

いサーニヤに少佐と中佐が無理矢理睡眠薬を飲ませた。
サーニヤはそれで何とか眠ったけど。それでも、快眠とは言えないだろう。

「行こつか、サーニヤ……」

「うん……」

二人一緒に自室を出る。向かう先は……一つ、儀國が眠っている医務室だ。

医務室に着く。どうやら私達よりも先客がいるらしい。

「あ、エイラとサーにゃん」

先客者は中尉と大尉だった。

……珍しい事もあるもんだ、とエイラは思う。

大尉が早起きしているのは分かる。少佐と大尉の場合、起床ラッパが鳴るよりも早くに起床して、自主訓練なんかをしているからだ。ただ、中尉の場合だと話が変わってくる。中尉は起床ラッパが鳴っても起きないし、時には昼過ぎまで眠っていることだってある。

それを大尉が大声を挙げて叩き起こすことが、ここ501ではいつもの日常風景だ。でも、今回は起床ラッパが鳴る前から起きている。大尉に無理矢理叩き起こされた、と言う様子は見られない。自分の意思で、起きたんだろう。

明日は吹雪か、槍が降ってきそうな気がする。

「あの……儀國さんは、まだ……」

「……ああ」

大尉が視線を一床のベッドへと移す。

ベッドの上に横たわっている儀國。昨日から未だに目を覚まさず、ずっと眠り続けている。明日になれば、私達が訪れるよりも起きていて……いつもの様に能面を浮かべて私達に対し皮肉を言うだろう、と思ったけれど。まだ、目覚めていないらしい。

特に儀國自身も、致命傷になるような怪我をしていない。バイタルも普通、命に別状は無いらしい。ただ、一つ　左腕を……肘より下から失ってしまった、と言う事を除けば。

不治の魔法を使う騎士型ネウロイの大鎌から身を挺して私を庇い、その左腕を犠牲とした儀國。不治を受けてしまった以上、儀國の持つ「Lucifer魔天の白焰」の力がないと呪いを解くことが出来ない。

どうして、この力が術者自身にも使えないのかとつくづく思う。自分自身にも使えていれば、儀國は左腕を失う必要なんかなかった。けど現実是非情だ。

生きるために、儀國は自ら左腕を断ち切る事を選択した。そして何も知らずそれを手伝った……私。

あの時儀國の考えが分かっていたれば止めに入る事が出来た筈だ。そんな事をしなくても左腕を失わずに済む方法が必ずあるって、宮藤と一緒に止められていた筈だ。けど、もう遅い。結果として儀國は自ら左腕を切り落としてしまった。

どうして、コイツはあんな事を何の躊躇いもなく出来るんだろうか。そんな事をつくづく思う。

当たり前だった物を失う、自分から差し出す……なんて事。絶対に戸惑う筈だ。それなのにあの時の儀國からは、全く躊躇いと言う物を感じなかった。どうして何の躊躇もなく切り落とせたのか、それが不思議で仕方なかった。

不意に、医務室のドアが開く。
やってきたのは……中佐だった。

「中佐……！」

「皆も来ていたのね……」

医務室に足を踏み入れると、未だに目を覚ます様子を見せない儀國に歩み寄る。

そつと、優しく。左肩に手を触れる。そんな儀國を見つめる中佐の目、顔は……とても優しく、そして悲しい顔をしていた。

……サーニヤだけじゃない、中佐も昨日は酷く動揺していたらし

い。

儀國が左腕を失い、後から宮藤達に聞いた話じゃ「悪食の緑焰」^{Beelzebub}を使って大型ネウロイを撃墜した後、気を失って海に落ちかけた私と、私の使い魔と分離し同じく海に落ちていく儀國を、ただただ身体を震わせて見つめていた……らしい。

幸い、宮藤達や到着した少佐達によって海に落ちる前に救出されたそうだ。

「儀國さん……」

中佐の手が震えている。

大切な仲間が傷付いた姿を見て悲しんでいる。それは、私だって同じだ。

暫くして、次々と医務室に仲間達がやってくる。

宮藤もリーネも、ペリーヌも。501の皆がこの医務室に集まった。全ては、未だに目覚めない仲間の身を心配してのこと。

「……儀國、起きた？」

ルツキーニの問いに、大尉は静かに首を横に振るう。

それを見て、誰もが暗い表情を浮かべた。未だに起きる様子を見せない儀國。

どうすれば、コイツは目を覚ますんだろう……。このまま、一生目を覚まさない……。何て事になったりしないだろうか。そんな要らない心配ばかりが浮かんでくる。

「儀國さん……」

サーニヤが眠っている儀國の頬にそっと手を触れさせる。

そして、綺麗な瞳から一筋の水滴が零れ落ち頬を伝って地に落ち

る。サーニヤは、泣いていた……。

「サーニヤ……」

「ん〜……そうだ！ 儀國が起きる方法思いついた！」

不意に、中尉が声を挙げる。

その言葉に誰もが視線を向けた。一体どんな方法を思いついたのか、真つ先に大尉が尋ねる。

「ど、どんな方法だハルトマン！」

「それはね……儀國にキスすればいいんだよ！」

……中尉の爆弾発言により医務室内の空気が凍った。
何？ 儀國と……キスをする？

「な、な、な、何を言ってるんだ貴様は！？」

顔を真つ赤にしながら大尉が中尉に怒鳴り声を挙げる。

この手の話は、どうやら大尉は苦手としているらしい。尤も、私も大尉と同じ意見ではあるけど。何故、儀國が目を覚ます方法が接^キ吻^スなのか理解出来ない。

他の面々も大尉と同じく、顔を赤くしていた。さっきまで泣いていたサーニヤも涙を止めて、顔を林檎の様に赤くしている。

「エイラ、顔赤いよ……」

「そう言う……サーニヤだって」

「ハ、ハルトマン中尉？ な、何故儀國さんが起きるのにその、キスをする必要があるのかしら？」

「いやあ、今ビビッって私の頭の中にそんなアイデアが浮かんできつとこれは神様からのお告げだよ！」

「冗談なのか、それとも本気なのか……。中尉は自信有り気にな中佐の問いに対し答える。

「いやいやいやありえないだろ、と私は心の中でツツコミを中尉に入れる。

そもそもキス一つで意識不明のヤツが目を覚ます訳が無い。ただ自分の初めての接吻を無駄な形で失うだけとなってしまふ。それで目を覚ますとすれば、世界中にいる意識不明者は目を覚まし医者要らずとなるだろう。

「ぎ、儀國さんと……。キス」

「はうう……」

何故か宮藤とリーネは更に顔を赤らめ

「は、破廉恥ですわっ！！」

ペリーも顔を赤くしながら叫び

「む、むう……。接吻で目を覚ますとは思えないが。いやしかし、もし事実ならば……」

「ぎ、儀國には沢山助けられてきたからな。こ、今度は私が儀國を……ッ！」

顔を赤くし、妙にやる気である少佐と大尉。

中佐はこの現状に対し収めようとしているが、時折眠っている儀國に視線を向けたりしている。中佐の顔も、最早言うまでも無い。

ルッキーニはよく分かっている様子。シャーリーは微妙に照れ臭そうにしている。そして、サーニヤ。儀國をじっと見つめながら頬を赤く染めていた。

その表情がとても可愛いと思いつつ、同時に……儀國を心の底から憎んだ。

騒がしくなり始める医務室。遅れてやってきた、この医務室の主であるアレツシアもこの現状を見て何事か、と不思議そうな顔を浮かべていた。

そしていよいよ誰がキスをするのか、という話し合いになった。他にも方法がある筈、と皆を説得しようとしていた中佐も場の流れに飲まれてか。いつの間にか誰がキスをするのか、と真剣に話し合っている。

一体どうして、こんな事になってしまったのか、とエイラが思い始めたその時

「……うるさいな」

話し合っている皆の声に混じり、一人の男の声が聞こえた。

話し合っていた皆の口が止まり、ベッドの方へと顔を向ける。

そこには、ゆっくりと横たわらせている身体を起こし、少し不機嫌そうにしている儀國の姿があった。

「お前等が煩過ぎて、ゆっくり寝てもらえない。ここは医務室だ、静かにするのが基本だろう」

「ぎ、儀國……！」

「儀國さん！」

サーニヤが涙を流しながら儀國に抱きつく。他の皆も一斉に儀國の元へと集まった。

……サーニヤに抱きしめられている事が無性に腹が立つが、今は儀國が眠りから目を覚ましたことを素直に喜ぶことにした。

「随分と長く寝ていたようだな……」

身体を強く抱きしめているサーニヤを見て、自身の左腕に儀國は視線を移す。

昨日まで、騎士型ネウロイの攻撃を受けるまでであった儀國の左腕も、今は肘より下が無い。

「……宮藤達から話は聞かせてもらった。随分と無茶をしたようだな……」

「左腕を切り落としたことが……か？ くだらないな」

少佐の言葉に素っ気無く返し、抱き着いているサーニヤを剥がすとベッドより腰を上げ医務室を出て行こうとする。

「お、おい。何処に行くんだよ儀國」

「怪我をしてないとは言え、まだ安静にしておいた方がいい」

シャーリーと少佐が儀國を呼び止める。

ドアノブを回し、ドアを開けたところで儀國は足を止める。

「余計な気遣いだ。負傷はしてない、左腕を失っただけで別に安静にしている必要もない。」

「たかが腕を失っただぐらいでイチイチ喚くな」

「たかがつて……お前、左腕を失くしたんだぞ？ もう……二度と動かないんだぞ!？」

「……それがどうした？」

私の言葉に、儀國は首を傾げるような仕草をして、呆れた様な表情を浮かべて答えた。

「確かにエイラ……お前の言う通り、俺の左腕はもうない。だが、それだけの話だ。」

お前も、お前等も戦場つて言うのが、命を賭けて闘つてもものごどんなのか理解してるだろ。命の殺り取りをすれば必ず何かしら失う。身体の何処かは勿論、下手をすれば命をも失う。

今回の戦いで俺は左腕を失った　　が、それだけの話だ。左腕を失っただけで俺は生きてるし、まだ充分に闘える。心配する必要なんか何処にもない。

……ああ、そういうことか」

一人で納得した様に口を開いた儀國。

「お前達はアレか？　俺が左腕を失ったから戦力が低下したんじゃないかって言う懸念を抱いている訳だ。なら安心しろ、左腕を失っただぐらいで闘えない訳じゃない。片腕さえあれば充分に俺は闘え」

「

乾いた音が医務室に響いた。

右頬に手形の形をハッキリと残し赤く腫らしている儀國。その原因を作った、儀國の右頬に平手打ちをした中佐。

中佐は怒りの表情を浮かべて儀國を睨んでいる。対して、儀國は至って平然とした態度で。いつもの能面で中佐を見据え返している。

「誰が……そんな事を心配すると思うの!? 大切な仲間かぞくが傷付いたのよ……その事をただ私達は心配しているの!? なのに、貴方はどうして……ッ!」

「……心配される理由が分からないな。それに大切な仲間、だと? まだそんな事を言ってるのかお前は、くだらない演技はやめると言った筈だ。鬱陶しい」

呆れた表情を浮かべつつ、儀國は中佐に冷たく言い放つ。

「俺は前から言っている筈だ。俺はお前達を信用しない、仲良くするつもりも毛頭ないってな。この基地にいる以上、俺もこの501の一員として一応“戦力”として働いてやる。」

だがな、俺達の関係はそこまでだ。お前等がどうしても来ようが勝手。だが、俺はそれより先へ、深く関わるつもりはない。その事を……改めて憶えておけ」

そう中佐を見据えたまま、実際には私達にも向けて儀國は言い放つ。

そして医務室を出ようとして 不意にその足を止める。

エイラ、と背中を向けたまま儀國は私の名前を呼ぶ。瞬間、私の全身から白い焰が燃え上がった。見れば儀國の右手からいつの間にか白い焰、Luccifer「魔天の白焰」が発現されている。

これが……「Luccifer魔天の白焰」か、とエイラは己から立ち上る白い焰を見つめて思った。

初めて自身に受けた『高慢』を司る悪魔の力 「魔天の白
焰」の焰。焰と言えば普通熱い、と感じるのが普通。ただこの「魔
天の白焰」、熱さではなく温かさを感じる。
忘れていた、あの懐かしい感覚。幼い頃に母親と父親に優しく抱
きしめられていた、あの感覚と似ている気がする。

そして白い焰に包み込まれて直ぐに、朝起きた時に身体に重く圧
し掛かる気だるさや疲れが消えた。「魔天の白焰」の効力は回復。
宮藤の治癒魔法よりも優れた力を持つ白い焰は私の身体に癒しを与
えられた。

肉体面だけじゃない。私の魔術回路にも変化が訪れるのを感じた。
今までにないぐらい、魔法力の流れがいい。初めてウィッチとし
て入隊したばかりの頃と同じぐらい。

以前儀國が言っていた、私達魔女の魔術回路は不完全な状態で可
動している機械、と。そこに加わり昨日の一件。他人の固有魔法を
使用するという、術者に多大な負担を与える荒業を使用した事によ
り私の魔術回路にかなりの負担が掛かった……と思う。

実際、魔術回路に負担が掛かると言われてもよく分からない。魔
法力の流れがいつもより悪い気がするから……多分負担が掛かった
からだろうな、と思っただけ。

それももう、たった今無くなった。

ルシファアの白い焰が身体から消え、同時に儀國の右手からも白
い焰が消える。

「……嫌な役をさせて悪かったな」

その一言だけを残し、医務室から去っていった。

「くそっ……こんなっ！ 持って行かれたッ！！」

自室。床には適当に魔方陣を描いた紙を置き、その魔方陣の中に一本の筆を置く。

後は、左肩を強く掴みながら叫ぶだけ。

こんな事をしても、何の意味もない。ただ何となく、折角の機会だから真似をしてみただけに過ぎない。

……暫くして、馬鹿らしくなり筆を机の上に置き、紙は「煉獄の青焰」で跡形もなく燃やして処理。
Beilph

鉛筆一本に対し左腕を対価とするなんて割に合わないだろ、と内心自分に対しツッコミを入れながらベッドへと身を投じる。

大きな溜息が自然と零れた。

左腕は確かに失われた。だが、特に何の問題もない。無くなったのなら、また新たに生まれ変わらせればいい。だが、それは今するべきことではない。

「暫くは……片腕生活か」

無くなった左腕を見て、小さく溜息を吐く儀國。

元に戻そうと思えばいつでも出来る。しかし、それではアイツ等に余計な情報を与えてしまい、依存させてしまう可能性もある。

だから今は使わない。全ての騎士型ネウロイを斃し、元の世界へと戻れるその時が来るまでは……。今後の生活に多少の支障は出てくるだろうが、我慢するしかない。

儀國は再び、小さな溜息を吐いた。

第五章 第一節：溝（後書き）

第五章 第一節でした。

とりあえず今回は第四章 第八節の続きみたいな感じですよ。

今章から更なる波乱万丈なお話になるかも……しれない。

また、今回は何とか間に合わせたつもりですが……また次話の更新の雲行きが滅茶苦茶怪しいッス……。

すわっ！！

第五章 第二節：真実と恐怖（前書き）

第五章 第二節です。

第五章 第二節：真実と恐怖

今日もギスギスとした空気が流れている。

場所は問わず。食堂であったり、ミーティングルームであったり、何処に居てもギスギスとした空気が払われぬ。

その理由としてあげられるのは、やっぱり儀國さんが私達の前に現れないからだと思う。

顔を合わせる時と言ったら、食事の時ぐらいしかない。

目を覚ましてから、儀國さんはまた私達に対して冷たくなった。

ようやく、少しずつだけど儀國さんと仲良くなれたかと思っていたのに。

それは、私達の勝手な思い込みだけで……儀國さん自身は、まだ私達の事を仲間として認識していてくれていなかった。

今も坂本さんやバルクホルンさん、ハルトマンさんらが諦めずに儀國さんに声を掛けに行くけど。儀國さんは、それに答えようとしてくれない。

やっぱり、私達は儀國さんと仲間として仲良くやっていけないのか。そんな事を考え、深く溜息を吐きながらお盆を手に儀國さんの部屋へと向かう。

今日の朝食の時も、儀國さんは食堂に来なかった。呼びに行った坂本さんの話だと、食欲が無いらしい。

それでも、何か少しでも食べないと身体に良くない。片腕でも安心して食べられるように考慮して塩おにぎりを三つと沢庵の漬物を少々、温かい扶桑のお茶を淹れて持っていくことにした。

儀國さんは仲間じゃない、と言っていたけれど。私からすれば儀國さんは大切な仲間^{かぞく}。傷付いたら一緒に悲しんで、何かを護る為に闘うのなら私も力の限り一緒に闘う。

「儀國さん、失礼しますよ」

部屋の前に辿り着く。ドアをノックし部屋の中へ。
いつ来ても殺風景な部屋。必要最低限の物しか置かれていない、
寂しげな空間。

その空間の中、ベッドにて端座位になりながら何かを触っている
儀國さんの姿が視界に映った。

「ん？ 宮藤か……」

「は、はい。あの、食慾がないって聞いて……私、おむすび作って
来ました。やっぱり何か食べないと身体によくないし、だから簡単
に食べられる物を私作って来たんです」

お盆を手に、儀國さんの隣に腰を下ろす。

儀國さんが触っていたのは、色鮮やかに輝く綺麗な宝石だった。

「宝石……ですか？」

「ああ、宝石だ」

触っていた宝石を布袋の中に戻していく。

そして最後の一つを手に取り仕舞おうと はせず、それを

私に差し出してきた。

「やる。わざわざ面倒なところ、俺におむすびを作ってくれた

その見返りだ」

そう言ってほぼ無理矢理私の手にその宝石を握り締めさせ、代わ
りにおむすびを置いた皿に手を伸ばし、一つ手に取るとそれを口
へと運ぶ。

無表情で口だけを動かし、私が作ったおむすびを咀嚼する。

「そ、そんな……別にいいですよ！ 儀國さんに見返りが欲しくて私、作ったわけじゃありません！」

「ああ、言われなくてもお前がそう言うキャラじゃないってことは理解している。

だが、それは駄賃代わりだ。それにその宝石は、“アイツ”があんまり好きじゃないんだ。

だから持っただけでも意味はないし、かと言って捨てるのも勿体無い。だから、俺の部屋に来たお前にやるよ」

おむすび食べる儀國さん。

握らされた手を解き、その中で輝く宝石を見つめる。

尖晶石^{スピネル}、と儀國さんは宝石の名前を教えてくれた。赤い輝きはルビーにも劣らず、その綺麗な赤色からは炎をイメージさせる。不思議と、持っているだけで力が湧いてくるような感じがした。

「で、でも……私がこんなのを、貰ってもいいんですか？」

宮藤は遠慮がちに訪ねる。

幾らお前にやる、と言われても……コレは宝石だ。宝石がどれくらいの値段がするのかは詳しく知らない。ただ、相当の値が付けれられていることだけは私でも流石に分かる。

このスピネルもかなりの値が付いている筈。それを、私なんかが無償で貰ってもいいのだろうか……、と宮藤は悩んだ。

「ああ。別に俺には必要ないからな」

そう言って全てのおむすびと漬物を食べ終え、お茶を静かに啜っ

た。

もう一度、スピネルを静かに見つめる。見れば見るだけ、その炎の如く美しい赤に魅入ってしまう。

「そ、その……有難う御座います！ 私、ずっと大切に持っています！」

優しく両手でスピネルを包み込み、儀國さんへ感謝の言葉を述べた。

ああ、と相変わらず素っ気無いけど儀國さんは答え、お茶を全部飲み干すと空になった湯飲みをお盆の上に置いた。

そしてベッドから腰を上げると、壁に掛けていた扶桑刀を手に取り部屋から出て行くこうとする。

「ど、何処に行くんですか？」

「アイツとの約束を果たしに……」

アイツ……と言うのは、多分坂本さんのことだろう。

坂本さんと儀國さんがずっと前から交わっていた約束。扶桑刀を儀國さんに渡し、その見返りとして強さの秘密を教えてもらう、という二人の契約。

坂本さんは儀國さんが提示した条件を達成した。後は儀國さんがそれに答えるだけ。儀國さんの突然のエイラさんの使い魔化や新たな騎士型ネウロイの襲撃、そして……左腕を失ってしまったという、兎に角立て続けに事が起き過ぎた。

流石に約束を果たせる機会がなかったと思う。でも、ようやく。その機会が訪れた。

儀國さんがドアノブに手を掛ける。そして回しドアを開こうとして、

「あ、あの！ 儀國さん！！」

慌てて宮藤は呼び止めた。

顔を振り向かせ、その表情は何か用か、と言いたげだ。私は昨日、どうしても尋ねたかったことを今、儀國さんに尋ねることにした。

「儀國さんは……どうしても、私達の仲間として、一緒に闘ってくれないんですか？」

「またその話か。何度も言わせるな、俺とお前達は仲間じゃない。仲間なんてものは、所詮言葉だけの物だ。

俺とお前は大切な仲間だ、何があっても助ける……なんて。その時はそう口にしていても、いざ危機が迫った時仲間と呼んでいたヤツを平気で見捨てる。理由は至ってシンプルな物。自分は死にたくない、生き残りたいと思うからだ。

仲間という言葉は、最後には所詮ただの言葉でしかなくなる」

「そんな事ありません！」

私は叫ぶようにして儀國さんに反論した。

私の知っている仲間と言う言葉は、そんな簡単に見捨てたりするものじゃない。

どんなに強い相手が目の前に現れたとしても、どんな危機に陥っても、一緒に闘って……護る、絶対に千切れない絆によって硬く結ばれたもの……それが仲間。

坂本さんも、ミーナ中佐も、リーネちゃんも、皆。一緒に闘ってくれる大切な仲間。だから、決して仲間を見捨てて自分だけ生き残ろうとするようなことは絶対にしないと断言出来る。

「私は、儀國さんは大切な仲間です。だから、絶対に見捨てたりする様なことはしません！」

「……言葉だけなら、幾らでも並べなれるな。まあ、どうでもいいがな。」

俺の方からお前にハッキリと言っておいてやる。俺とお前は、仲間じゃない。

そして戦場で共にしていて、俺の力よりも強いヤツが現れた、絶体絶命の危機に瀕した時。俺は　　お前達を見捨てる。見捨てても、俺は絶対に生き残る。こんな所で死ぬつもりは毛頭ないからな、その事を……よく憶えておけ」

鋭い眼が、私の眼を捉える。

冗談を言っている、なんて風には見えない。今の言葉に嘘は一切感じられず、本心として放たれた言葉だと安易に理解する事が出来た。

それだけを言い残し、儀國さんは静かに部屋から出て行った。

波打つ音が等間隔で静かに鳴る、潮風が吹く砂浜。

そこに立つ一人の魔女の姿を視界に捉えて、背後より声を掛けた。

「待たせたな」

魔女が振り返る。

眼帯に覆われていない左目で此方を捉える、と何処か悲しげな表情を浮かべた。

何故、そんな顔を浮かべるのか。不思議に思いながらも、魔術師

は魔女へと歩み寄った。

「約束の時だな、坂本」

「ああ……そう、だな」

「……何を考えているのかは知らないが、余計な事は考えるな。さて、まずはお前の魔術回路の方だな」

儀國が白い炎……「Lucifer魔天の白焰」を発現させる。

燃え上がる右腕。その手を静かに私の頭へと置く。瞬く間に白い炎に全身を包まれる。

刹那、絶頂期とも言えたあの頃感覚が再び私の元に戻ってきた。今にも消えてしまいそうだった炎が、激しく燃え上がるかの如く。魔法力が溢れ出さんばかりに内から湧いて出てくる。

これが本当の、正常に可動している魔術回路の状態。

「坂本、試しにシールドを張ってみろ」

「あ、ああ！」

言われたとおり、シールドを展開する。

二十歳になり、魔法力がほぼ失われ、シールドが文字通り『盾』と言う役割を果たさなくなつてからもう長く張っていないシールド。儀國が腰に差していた扶桑刀をゆっくりと鞘から払う。そして切先を此方に向く様に構え、右手を静かに引く。

何の変哲もない、普通の刺突。魔法力の行使なしで弾丸並みの速度を以つてして放たれる、と言う事以外は特に変わった様子も見られないごく普通の突きだ。それを儀國は私に向けて繰り返してきてきた。飛んでくる刀の切先。そして

金属音が鳴り響く。

放たれた高速の突きは私に届いていない。盾としての役割を再び手にした私のシールドが儀國のソレを見事に防いでいた。

シールドが使える様になった、と坂本は幼い子供の様にはしゃぎながら声を挙げた。

ネウロイの攻撃は勿論、魔法力が込められていない銃弾ですら防ぐ事が出来なかった私のシールドが再び使えるようになった。これが嬉しいと言言葉以外に何とも言えよう。

私はネウロイと充分に渡り合える魔法力を取り戻した。全ては、七つの悪魔ほのおを使役する魔術師 儀國 雅史のおかげで。

「有難う儀國！ お前のおかげで私はまだ戦える！」

「……一つだけ、説明しておいてやる。坂本、お前の魔術回路は確かにポロポロだったが今は違う。が、それは“直した”からじゃない。 “戻した”だけに過ぎない事を憶えておけ」

「戻した？ 一体どういう意味だ？」

「Lucifer「魔天の白焰」の力の本質は治癒じゃない、『時間操作』……時間を操ることだ」

白い炎を、Lucifer「魔天の白焰」を右手から燃え上がらせて儀國は説明する。

時間操作、それが本当のルシファアの力の正体。白い炎に触れた対象の時間を操作することを可能とする。サーニヤが不治の効果が吹かされた矢を受けて倒れた時も、“矢を受ける前の状態”まで時間を戻すことで結果として呪いを解呪し治癒した。

これはつまり、時間を逆行させたということ。

逆にハルトマンが握り潰し大型ネウロイの大群を一瞬にして消滅させた時はその逆。時間を進行させることによって消滅させた。

物事にはいつか必ず訪れる終焉おわりと言う物がある。それは肉体的活動を停止する死ではなく、存在そのものの消滅しのこと。

ルシファーを具現化しその力は、魔眼による力。

普段開かないように縫われ強制的に閉じられている二つの眼。それが開かれた時、瞳に映る物の時間を一気に終焉まで時間進行させ、結果として白い炎に包まれて跡形もなく燃え尽きたように見える。

そう、儀國は説明した。

「とまあ、これが「Lucifer魔天の白焰」の力の正体だ。ただ、コイツは色々と扱いが悪いからあまり使わないがな。色々と面倒なんだよ、本当に。」

一つ、俺が直接触れないと発動出来ない。

二つ、ルシファーを召喚した際その魔眼しかいに入っている者全てに発動する。言ってしまうれば味方も殺しかねない、ってことだ。

三つ、生命体にしか反応しない。鉄骨とか無機物に対しては全くの無意味。

四つ、コイツを使って敵を斃すとすぐに調子に乗るから……以上が理由だ」

話を聞いていて、つくづくコイツが敵でなくてよかった、と坂本は心底思った。

ベルフェゴール、レヴィアタン。まだ眼にしたことがない、エイラが一時的に使用したというベルゼブブ。そして……私達を窮地より救ってくれた美しき墮天使ルシファー！

時間を操るなど、最早その力はレアスキルというレベルのものではない。私達では一生辿り着けない神の領域にある業。その力を手にしている、使役する儀國は正に神の力を手に入れていると言っても過言でない。

尤も、使役しているのは神ではなく悪魔の力だが……。

「今回でお前の魔術回路は十歳の時にまで戻った。だが忘れるな、戻しただけであり完全治癒じゃない。時が経てばまたお前の魔術回路は再び過度の負担によつて使い物にならなくなる……。魔法力喪失が十年先延ばしになった、と頭の中に入れておくことだ」

「それでも充分だ！ 感謝する儀國！」

心底嬉しそうに、坂本は儀國に礼の言葉を述べた。

治癒ではなく、魔法力が完全に失われるその猶予を十年先延ばしにしてもらっただけ。だが、今の私にとってはこれだけでも十分に嬉しいことだった。

常に断崖絶壁に立たされた、綱渡りをさせられている様な状態での戦闘をしなくても済む。余裕を以つてしてネウロイとの戦いに集中することが出来る。

「……さてと、これで終了だ。じゃあな」

「ま、待て儀國！ まだ話は終わっていないぞ！」

踵を返し、立ち去ろうとする儀國を呼び止める。

まだ話は終わってはいない。魔術回路の修復はあくまでオマケ。本題は、如何にしてあれ程までの力を身に付けられるのか、どうすれば烈風丸の力を支配下に置く事が出来るのか。それが最も知りたいいことであり、これが契約の内容だ。これを聞かずして納得出来る筈がない。

幾ら魔法力が十歳の時に戻ったとしても、それは強さには繋がらない。

私はその強さを手に入れなければならない。ネウロイを斃す為に、

そして……大切な仲間を、存在を護る為にはどうしても力が必要だ。もう護られてばかりなのは嫌だ。護られ、その度に傷付く儀國の姿を眼にするのがどれだけ苦痛だったか。何も出来ない自分に対しどれだけ悔やんだか。

そんな想いをこれから先、しなくてもいいように。私は強くなりたい。強くなってみせる。

「……どうしても知りたいか？ 坂本」

「……どういう意味だ？」

「……教えてやってもいいが、お前は絶対にその強さを手に入れようとするだろう。」

「だがな、ハッキリ言っただけや。お前はその力を得る事無く……死ぬぞ？ 確実に。それでもお前は力が欲しいのか？」

此方に背を向けたまま、儀國は尋ねてきた。その問いに対しああ、と即答する。

死を覚悟しての強さを得るか、あの時そう儀國は口にしてた。死ぬような特訓、等という比喻表現ではなく。本当に命を賭けた、それこそしくじれば命を落とす程の訓練なのだろう。

……覚悟など、最初から出来ている。魔女としてこの身を戦場へと投じたあの日から。

今更何を恐れることがある。ストライカーユニットを纏い、この青き大空を駆け抜けている自分にとって負傷も死も承知の上。どんな訓練だろうと、それが死を伴うものだろうとも……私は絶対にそれを乗り切り強さを手にして見せる。

全ては……儀國を護る為に、だ。
暫くの静寂の時が流れる。

「……本気なんだな？ 坂本……」

ゆっくりと儀國が顔だけを此方に振り向かせた。

すらりと扶桑刀を鞘より払う。

爆発的に放出された凄まじい闘気、殺気が私に襲い掛かる。

片腕を失った魔術師。だが、それでも左腕があつた頃と何も変わらない。寧ろ、余計な物が取り払われ本当の実力を曝け出したかの様に錯覚する。

今、目の前にいるのは私が知っている七つの悪魔の炎を操る魔術師としての儀國 雅史ではない。一振りの刀を手にした一匹の鬼神。そして何故か、これが本当に儀國の姿なのだと、ふと思った。

「……もう一度聞く。坂本、お前はあの時……死を覚悟して強くなる事を望むんだな？」

口で云々説明して得られる物じゃない……そして、お前がどうなるかと俺は責任を取るつもりはない。それでも、お前はいいんだな……坂本」

反射的に背中に携えていた烈風丸を抜刀し、それを常の構えに取る。

一瞬でも気を抜けば、気付かぬ内にこの命を刈り取られる。そう直感しての、自動的に身体が取った行動。既に儀國との訓練は始まっている。剣を構え、絶対に相手の動きを見逃さないと。限界まで眼を見開き、ただただ儀國の姿をその眼に捉える。

そうか、と儀國は呟く。

……嫌に聞こえてくる自身の鼓動の音。足が、手が、全身の震えが止まらず呼吸すらも困難になってくる。額からは冷や汗が流れ落ちていく。

恐怖、その言葉が脳裏にハッキリと浮かび上がる。

先程までの、今までの覚悟は何だったのか。私は今、恐怖を感じ

逃げ延びたい事を心の奥底から強く願っている。

死にたくない、その思いが自分の中で強くなっていくのが嫌でも分かる。

鬼神が一步、前へと足を踏み出す。私の足は意思とは無関係に三歩後退した。逃げると激しく訴える本能が起こした行動だ。

はぁ、と小さく溜息を吐く声が聞こえる。溜息を吐いたのは、目の前にいる鬼神まにまに。

「……この時点で決まりだな。諦める坂本、お前じゃ俺達の領域に入ってくることは不可能だ。

聞くだけ無駄だろう。今持っている力のみで強くなってみせる、その方がお前にはお似合いだ」

殺気の奔流が収まり、儀國は手にしていた扶桑刀を鞘へ納めると踵を返しビーチより立ち去っていった。

儀國が立ち去り数分後、糸が切れた人形の様にその場に力なく座り込む。

初めて感じた凄まじい殺気。それに伴い肉体を、精神こころを支配する程の恐怖、それを今身を以って味わった。

あそこまで恐怖を感じさせる儀國の姿は見た事が無い。初めて邂逅を果たした時、ミーナを護るべく最強と呼ぶに相応しい力

「煉獄の青焰Belphegor」の炎にて騎士型ネウロイ達を瞬く間に燃やし尽くした、あの悪魔の饗宴を演じた姿が可愛らしくすら思える程に。

本当に、儀國 雅史と言う男は何者なのか……。坂本は今だ震えが収まらない右手をただ見つめていた。

第五章 第二節：真実と恐怖（後書き）

第五章 第二節でした。

さてさて、来週の儀國さんは？

儀國です。何か新しいキャラクターが出るとか出ないとか、そんな予感がしています。もしそうならどんなキャラクターなんですかね？
次回は……、

「必殺！ ビューティフル儀國・スペシャル・スーパー・マグナム・デンジャラス・ワンダフル・バリアブル・エロティック・ハリケーン・ファイア！」でお送りします。

……嘘予告ですかね？

第五章 第三節：すれ違い（前書き）

第五章 第二節です。

相変わらず、サブタイトルは適当です。

第五章 第三節：すれ違い

本日も快晴の空。心地の良い風が吹き、その風に揺らされ互いに葉を擦れさせる音が鳴っている、森の中。

舞い落ちる緑色の葉。その葉が地面へと到達する前に 縦
に横に、四つに分離し、そして地へと到達する。

風を鋭く切る音が何度も響き、その度に風に吹かれ舞う葉は幾つにも分離してから地へと落ちていく。

もうどれぐらい時間が経過しただろう、儀國は右手に携えた扶桑刀を振るいながら、そんな事をふと思った。

朝六時ぐらいに部屋を出て、起床ラッパが鳴ってから……多分、一時間程度だろう。

朝食は抜いているが、特に空腹を訴えている訳でもなく。これならば昼食までのんびりと訓練に励む事が出来る。

……左腕を失い、自身の戦力が低下したと言う現実。闘えない訳ではない、だが身体の一部が失われると言うことは戦力において大きな悪影響を及ぼす。

相手が普通のネウロイならば問題は無い。そうでないから問題なのだ。

『鎌』の騎士型ネウロイに加え、新たに登場した『天秤』の騎士型ネウロイ。予感は見事の中、と言ったところだろう。

今まで斃してきた『剣』と『弓』、そして今後絶対に斃さなければならぬ『鎌』と『天秤』の騎士型ネウロイ、これらが『アレ』そのものなのか、それとも『アレ』をモチーフとしているだけなのかは不明だが、どちらにせよ相手の数はこれで絞れた。

問題は……『天秤』の騎士型ネウロイがどのような固有魔法を持っているのか、と言う点にある。

『天秤』の騎士型ネウロイと邂逅を果たしたと言う、ハルトマン達の話だとそのネウロイは“異世界の魔術師”と口にしたと言う。

滑らかな人語を喋り、そして“異世界の魔術師”と言つ言葉を口にしたその騎士型ネウロイは……俺について、そして俺の身に起きた事について何か知っている。

恐らくは、このストライクウィッチーズの世界へと、並行世界へと来た現象による何かを。

「……………ッ」

扶桑刀を構え直す。そして再び正面、側面、背面と落ちてくる葉に目掛け刀を振るい続けた。

いずれにせよ、近い内に『鎌』と『天秤』の騎士型ネウロイとは合間見える。向こうは俺に用があるらしい。どんな目的が向こうにあるかは知らない。ただ、和解という穏やかなものではないことだけは、理解出来る。

いずれにせよ、残り後二機の騎士型ネウロイを斃さない限り、未だ魔術回路を蝕んでいる『不治』の呪いも完全解消されないし、元の世界へと帰る事も……多分無理だろう。

何としてでも、次あつた時は必ず仕留めなければならない。今度こそ……逃がしはしない。

その為には、今後に備えて強くなるしかない。

都合上左腕を“蘇生”させない状態で闘う以上は絶対だ。

自身の力に自惚れて鍛錬を怠っていた訳ではない。ただ、今後二度と闘うことはないだろうと思ひ鍛錬から、闘いから短期間ではあるがこの身を引いていた。

絶えず続く戦いに明け暮れていたあの頃に比べて俺は、随分と弱くなつてしまつたと思う。世界の何処かで、今も尚俺のことを探しているであろうお師匠様が見てもきつと、あの頃に比べて弱くなつたと口にするに違いない。

……本当に今更ながらではある。少しでも全盛期だつた頃の感覚（おぼえ）を……今は取り戻す、それだけに今は集中することにした。

とは言え、鍛錬と言っても出来る事が限られる。この世界にはあ
の世界にあつた様な訓練用の魔法技術や見合うだけの實力を持った
者が居ない。

だからその限られている方法の中で強さを身に付ける、これしか
方法がない。

とりあえず基礎から、そしてあの頃と同じ鍛錬メニューを行う。
今はそれだけだ。

魔女にも、この世界にも、力を借りない、借りるつもりはない。
不意に背後で草木が擦れる音が鳴る。

風によって擦れ合う音ではない、誰かが人為的に擦らせた音だ。
気配も感じる。数は　一つ、それと僅かな魔力も。あまり
関わった事がないが、よく知る気配だ。

「……俺に何の用だ、ペリーヌ」

背後から感じる気配の主に声を掛ける。

程なくして、草木を擦れ合わせながらゆっくりと姿を現した。

「……よく分かりましたわね」

「気配で分かると言った筈だ。で、何か俺に用でもあるのか？」

「……貴方、いつまでそうしているおつもり？」

何処か呆れた様子でペリーヌは言う。

いつまで、と言われてもまだ一時間程度しか経っていない筈だ。
一時間だと訓練の内にも入らない。せいぜいウォーミングアップ、
準備体操程度だ。ようやく身体も温まりこれから本格的に訓練をし
ようとしていた所でもある。

「……まだ一時間程度しか経ってないだろう」

「一時間！？ もうお昼ですわよ！ 貴方、朝から食事も摂らずに何時間訓練をするつもりでして！？」

……どうやら、俺の感覚時計が大きく狂っていたらしい。

一時間程度と思っていたら、実際はその倍の時間を訓練に費やしていたようだ。お昼、今が午後零時だとすると……六時間程度ぶっ通しで訓練をしていた事になる。

人間、何か物事に集中していると時間が経過することも忘れて没頭してしまうと言うが 久し振りに長時間訓練をする事が出来たようだ。

だが、これではまだ足りない。次は本格的に修行をするつもりだ。空腹もないし疲労も感じない、まだまだ続けて行える。

「時間を知らせて来てくれて悪いが、伝えてくれたのならさっさと基地へ戻れ。鍛錬の邪魔だ」

「なっ、まだ続けるつもりなのですか！？」

ペリー又が驚愕した色を浮かべて声を挙げる。

まあ無理も無いだろう。宮藤達も訓練をしているが、何時間も休憩無しで行っている訳ではない。適度な休憩や水分補給を交えた計画的な訓練メニューだ。

その訓練を行っているペリー又の目からすれば、俺が行っている訓練方法はあまりにも異常なのだろう。けれどそれは価値観の問題で。実際幼少期の頃、父親から鍛錬を受けていた時は休憩と言う休憩もなかったし、ただひたすらに鍛錬ばかりを行わされていた。

ようはスタミナ、気力の問題。幾らペリー又を含む魔女達が空を駆りネウロイと闘っている軍人だとしても、元は年頃の少女に変わ

りはない。そこから見比べれば男性である自分の方が彼女達よりもスタミナも上だ。

何も問題は……ない。

「この程度、訓練の内にもなりはしない……。ウォーミングアップはこれで終了、ここからだ」

扶桑刀を構え直す。それをペリーヌが慌てて止めに入った。

「も、もうお止めなさい儀國さん！」

「……俺の邪魔をするな、ペリーヌ」

「もう六時間近く休憩もなしで訓練をし続けているのに、まだこれ以上続ければ身体を壊しますわ！」

「いらん世話だ。それにお前等に心配なんざされたくもない。邪魔だ失せる、鍛錬に集中出来ない」

威圧感を放ちながらペリーヌを睨み付ける。

一瞬表情を強張らせ、身体を震わせたペリーヌはゆっくりと踵を返し、この場から立ち去る。その途中、不意に立ち止まり、

「……どうして貴方は、そこまで拒絶しようとするんですの」

「……愚問だな。簡単な話、お前達は信用出来ない存在だからだ。いや、戦場においてお前達に限らず“仲間”と口にする奴全てが信用出来ない、それだけの話だ」

「……貴方は馬鹿ですわね」

「……なんとも言えばいい」

「……馬鹿ですわ、本当に」

呟く様に言い、ペリー又はそのまま立ち去って行った。

……俺は信じない、仲間と言うものを絶対に。何があっても俺は誰の手も借りず独りの力で闘い続ける。信じられる者は……己のみだ。

改めて自身に言い聞かせるように、儀國は静かに瞳を閉じた。

何故あの男はこつも自分達を信じないのか、ペリー又は小さく溜息を吐いた。

あの男の事は気に食わない。儀國 雅史……坂本少佐と同じ、扶桑皇国の出身者。そして絶対無敵、最強と讃えるに相応しい力を、七つの大罪を司る悪魔ほのおを使役する魔術師。

実力は私達ウィッチを、ネウロイを遥かに凌駕する程の持ち主。ただこの部分を除けば最低な男でしかない。他人の気遣いを無碍にし、誰も信用しようとせず、上官を上官とも思わない失礼極まりない態度の数々。見ていてストレスが溜まる。

……あの男の事が本当によく分からない。他人を突き放す様な言動を取っているものの、わざわざ回りくどく私達を護る為に七魔の炎を結晶化させた物を持たせたり、庇ったりと。不治の呪いを受け、自ら斬り離れたと言う左腕も。元はと言えば『鎌』の騎士型ネウロイの攻撃からエイラさんを護る為に、自ら身を挺して庇った事が原因。

自ら私達は仲間ではない、と口にはしていると言つのに。言っている事としている事が矛盾している。

「何故彼は……あそこまで私達を、他人を拒否しようとするのでしようかね……」

偶然、本当に偶然だった。

今日は自分でも珍しいと思うぐらい、起床ラッパが鳴るよりも早く起きてしまった。

眠気もなく、実に目覚め良く起床する事が出来た。二度寝をしようと言う気にはなれず、どうしようかと悩みある事を思いついた。

急いで服を着替え外へと出る。坂本少佐は起床ラッパが鳴る前よりも早くに起床し、自己トレーニングに励んでいる。そのトレーニングに自分も参加し、尊敬する坂本少佐へと好感度を上げておこうと企んだ。

坂本少佐を同じく慕っている宮藤さんには、負けたくない。坂本少佐を思う気持ちは他の誰でもない、私が一番上なのだから。

そして坂本少佐を探しに外を歩いていると、偶然儀國 雅史の姿を見つけた。右手に坂本少佐との契約で手にした一振りの扶桑刀を携えて、森の中へと入っていく。

気になり後を追いつける。そこで見たのは、扶桑刀を振るう儀國 雅史の姿があった。

心地よい風に吹かれ宙を舞う葉を、眼にも留まらぬ剣閃で幾つもと斬り裂いていく。相変わらずあの男の身体能力は異常だ、と改めて思わされた。

魔法力を、魔法行使なしでの超人的な身体能力。振るった瞬間が全く見えない程のスピードを以ってして繰り出される斬撃。そして華麗に扶桑刀を振るう魔術師……儀國 雅史。その姿に不覚にも、私は見惚れてしまっていた。

坂本少佐とは違う剣を振るうあの男を。私は坂本少佐を探す事を忘れて、ジツと見つめていた。起床ラッパが鳴って、ようやく我へと返り本来の目的を思い出したが時既に遅く。

結局朝食を食べに戻ることにした。ただ、起床ラッパが鳴っても一向に鍛錬を止める様子を見せない儀國 雅史を気にしながらもすぐ戻ってくるだろう、と考え基地に戻った結果がコレだった。

何時間経つても基地に戻っておらず。まさかと思いいあの場所へ訪れたら、案の定。儀國 雅史は扶桑刀を振るっていた。汗一つ掻かず、呼吸を少しも乱す事無く。ただひたすらに、全方位に舞い落ちる葉を斬り続けていた。

「ハア……相変わらず、彼と私達との距離は遠い位置にあるようですわね」

先程のやり取りを思い出しながら、ペリー又は二度目の小さな溜息を吐く。

流石に止めに入らなければならない、とそう思っただ儀國 雅史に声を掛けることにした。訓練を始めた時間が、午前六時ぐらい。そして現在の時刻は午後零時丁度。休憩もなしに続けて鍛錬をしていたとすれば、実に六時間程もの長時間していたことになる。

私ですら訓練をしている時、一〜二時間連続で行う事に疲労と苦痛を感じると言うのに。その倍の時間を行っている、流石に止めに入らなければ過度の鍛錬による負担で倒れてしまう。

そんな心配をし声を掛けたものの、見事に邪魔者扱いされて終わった。

どうすれば、あの男は私……もとい他の皆と打ち解けようとするのか。そんな事を考えながら基地へと戻る。もうすぐ昼食の間でもある。

恐らく、今の彼に何を言っても無駄だろう。もうすぐ昼食だからと声を掛けたとしても、絶対にあの場から動こうとしない。

あそこまで真剣に、鍛錬に励んでいる姿を見るのは恐らく初めて眼にした。

左腕を失っても戦力低下の懸念を抱く必要は無い、そう口にしていた儀國 雅史だったが。多分、アレは焦っているのではないだろうか。口に出さなくても内心では左腕を失ったことで自身が弱くなったと思ひ、それを補う為にあのような鍛錬をしている気がする。……独りで闘う必要がないのに、とペリー又は思ひながらも一度小さな溜息を零した。

「ハア……ハア……」

呼吸が乱れる。息をするのにも疲労を感じる様になってきた。そろそろいいだろう、と儀國は構えを解き扶桑刀を鞘へと納める。そしてその場に座り込み、乱れた呼吸を整えようとする。

気が付けば、空は既に夕日で赤く染まっていた。誰にも邪魔されることなく思う存分に身体を動かす事が出来た。

……いや、邪魔をされたと言えば邪魔をされた方になる。ペリー又が基地へと戻り、その後バルクホルン、坂本、ハルトマンと立て続けにやってきてはそろそろ止めると言ってきた。無論追い返したが、去り際には必ず馬鹿という言葉を残し去っていった。

何はともあれ、本当にこれだけ身体を動かしたのは久し振りのことだった。

尤も、幼少期の頃に比べれば今日行った内容ことは鍛錬の内に入らない。言ってしまうば、まだまだ基礎トレーニング段階に過ぎないのだ。全盛期の力を取り戻す為には、まだまだ足りない。

深く息を吸って、肺に溜めた空気を吐く。ようやく乱れていた呼吸も落ち着きを取り戻してきた。

さて、と儀國はその場に大の字になって寝転がる。明日を含みこれから先どの様な鍛錬方を行うべきか、それについて思考を働かせた。

気配を感じる。数は一、殺気や敵意は感じられない。

「ようやく終わったようね」

「アンタか、何の用だ」

気配の主、ミーナに寝転がったまま尋ねる。

此方へと歩み寄ってくるミーナ。そして隣にそっと腰を下ろす。

お互いに喋りかけることもせず、ただ俺は大の字に寝転がりミーナは腰を下ろしている。ただ時間だけは経過していく。

コイツは一体何しに来たのか、そう思い始めて　　ようやく
ミーナがゆっくりと口を開いた。

「ずっと……今まで訓練を行っていたの？」

「アンタには関係のない話だ」

「……私達のこと、そんなに信用出来ない？」

「出来ないな。お前達の何処を見て信用すればいいと？」

また相変わらずこの手の話を持ち掛けてくる。

何度言えばコイツ等は理解をしてくれるのか。ここまで言われれば。普通の人間ならば諦めて関わりを持つとするとする事を止めると言うのに。そこまでネウロイとの戦いに終止符を打ちたいが為に必死なのは分かるが……ここまでしつこいとストレスが溜まって仕方がない。

いい加減諦めてくれ、と思いつつ儀國は小さく溜息を吐いた。

「何でアンタは俺に関わろうとしてくる？ アンタ達の望んでいる戦力として、俺は充分に働いているつもりだが……まだ足りないと思う？」

「……私達はそんな風に貴方を見ていないわ」

「どうだかな。口だけなら誰だって何とでも言える。アンタも意外と強情だな、さっさと本音を吐いてしまった方が楽になると言うのに……」

「ッ！」

彼の頬を張ろうとした手を、反対の手で強制的に押さえ込む。

心の中で気持ち落ち着かせるように自身に言い聞かせ、落ち着いた所で彼に声を掛ける。

「……そう言う貴方もかなりの強情者よ。どうしてそう他人を突き放そうとするのかしら」

「じゃあ俺からも聞くが……アンタは、俺をどうしたいんだ？」

世界はネウロイとの戦争中、今いる基地（こゝ）も戦場の真っ只中。いつ死ぬか殺されるかも分からない中で、お前は俺に何を求める？」

「それは……」

「お前だって仲良しこよしの関係を築きたい訳じゃないだろう？ 異性交遊禁止令、アンタが出している軍規だ。魔女の純潔を穢され魔法力が低下しないように、そして……大切な者を失った悲しみを他の奴等にも味合わせないように……だったか？」

鼓動が大きく跳ね上がったのを感じた。

どうして、そんな疑問を抱きながら儀國を見つめる。

異性交遊禁止令を出しているのは、ウィッチの純潔が穢されれば魔法力が低下する。それは即ち、ネウロイとの戦いで大きな支障を出すこととなる。私だけではない、他でもこの軍規を遵守するようにと命令を出している部隊は少なからずある。

ただ、その軍規をどの様な思いで命令したのか。ただ純粹に、純潔を穢されないようにと言う意味で出しているのは勿論。他にも何か特別な想いがあったからこそ、部下にも遵守するように呼び掛けている者のいる筈。

私の場合もそう。過去、私は恋人を失った。目の前で一瞬にして奪われた大切な存在、それがどれ程悲しいことか、悔しいことかを思い知らされた。

だから私が隊長に就任した時誓いを立てた。他の部下にも、私の様な悲しみを決して味わせない。

この理由を知る者は、恐らく。同じカールスラントの空で戦っていたトゥルーデとハルトマンぐらいだと思う。その理由を、どうして彼が知っているのか。

「どうして知っているんだ、って面だな。まあ教えるつもりはないがな。

まあいい、今はそんな事はどうでもいい。肝心な話、そうやって命令を出しておいてどうしてお前達は俺に関わろうとしてくるんだ？

ここから考えれば答えは一つ……：只単に戦力を失いたくないから、お前達は必死に機嫌取る為に関わろうとしてくるんだよ。本当に鬱陶しいな」

「違う……」

彼の言葉を否定する。

…… 本当の事を話せばそう、彼の言う通り“だった”。

世界初魔法が使える男性 魔術師、儀國 雅史とそんな彼
が持つ絶対無敵、最強の固有魔法『地獄の七焰』^{Hell Fire}があれば、長きに
渡り続けられているネウロイとの戦争に瞬く間に終止符を打てる。

そうすれば世界は平和になり、結果として大切な者を失う悲しみを誰も味わう必要がなくなる。だから、私達は正に無敵の戦力を手に入れた……と。確かに思っていた。今後一生口にすることはないが、正に彼の言う通りである。

彼を一戦力としてしか見ていなかったのは紛れも無い事実。けど、今は違う。

「違う。何も間違っている所はない」

「違う……」

私達の大切な仲間^{かぞく}を沢山護ってくれた。私もその中に含まれている。

身を挺しネウロイからの攻撃を庇い護った、危険のリスクを高めるのを承知で私達を護る為の力を貸してくれた、自らの命をも失う強い覚悟でネウロイを斃した。挙げればキリがない、今まで私達は何度も彼に助けられている。

…… 彼はただの戦力という存在じゃない。戦力として見ていなかった自分を恥じた。彼も、儀國 雅史という存在^{かぞく}はそんな軽い物じゃない。彼は…… 私達と共に戦う大切な仲間だ。

皮肉を口に行っているけども、私達を決して死なせまいと彼は七つの炎^{あへ}を行使し、ネウロイと戦う。それが、自らを傷付けることであつたとしてもだ。

どうしてか、彼には今は亡き恋人。クルトの姿を重ねて見えることがある。

容姿は勿論、性格も考え方も全くクルトと似ていないのに。彼の

後ろ姿、私達を護る為にネウロイへと向かっていくその姿が……彼クルトと重なって見える。何故なのかは、私自身も分からない。

ただ……

「何も違わないと言っているだ

」

「違うわ！」

声を挙げ、ミーナは反論する。その声に儀國は一瞬だけ驚いた表情を浮かべ、直ぐに元の表情へと戻る。

彼が、儀國 雅史が大切な仲間である、この事には何が起きようとも変わらない。

一緒に闘って、一緒に苦しんで、一緒に笑って……。だから、例えどんなに突き放す言葉を投げ掛けられても、彼が信じてくれるその時がくるまで 私は絶対に諦めない。

彼が時折見せてくれる優しい笑みを、もっと私は見たいと心から思ったから……。

「……アンタはどうしてそこまでして、俺に関わろうとするんだろ
うな。俺には理解できないな」

大の字に横たわらせていた身体を起こすと、そのまま基地へと向かって歩き出す。

……クルトの姿と重なって見える彼の後姿。その後姿からは、とつもない強い悲しみと決意、覚悟を私に感じさせた。

第五章 第三節：すれ違い（後書き）

第五章 第三節でした……。

今回は少し自分でも何書いてるか分かんない話になっちゃいました……。

いよいよ、次回から新キャラ登場……な予感です。

それと、この場をお借りして一つ告知を。

新たに新作小説を執筆しました。

完全オリジナルです。そして他のオリジナル作品を抜き、この『ストライクウィッチーズ 夢幻幻想曲』に次ぐ渾身作だと個人的には思っております。

是非読んで頂ければ嬉しいです。更に感想やアドバイスなんかも頂けたら二倍嬉しいです！

それでは、すわっ!!

第五章 第四節：意外な訪問者（前書き）

遅くなりました。第五章 第四節です。
今回オリキャラ第二号が登場します。

第五章 第四節：意外な訪問者

人気のないビーチに響く風切音。その音を奏でるは白銀の刃。

中空を何度も、白銀の閃光を煌かせ奔り風を鋭く切り裂く。その白銀の刃を、一振りの太刀を振るう儀國。

息を切らし、額からは汗を大量に流しながらも、ただ正面を見据える。右手に握る柄、その力を更に強く。絶対に離すまいと握り締めて、無理矢理呼吸を整えると再び中空に向かって鋭く刃を打ち落とす。

最近苛立ちが止まず続く。その原因を作っているのは言うまでもない、あの魔女共ウィッチにある。アイツ等が俺の視界に入る度に、俺に関わろうとする度にその都度俺は強い苛立ちを憶えるようになった。

ただ単に、単純にアイツ等の事を嫌っているから……そんなくならない理由ではない。

最初の頃はこんな事はなかった。相手ネウロイから喧嘩を売られれば買うだけの契約。仲間として護るのではなく、ただ単に誰か一人でも欠けたりでもしてズルズルと落ち込まれていても鬱陶しいから、ある程度の力を貸してやっただけだった。

鬱陶しいから、仕方なく力を貸してやっていた。そうであった筈だ。なのに……。

「ッ！」

舌打ちを零し、袈裟に刀を振るう。

……自分でも分かっている。アイツ等を見ていて苛立つからだ。仲間と称し共に戦おうとする姿勢が、態度が。記憶の奥底に仕舞っていた忌まわしき過去を、人生最大の汚点を、失ってしまった大切な者の存在こころを、穿り返してくる。

何故赤の他人であるアイツ等を見ているところも苛立つのか。そ

れが実に不愉快で仕方がない。放っておけ、と何回何十回と突き放したと言つのに。

それでも……。誰もそれを止めようとしなない、何かと俺に話しかけてくる。俺に関わるうとしてくる。

戦力としてしか見ていない連中であることは最初から理解している。そんな相手であると俺自身も分かっている筈なのに。

消えぬ苛立ちに、更なる苛立ちを感じながら儀國は太刀を振るい続ける。それは修練と言う目的のものではない。自身の脳裏に浮かび続ける邪念を打ち払うように……。ただ我武者羅に刃を中空に奔らせていた。

「……………」

構えていた扶桑刀をそつと下ろす。背後から気配を感じ、溜息混じりに儀國は扶桑刀を鞘へと収めた。

「あ、あの……。お昼の用意が出来ました」

「……………ああ」

踵を返し、基地へと向かって歩き出す。その後ろをリーネが静かについてくる。

会話は一言もない。ただ砂を踏む足音だけが耳に入ってくる。リーネは最初から俺に対し恐怖感を抱いている。それはそれで離し掛けてくれずに済んで楽ではある。

話しかけられても鬱陶しいし、それにいちいち受け答えするのも面倒だ。こうして黙って歩いている方が此方にしてみれば過ごしやすい。

他の連中もリーネぐらい静かに出来ないのだろうか、そんな事を考えながら歩いていた刹那。

基地の方から喧騒が聞こえてくる。

聞こえてくる声は三つ。バルクホルン、坂本、ペリーヌ。会話の内容までは遠くにいる為聞き取れない。ただ、声色からして穏やかな内容ではないことだけは直ぐに理解出来た。

儀國は鞘へと収めていた扶桑刀を再び払い、基地へと向かって走り出す。

まさか……騎士型ネウロイが出たのか。だとしたら好都合、『鎌』の騎士型ネウロイならば尚更良い。いい加減斃しておかなければいつまで経っても本調子の状態で満足に戦えない。何より、左腕を失うことになってしまったカリを返さなくてはならない。

絶対にこの場で斃す。今度こそ逃がしはしない……。

「あつ！ どうしたんですか儀國さん！」

一人事に気付いていないリーネは、ただただ俺の後ろを追いかけて走ってきた。

基地へと近付く。目の前から此方に向かって走ってくる影が一つ。騎士型ネウロイか、と儀國は立ち止まり扶桑刀を構え向かってくる相手を静かに見据える。

相手は少々厄介な能力を持っている相手。負けはしないが、油断も出来ない。

あの騎士型ネウロイは一瞬でも集中力が途切れれば此方の負け。相手が攻撃に転じた瞬間が唯一絶対の好機^{チャンス}。絶対に見逃さない。

相手との距離が縮まってくる。徐々に見えてくる相手の姿。あの『鎌』ではない、加えて騎士型ネウロイですらない。

一人の人間の少女。その顔を見て、儀國の表情は驚愕の色を浮かべた。

どうしてお前がここにいる、と心の中で何度も尋ねた。

特徴的な薄紫色の地毛、可愛いから気に入っているとその長い髪

をポニーテールにいつもしている髪形。日本人としては大変珍しい黒の瞳ではなく、金の瞳を持つ双眼。

かつて共に通っていたことのある高等学校の指定制服、紺色のブレザーとスカート。胸に付いている校章は間違いなく、あの高等学校の物。

あの時と瓜二つ。どうしてお前がここにいる、もう四年前に“死んだ”筈なのに……。

「……沙耶」

「え？」

呆然と立ち尽くし、ただ向かってくる少女の姿を見つめる儀國。

少女との距離が縮まっていく。少女は時折後ろを振り返りながら何かから逃げるようにして走り、その後ろからはよく見知った顔が

坂本達が走っている。

そして少女との距離が零となりそのまま横切った、かと思えば走らせていた足を止めて隠れるように背中引付く。

坂本達がやってくる。気が付けば、仮初の仲間達に俺は刀の切先を向けていた。

「な、何の真似だ儀國!？」

「……お前等こそ、これは何の真似だ？ 女追い掛け回して何やってるんだよ」

ミーティングルーム、そこで話し合いは行われた。

ミーナが先頭に立ち、他の皆はその様子を見守る。

「では、早速ですが貴方に質問をします」

目の前の相手に話し掛ける。

視線の先にいるのは両腕を組み、いつもの如く能面を浮かべている儀國。その後ろに隠れている一人の少女に対し質問を始める。

いきなりこの基地に姿を現した少女。私達ウィッチと違い魔法力を一切感じない、何者かと尋ねても喋ろうとせず逃げ出す始末。

何処かの国のスパイか、と判断し少女の拘束をするよう命令を下した。そして美緒達が少女を見つけ追い掛けている時に、何も知らない儀國とリーネさんと遭遇。どういう訳か、彼女は儀國の後ろに隠れて出てこようとしない。今でも儀國の背後に隠れたまま、顔だけを覗かせている状態。

そして儀國の態度も可笑しかった。素性も分からない彼女を庇うようにして立ちはだかり、美緒達に対して剣を向けた。今でも私達から彼女を護るようにして立っている。

「……まず最初の質問です。貴方の名前は？」

「……………」

此方の質問に対し、彼女は答えない。脅えた様子で、敵意を孕んだ眼で睨み返している。

どうすればいいのやら、と思った矢先儀國が不意に口を開いた。

「お前、名前は？」

「……………椿」

「椿……………か。その格好、この辺じゃ見掛けないな。何処の生まれだ

「？」

「何処つて……日本の東京だよ。そういう貴方も日本出身でしょ？
後あの眼帯している人と小さい女の子も」

……実に不可解だ。此方の質問に対し答えなかった椿の名乗った
彼女が、儀國の質問に対してはスラスラと答えている。

どうして彼女は儀國にのみ反応を返すのか。それについての問答
は後に回すとして、儀國と椿の会話に耳を傾ける。その中で気にな
る言葉があつた。

「少し待って。日本……と言つのは、何処の国なのかしら？ 儀國
に坂本少佐と宮藤軍曹も同じ出身……と言っていたけれど、扶桑皇
国のこと？」

「……………」

彼女は答えない。どうあつても私からの質問に対しては答えない
つもりだ。

「……もう一度確認するが、お前は日本という国の生まれなんだな
？」

「だから、さつきからそうだつて言ってるでしょ！」

儀國の質問に対しては答える少女、椿。

二人は初対面の筈。なのにどうして彼女は儀國にのみ心を開いて
いるのだらう、逆に儀國はどうして彼女を美緒達から庇つたのだら
う。

「……一つ尋ねる。お前は何年生まれだ？」

「えっ？ 私は一九九〇年の四月生まれだけど……」

「せ、一九九〇年だと！？ 四十五年も先の世界ではないか！？」

トゥルデーが驚愕の表情を浮かべながら声を挙げる。

トゥルデーの言う通り、彼女の生年月日は今より何十年も先の事だ。今は一九四五年、明らかに彼女は嘘を言っているとしか思えない。

「……椿、と言ったな。今この世界は一九四五年、そしてお前の言う日本という国はこの世界には存在しない。お前の服装、言葉や喋り方からして……お前の言う日本は此方では扶桑皇国と言われている」

「えっ？ な、何言ってる……」

「……ややこしくなってきたぞうだな」

儀國の口からこの世界についての理が説明される。

その説明を聞いて椿は終始驚愕の表情を浮かべたまま、儀國の言葉に対し質問を投げ掛け、帰って来た言葉に更に啞然とした表情を浮かべていた。

椿の口から語られる話、それはあまりにも信じがたい内容ばかりだった。

彼女は一九九〇年、この世界で言う扶桑皇国 日本という

国に生まれた女子高生。学校へと登校中、急激な眩暈に襲われ意識が朦朧として……気が付けばここ、第501統合戦闘航空団の基地にいた。何処だと彷徨っている所を美緒達に見つけられ、不審者及

びスパイと疑いを掛けられ逃げている途中に儀國と出逢った……。

どうして儀國にのみ懐いているのか。彼女曰く、私達よりもずっと信用出来ると思ったから、だそう……。

そして彼女の言う国及び世界には怪異ネウロイの存在がなく、またウィッチと言う存在もない。そしてこの年代には私達人類と怪異との戦争ではなく、人間と人間による激しい戦争が繰り広げられていた時代なのだ、と椿は口にした。

ネウロイやウィッチが存在しない世界。人間と人間が血を流し合い激しい戦争をしているという歴史。私達の世界とは全く異なっている。こんな事……ありえるはずが無い。

ただ一人、この事態を納得している人間がいる。儀國だ。

「……なるほど。つまり椿は一種の並行世界から来たって訳か」

「ねえねえ、“へいこうせかい”って……何？」

「……並行世界、パラレルワールド。この世界とは別次元に存在するもう一つ……いや、無限に存在している世界。仮にこの世界をAとするならば、Bの世界はネウロイが居ない世界……つまり椿の世界も存在していても、何も可笑しい話ではないってことだ。

この世に、絶対なんて言葉はないんだからな」

ルッキーニさんの質問に儀國は静かに答える。

並行世界……。この世界とは違う、ネウロイや私達ウィッチが存在しない世界があるなんて、まだ信じられない。

「貴様、嘘を言っているのではないだろうな!？」

「う、嘘なんか言っていないし!」

トゥルーデの威圧感に脅えながらも、椿は答える。

嘘を言っていない、と彼女は主張するがそれ自体が嘘である可能性が極めて高い。何より、自身の身の潔白出来る証拠も何一つない……嘘を言っていないようにも見えることは見える。けど、それだけで決断は下せない。私は大切な仲間かぞくを護らなければならないのだから。この基地にとって、仲間にとって有害となる因子は一つ残らず取り除かなければいけない。

「……椿さん、貴方の処遇ですが」

「少し待て」

言葉を遮る様に儀國が口を開く。

「そいつを放逐するのなら止める。もし監視すると言つ意味合いでここに置くのなら……そいつの面倒、俺が見よう」

その言葉に誰もが驚いた。

そして椿もその言葉を聞き、何処か嬉しそうな顔をしている。

「別に問題はないだろ？ お前達にコイツは任せておけない。だから……俺が見る。今まで散々給料分以上働いてきたんだ。これぐらい文句ないだろ？ まあ……言わせないけどな」

鋭い眼が私の眼を捉える。言葉通り、その眼からは有無を言わせない圧力を感じさせた。

……放逐するつもりはない。彼女の言っている事が真実であれ偽りであれ、スパイかもしれないという疑いがまだ晴れた訳じゃない。野放しにするのも返って危険かもしれない、従って様子見も兼ねて私達の元で監視しておくつもりでいた。

ただ一番の疑問は、どうして儀國がその役目を自ら進んでしようとしているのか。普段何に対してもあまり関心を抱かないのに……。

「まさか儀國、その子に惚れちゃったとか？」

からかう様にエーリカが言う。

それに対し儀國は返答せず、踵を返し椿の方へと向いた。

「とりあえず基地を案内してやる。行くぞ」

「う、うん！ えっと……貴方の名前って何？」

「ああ。まだ名乗っていなかったな。……雅史。儀國 雅史だ」

「そっか！ じゃあよろしくマサフミッ！」

「ちょ、ちょっと待てよ儀國ッ！」

不意にエイラさんが儀國さん呼び止めた。

「……どうしてソイツ庇うようにするんだよ。だってソイツ、スパイかもしれないんだぞ？」

「別に、庇っているつもりはない。それにスパイ“かも”、だろ。コイツがスパイじゃない可能性だってある。それに俺から言わせてもらえれば、コイツはスパイなんて玉じゃない。眼を見れば一発で分かる」

「眼を見れば……そんな理由で庇うのかよ！？ 可笑しいぞお前、どうしちゃったんだよ！」

「……お前には関係のない話だ。どうでもいいだろう、そんなこと」
儀國の声色が少し変わった。エイラさんに対し明らかな怒気を孕んでいる。

その声を聞いて、エイラさんは一瞬身体を震わせる。

「……行くぞ、椿」

「う、うん」

儀國に続いて、椿がミーティングルームより退室する。

……初めて見た。彼があそこまで怒りを孕んだ眼をしたのを。以前にも、私達に本音を曝け出した時も確かに彼の言葉には怒気があった。その怒気よりも遥かに濃い、恐怖すらも感じさせる殺気を感じた。

訳が分からない。儀國がどうして彼女を護ろうとしているのか、それが私には理解出来なかった。

一通り基地の中を案内した後、儀國は自室へと椿を連れる。

「ここが俺の……いや、今日から俺“達”の部屋だ」

「うわっ、何にもないじゃん。殺風景な部屋って言うか……寂しすぎ」

部屋全体を見渡しながら椿は感想を述べる。

俺が椿を監視すると口にした以上は責任を以って監視しなければ

ならない。

同じ部屋で男女が過ごすという事に抵抗はない、寧ろ慣れてしまっている。何年もそうやって生活してきたのだ、今更羞恥心は感じない。

幸い、椿自身も最初は戸惑い躊躇っていたが、最終的には恥ずかしそうにしながら承諾した。後でミーナ達に不純だの不潔だの言われるだろうが、所詮はあいつ等の戯言に過ぎない……放っておけばいい。椿にも別に強要させた訳ではなく自らそう願ったのだ。

本人の意思、主張は尊重するべきである。

幸い、俺の部屋には何も無い。ただ広い空間にベッドと簡易机が置かれているだけのシンプルな部屋。椿が使うスペースは充分にある。

とりあえずベッド等は後で安藤達に頼んで何とかしてもらおうとする。片腕では流石に自分だけの力ではどうにもならない。

衣服や必需品はまた明日にでも街に行けばいい。俺自身買う物も特にない、それを椿の為に使ってやる方が無駄に溜まっている給与にも意味が与えてやれる。

……監視と言う名の元、俺はコイツを守らなくてはならない。コイツは、椿は“アイツ”じゃない。それは理解している。顔が似ていようと、声が似ていようと、性格や立ち振る舞いが似ていたとしても……椿は所詮他人でしかない。

だが、それでも。俺はコイツを護らなくてはいけない義務がある。椿は俺と同じ並行世界からの人間。ただ、椿の住む世界には「ストライクウィッチーズ」という存在そのものがないらしい。だから宮藤達を見ても二次作品のキャラが、と騒がなかった。

しかし、俺と同じで椿は孤独だ。両親がいないと言うレベルではない、真の孤独。

周りには誰一人として自分を知る、知っている人間はいない。自分が知っている物が一つも無い。そして、自分が知る世界には存在しない脅威によって命を失うかもしれない恐怖感が付き纏う。

だから……俺が護る。俺が護らなくてはいけない。
孤独から、苦痛から、怪異ネウロイから、降りかかる全ての脅威から……
椿を護る。

これはある意味、信じてもない神からの贈り物。今まで苦勞し
頑張ってきた褒美でもあり、また同時に試練だと感じている。

あの時護れなかった者を、今度こそ護り通して見せると言う……
神から与えられた試練なのだ。

コイツは“アイツ”じゃない。それでも、今魂こゝろに誓い刻み込む。
椿を……絶対に死なせない、護ると、ここに……。

「ねえ、ベッド一つしかないけど……ま、まさか一緒に寝るとか！
？」

「馬鹿、そんな訳があるか。後で知り合いにここまでベッドを運ん
でてもらうに決まってるだろ」

「うわっ、何そのリアクション。つまらないわねーアンタ、そこは
普通慌てたり顔を赤くするのが常識でしょ」

「悪いな、生憎と俺は面白くない人間だからな。

……一つ、聞いてもいいか？」

「ん？ 何？」

「……どうしてお前は、俺を信用するんだ？」

抱いていた疑問を本人に尋ねる。

椿はミーナ達の事を信用せず、俺を信用するとミーナ達の前で答
えた。

ミーナ達を信用しないのは、それはやはり軍に所属している人間

だから、だろうか。しかしそれを言えば俺も同じ、軍に所属している人間だ。

それ以外の理由で、椿は俺を信用しているのか知りたかった。

「ん〜：貴方だから、かな。記憶を見てたら、貴方なら信じてても大丈夫って……私もそう思えたから」

「記憶？」

「ううん、何でもない。ただの独り言。それよりも私、お腹空いたんだけど……何か食べるものない？」

「ああ。そう言えば、お前が現れたから昼飯まだだったな。食堂も案内はまだだったし、行ってみるか」

「うん！」

元氣よく答える椿。そんな椿の笑みに口元を少し緩めながら、儀國は食堂へと案内する。

……本当によく似ている。本人かと思ってしまうぐらいに。

第五章 第四節：意外な訪問者（後書き）

今回は更新が大幅に遅れてしまったことを、心よりお詫び申し上げます。

しかし、今後更なる遅れが生じると思われます。

詳しくは、活動報告をご覧ください。

それでは……こんな私ですがこれからも応援、よろしくお願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2249r/>

ストライクウィッチーズ 夢幻協奏曲

2011年8月8日12時14分発行